
霧幻冬の群像劇

宇野 壱史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧幻冬の群像劇

【Nコード】

N1228V

【作者名】

宇野吉史

【あらすじ】

一人の少年が『戻ってきた』ことによりこの物語は始まる。

『最強』と称される少年。新しい学園。そこで彼と出会う少女たち。ある少女は見定めるため動き、ある少女はただ微笑う。ある少女は再会を望み、ある少女は何も知らず。そして新しい同居人。

波乱の日々が口を開け、戦の霧に呑み込まれる。

これは少年と、少女たちと、霧の獣が織り成す一冬の物語。

……要は男一人、女五人の六人の視点から描くSFバトルラブもの。

(各0000初登場話にイラストを挿入しました)

第一話 始まりの日

「じゃーなー、キリンー！」

ブンブンと手を振る伊緒。こんな寒い中だつていうのにホント元気なことだ。隣の幼馴染みは寒そうに背中を丸めてるっていうのに。その友達に手を振ってボクも家路へと踵を返した。

特に何と言うこともない、普通の一日だった。

正月の三が日も明けて、退屈な休日の午後、メールで友達と待ち合わせした。今年初めて会った二人の友達は、当たり前だけど去年と何も変わってなかった。

駅前でファストフードを買い食いして駄弁った。年賀メールの数が一番少なかったことにちよっぴりへこむ。

ゲーセンで時間を潰した。自信満々で格ゲーの筐体へと直行した。啓吾だったけど、乱入相手に手も足も出さずコテンパンにやられてた。ていうか啓吾が勝つとこ見たことないよボク。

太陽が西の空に沈み始めて、空が赤くなった頃になんとか解散ムードになってお開き。そのまま各自家に帰る。そんな何の変哲もない休日だった。少なくとも今この時までには。

朝まで降り積もって半ば溶けた雪の道を歩くのも口から吐いた息が白いのもこの季節ならいつも通り。携帯を開いて時刻を確認するのも あ、しまった。今日は早く帰ってくるよう言われてたの忘れてたよ。あっちゃあ、メール入ってるし……

「ゴメン、忘れてた」

返信するとすぐメールが返ってきた。買い物してきて、ね。りよーかい、と。まあ、こんなのもたまにあること。

ちよつと違ったのはこの後。スーパーまで行くより早いかな、と駅前まで戻る途中、キーパーツという甲高い音とガシャンツという何かが壊れる音、更には甲高い悲鳴のような声まで聞こえてきた。何事、とその他大勢の通行人の例に洩れずボクも音のほうへ視線

を巡らす。

そこには一台の転倒したバイク。へこんで割れたガードレール。投げ出されたライダー。

交通事故だった。

「……」

通行人が足を止めて俄かに騒がしくなる。警察や病院へ電話する人、怪我人を歩道へ運び込む人。雪道でスリップしたのかなー、とか危ないねー、とか感想を言う野次馬が増える前にボクは視線を切つてその場から立ち去ることにした。

交通事故　バイク事故。

あの瞬間の光景が思い出される　うっん、頭に焼き付いて離れない。同時にチリツと胸が焼けるような錯覚を覚える。

空転するタイヤ。割れたヘッドライト、折れ曲がったミラー。倒れて呻くライダーとざわめく通行人。

それらの中心　道路の真ん中に立つ、小さなボク。そして足元には、

ふと、シヨウウィンドーの中の自分と目が合った。高校に入ってから伸ばし始めて、サイドでまとめた髪の女の子　うん、ボクで間違いないね。わざわざそんな意味の無い確認をしたくなるほど、ボクの瞳は濁って見えた。

そして気付く。すぐ傍ら、陽炎が　世界を歪める様な揺らぎがボクの憎悪の矛先が　揺らめいていたこと、そしてすぐに消えていったことを。

「……」

ふーっ、と悪いものを吐き出すような長い溜め息一つ。止め止め、こんなことでいちいち鬱になるなんて。まるでアレがボクのアイデンティティーみたいじゃないか……。

振り切るように駅前へ足を向ける。さっさと買い物を買って帰

ろう。正月の間はずっと家にいたけど、普段は留守にしがちの癖に心配性なんだから、あの『姉』は。

……そういえば、あのときもこんな雪の降り積もった日だったっけ

と、そんな上の空でいたのがいけなかったのか。

気付いたときには視界いっぱい人がいた。

「「へ？」」

ドンッ

「わあっ!？」

軽い衝撃に押される。さらに足がもつれて、そのまま

ドサッ

「〜〜、痛った〜」

仰向けに倒れこんでしまった。幸い受身は取ったし下は雪だから言うほど痛くはなかったけど。

でも重い。どうやらぶつかった相手 男の人も倒れて、ボクに覆い被さっちゃってる格好みたい。おかげで立ち上がれないし、しかも下が水混じりの雪だからコートにじんわりと水が染み込んでくるし!

「あ、悪い」

「謝るよりどいて、重いし冷たいっ!」

「お、おう」

と、次の瞬間、

むにっ

「!？」

驚きに身体が硬直した。男の人が立ち上がろうとして力を入れた瞬間、初めてそれに気付いた。

テノヒラ、オッパイ、ワシツカミ。

ぬぁああああああ!!

待て、落ち着けボク！ コレは事故！ アクシデント！ そう、だからすぐに離してくれるはず
むにむに

「~~~~ツ!？」

ぬぐあああああああああ！

揉まれた!? また揉まれた!? しかもはっきり、感触を確かめるみたい!!!

……そっかー、なるほどー。これが……

再び。指に力が入るのがわかる。それが動き出す前に、

「いい加減に、しろおっ!!!」

痴漢ってヤツかあっ!!!

ゴツ!

脇腹に拳を打ち込んだ!

「ぐおおっ!？」

「ごろごろと転がる痴漢へ起き上がってすぐさま追撃。仰向けになったところへ、どてっ腹を容赦なく踏み抜いた。

「がふうっ!」

「死ね変態っ!」

とどめとばかりに顔面を蹴り飛ばした。最後には悲鳴も出ない。気絶したかもしれないけど、その程度で助かったと思って欲しい。

もちろん容赦なんてしてないけど、それでも一応手加減くらいはしてる。万一にも本気を出して、一生を棒に振るなんてゴメンだも
ん。

「ああっ、ボクのコートびしょ濡れ……帰ったらすぐ乾かして、お風呂入って……もう、なんでこんなことに……」

ありふれた一日。その中で起きた、ちょっと変わった出来事。でも、ただそれだけ。厄日だなあと、ただそれだけの感想で終わる出来事だった。

終わる出来事、のはずだった。

一体誰が思う? これが 『始まり』 だなんて。

知らない土地だ。

電車から降りて、真つ先に浮かんだ感想はそんなものだった。

実際のところ、昔住んでた町はここではなく、さらに二駅ほど進んだ先にある。それでも、この辺で一番大きい街であるところのこの駅前一带には両親に連れられて何度か訪れた覚えがある。あるのだが。

たった六年でこつも変わるものなのか。さすがに細かいところまで覚えてないが、漠然と幾つか大きなデパートがあるだけ、というイメージが残っている。それが、今はすっかり「都会」の駅前だった。モノトーンの水墨画が油絵具でカラフルに塗り潰された、とても言えばいいだろうか、違和感を禁じえない。

……この辺も被害の一角だったんだらうか。ふとそんな考えが脳裏を過ぎる。

「戻ってくるなんて、全然思わなかったな」

思わず口を突いて出た。この街に住んでいて『あの事件』を知らないなんて有り得ない。それとも、そう思ってるのは当事者である俺だけでとつくの昔に忘れ去られているのか。本当、疑念ばかりが浮かんでくる。この街に戻ってくることになった経緯も含めて。

そんなわけで、周囲をキョロキョロ見ながら上の空で歩いていたのが不味かった。

ドンッ

「へ？」

「わあっ！」

正面から歩いてきた人とぶつかったのだと気付いたのは歩く勢いそのままに前方へとつんのめって倒れた後だった。

「うひゃっ」

ガクン、と突然倒れたのだけど反射的に地面に手を着いていたらしい。ただし地面には雪交じりの水、手どころか袖まで濡れてその

冷たさに、思わず声を上げてしまった。

その割に体には冷たさは感じずむしろ暖かい。痛みもそれ程無い。
「〜〜、痛った〜」

それは自分の下敷きになっている人間がいるからだとその声でようやく気がついた。

「あ、悪い」

「謝るよりどいて、重いし冷たいっ！」

「お、おう」

急かされて腕に力を込める。そこにあるモノを確かめもせず。

むにっ

「!?!」

ん？ なんだこの感触？ 左手に感じる冷たさと固さとは真逆で温かく柔らかい。

はてなんだろうこれは？ 試しに右手の指に力を込めてみる。

むにっ

「〜〜ッ!?!」

わっ、なんかすごい柔らかい。はて、なんだろうこれは？

……いや、わかってるんだけどね。そんでこの後どうなるかも大
体予想がついてはいるんだけどね。だからこれは、まあ現実逃避っ
て奴で。

……現実を引き戻される前にもう一回。

「いい加減にしろおっ!?!」

ゴッ!

「ぐおおっ!」

脇腹にショートフック！ しかも重い！

地面をごろごろと転がる俺。そこへさらにどてっ腹をおもいつき
り踏みつけられ、いや踏み下ろされた。ズドンと。

「がふうっ!」

肺の空気が全部口から吐き出される感覚。

「死ね変態っ!」

ガスッ！

そこへさらに情け容赦なく顔面への蹴りという追い討ち。最早悲鳴も出ない。

「ああっ、ボクのコートびしょ濡れ……帰ったらすぐ乾かして、お風呂入って……もう、なんでこんなことに……」

臆気な視界で眉を吊り上げたサイドポニーの女の子がさっさとこちに背を向けて駅のほうへ歩いていくのが確認できた。

時刻は夕刻、買い物帰りの主婦から会社帰りのサラリーマンまで、人通りが増えてくる頃。しかし道端にノックアウトされた俺に声をかけてくる人は誰もいなかった。

世間の荒波は冷たいなあ……

しかしまあ、当然の事ながらいつまでも道端で大の字に寝転がっている趣味はなかったのですぐさまその場を離れ、目的地……と思わしき場所へたどり着いた俺は、先程駅前で感じた以上の戸惑いを味わうことになっていた。

「……本当にここでいいんだよな？」

たっぷり水を吸い込んだ服を着たまま教えられた住所へ向かうと、そこはマンションだった。……多分高級って付く類の。

住所は……多分合ってる。それに書かれているマンションの名前とも一致する。

「……ドッキリ？」

いやいや、さすがにそれにしても手が進みすぎだろうと首を振る。同じ手が込んだことをするなら、そう、「実は引き取り手など無く適当な住所を教えて追い出した」の方がまだ現実味がある。

引き取られるたびに腫れ物、厄介者扱いされていた俺にはむしろそちらの方がすんなり納得できる選択肢だった。

俺は子供の頃ある事件を起こして以来、ずっとあちこちの家を渡り歩いている。とはいっても、別にその事件の内容が問題なのでは

ない。世間一般にはただの『異常気象』なのだから。つまり、問題なのは俺のパーソナルな部分。細かい説明は省くが、要するに「手に負えない」ということらしい。

そんな俺を今さら引き取る、とか言う奴が現れたこと事態、よく考えると胡散臭い。もちろん前の家は渡りに船とばかりに飛びついたらに違いないし、俺だって別に反対はしなかった、というか元より選択の権利なんてないんだが。

それにしても本当に何故今さら、だ。両親がいなくなった当時ならともかく、今になって引き取り手が現れる理由がわからない。しかもよりによってこの街で。遠縁だとかいう話だけどそれも本当か怪しいところだ。やっぱり厄介払い説が濃厚か。

このトシでホームレスか。いや、とうとうと言うべきかな？むしろよく保ったほう？ さて、まずは寢床探しからすりゃいいのかな？ それともメシの確保？ ああ、でも服乾かしてえなあ、風邪引くかはわかんねえけど濡れたままだと気持ち悪いし

「じーっ……」

……ん？

「じーっ」

「ッ!? うわっ!」

突然、唐突に、いつの間にか、俺の目の前に女の人がいて俺を凝視していた！ 思わずのけぞって後退さって滑って尻餅ついた！うわっ、なんか恥ずかしい！

赤くなつて口をパクパクさせて何も言えない俺に女の方は、

「こおりくんよねえ？」

甘ったるい声で俺の名前を呼んだ。

「え？」

「周防こおりくん。違った？」

ぶんぶんと高速で首を振る。するとその女の方はにっこりと笑って、

「はあい、ようこそ桜井家へ！ わたしが、家主の、桜井遥香^{はるか}でえ

す

ぶんぶんと俺の手を握って振り回した。……なんか呆然。続けて女の人　桜井さんはキョロキョロと周囲を見回す。なんだか忙しくない人だなあ。

「結局輝燐ちゃんきりんは間に合わなかったかあ。初顔ファーストコンタクト合わせが大事なのになあ」

「きりん……？」

俺が要領を得ない返事をすると桜井さんはうーん、と指先を額に当てて考え込んだかと思えば、

「まあいいわ、とりあえずお家に入りましょう、ほらほら、そんなところに座ってないで、あら服もびしょびしょじゃない大変、お風呂の用意しないと」

一氣にまくしたててきた。いかん、かなり独特のペースの人だ。

俺の中で危険信号が点灯する、こんな序盤から吞まれたら後々必ず面倒なことになる、と。

「こおりくんは入浴剤」

「あの、桜井さん」

あえて話しかけのところで口を挟む。こちらから話題を振ることで事態滅多にしない真似だが、これが会話の主導権を奪い取るための常套手段で間違いないはず。そしてこの人とは真逆に懇切丁寧にゆつくりと話を

「それダウトー！」

「!？」

ビツと怒り顔で鼻先に指を突きつけられた。

「『桜井さん』なんて他人行儀ダメよお。な・ま・え・で、呼んでね」

「は、はあ……」

「気軽に呼んでくれていいのよお。はるちゃん、とか、はるるん、とか。お姉さま、なんて最高におススメんだけどなあ」

期待を込めた流し目でこっちを見る。

「……遥香さん」

「……………ぐすん」

いや、そんな恥ずかしい呼び方出来ませんから。だから継るような目でこっち見ないで！

「……まあいつかあ。そんなことよりお風呂よお風呂、ほら風邪引いちゃわないうちに」

「あ、はい、っとお！？」

ようやく立ち上がった途端遥香さんに手を引かれた。マンションの入り口へと。

「ようこそ桜井家へ。わたしたちは、貴方が来るのを待っていました」

俺の手を引きながら、彼女は改めてそう言った。

「なんか早々に疲れたなあ」

シャンプーでガシガシと洗いながら紅潮した顔で溜め息を吐く。

（こら、そのこの読者！ 最初の入浴シーンが野郎だなんて最悪だ、とか考えない！）顔が赤いのは火照っているだけが原因ではない。主な要因は入浴前の遥香さんの一言。

『背中流してあげようかあ？』

もちろんしつかりきつぱりお断りした。……慌てふためいてなんてないデスヨ？

あの人が言うのと冗談に聞こえない。出会ってまだ一時間と経っていないというのにそんな印象が既に定着していた。おっきな三つ編みも性格も何もかもが「ふんわりさん」だ。

正直、異常なほどペースが乱れる。それは新しい環境だからとか、相手のペースが独特だからとか、そんなことはまったく関係ない話で。

初めてかもしれない。家族以外で、これほど『近く』に人を感じたのは。妙に気になるというか……いつもの感覚が出てこず、踏み込み踏み込まれることに抵抗が少ない。思えば「恥ずかしい」とか「慌てる」とか、すっかりカビの生えた感情が表出するのも何年ぶりだろう。不意打ちですらこれほど大きく動揺した事なんてない。良いことなのやら悪いことなのやら、少なくとも妙だと思ってるのは間違いない。

ん？ さっきのアレ？ 戻ってきて早々ヒドイ目にあつたよなあ。自業自得？ や、わかってるけどな。だったらさっさと離せてハナシなんだが……本能つてヤツ？ 所詮俺も男つてことだろ。それこそ不意を打たれたに過ぎねえよ。けど、慣れないって程のことじゃない。

それにしても、いい蹴りを見舞ってくれたもんだ。「痛い」と思う攻撃は 毎度喰らってるけど、「効いた」のは久しぶりだ。しかも人間の打撃か。馬鹿力で説明していいもんかね。まあ、どうでもいいんだけど。どーせ二度と関わりやしないし。

そして湧き上がるひとつの疑問。

「……知らないのかね」

ぬるま湯でシャンプーを流してやる。

「終わり。ったく、なんでこんなに埃だらけになってるんだか」

それから自分の体にお湯を二、三杯かけて湯船に身を沈める。うー、とうなり声が出てしまうのはどうにも止めようが無い。

……よく考えてみれば、知ってて引き取るうなんて人間がいたらそれは余程の物好きか怖いもの知らずかお人好しか、でなくば何やら裏のある人間かということの間違いない。遥香さんは十分お人好しのカテゴリーに入るだろうし無害な人間のように見えるけど、やはり人間見た目だけじゃどんな裏があるかわかったものじゃあない。そもそもついさっき会ったばかりの人間だ、信用するには全然足りない。

とはいえ、そういう人間なら俺に対してもう少し警戒心というも

のを持っているはずだ。だというのにあの人には普通一般常識における男性への警戒心すら見受けられない。年頃の美人だし悪い男に騙されてやしないだろうか、ああ、むしろ心配になってきたかも。そういえば今日から遥香さんと一つ屋根の下で暮らすってうわっ、こんなことが毎日続くんじゃないだろうな

「……う、のぼせてきた」

……やめやめ、考えるのやめ。湯船から上がってなんか変なところに入り込んでた思考を一旦リセット。

で、どうする？ その気になればあの笑顔の裏を読むことは出来るが……いや、やっぱりダメだな。こんなことで破ってちゃ「制限」にならない。

……そうだな、相手がどうあっても今までと同じようにすればいいだけの事か。迷惑をかけないようにそれなりに気を遣って成績を保つて。本格的に俺たちの敵となることがあれば叩き潰して。それ以外はほんと、どうでもいい他人事だ。

ガラリ、と脱衣室への引き戸を開けた。

「……………」

目が合った。下着姿の女の子と。

「……………」

「……………」

女の子は目を見開いて硬直している。

俺は思考が完全に停止して硬直している。

そのまま時が止まること数秒。

不意に、女の子が視線を下方へと移した。

現在の俺の状態：FULLCHIN。

「……ッ」

女の子が息を呑む。予感がした。時が一気に静から動へと移る予感が。ていうか身の危険を。

「待っ」

「ドヘンタイイイイ……！！！」

ビュオンツ

ツツツ!?

その瞬間の衝撃は擬音にするの**も**はばかられる**もの**だった。男性にしか存在しない急所への蹴り。蹴られた部分を押さえて身悶える俺。

女の子は自分の服を引つ掴んでサイドポニーを翻し脱衣所から駆け出していった。

数十分後。リビング。痛みから無事復活を果たした俺はテーブルに着き二人の人間と向かい合わせになっていた。

一人はこの家の家主である遥香さん。相変わらずニコニコしていらっしやる。多分場の空気なんて全然感じ取っちゃいない。

もう一人は 先程俺を蹴倒してくれたサイドポニーの女の子。ものすごい不機嫌顔で俺を睨みつけておられます。

そんな状態が既に十分以上経過している。体感時間は悠に一時間以上。

重い。時計の音がとても重い。

痛い。静寂と沈黙がすっげー痛い。

と、そんなノリのまま縮こまっていたが、何分もこうしていると流石に面倒になってきた。やっぱりリアクションは瞬間に限るなあ、とかそろそろ何か言ってくんないかな、とかおおよそ被告人にあるまじきことを考え始めていた。

そしてようやくと、と立場的に言っていないものか、テーブルをダツツと叩く音で沈黙が破れる。当然叩いたのは女の子。

「遥香さん！ 一体誰なのコイツ！」

ビシツと俺を指差しながら視線は遥香さんの方へ。その問い詰めに、遥香さんは「よくぞ聞いてくれました」とばかりに嬉しそうに手を組んで頷いた。ここまで場の雰囲気こそぐわな**い**人を俺は初め**て**見る。

そしてわざわざテーブルを回ってきて俺の後ろに立つと両肩をポンと叩いた。

「今日から一緒に暮らす、周防こおりくんです」

その紹介に女の子　輝燐というらしい　は一瞬ポカンと呆気に取られた顔をして、

「……ナニソレ？　ボク、キイテナイヨ？」

「うん。今初めて言ったもんねえ」

……おい。それは流石に俺もどうかと思うぞ。ほら、プルプルと震えてるし。あれはまかり間違っても感動の震えなんかじゃあるまい。そして怯えでもないのは今までの一連の流れから明白。つまり。

「仲良くしてあげてね」

「ふっ、ざけんなあっ！」

あ、噴火した。

「わっ、びっくりしたあ。……あれ、もしかして嫌がってる？」

「嫌に決まってるでしょ！」

「えー！？」

「こんな変態と一緒に暮らすなんてありえない！　さっさと放逐するべきだっ！　そもそもこの変態が風呂に入ってるのになんで止めなかったの！」

「裸の付き合いで親睦を深めよう　じゃないの？」

「んなわけあるかあっ！！」

「……」

目の前のやり取りを俺は黙って見ていた。

輝燐のボルテージがどんどん上がっていくのと対照的に遥香さんはにこにここと落ち着いたものだ、とどこか他人事のような感想が出てくる。

これが本来の俺の感覚だ。相手が俺の扱いで揉めていても、罵る言葉を浴びせてきても、腫れ物に触るような扱いをしてきても、それをまるでガラス一枚隔てたところから眺めているような他人事染

みた感覚で見ている。それは相手からしてみると、

「ちよつと、何ボーツとしてるの」

そう、そのように見えるらしい。実際はちゃんと意識を向けているから輝燐がこっちになんとかなく視線を向けたのにも気付いていた。そして話しかけられたなら返事くらいする。する、のだが……

「……？」

こつして正面から落ち着いて見た彼女の顔に覚えがあつて、でも思い出せなくて、黙ってしまった。

「何さ？ ボクの顔に何か付いてる？」

眉をしかめる彼女。だが俺は、その『ボク』という一人称と翻るサイドポニーが重なって思わず言葉を発していた。

「ああ、今朝ぶつかった！」

どうやら俺の危機意識は、遙香さんに注意できるレベルのものではないらしい。

ズガアアアーン、と遠雷の如き音がマンションの一室に響き渡った。次の瞬間、蹴りの跡を顔面にめりこませた俺の体が椅子からぱたりと倒れ落ちる。絶対なんか格闘技やってるぞこの女。

「お前があつ！」

「ア、キツイテナカッタノネ」

痙攣する顔で口をパクパク動かして出た言葉はなんともロボット染みていた。

「遙香さん、もうコイツ追い出しちゃっていいよね？ いいに決まってるよね？ 警察か病院か、好きなほうくらいは選ばせてあげるよ」

それはちよつと遠慮したい。だってどっちも定住できないから。

「ダメよ。こおりくんはここに住むの」

「馬鹿言わないで！ こんな奴と同居なんてしたら四六時中貞操の危機だよっ！ ゼーったい認めない！」

「輝燐ちゃん。これは家主であるわたしの決定です。輝燐ちゃんが駄々を捏ねても決定が覆ることはありません。どうーゆーあんだす

たん？」

「……ぐう」

その遥香さんの一言はどうも最終宣告だったようで輝燐が唸り声ひとつを最後に口を噤む。代わりにこちらに向けられた視線には人を殺せそうなほどの憎しみが込められていた。

「ちなみに、こおりくんが駄々を捏ねても決定は覆りません」

まあこのくらいで出て行く気はないけどさあ。

「というわけで。お話も纏まったことだし、」

言いかけた時にピンポンと呼び鈴が鳴る。

「歓迎会、はじめよっか」

この険悪な雰囲気で何がそんなに楽しいのか俺にはまったくわからなかった。

「それでは、周防こおりくんが新しく我が家の一員となったことを記念しまして」

そこでいったん溜めを作り、

「かんぱーい！」

グラスを高々と差し出した。……のは遥香さんだけで俺も輝燐も無反応だった。しかし遥香さんは気にした様子も無くニコニコの笑顔だ。

「ふふー、今日は豪勢にいったよー。さあ食べましょー」

食卓の上には出前寿司、出前ピザ、中華セット、唐揚げやソーセイジなんかが入ったパーティーセット、それと各人の前に置かれた引越しそば。なるほど、豪勢に並んでいるが……

「ボクの時もそうだったけどさ、脈絡なさ過ぎ。美味しそうなものなんでもかんでも並べればいいってわけじゃないってば」

輝燐も同意見だったようだ。ちなみに彼女は一緒に席で食事することに断固反対してたのだが、そうしなければご飯抜きという遥香さんの言葉に渋々同席しているのだった。

「ええー、美味しいんだからいいじゃない」

「だから、取り合わせの問題なんだってば！ それに結構重たいものばかりだし、これ絶対食べきれないよ」

「それなら明日の朝ご飯にすれば問題ないよあ」

「そこが問題なんじゃなくてねえ、……」

いろいろ文句を言いつつも箸はしつかり動いていた。

「もう、今日の輝燐ちゃんはほんと怒りっぱいよ。どうしたの？

カルシウム足りてる？」

「 遥香さん」

わずかに間を置き語調を静めた輝燐が、すつと俺を指差した。

「こいつ、何者なの」

その問いに遥香さんはまったく変わらない笑顔で、

「わたしの、新しい弟だよ」

そう、言い切った。

「それで、輝燐ちゃんの新しいお兄さん」

「

沈黙。俯いて伺えない表情^{かお}。

「 うおっ」

と、いきなり料理を口に詰め込み出した。明らかにそれ許容量超えてるだろって量を。一気に咀嚼して、ごくん。

「ごちそうさま」

席を立って部屋に戻っていった。

「……はふう。反抗期なのかなあ。いつもはもっと明るいコなのに」
俺が嫌われてるだけだからどうぞ気にせず。

それにしてもどうしたものかな。嫌われる程度慣れっこなものだがいつもの事情とは完全に違う。このまま放置していいんだろうか。つか思い出してみれば、

俺謝ってないじゃん。

やっべー。状況自体はいつもと同じだからすっかり見落としてた。さすがに謝つとかないと不味いよな、人間的に。しかし今謝ろうに

も絶対聞いちゃくれなйдらうし、接触を図るだけでも難しそうなのはどうすればいいかわからない。……ここのところまともに謝ることなんてした覚えも無いしなあ。当面ほとぼりが冷めるまで待つことにしようか。

「こおりくん箸が止まってるけど、もういっぱいかな？ 男の子だからたくさん食べると思ったんだけど」

「え？ ああ、いただきます」

食事を再開したその後は、もう輝燐のことは考えなかった。

……なにこれ。なんなのこれ。どういうことなのこれ。

同居？ 男の子と同居！？ それだけでも信じられないっていうのに、そんな大事なことを相談もなく勝手に決めるフツー！？

そりゃ遥香さんはいつもほんわりしてるけどさあ、こづいことはいっしょかりしてると思ったのに……

と、そこへノックの音。思わず身構えて、

「きりりんちゃん。あゝそゝぼ」

ぐったり脱力。

「……遥香さん一人だけ？」

「うん。こおりくん、お片づけしたらお部屋引っ込んだじゃった。お話したかったけど疲れてるだらうから引き止めるのも悪いもんね」

「……」

その言葉を真実と判断してドアを開き、遥香さんを部屋の中に招き入れた。言葉通り、遥香さんは一人だった。

「……うーん」

「……なに？」

「輝燐ちゃん、過剰反応し過ぎじゃないかなあ？」

「遥香さんがユル過ぎるの！」

まったくこの義姉は、少しは危機意識持つてよね！

「さっきも言ったけどね、あんな信用ならない男家に置いといたら

気の休まる暇がないって！ いつ何時襲われるかわかったもんじやないよ！」

まあ、その時は返り討ちにしてやるけどさ！

「ああ、なるほど。それなら大丈夫だよ」

「……何を根拠に」

これでネジの外れたことを言ったらその頭を斜め四十五度の角度で叩いてやろうと身構えつつ、遥香さんの弁明を待った。

「だって、今までだって大丈夫だったし」

……少し、言葉の意味が理解できなかった。

「……今まで、って？」

「今まで、こおりくんが暮らしてたところ。同じ年頃の女の子と一つ屋根の下だったことも一度や二度じゃないのに、手を出したことは一度もないみたいだよ？」

「……」

「それどころか、手え出されそうになったこともあるくらいだってどっちかというとな難攻不落の鉄壁？ そうだ輝燐ちゃん、ここはむしろ手を出されるようがんばってみるっていうのはどうかなあ？」

……待つて。突っ込みどころはいろいろあるけど、まず何より。

どうして、そんなことを知ってるの？

まさかあいつ自身が自慢げにペラペラと喋ったわけじゃないだろう。じゃあ調べた？ どうやって？ こんなの、データに残る情報ですらないんだよ？ 以前の家族に聞か、それこそずっと生活に張り付いて監視しているくらいでないか。どっちにしても遥香さんが出来ることとは思えない。

そもそも。なんで遥香さんはあいつを引き取ったの？

そこまで考えに至り、閃きに目を見開いた。

まさか。あいつ。

ボクと同じ

「でね、輝燐ちゃん。実はもう一つ、驚きの新情報があるのです」「え？」「

その言葉に現実に戻される。何だろう。まさか、さっきボクが考えたこと大当たり!?

「実はねえ」

「ごによごによ」

「え。えええええええ!?!」

第一話 始まりの日（後書き）

はじめまして、宇野吉史と名乗る新参者です。

はじめのうちこそあまり間を空けず連投できると思いますが、なにぶん遅筆なもので、連載間隔が不定期になると思われますが、どうか見捨てないでやってください。

第二話 学園と副会長

「……ジ ムおじさん!？」

身体がビクンと跳ねた。……なんだ、夢か。

頭をぽりぽりと搔きつつ胡乱な頭で見知らぬ室内を見回す。そしてすぐに引越したばかりという状況を思い出した。最早毎度のことなので今さら混乱に陥るなんてことない。

……ふあ。久しぶりにぐっすり眠れたなあ。目覚めて早々意識がはつきりしてるのも珍しい。今日は槍でも降るかね? そう思いつつ時計を見る。

……十一時。えーっと、確か昨日床に入ったのも確かそのくらいだったから……

参ったね、十二時間寝ちまったよ! そりゃ寝覚めもすつきりさ、
H A H A H A !

……起きるか。

着替えようとして、ふと手を止めた。視線は扉へ。思い出されるのは昨日の浴室での惨事。

……乱入してきたりしないよな?

馬鹿な考えと切って捨てた。一体何の理由があつて嫌ってる奴の部屋に飛び込んでくるものか。万一何かの間違いで踏み込んできたとしても今度は硬直すらせず平然と対処できるだろうなーと漠然と想像出来る。よって何の問題も無し、と。

寝巻きのズボンを下ろした。

ガチャ

「こおりくん、運送屋さん来たよお。いつまで寝てる……の……」
……硬直。

「……あは、あははははは」
真っ赤な顔で気まずそうに笑う遥香さんが扉の向こうへ消えていく。

パタン

「……ふみゆう」

ドサリと、何かが倒れる音が聞こえた。

……ハッ、なるほどな。そりゃ、こんな事一回や二回で慣れるわけやないよな。まして相手が遥香さんとあつちや尚更か。おお、なんと。冷静に自己分析できるくらいには冷静ではないか、H A H A H A。

そんな、今現在の問題点とは微妙にズレたことを考えた。はい、現実逃避ですがそれが何か？ 冷静さ？ どこにあるんだ、んなもん。

さて、引越しとは言うもののそれほど多くの荷物があつたわけじゃないので、引越しは一時間と経たずに終了した。その間に遥香さんもどうにか復活、謝り倒されることとなった。……まあ、今回マナー違反をしたのは向こうだしね。

そして時刻は正午。朝も食べてないし胃が空腹を訴えてくる。催促をするようでなんだが、昼飯の相談をしようと口を開きかけたところで、

「お買い物しましょう」

と遥香さんが先に提案してきた。

「買い物？」

「だってこおrikんの部屋ってあまりにも殺風景じゃない。見栄えのするよう飾らなきゃいけないってわけじゃないけどお客様を部屋に上げるときに机くらいあつたほうがいいでしょう。あ、音楽なんかは聴くのかな？ テレビは？」

「いや、そんなお金ないし」

それにいざまた移り住むことになった際荷物は少ないほうがいい。しかしまた遥香さんは強引に押し進めてくる。

「構いません。お引越し記念にどーんとプレゼントしちゃいまし

よう」

「そんな、悪いですよ」

「遠慮しないのぉ。そうだ、こおりくん携帯は？」

「持ってないですけど」

「よし、じゃあそれもだね。これから持ってないといろいろ不便なもの」

うんうんと一人頷いている。

「服も結構少なかったよね。よおし、このわたしが直々に見繕ってあげましょう。それと……」

まずい。早く止めないと際限なくプレゼントが増えてゆく予感がある！　ここは話題を変えて！

「あー、それより遥香さん？　そろそろ昼飯にしてもいい時間だと思っただけど」

「ああ、そうね。それじゃあまずご飯を食べてからゆっくりお店を回りましょうか」

そう言いながらコートを着込む遥香さん。

「へっ？　もう出るの？」

「うん。美味しくて安いお店も教えてあげるね。あ、そっか、来たばかりなんだからどこに何があるかもわかんないよね。ようし、張り切って案内してあげよう」

作戦失敗。ていっかなんだこの状況、どうしてあなたはそんなところに気を遣って、どうして俺はこんなことに気を遣わなきゃいけないんだ。今までも物の無さに何か入り用はないかと聞かれたことはあったが俺が必要ないといえればそれ以上追求してはこなかったのに。

わかってる、俺は子供だ。相互不干渉を望んでも所詮養ってもらっている存在だ。しかも望まれてもいない厄介者。だからこそ出来るだけ余計な迷惑をかけないようにしているというのに、この人はなんで自分から負担を背負い込む真似をするんだらう。

「ぶふふ、お姉さんにどーんと任せなさい！」

そして、この人に言われると何故か断りにくくなる俺もまた謎だった。

「……こおりくんは遠慮しすぎです」

「いや、これだけ買ってもらえばもう十分すぎますって」

そう言っても遥香さんはぷんぷんと頬を膨らませるのを止めない。子供っぽい怒り方だ。いや、拗ねてるのかもしれない。しかし普通物を買えなくて拗ねるのは買ってもらう側だと思っただが。

ちなみにラインナップは遥香さんが勝手に見立てて買った服数着に遥香さんが勝手に見立てて買った座卓と合わせの座布団、そして携帯電話。既に中には遥香さんと輝燐の番号が登録されている。

「そもそも携帯一つ買うのに渋り過ぎです。もうみんな持つてるしむしろない方が不便な世の中だよ」

「や、わかってるんですけどね」

俺が気にしているのは月々の使用料金のことだ。遥香さんが払うというのは俺自身彼女に養われている以上（本当は抵抗あるけど）それじゃあお言葉に甘えようという気にもなるけど、また移り住むことになった際にはそうはいかない。この人はまだそういう考えはないみたいだけど、それはあのことを知らないからだろうし、よしんば知った上で住み続けることを認めてくれたとしても、またそういうこともあったが、別に家庭内だけが退去の理由には留まらない。そしてそれはいつ訪れるかわからない。そうなれば料金を払い続ける気はないからこいつはあっさり無用の長物と化してしまふ。そういうものをわざわざ買わせたくなかったのだ。

「こおりくん、なにもわたしは甘やかそうってわけじゃないの。ただね、これはこおりくんがわたしたちの新しい家族になった記念なの。だから、そのためにお金を使うのは全然間違ったことじゃないの。わかる？」

その考えは、いつ離れるかもわからない仮初のものだと考えてる

俺とはまったく逆のものだった。

「それにね、わたしが今輝燐ちゃんやこおりくんを養っていくお金は二人が大きくなったらちゃんど返してもらうから、だから全然気にしないでいいの」

これも、俺がずっとこの家にいることを前提に話している。

きっと、遥香さんの中ではそれが決定事項で、当然のことなのだ。不快ではない。俺のことをちゃんと考えてくれているのだ、不快であるはずがないが、やはりどこか他人事のように自らの立場として受け入れることが出来なかった。

と、遥香さんが何かに気づいたようにハツとなり、

「わ、わたしこおりくんたちが大人になったら退職するような年齢じゃないからね！」

「あー、はいはいわかってますって」

なんだそんなことか。まだ二十台前半でしょうに、気にすることもないでしょう。いや、これだけ慌てるってことは実は見た目より歳取ってるってことも、

ガツと両肩を掴まれた。

「こおりくん」

って痛い痛い痛い！？ って怖っ、なにそのダウンナーな笑顔！？

「女性の年齢を考えるのはね、いつだってNGなんだよ？」

「は、はいいつ！」

逆らっちゃいけない。そう生存本能が告げるまま勢いよく返事をした。

「お姉さまとの約束だよ、もちろん守ってくれるよね？」

疑問形にみせかけた脅迫に、

「はいっ、もちろんであります！」

逆らう気など一片も無かった。

その返事に遥香さんは満足そうに頷くとようやく手を離れた。その顔は元の「ふんわり」な笑顔で先程のような恐怖は微塵も感じられない。しかしそれが幻でなかったことは未だ肩に残る痛みが証明

していた。……跡残ってないよな？

しかし本当不可解だ。本気で恐怖を感じるとか、いったいどれだけぶりだ？ 多分他の人で同じ状況になったら条件反射的に同じ言動はするだろうが、本気で応じるとかは絶対ない。出会ったばかりだったのにどうしてここまで距離感が近いのか。まさか、生き別れの姉とかいうオチじゃないよな。

……姉といえば。

「遥香さん、あの輝燐って娘なんですけど」

「え、輝燐ちゃん？ 輝燐ちゃんがどうかしたの？ 気に入っちゃったのかな？」

「いえ、ただちよつとあの娘も遥香さんのこと『遥香さん』って呼んでたのが気になったな、ってくらいなんですけど」

あと、昨夜の夕飯で「ボクのとときも」とか言ってたのも引つかかるところだった。

「……うーん、お姉ちゃんって呼んでほしいと思うんだけどね」

困ったように笑う遥香さんを見てると触れられたくないことだったのだとなんとなく分かった。

「でもやっぱりお姉さま、かなあ」

「それは絶対呼んでくれないと思います。ちなみに俺も呼びません」
居候の分際で人の家の事情をとやかく言うべきじゃあなかったな、と少し後悔。えー、という非難の声を聞こえない振りして空を見上げたとき。

灰色の空に一点、白が点^{とも}った。

それは次第に二つ、三つと増えていき、遂には空を埋め尽くす。今はすぐ元に戻る地表も、いずれは白に染め尽くす。

見上げた顔にも一点、冷やりと舞い降りる。すぐに融けて水に変わる。その感触が心地良い。

「わあ、降ってきちゃった。どうするこおりくん、もう帰ろうか？ それとももう少しお店とか案内しようか？」

「あ、いえ」

ふと周りの様子を眺める。降り出した雪に足を速める人、傘を差す人。どこにでも見かける普通の光景だった。

……やっぱり気にしすぎだったな。

「あ、そうだ、もう一箇所だけ案内しておきましょうか」

「え？ あ、はい、どこですか」

その質問に遥香さんが含み笑いを浮かべた。

「こおりくん、冬休みは今日で終わりなんだよ」

そこは駅前の繁華街を出て大通りから外れ、坂道を登った先の高い丘の上にあった。

私立霧群学園。それが明日から俺が通う学校の名前だ。

校門から駐車場の向こうに見えた近未来的なデザインの校舎は、まず何といてもデカかった。玄関から入ってすぐの広々としたエントランスは四階まで吹き抜け。学校の廊下は、それにしても幅広く、教室の中は……割と普通。別棟に体育館と武道場、運動場とおなじみの施設。運動部が部活していたのでちらと覗いただけが設備はなかなか良いものを使っているんじゃないだろうか。そして校舎の周りには……何も無い。これまただっ広い雑木林で埋め尽くされている。ナニこのアンバランス。てか無駄に敷地使いすぎだろ、どうでもいいけど。

さて、そんな校舎だが一時間もすれば大体一巡りしてしまった。

……一人で。

本当は場所だけ確認したらずく帰るはずだったが、遥香さんが「学園長とお話があるから適当に校舎の中見て回っててね」とか言っただけで返事も待たず先に行ってしまった。別に待たずに一人で帰ってもよかったけど仮にそうした場合また拗ねるのは目に見えてたし無駄に反発して迷惑をかける気も無かった。そして今さらのように思う。

遥香さんって何者なんだろ？

いち転入生の保護者に過ぎない人が学園長に会いに行くなんて普通はないだろう。ここに来たのだからアポを取っていた訳でもないだろうし、個人的な関係でもあるのだろうか。いや、それ以前に俺はあの人のことを何も知らない。何をしてる人なのか、どうして俺を引き取ったのか
「ちよつとあなた」

好奇心はある。ちよつとした世間話程度に聞けばいいし、それに俺自身のことでもある。聞く権利くらいはあると思う。

「あなた、聞こえてる？」

でも決して知らなきゃいけないわけじゃない。余計なトラブルの元になるものは出来るだけ持ち込みたくは無。いやいや、さすがに遠慮のし過ぎか？ 妙な感じだ、いつもなら「どうでもいい」とか「どうせ他人事だし」で済ましている程度のことなのに

ぐいっ

唐突に耳を引つ張られ

「いつまでも無視してるんじゃないっ！！」

！！！！

耳が、耳があっ！！ 鼓膜があっ！！

耳を押さえてぶるぶると痙攣しながらも音の発生源を見た。シヨートヘアにヘアバンド、眼鏡の女の子。この学園のものだろう白と藍色のセーラー服の腕には腕章。すごい、なんてステレオタイプな委員長。それはともかく、

「なにすんのっ！！」

俺の悲痛な叫びにも委員長（仮）は呆れたように鼻を鳴らすだけだ。

「何度も普通に呼び止めたわよ。それでも聞こえないようだったから強硬手段に出ただけ。文句があるなら聞くわよ、聞くだけだぐぐ。他にも穏便なやり方があったんじゃないか、と言いたいが言えない。何と言うか、威圧感が凄まじい。怒りによる重圧プレッシャーじゃなく、有無を言わせぬ風格というやつがもたらすものだ。ただの委員

長じゃないなこいつ。

「そんなことはともかく。登校時には制服の着用が校則で義務付けられていることは知ってるわよね」

「いや、知らないけど」

この空気を読まない台詞　つくづく俺は危機意識が足りない。
この重圧の中相変わらずの他人事扱いで返事が出来た辺り大物といえるかもしれないけど。もしくは馬鹿か。

委員長がピクリと片眉を吊り上げた。そして不審そうな目でじろりと睨んでくる。

「そういえばあなた、見ない顔ね。名前と学年、クラスを教えなさい」

「周防こおり。多分一年生で、クラスは知らない」

「……おまえ、部外者か」

ちよ、おまえって！　いやそこじゃない、おもいつきり不審者扱いされてる！　通報寸前だし！

「いや、違う！　転入生！　だからその携帯しまっつて！」

「……転入生？」

全力でコクコクと頷く。

「周防こおり……」

委員長は俺の名前を呟くと顎に手を当て考える素振りを見せた。
幾ばくもしないうちに「っ頷く。」

「そうね、確かに。それで、その転入生が何故こんな所をウロウロしているの？　職員室や事務室なら向こうよ」

「いや手続きとかじゃなくて、保護者の人に学校まで案内してもらって来たんだけど、その人学園長に話があるとかで俺は校舎の中見学してなさいって」

「保護者……桜井遥香さん？」

「あ、うん……知ってるの？」

「ええ、理事の方で何度も学校まで足を運ばれてるから。さっきも会長が学園長室へ呼ばれたところだし」

「ふっん」

……………

「って理事!？」

理事って要するにお偉いさんだろ!？ 学園長に会いに来たことの説明にはなつたけど、なおさら何者なのか気になってきたぞ、おい。

「何鳩が豆鉄砲食らつたような顔してるの」

「わっ、また不審げな顔！」

「い、いや」

「まあいいでしょう。まだ正式にうちの生徒ではないということで見逃してあげるけど、明日以降このようなことがあった場合は罰則の対象になるので気を付けるように」

「ああ、はい」

ようやく解放されると思った瞬間、ピロリロと場違いな音が鳴った。何の音だろうとのんきにしているとまた睨まれた。

「え、なに、俺!？」

聞き覚えの無い音だが確かに出所は俺のようだった。服の上から体中に手を当ててみるとポケットに何やら硬い手触り。

「あ」

探り探りで操作しどうにか文面を開く。

『おっしま〜い、はやくかえろお。昇降口でまってるね』

「終わったそうです」

「そう」

素っ気無く一言だけ返ってきた。特に何か言われることもなさそうなのでこのまま立ち去ることにしよう。

「それじゃあ」

「シシドウ」

と思つたら意味不明の単語が飛んできた。

「……………はい?」

「シシドウユウキ。二年生でこの学園の生徒会副会長をしているわ。」

あなただけに名乗らせておいて私が名乗らないのは礼儀がなっていないでしょう」

ああ、なるほど。……委員長じゃなかったんだな。でも規律に厳しいって意味じゃ同じか。むしろこんなのを従える会長って何者だ、とまだ見もしない人に畏敬の念を抱いてしまふ。

しかしまた珍しい苗字だ。輝燐もそうだが、漢字変換がぱと思い浮かばない。と、表情から察したのか結露で濡れた窓ガラスに書いてくれる。

獅子堂優姫。

……。

「苗字がそのものズバリな癖に名前が全く似合っていない、とか考えてるでしょう」

「エスパー!？」

「正直で大変よろしい。ただし口は災いの元という言葉もあるのよ、覚えておきなさい」

まずい。何か地雷を踏んだ気がする。だって目の前の人の怒りのボルテージがどんどん上昇しているもの!

「それでは、人を待たせているので俺はこれで!」
返事を待たず彼女に背を向け駆け出した。

「廊下を走るな!」

「はいいつ!」

今朝といい今といい、もう上の空で歩くのはよそう。次は命に関わるかもしれない。そんな教訓を密かに得たのだった。

「あつ、来た来た。って、どうしたの汗びっしょりだよ。運動部に混ざって練習でもしてきたの?」

「いえ、気にしないで……」

ただの冷や汗だから、とは言わずに貸してもらったハンカチで拭いた。

と、今さら気付いた。いや、威圧されて気付く余裕がなかったとも言えるが、今の副会長。

また、外れてた？

どうなってる？ 六年前のあの事件からずっと纏わりついてたこの感覚、その対象外が急に二人も現れるとか、有り得るのか？ この感覚のそもその原因から考えて。

「うーん。でも傘借りてきたのは正解だったね。そんな状態で外出たら風邪引いちゃうよ？」

その言葉につられるように考え事をやめて外を見た。しんしんと降る雪はいつの間にか地面にうつすらと積もり始めていた。

「でも傘一本しかないじゃないですか」

「そうだね。相合い傘しよっか」

「ヤですよ恥ずかしい」

振り切るように一足先に玄関を出る。地面に敷かれた薄い雪に足跡が一つ、二つと増えていく。

「もう、風邪引くってば」

「大丈夫ですよ、このくらいの雪じゃあ寒くもないし風邪なんて引きっこありません」

「そういう油断が怖いんだよっ！」

そう言っただけに追いつくと傘を押し付けてきた。ちょっと過保護じゃないかこの人。

「ほら女の子のほうから誘ってるんだよ？ こんなこと人生で何度あるかわからない貴重な機会なんだから素直にお姉さんに従いなさい」

女の子？ とかいう危険な考えは必死で表情に出さないようにした。

「正直どうでもいいです」

「淡泊だなあこおりくん。女の子に興味とかある？ これから女の子二人と同居生活っていうのどう思ってる？」

「これといって特に何も。強いて言うなら男同士よりマナーに気を

つけるのが大変かな、と」

その失敗した結果が昨日のあれで今朝のあれだし。決して異性に興味を示さないというわけではないが突発的なこと以外は綺麗にスルーしてるし、それ以前の問題として人間関係を広げる気がさらさら無い。

「うーん、思ったより重症だなあ……」

「なんですか、女の子に興味がなかったら病気ですか」

「そうじゃなくて、こおりくんって人間不信気味じゃない？」

「……そんなことは」

「ない、とは一概には言えなかった。」

「ちよつと距離を開けてるだけです」

代わりの返事は肯定とも否定とも取れるものになった。

「それじゃあわたしとは？」

その言葉と同時に遥香さんが横から顔を覗き込んできた。

「つと!？」

その触れるほどに近い距離に思わず硬直してしまう。

「わたしのこと。きつといろいろ考えてるよね、こおりくんは。怪

しんだり……疑ったり。まるで信用してないんじゃない」

覗き込む瞳は俺ではなく、まるで深淵を覗いているようで ふ

と、どこかで見えたことがあるような錯覚に捉われた。

……それはさておき、彼女の言葉は事実その通りだ。隔絶の感覚がないのというのは信用できるか否かという事とまったく関係がない。むしろ却って警戒の材料になるくらいだ。

「……まるでってことはないですが、遠縁っていうのは嘘かな、と」

「……そう」

そつと答えつつも遥香さんの顔は離れない。いつの間にか密着するくらい隣に来ていた。……隣に？

顔を上に上げる。空の色は見えず傘の中にいた。周りの景色も校門を出た下り坂の途中だ。

「話し込んでるうちにいつの間にか歩いていて二人は相合い傘でし

たという罫〜！」

「……………」

サイドステップ。

「えうー!?!」

「もっほつといてください。好きなんですよ、こっ雪の中歩くの」「相合い傘して歩くほうが絶対に楽しいと思うんだけどなあ」

「はあ、と残念そうな溜め息の遥香さん。」

「仕方ありません。残念だけどこおりくんは自分の楽しみを優先するといよ」「……………」

「……………」といいつつこっちに寄ってくるのは何故ですか」

「わたしも自分の楽しみを優先しよっかなって。わーん、逃げないですよ」

Another eye

窓から外を眺めていた。眼下には正面玄関。まもなくして人影が二つ出てくるのが見えた。

後から出てきたほうは傘に隠れて姿が見えない。……………先程遥香女史に貸した、もとい奪われた自分の傘だ。有無を言わせず持っていたあの手際。うむ、参考にしたい。

注目すべきはもう一つ。先に出てきた男子。傘に入るのを嫌がるような仕草をする彼の面影はわずかばかり陰を帯び、しかし自ら雪に降られようとする彼の姿は根本的に変わってはいないことを示していた。

「あの人ですか？」

清涼感ある澄んだ声に隣から尋ねられた。

「ああ」

声が弾んでいるのが自分で分かる。歓喜に打ち震えるのを止められない。

「今の貴方を作った人、ですか」

「そう。彼なくして今の僕はいなかった。組織に属しない大多数がそうであるように、あの子を利用するか嫌悪するだけの人間になっ
ていただろう」

「わかります。私も翠歌くんが居なければそのようになっていたと
思いますから」

くくつと笑う。しかし対して目の前の彼女の表情は曇り気味とな
る。

「どうしたかね？」

「……貴方も資料は貰っているでしょう？ 彼の今までの環境と経
歴……それを鑑みれば私たちと同じようになっていないと断言でき
ないでしょうに」

「ああ、その懸念ならさつき晴れた」

「そうなのですか？」

拍子抜けと驚き。そんな表情をした彼女に自信満々に言ってやる。
「ああ。無論多少の歪みはあるがそれは君たちとは違う方向だ。そ
して、僕らなら何の問題も無い。彼は必ず僕らの期待に添えてくれ
るだろう」

「そうとも。何故なら、」

「周防こおりが雪と戯れている。」

「証明はそれだけで十分だ。」

「むしろね、僕は彼の扱いの方が問題だと思うよ。守られる立場の
人間に守ってもらうってのはなんだいそりゃあ。利用するための下
地を作っているだけじゃないのかい」

「それは仕方ないでしょう。彼でなければ解決できない問題があり、
それが完全に表に出るまでに確実に彼を味方に引き込んでおかなけ
ればならないのですから」

「うーん、僕もそう思うんだがね。そこにこおりちゃんを巻き込む
というのが、どうも、こじ……」

「あらあら、おアツいじゃないですか」

身振り手振りで表現しようとしているところへガチャリ、とノックもなしにドアが開いた。

「ただいま戻りました……何身悶えてるんですか会長」

「おや、我が優秀な片腕のご帰還だ。」

「戻ってるなら仕事して下さい。ああ石崎先輩、いらっしやっただんですか」

「ええ、また遊びに来てしまいました」

「引退した方に仕事しろなんて言いませんけど、邪魔はしないで下さいね。叩き出しますよ」

「うむ、元生徒会長にも遠慮が無い。実に素晴らしい副会長殿だ。」

「会長は喋ってないで仕事して下さい」

「現会長にはさらに容赦が無い。」

「叩き出すかね？」

「足の上に重石を載せるわ」

「それは怖い」

「実に頼もしい副会長様だ。」

その後は明日の始業式に向け、下校時刻まで仕事を続けたのだった。

Another eye end

第三話 初登校と生徒会長

「しくじった……!」

現状を呪いつつ、俺には走るしかなかった。

何故こうなると分かっていたのに昨日のうちに準備をしておかなかったのか。後悔しても足りないが今そんな悠長なことをしていただける余裕は無い。

いろいろな装飾を取り外して明瞭簡潔に現状を述べるなら。

寝坊して遅刻しそう。

しかも転校初日に。

そう、わかっていたことだ。俺の寝起きの悪さは天下一品。だといつのに昨日は何の対策もせず寝てしまったのだ。俺の荷物の大半を占めた目覚まし時計をセットすることも、遥香さんに寝起きの悪さを話すこともすっかり忘れていた。

遥香さんが俺が起きてこないのに気付き奮闘すること三十分。急ぎ学ランに着替えると朝食を取る間もなく走り出したのだった。

「ぜえぜえ……」

学校前の坂道は朝っぱらから全力で登るには酷だ。しかも雪が積もってるならなおさら。

それでも俺は走らなければならない。転校初日から遅刻などしてはいけないのだ。

いや、普通に遅刻しちゃいけないんだけどね。要するに、そんな目立つことはしたくないってことだ。別に笑いや者になるくらいどうってことはないのだが、話題の中心になるのは勘弁だ。まあ、転校生という時点で話題から外れるというのは相当難しい話なのだが、あえて話のタネを増やすこともない。

しかし、どうやら全力疾走の甲斐はあったようだ。見る、校門まであとわずかだ。時計を見ても、これなら歩いたって十分間に合う時間だ。

そう思つて減速した瞬間、
ずるっ

「うわっ!？」

雪に足を取られ、滑つて尻餅をついてしまった。すぐに起き上が
るうにも息が上がつてしまつていて立ち上がる気力が出ない。

……はあ、ついてない。そう思いつつ息を整えていると、すぐそ
ばに人の気配がした。

「はあ……ん？」

振り返る。

女の子が一人、立っていた。

正確には肩で息をして、膝に手を付き呼吸を整えているところだ
つた。制服を着ていなければ同じ学園の生徒とは思えないような小
さい身体をしているが、その顔は幼いながら人形みたいと形容でき
るほど綺麗なものだ。しかしその表情は何故か苦悶に歪んでいる。

これは……なんだろう。この娘も遅刻したクチだろうか。

「はあ、はあ………キッ」

!？ 何故かいきなり睨まれた。それから……なんだろう、胡散
臭いものでも見るような目つきになった。おい、この娘とは初対面
のはずだよな、俺？

「本当に、こんなやつが……」

「え？ 何だつて？」

聞き取れなかった呟きを反射的に訊いてはみたものの、女の子は
無視して歩き去つてしまった。後頭部から流れる二房の長い銀の尻
尾をなびかせて。

「……俺も行かないと」

遅刻間際だった。いつまでも座り込んでるわけにはいかない。

転校初日。学校が始まる前より既に静かな生活から遠ざかり始め
ていることに俺はまだ気付いていなかった。

とりあえず始業ベルぎりぎりには職員室へ到着。さすがに注意されたもののそれ以上のことは何もなく、もちろん朝のHRには間に合った。そして俺は担任の若い教師に連れられ、今は教室の前で待たされている。

最早慣れたもので転校の挨拶なんかで今さら緊張なんてしない。いつも通り名乗りと礼だけで終わらせる気だ。それでこっちの空気を読んでくれれば重畳。お節介焼きとかがいないと大助かり。

「入れ周防」

あ、呼ばれた。引き戸を開けて中に入り、黒板の前に立つ。教師が黒板に俺の名前を書いている間、ぼうつと教室を眺めていた。

「……？」

なんだろう。どこもかしこもひそひそ話が目立つ。それも俺をちらちらと見ながら。いや、転校生である俺の容姿がどうだとか話しているのは別に珍しいことじゃない。ただ、どうもその視線が冷たく感じられるのは一体……？

「家庭の事情で転校してきた周防こおり君だ」

「っと、周防こおりです。どうも」

教師の言葉に反応し挨拶、そして一礼。予定通りそこで終わった。その態度に教師は「あー」と困ったような呻きを上げると、

次の瞬間、とんでもないことを補足してくれた。

「周防は桜井の家に厄介になっっているんだっただな。何かと面倒もあるだろうから、隣の席にしても構わないぞ」

「……は？」

サクライ？　って、おい。

その発言に一瞬教師の方に向けた視線を教室へと戻した。眼球の動きだけで教室を見回す。

……発見。桜井輝燐。こちらに顔すら向けず明後日の方を見ている。あいつもこの学校だったのか。いや、遥香さんが理事をやっているくらいだしそれはいいとしても、まさか同じクラスになるとは予想していなかった。

そのわずかな間にひそひそはざわざわへと変わっていた。

「はい、しゅつもん！」

ざわめきの中元氣よく手を挙げる女子。肩までの髪に頭頂部にはアホ毛がびよこんと生えている。その娘は指名されてもいないのに元氣よく立ち上がると、

「ゆーが変態覗き魔っていうのはほんとうですかー？」

「……………は？」

「ついでに痴漢というのはなしもほんとうですかー？」

「……………はあ！？」

なんだそりゃあ。いったいどこからそんな話が出てきて

一人しかいないな。しかも完全に嘘とはいえない。

「どーなんですかー？ ってかなんかいえこらー！」

教室に入った直後からのひそひそはこれか。なんつー浸透速度。

もしかすると学園全てにまで広がってるかもな。というか下手すると自分も話題に上りかねない話だっていうのに、そこまで俺が嫌い
かあの女。

「むしすんなー、ひこくにもくひけんはないぞー、つていたいー！」

さつきから騒いでいた女子が側まで来ていた教師の出席簿で叩かれた。

「牧野せんせー、かどはひどいよー」

「うるさい、お前は今年もこんな調子かまったく。ほらお前たちも静かにしろ」

出席簿をぱんぱんと叩いて騒ぎを黙らせにかかる。それから、

「あー、周防。お前の席はあそこだ」

そう言っただけ出席簿で指した先には一つ空席があり、……………そこは輝
燐の斜め後ろの席だった。

「ほら次は始業式だぞ、体育館に移動だ。いつまでも喋ってないで
とつとと廊下に並べ。転校生に群がるのは休み時間になってからに
しろよー」

「でもせんせー、まだようぎしゃのとりしらべがおわってませんー」

被告と容疑者じゃ意味がまったく違うぞ。どうでもいいけど。

「みつちり職員室で取調べを受けさせてやるつか、藤田？」

「カツ井でないならけっこうですー」

そう言うつと藤田というらしい女子は瞬く間に廊下へと消えていった。他クラスメイトの面々もまたざわめきは残るものばらばらと廊下へ出て行く。

とりあえず俺は鞆を置きに自分の席へと向かった。既に輝燐はいなかったが予想の範疇だ。だが席に着いた途端、隣の席の女子が立ち上がった。そのまま廊下へと出て行く後姿を見送る。すれ違い様こちらに一瞥もくれないその表情は少々硬い。

小さな背。揺れる二本の尻尾。色は銀色。

今朝の娘だった。

「……………」

避けられたかな。覗きがうんぬん、痴漢がうんぬんだ。嫌悪感を抱くのも当然。しかも俺自身否定していない。

これは…………どうやら。

「好都合だ」

「しまった」

時刻は十二時半。今日は半日授業。そして教室内に他の生徒は誰もいない。

始業式の間、俺は列の一番後ろで立つたまま安眠していた。いやあ、実に快適な時間を過ごさせていただきました。ただし目覚めは階段で転ぶという最悪なもの。多分非常に機嫌の悪い某女子生徒に足を引つ掛けられたと思うんだけどそれはともかく。

始業式が終わった時点で起こされたため半分起きていたとはいえ本来ならゆっくり覚醒していたところへの唐突な痛み。次の時間は寝直すことに決めた。そう、ほんの一時間だけ寝る予定だったのだ。それが既に放課後。転校初日を寝て過ごしてしまったらしい。い

やはり、学生にあるまじき行動だね、まったく。反省。

どうやら誰も起こしてくれなかったらしい。そりゃそうか、例の話題もあるし、転校早々爆睡して全授業ブツチしてるやつと係わり合いになんてなりたくないだろう。

過ぎてしまったものはしょうがない。昼飯にしよう。家に帰って食べるか、それとも学食へ足を運んでみるか。明日以後も使うのだし学食へ行くことに決めた。

程なく到着。

「むっ、多いな」

半日授業で、少し時間も外れているため人が減ってるかと期待してみたものの、現実には甘くなかった。券売機に並ぶ列こそ少ないものの席は完全に埋まっている。

どうしようか。売店はそもそも開いてなかったからパン買って適当な場所で食べるというわけにもいかないし。帰るか、外で何か買うか。どのみち学校からは出るか。

「うおーい、そのエロガツパー！」

……………。

聞かなかったことにしよう。

「まーてよー、てーんこーせー！ すおーこーりいー！」

聞こえない、俺は何も聞こえない！ インパクトだけ無駄にある馬鹿っぽい声なんて聞こえない！ だから速攻で学食から出るのだから俺は！

「にげるかー！ ならばくらえー、伊緒のひっさつアホ毛カッター

！ おんどりやあー！」

「ええっ、外れんのそれ！？」

思わず聞き返してしまった。

「はずれるわけじゃないじゃん、あっはっはー！」

しまった！ ハメられた！

「ふっふっふ、もうにげられないぞかくごしろー」

いや、んなことないんだけどね。けど席があるっていつならわざ

わざと出て行く必要もないし。もう残り物しかないだろうけどここでご飯にしよう。

それにしてもこのスピーカー女め。周りの注目集めまくりじゃねえか。視線の種類は大半が好奇心、ところどころに侮蔑が混じってるってところか。こりゃ本当に学園中に広めてくれたみたいだな。

しかも笑い話とかで済まないような尾ひれ背びれを付けてると見た。「さー、こっちこいこっちー」

おそらく噂の拡大に一役買ってそうなヤツが呼ぶ。……早まったかもしれない。やっぱり別の場所で食うか？ でも遠くに座っても移動してくるだろうしなあ。早く食って帰るのが一番面倒が無さそうだな。

ためきそばを買って席に着く。

「ききたいことがある！」

割り箸を割って麺と油揚げを一口ずつ食べる。

「ミス研にはいれ！」

見た目豪華だろうと所詮学食か。美味さを求めるのが間違ってるってことだな、うん。

「……けー、こいつきいてない」

「ツッコミすらなしか。こいつぁ厳しいわあ」

「……ん、ああ悪い。まるで聞く気がない」

「絶対悪いと思うとらへんやろ、自分」

藤田という女子の隣に座っていた糸目の男子が話してきた。連れだったのか。

「ああ」

真っ正直に返した。そもそもここに座ったのは話を聞くためじゃあない。

「すっげー、ざいあくかんのかけらもないな、おまえ」

「ああ」

「よし、きにいったー！ ミス研にはいれ！」

「やだ」

ちゆるちゆる

「はいれー！」

「やだ」

もぐもぐ

「はいれー！」

「やだ」

ずずずーっ

「はい」

「待ちいや！ これじゃ無限ループや、あかん！ 食べ終わったら逃げられてしまうで！」

……似非臭い関西弁だなあ。

「じゃーどーする？」

「えっと……そや自己紹介！ 何するにしても基本やで！」

「うんそのとーりだ！」

元気良く同意すると挙手して立ち上がる女子。

「伊緒は藤田伊緒だ！ よろしく！」

「んで、わいが乾啓吾っちゅーもんや。よろしゅうたのむで」

「周防こおり。ごちそうさま」

「そこはキミもよろしくやろ！？ 待つて、まだ行かんとして！ 立ち上がるうとすると乾が腕にすがり付いてきたので仕方なく座りなおす。

「言つとくけど宇宙人にも未来人にも超能力者にも興味はないからね」

「安心せい、うちのミス研はもつと身近な不思議を調査中や」

「でんじろう先生の不思議な科学とかか？」

「七不思議や」

「トイレの花子さんを知り合いになる気はありません。じゃ立ち上がるうとすると乾が腕に以下同文。

「待て、焦るな。全て聞いてから考えても遅くはないはずだ」

「似非関西弁外れてるぞ」

「やかましわ！ ええか、七不思議うちゅうても普通の学校規模のものとは訳が違う。こっちは街規模や。鳴海市七不思議や。いや、もう七つくらいに収まりきらんほどのミステリースポット、それが鳴海市なんや！」

「街中引つ張りまわされる気はないので。じゃ」
立ち上がるうとすると以下略。

「たくさんあるからって全部調べて回る気はわいらにもあらへん！ 面白そうなのをピックアップして、ちょこつと実地検証するだけや。人面犬とか幽霊とか、けっこつ目撃例あつたりするんやで。どや、ほんまに出くわしそつで面白そうやろ？」

「自分からエンカウト率を引き上げる気はないので。じゃ」
立った。座らされた。

「じゃあ……極めつけの不思議現象や！ これはわいらが小学生くらの頃実際にあつた話でな。真夏に、しかも気温四十度近くの真夏日にな、なんと雪が降つたんや！」

「……………」

「しかもただの雪やない。竜巻みたいなブリザードや。その上氷の塊が飛んで建物をぶつ壊し、死傷者も多数出たという。さらにそれがなんと、この鳴海市だけに発生したつちゅうから驚きやろ」

「驚きの異常気象だな」

「それだけやない、こんな目撃情報もある。氷の竜巻の中心に死神の姿を見た、と。ゆえにこれは『白い死神』と呼ばれ、数ある不思議の中でも『七不思議』の一つとして君臨しとるんや」

「猛吹雪の中心地近くに夏服で居りやあ、そりや死神くらい見るだろ。じゃ」

「きまつたー！」

立ち上がる前に藤田がガツポーズで叫んでいた。そういえばずつとあのお騒がせボイスが聞こえなかつたな。

「おう、伊緒。なんか名案でも思いついたんか！？」

「いえーす、ちょーめーあんだよー！」

彼ら的には名案かもしれないが俺は中腰の姿勢で立ち去る機会を逸してしまった。

「はっぴよーします！ だらだららららだん！」

ドラムロールを口で言い終わると、びしつと俺を指差した。

「こーりん！」

……。

「伊緒はこれからゆーをこーりとよぶ！」

「じゃ」

「待ってー！」

またすがりつかれたけどもう付き合う気はない。天然人種と話してるとこっちの精神力がどんどん磨り減っていくのだ。

それに、実は相当へこんでるみたいだし。このまま話に付き合い続けさせるのはちよつと酷だろう。

「いや、実はこれからちよつと用事があるんだ」

なんのひねりもない嘘だ。

「ああ、そうやったな生徒会か。ならばよ行った方がいいで」

「……は？」

なのにあつさり納得されて、しかも勧められた。

「だから生徒会。呼ばれてるやる。牧セン言つとったやん」

俺が寝てる間のことらしい。

「……なんで？」

「んなもん知らへん。とにかく放課後なつてもう結構時間経つとるし、はよ行かんと大変なことになるで」

「いや、ブツチする」

そんな明らかに厄介そうなものに関わってたまるか。

「昨日も言つたと思うけど、口は災いの元。こんな誰が聞いているかも分からない場所で堂々とサボリ宣言するなんて、余程度胸が据わっているのね」

振り向くな、俺。怖くても振り返るな。石にされるぞ！

「あー、獅子堂先輩、本日はお日柄も良く」

「つべこべ言わずに来い」

「はい」

藤田は手を振り、乾は十字を切って連行される俺を見送って、もとい見捨ててくれたのだった。

「……………」

優姫先輩の威容に気圧されすぎること着いていく周防こおり。その二人の背中を少々離れた位置から見ていた。いや、睨んでいた。

…………… 優姫先輩がぴたりと足を止めた。まずっ！

振り返る、その前に視線を切る。目の前のラーメンを食べることにだけに集中する！

「……………行かねえの？」

「……………いや」

そのまま数分、顔を上げた時には二人の姿は食堂から消えていた。ふう、やっぱり人間離れしてるよね優姫先輩……………。

「……………生徒会が、何の用だろ？」

本当にボクのクラスに転校してくるなんて。聞かされてなかったら教室で絶叫してたかも。だからって遥香さんに感謝は出来ないけどさ。何考えてんだろホント。

その上いきなり生徒会に呼び出しとか……………なんかしでかしたのか、あいつ。今日一日中寝こけてたのは、まあ今日一日（マイナスの理由で）注視してたから知ってるけど、わざわざそんなことで呼び出されやしないだろうし。

気になる。やっぱりマイナスの意味で。敵情視察とか、粗探しとかの感じ。でもどうする？ 生徒会室の扉に張りつこうにも、優姫先輩がいたら百パーばれる自信がある。

「うーん」

「お困りですか？」

「！」

突然背後から掛けられた声にギョツとなる。慌てて振り返ると、
「お悩みですか？ 私でよければお力になりますよ」
笑顔を湛えた、知己の先輩がそこにいた。

「周防を連れて来たわ」

「失礼します」

獅子堂に連れられて生徒会室に入る。仕事をしていた生徒たちが動きを止めこちらに注目してくる。

「会長は？」

「職員室だそうです」

そう、と頷くと獅子堂はこちらを向いた。

「周防、あなた先生から話は聞いているかしら」

「いや、今日は一日ばつちり寝こけてたもんで」

また機嫌が悪くなったみたいだなあ。不意打ちだときついけど正面からならもう慣れた。

「で、帰っていいか？」

「まだ何も用件を言ってないのだけどね。出来るなら私もこのまま帰ってほしいわ」

「だったら構わくないか？」

「そもいかないわ。会長の推薦及び多数決で可決したことから」

「って、何が？」

「はじめにそこをすつとばしたのはおまえだ」

ときどきこの人の口調乱暴になるなあ。

「つまり」

「つまり、周防をこの霧学生会へ加えることに決まったのだよ」

獅子堂の言葉を奪って引き継いだのはいつの間にか扉から入ってきていた男だった。腕には生徒会のものらしき腕章。ぴしつと背を伸ばし自信に満ち溢れた風貌の男。

「この部屋の主、ひいては学生たちのトップ、生徒会長を勤めてい

る遠見京之介だ。初めまして周防こおりクン」

.....

「初めまして遠見先輩。もう帰っていいか？」

「おいおい、そりゃないよ。まあひとまず座ってお茶でも飲みたまえ」

言われるとおり席に着いた。ただし何故か長机の一番上座、つまり本来なら生徒会長が座る位置に。そして左右の席に生徒会長と副会長。いや、獅子堂は立つたままだ。おそらく逃走防止のためだろう。.....ちっ。

席に着くとすぐにお茶が運ばれてきた。

「ふう。いいね、すぐに温かくて美味しいお茶が飲めるというのは生徒会室の特権というものだろう。玉露にしても紅茶にしても、いっつも葉を厳選し淹れてくれる真砂クンには至上の感謝を」

「会長、早く本題を」

「ふう。優姫クンはもう少し会話に遊びを覚えたほうが良いと思うのだが」

「あ、怒りのボルテージが上がってる。」

「副会長殿が恐ろしいので本題に入ろうか。周防、僕は君にこの生徒会に入ってもらおうと思う。ああ、君に拒否権は無い。ただ素直にハイかイエスと言ってくれば」

「会長、嘘を教えないように。ちゃんとこの生徒会のシステムから説明してください」

「やれやれ、仕方ないか。生徒会の任期は一年。九月の終わりに前会長より推薦された新生徒会長のみ信任投票を行い、残りのメンバーは当選した会長の推薦によって決められるというものだ。基本的に以後のメンバー変更は無いのだが、会長の推薦があり、更に現行メンバーの過半数が賛成した場合新たなメンバーを入れることが可能になる」

「ふむ。有望な新一年生を早いうちから育てるための制度なんだろうな、本来なら。」

「で、何の間違いか通つてしまつたのよ、その案が」

「その口ぶりだと、獅子堂先輩は反対だつたんだな」

「転校してきたばかりの人間にいきなり生徒会を勤めさせるわけにもいかないでしょう。それに昨日会つた限りの私の印象だと、あなたが生徒会に相応しい人間だとは思えなかつたわ」

「だが君以外の全員が賛成したんだ、認めないわけにはいくまい？
こいつ。」

「その賛成者の意思も曖昧なものよ。『なんとなく』とか『会長が
そう言うなら』とか、適当なものばかりだわ」

「それでも可決したんだ、今さら文句を言つても仕方あるまい。あ
とは周防が了承するだけだ」

「こと」

「急いては事を仕損じる。今ここで決めてしまうことは無いだろう。
とりあえず今日は見学してたまえ。それから明日にでも判断して
もらえば決して遅くは無い」

「わる、と言いつ切る前に被せて来やがつたこの野郎。」

「いや、放課後はバイトとかしたいんだけど」

「校則で原則的にバイトは禁じられているわ」

「うわ、藪蛇だ。」

「というわけでまずは今日一日拘束されていたまえ。ああ、その副
会長殿は空手の有段者だから逃げようなんて考えないほうがいい
よ」

「進学先のこの学校に空手部が無かつたのは大きな誤算だつたわ」
「うわ、本気で残念そうだ。」

「結局部員は集まらなかつたし」
「しかも作ろうとしたのか、空手部。」

「武道場は使わせてもらえるよう話はつけたからいいのだけれどね」
「いいんかい。」

「しかし見学はともかく、俺はいつまで全員の注目を浴びる場所に
鎮座していればいいのだろうか。なんか周りの人たちすっごくやり

にくそうなんですけど。

結局、十分ほどして後獅子堂が気付くまでこの状態は続いていたのだった。

ちなみにお茶は本当に美味かった。

本日の生徒会活動終了後、会長は面談と称して俺に残るよう言いつけた。よって現在、この部屋には俺と会長の二人だけだ。

「さて周防。そろそろ首を縦に振る気になったかね？」

びらり、と入会届とか書かれた紙を目の前に突き出してくる。ええい鬱陶しい。

「……その前にさ、どういうことか説明してくんない、キョウ？」

「どういふもこういふも、僕がこおりちゃんを生徒会に勧誘してるだけだが？」

「こおりちゃん禁止！」

「可愛くていいじゃないか、こおりちゃん」

「だからやなんだよっ！」

この遣り取りでお察しの通り、俺とこの男、遠見京之介は昔この街に居た頃の知り合いだ。出来れば当時の俺を知っている奴には会いたくないのだが、こいつに関しては問題無い。性格上の問題を除いては。

溜め息を一つ吐いて仕切り直す。

「かなり強引な手段を使ったな」

「身内を傍に置けるのは生徒会長の特権だよ」

「そっちじゃない。あいつを使ったな」

「……やはりこおりちゃんは気付いてしまっつか」

「確かあいつはこんなことは出来なかったよな。昔は隠してたのかな？」

「いや、もうあの子は『ビジョムス』じゃない。そう言えば分かるかな？」

「ああ……なるほど。機会があつたら。で、そこまでして俺を生徒会に引き入れる理由は何？」

ズバズバ質問を口にする。こいつには遠慮なんて必要なかった。「何も特別なことは無いさ。それだけのことが可能な力を持つてるのなら、それで少しくらいおいしい思いをしてもバチは当たらないだろう」

「そんなので納得するとも？」

「してもらおう。でなければ学校中にあることないこと言いふらそう」「それ、あんまり意味無いと思う。今朝されたばっかだし」

「いやいや、今度は君の周りに女子が集まってくると思うよ？ 主にそう、男性同士の絡みが大好きな趣味の女子が」

……すっごい鳥肌が立ってきた。

「と、冗談は置いといて。一応側に居たほうがいいかと思ったただけだ。ここはいろいろあつたからな、少しくらい休める場所があつてもいいだろう」

「大丈夫だけどね、今までだつてずっとこうしてきたんだし。第一、生徒会の仕事しながら休めつて矛盾してるぞ」

「まあ、所詮名義上の言い訳だ。気が向いたときに来ればいいさ」

「……はあ。ま、それなら別に構わないけど。ほら、寄越せ」

返事より早く入会届けをひったくる。さらりと名前を書いて突き返した。

「それで、これで全部？ なら帰りたいけど」

「せっかちなおこりちゃんは。それとも本当に用事でもあるのかい？」

キョウは紙切れを受け取ると代わりに生徒会腕章を渡してきた。

着けることはないだろうけどな。

「ああ、少々重要な案件が」

「ふむ、君がそこまで言うくらいなら引き留めはしまい。ああ、あの子は元気かい？」

「ああ。じゃあな、遠見先輩」

「うづむ、こおりちゃんに先輩と言われるのは違和感があるな」

「俺もだよ。けどまあ、こっちの方が都合がいいんだろ？」

「フッ」

気障ったらしく笑った旧友を残して生徒会室を後にした。……で

もやっぱり『先輩』とは呼びにくいなあ。次からは『会長』とでも呼ぼう。

第四話 食卓、生徒会、そして

桜井家に着いたのは七時頃になっていた。一般的な家庭ならそろそろ夕飯の準備を始めている頃である。

「今帰りました」

「おかえりこおりくん、朝間に合ったあ？」

ぱったぱたとスリッパを鳴らしながら遥香さんが玄関まで出てきた。

「ええ、大丈夫でした」

「うん、よかつたあ。ダメだよこおりくん、朝弱いなら言っといてくれなきゃあ」

「はい、すみません」

「うん、よろしい。明日はちゃんと起こしてあげるね」
間違いなく子ども扱いされてるが実際起きれないので何も言えない。

「それじゃ着替えてきます」

「はい」

返事を後ろに自室へ戻ると机に鞆を置いて着替え始めた。着替えながら考える。

転校してきた学校の生徒会長がキョウ。その生徒会に引きずり込まれた。これが偶然？ んなわけないだろう。

キョウが話した理由なんでもちろん信じてない。あいつは絶対俺に何かやらせる気だ。多分とっても面倒なことを。

とすると、俺が転校してきたことも計画のうち、か。遥香さんもグルの可能性が高い。もしかすると学校総ぐるみの可能性もアリだ。あの場で追求しなかった理由は単純で、問い詰めても話しやしないだろうと思っただからだ。生徒会に入らなかったとしても何か目的があるなら多分嫌でも巻き込まれる気がする。おそらくキョウが提示する位置に居れば悪いようにはならないだろう。上手くすれば事

前に察知して回避策が取れるかもしれない。

という訳でこの部屋を出てからの遙香さんへの対応は今までと同じようにしよう、と思考が一段落したところで部屋を出、リビングへ入った。お茶を飲んでいた遙香さんが話を向けてくる。

「こおりくん、学校はどうだった？ 友達は出来たかな？」

「一応ね」

白々しくはならなかった……と思う。

「そう、よかったあ。こっちは残念なお知らせがあります。なんと、今夜は輝燐ちゃんが友達のお家にお泊まりでないのです。がつくり」

おいおい、そこまでやるか。ってか、俺が居る限りその友達の家
に居座る気か？ そりゃ家出だぞ。

「というわけで、今晚は二人での晩御飯なのです。それで、昨日こ
おりくんが言った通り何も頼んでないけど あれ、それなあに？」

そこで、ようやく俺が手に持っている袋に気付いたらしい。

「帰りに買ってきました。後で食費くれたら助かります」

「……もお、こおりくん。食べたいものあるんだっいたら言ってくれ
ればちゃんと買って」

ズレまくったことをのたまう遙香さんの口を黙らせるようにエロ
バッグを目の前に突き出した。

「え、ええつと、ジャガイモ？ ニンジン？ お肉？」

戸惑いながら後退する遙香さんに、その距離を一步で詰め、眼前
で宣告した。

「……これから俺は戦場に入ります。決して、邪魔しないように」
……大袈裟、と呆れる声は無視した。

それは昨日の事だった。

「うあ、もうこんな時間かよ」

帰宅後、携帯のマニユアルと睨めっこして悪戦苦闘する内に、い
つの間にか夕飯時という時間を過ぎていた。ちなみに、輝燐とは朝

起きてから一度も顔を合わせてない。

この家じゃどうしてるか知らないが、居候としては任せつきりには出来ないとりビングへ向かう。しかしここでは遥香さんが雑誌を読んでいるだけで準備をしてる様子もない。なので遥香さんに聞いてみると、

「あ、ごめんねえ」

と謝ってきた。だから遥香さんも雑誌に集中して時間を忘れてたんだろうと思った。一瞬だけ。

「こおりくんの分も勝手に注文しちゃったあ。何か食べたいものあったかな？」

……唐突に気付いた。

この家に来てから一度も手料理というものを食べていない。

この家に来てから一度も台所に入っていない！

「こおりくん、どうしたの？」

遥香さんが訝しむ声も気に留めずキッチンへ踏み込む。

綺麗だ。というかわれられた形跡がない。

冷蔵庫をオープン。飲み物やわずかな調味料が入ってるのみ。生鮮品なんて欠片も見当たらない。あ、カニかま発見。ビールのつまみか？

棚をオープン。まったく手付かずの油や醤油、フライパンに包丁。炊飯器はあるのに米びつはどこにもなかった。

ガスは通ってた。レトルトを温めるのに使ったんだろう、手持ち鍋が使われた形跡があり、大鍋はほこりを被っていた。食器がちゃんと洗ってあったのは救いか。

電子レンジだけが唯一、頻繁に使われている跡があった。

「遥香さん、質問」

「はい、なんですか」

「包丁とか器具の用意はあるのに、どうして料理をした形跡が見当たらないのでしょうか？」

「やだなあもう、こおりくんってば。わたしも輝燐ちゃんも料理な

んてからつきし出来ないからに決まってるよう」

「だったら始めっから買うなよ！」

「それにね、こおりくん。今の世の中、料理なんて出来なくても生きていけるように出来てるんだよ」

「うわあ、すごいダメなことを諭すかのよう！」

同時に響くピンポンというチャイム。

「ごっはんごはん　輝燐ちゃん出てきてくれるかなあ」

パタパタと駆けていくスリッパの音。それを背に震える肩、握る拳。

目にももの見せてくれると、誓いを胸に刻んだ。

「……………」

「はい、出来ましたよ」

あれから一時間。ホワイトソースから自前のクリームシチューにブロッコリーを添え、鮭はマイタケと一緒にバターでソテーにして盛り付けたサラダに手作りフレンチドレッシングをかける。主食はパンで。普段は米食なのだが、あいにく手持ちの金が足りなかったのでパン食で合わせてみた。

エプロンを外して席に着く。料理をしない家庭があることは分かっていたがまさかこの家もその類だとは。女所帯だからって油断していたぜまったく。

「ねえ、こおりくん」

「はい、なんですか」

「これ……食べていいの？」

「どうぞ」

「いただきますっ！」

言っが早いかクリームシチューを口に運ぶ。

「美味しい……美味しいよこおりくん！」

「別にそれほどのものでもないでしょう、いろんな店の味をご存じの遥香さんには」

明らかかな嫌味にも気付かずブンブンと首を振って一口一口噛み締めるかのように口に運ぶ春香さん。俺は普通に食べながら、心の中で密かに勝鬨を上げていた。んー、でももうちょい濃い目の味でも良かったかな？

「すごい！ なんだかご飯が瑞々しい！ わたし、もうレトルトでいいなんて言わない！」

今食べたサラダのカニかま、元々冷蔵庫に入ってたやつだけだな。

「こおりくん……おかわり……食べていいかな……」

「どうぞご自由に」

うわあ、感極まって泣きそうだよこの人……。

居候してる以上家事くらいすべきだろ、と覚えたスキルの一つが、今ここで遺憾無く発揮されていた。

閑話休題。

食後のお茶を二人で啜^{すす}る。

「こおりくん、明日お弁当作ってくれないかなあ」

「無理です。朝弱いんで」

「そこをなんとかならないかな？」

「以前やってみたことありますが、すごい味になりますよ。むしろむごい味になります」

前の晩のうちに作っておく、という手もあるのだが……朝の俺は完成してるはずの弁当に何をしているんだ。そして何故あんな壊滅的な味へと変貌しているんだ。

「うっ、そっかあ……」

深く落ち込む遥香さん。気を取り直して顔を上げた。

「あのね、明日からわたししばらくこの家からいなくなるから」

「そうなんですか？」

「うん。当分戻ってこれないと思う」

それは……なんとも。このタイミングで手料理の味を覚えさせたのはいささか酷だったか。

「それでね、こおりくんに頼みがあるの」

「頼み？」

「うん。輝燐ちゃんをね、守ってほしいんだ」
守る？

「それってどういう」

「さて、お皿はわたしが洗うね。こおりくん、早く寝ないとまた寝坊しちゃいますよ」

そう言うのと重ねた皿を持ってキッチンへと立ち去ってしまった。

「……………」

どういう意味だろう。単純に留守の間をよろしく頼むということだろうか。それとも何かがあるのだろうか。

一つの秘密が全てを疑わせる。この場所は、この人たちは、俺たちにとって害なのか無害なのか。

だから気付かなかった。

命じられるのでも媚びられるのでもない、頼まれるということが初めてだったことに。

『また留守にします、ごめんね。こおりくんと仲良くするんだよ？』

「……………」

チャンスだ。

明日はどうしよう、さすがに何日も泊まらせてもらうわけにはいかないよね、とか悩んでいたところに遥香さんから届いたメールは、ボクに絶好の機会が訪れたことを知らせるものだった。

ついに、長年の呪縛から解放された。

その為に遥香さんが連れてきた彼、周防こおりを利用する。ちょっと痛い思いをさせるかもしれない。彼に恨みは……大有りだから遠慮なく我慢してもらおう、うん。どうせ彼の立場だってボクと似たり寄ったりなんだ。そこからどっちかが解放される。

その後もあの家にいられるかは……ちょっとわからないや。遥香さんという人自体は好きだからあの家は悪くないんだけど……。

「りん、あがったぞー！」

あつ、と。風呂上りのパジャマ姿で伊緒が戻ってきた。濡れて重く垂れた髪の中、彼女のトレードマークであるアホ毛だけはぴんと立っていた。うーん、いつか引っこ抜いてみたい誘惑に駆られるよね、これ。

そういえば朝、この子があいつに噂の内容を面と向かって尋ねたときには密かに驚いた。あの噂は、流したボクが言うのもなんだけど、明らかな誹謗中傷だ。そういうのを会話のネタ以上に使うんじゃないのはよく知ってる。大勢の前で相手を貶めるような真似をする子じゃ間違ってもない。

その辺が不思議だったので、そのまんま尋ねてみたら、

「んー、なんとなく？ きーてみたくなかった？」

自分でもよくわかってないっぽい。直感に従った、みたいなかんじかなー。でも伊緒の直感って、割と当てになんないよねえ。

「こーりんなー、けっこーおもしろいやつだったぞー」

うん、当てになんない。ボクは正直言っただけに入らない。

多分例の一件……二件がなくてもそう思ったに違いない。本能的に受け付けない……っていうのともまた違う。なんていうか、無意識に神経を逆撫でされてるカンジ？ きっとボクと同じ立場のはずなのに何も悩まず日々を過ごしているように見えて、そんな人間の前で自分だけ悩まなくてはならないのが嫌なんだと思う。出来ればさっさと出て行ってほしい。

……明日、事が終わった後この考えはどう変わっているだろう。

「それじゃボクもお風呂いただくね」

「おー、あつたまってこい」

こんな悩みがこれで最後であればいい。今は、そんな悩みも何もかもすつきり洗い流してしまおう。

「いきなり生徒会入りってどういうこと？」

「なんか生徒会長と相思相愛なんだって、きゃー!」

「え、私ロリコンって聞いたけど?」

「うわっ、なんかキモくない?」

とんでもない噂が広まっていた!

「よーロリコン!」

「あんだ、わいの体が目当てやったのね!」

そんな噂の的に話しかけてくる奇特な人間が二人。

「おはよう。飲み物買ってきて」

「いきなりパシリですか!?!」

「お釣りはあげるから」

そう言って百円玉を手渡す。

「足りないやん」

「せめて購買に行つてからツツコミに戻ってきてくれ。話す時間もちよつどよく無くなつてるだろうから」

「おー、あいかわらずひどいやツだなこーりんはー。よし、ミス研にはいれー!」

「断る。去れ」

「そんな邪険にせんでもいいやん。噂話をネタに盛り上がるうやないか」

「中傷の対象にそのネタを振るのは他の人にはやめといたほうがいいぞ」

「安心せい、他のヤツにはやらんわ」

「そうか。じゃあ勝手にしてくれ。俺の目の前でどんな酷い内容の独り言を垂れ流しても乾の自由だ」

「や、あの……すみません、なんかすみません、だからお話ししませんか」

似非関西弁外れてるぞ。

「だってなー、みんなピリピリしてるもんなー、べんきょーしてないの伊緒たちだけだもん」

……そういえば皆始業前だったのに教科書なんか広げている。特

別勉強熱心な学生が集まった学校、なんて話は聞いてないから、これはどこの学校でも見かける、そう、あれだ。テスト前の一般的な風景。

「……もしかすると今日って」

「冬休み明けの学力テストや」

聞いてないし。いや、昨日寝ずに話聞いてりやせめて昨日一日は対策する機会があったのかもしれないけど。

「どうせ今からやっても無駄な努力やつちゅうねん。ほいなら道連れは多いほうがええわ」

「まえむきにバツクバツクー！」

「開き直るのは終わってからでも遅くはないと思うがな、乾、藤田」
いつの間にか教師が来ていた。

「HR始めるぞ、席に着け！ ああ周防、とりあえずお前は進度の確認くらいに受けてみる」

まだ教科書も貰ってないし、どうしようもあるまい。素直にその言葉に甘えさせてもらおう。

一時間目、現国。

いきなりの苦手教科で、すっかりやる気は削がれていた。

カリカリと鉛筆を走らせる音が教室中に響く中、ふと手を止めて斜め前を見た。

桜井輝燐。

俺が今朝登校してきたときには既にそこに座ってあの二人組と話していた。多分噂の発生源はこの辺。あの人間スピーカーなら悪気がなくてもどんどん広めそうな気がする。昨日の朝がいい例だ。

それはともかく。

気になるのは遥香さんのあの言葉。

守ってほしい。

完全に言葉通りに受け取るなら、彼女は知っていたと仮定してい

い。その上で考えて、何故？

その問いの答えは輝燐自身が知っているかもしれない。無論、話してくれるとは思ってないが。

表面的には今までよりいい環境の俺の新しい生活。しかし水面下では今までとは全く違った意味での厄介さが隠れているのは間違いないがなかった。

それが害か無害か。結局起こった後にしか動けない俺は、今は答案を埋めるしか出来なかった。

「皆、テストの結果はどうだったかな？ 良かった君も、悪かった君も、楽しくお仕事に取り掛かるうではないか」

「……………」

「ん、どうした周防、不景気な顔をして。さてはテストの出来が悪くて落ち込んでいるな」

「……………何で俺はHRが終わった途端生徒会室に連行されてるんだ？」

「生徒会役員になったのだから当然でしょう」

獅子堂が代わりに答えた。

「だってキヨ、会長が名義だよ」

「諦めたまえ周防。厳格なる我等が副会長がサボりを許すと思うかい？」

ヤロウ。始めっから計算ずくかっ！

「ていうか何故わざわざ俺の教室まで先輩が迎えに」

「周防だからだ」

すげえ。出会って三日目でもうそこまでマイナスの信頼を築き上げてるとは。

「話もまとまったところで今日の議題に」

「こんにちはです」

入りかけたところで、扉から女生徒が顔を出した。

艶やかに流れる長い黒髪からは大人っぽいイメージが、しかし頭

の両脇に結んだ小さな尻尾から子供っぽい親しみやすさが同時に感じられる、物腰穏やかな女性。澄んだ声質に口調も相まって丁寧だがどこか稚気を感じさせる。そして何より、スゴイ。所謂女性の象徴が。ストレートに言つと、胸が。はて、昨日こんな人がいただろうか。

「また来てしまいました」

「やあ杏李女史。そろそろ来るのではないかと思っていたよ。やはり彼に興味が？」

「ええ、期待の新人を拝見しに」

そう言つと彼女は俺の隣にすつと座つた。間髪入れず彼女の目の前にお茶が出される。

「ありがとうございます」

お茶出しをした女子にぺこりと礼を言つと今度は俺の方を向いた。

「周防こおりさんですね。私は三年の石崎杏李と申します。これも去年の生徒会長さんだったのですよ」

「そうだったのですか」

……なんかつられた。

「もう三年生は自由登校なのですけどね。私は皆さんが受験勉強で忙しい中、こうして生徒会室に遊びに来てしまう悪い子なのですよ」

「とうに推薦が決まっているのだから悪いことでもないでしょう」

「手伝つてくれるとありがたいけど、今の生徒会は私たち。でも偉大な先輩を歓迎することに異論は無い。邪魔さえしなければ」

「というわけで周防、初仕事だ。杏李女史を接待してくれたまえ」

「は？　なんだそりゃ？」

いきなりわけのわからない仕事を回されたぞ。っていうか仕事じゃないだろそれ。

「たいしたことじゃありません。お互い話をして親睦を深めましょう、っていうことですよ。生徒会のことではないことを訊いて下さつても結構ですよ。なにせ元生徒会長さんですから」

「と言われても」

この人にしても生徒会にしても別に知りたいことなんてないし。
「じゃあ私がこーりんのことを根掘り葉掘り聞き出す時間、ということ結構ですね」

「待て、内容自体も物騒だがその前に、こーりんって何ですか」
その質問に石崎先輩は何故かきよとんとした。

「伊緒さんがそう呼んでいらしたので」

「伊緒………藤田か。いや待て、どうしてそこで藤田が出てくるんですか」

「私、ミス研の元部員さんなのですよ」

藤田と乾あいつのの同類かつ！

「質問にも答えたところで、こーりんの尋問タイムのスタートです」
勝手に始まつてるし、ってか尋問!？」

徹底的にスルーしよう。

「で、昨日今日の噂は本当なのですか？」
いきなりそう来たか。

「それはぜひ私も聞いておきたいわね。随分とひどい噂が広まっているようだし、あなたが正式に生徒会役員になった以上、これが根も葉もない噂なのか、それとも真実なのか、場合によっては処分も検討しなければならぬから。噂の收拾にも乗り出さなければならぬ規模だし、その辺はつきりしておきましょう」

獅子堂が尋問に加わった！

「僕の調査によると、尾ひれ背びれを取り除いた大本の情報は、昨日のものが『女性を押し倒して胸を揉みしだいた』と『女性の着替えを覗いた』、今日のものが『ロリコン』と『ゲイ』だ」

「合わせ技でシヨタですね」

「人をどんどん変態にするな」

「これは失敬。では気を取り直して噂の検討を致しましょう。昨日のものに比べて今日のは具体的な内容に欠けていますね」

「だからこそ却って昨日のものに信憑性がある、とも言えるがな。で、どうなんだおまえ」

「もっと他に議論するべきことがあるんじゃないかな、と」
実は暇なのか生徒会。

「噂の中心人物が他人事のように言わないでよ」

「で、噂は本当なのかね？ ああ、いくら待ってもカツ井は出ないからね」

「今日のは嘘っぱち、昨日のは事故」

黙ってても長引くだけなのであっさり吐いた。

「あと覗きじゃない。むしろ見られた」

「……ストリーキングさん？」

「違います」

そんなに俺を変態にしたいか。

「……噂を流したのは相手の女性ね？」

「多分」

その返事にキョウと何か話し始めた獅子堂。その隙を突くかのよう
うに、

「昨日の朝の件で勘違いされておられるかもしれませんが、伊緒さんはこのような噂をお流しになる方ではありませんよ」

と石崎先輩に耳打ちされ、すぐに離れていった。藤田を庇うみた
いな言い方だな、となんとなく思ったところで獅子堂がこちらに向
き直った。

「私たちから特に言うことはないわ。ちゃんと話して解決すること、
いいわね？」

「はい」

投げやりに返事したら睨まれた。

「うむ、ではこの件は周防に一任するとして次の議題に移ろうか」
今の議題だったのか。

「あれ？ もしかしてもうお話の時間はおしまいですか？」

「うむ、周防にも早くこの空気に慣れてもらわねばならんからな。
悪いが返却してもらおう」

貸し出し物扱いだよ。

「お仕事の邪魔をする訳にはいきませんね。仕方ありません、今日のところは退散するとうしましょう」

そう言って立ち上がると、再び俺のすぐ耳元まで顔を寄せてきた。それもさつきよりずっと近い。まるで頬に口寄せるかの距離。思わず身を離そうとしたところで、

「ではごきげんよう、『最高のオーナー』さん」

「！」

ぱつと振り向く。彼女は既に顔を離していた。

「今度はもつとお話しましょう。出来れば貴方のお友達も一緒に、ね」

そして生徒会室から出て行った。

オーナー。

単語の意味は分からないが言葉の意味するところは一つしかない。知っている。俺たちを。

反射的にキョウウへと向けようとした視線は、

ピロリロ〜という電子音と周囲からの冷たい視線に遮られた。

「仕事中は電源を」

「はいっ、すみません！」

言い終わる前に携帯を取り出す。そういえば朝から携帯をいじった覚えが無い。授業中に鳴らなかつたのは本当に幸運だった。

電源を切る。前に届いていたメールを開いた。

『下校時刻後、教室で』

用件だけの短い文面。差出人は 桜井輝燐。

Another eye

「もしもおし」

『私だ』

非通知の電話番号から掛かってきた声は低く硬い男の声。

「堀内さんでしたか。いい加減非通知で掛けるの止めてくださいよ
お」

「君こそその間延びした話し方を止めてくれ。私はともかく周囲の緊張感が薄れていく」

むづ。生まれつきだからどうしようもないですよお、だ。

『『死神』の様子はどうだ』

『死神』。六年前の事件以来彼に付けられたコードネームの一つだ。

「普通に登校していきましたよ。ちょっとこちらを伺っている様子はありましたけど」

『やはり私はこの決定に納得できない』

「おやあ。どうしてですか？」

『学園に編入させたということは『死神』を我々の庇護下に置くことと知らしめる行為だ。これまでは彼をこの世界から遠くに置くことでの組織も牽制し合っている状態だったのだ。だがこれでそのバランスは崩れた。これからはどの組織も彼に対して何らかのアクションを開始してくるだろう』

昨日は朝から監視されていたようですしねえ。

『特に『あれら』は武力行使も辞さない構えだ。編入などという生温い引き入れではなく、完全に我々の側の人間にすべきだ、と語っているんだ』

「……ふう。わかってませんねえ」

『？』

「いいですか堀内さん。彼は『死神』です。『王』です。究極の中でも頂点に位置する力、それを今のわたしたちがどう御せるといいますか？ 事情を話して協力を仰ぐ？ 彼はそんな他人事、興味も抱きませんよ。拘束して言うことを聞かせる？ 力を抑えた彼を拘束したとしても、彼は虎視眈々と敵と認識した我々の寝首を搔こうとするでしょうね。最悪全力を振るわれたら組織の壊滅は決定的です。ミステイだけでも確保する？ 忘れちゃいけません、彼のミ

ステイは特殊です。オーナー無しではただのコモンですよ。きっとその性質上オーナーの変更は効きませんし、そもそもわたしたちはそんなことを起こさせないための組織でしょう。もともと、自分たちの傘下に置かないと始まらない他の組織はとりあえず確保に動くでしょうけど」

『……で、そこに彼を学校に置いておく理由がどこにある』

「彼を縛るのに必要なのは力じゃありません。情です。学校という空間、あるいは今の生活。守りたいと考えるなら彼は自然とわたしたちの手足になってくれます」

『情、ね。彼のプロフィールを見る限り成功率は低そうだが』

「そんなことはありませんよ。彼は『人間』ですから」

「？」

「ああでも、一悶着くらい起こるかもしれませんがねえ」

事実、今輝燐ちゃんと揉めている真つ最中だし。

『それはいいだろう。だが、狙われる立場にあるのはどうする？』

「狙われてくれなきゃ困ります。『その時』までに彼には戦闘経験、

『死神』の完全制御など覚えてもらわなきゃならないことが多いん

です。その為の『守り場であり戦場』である霧群学園ですよ」

彼に所謂『特訓』みたいなものが無意味だというのはわたしがよく識っている。

そして何かを思案するように携帯の向こうが黙った後、

『いつ我々についての説明をする気だ？』

「多分そう遠くないと思います。誰かが彼に直接アクションを起こせば、その時こそ間違いなくわたしたちを問い詰めに来るでしょうから」

『その後のほうが状況理解が早くて助かる、か。なるほど、では最後の質問だ』

「はい、なんででしょう？」

『君、及び桜井輝燐との同居には如何ほどの意味がある？』

「いやですねえ、未成年の彼に保護者を付けるのは当然じゃないで

すか」

『そこで何故君なのか、と聞いているんだ。いざというとき、彼を止める力がない君に適任だとは思えないが』

「全力を出した彼を止められる人なんているんですか？ まさかこの街に『皇帝』を呼び出す、なんて言いませんよね？」

彼女が動けば間違いなく『冥王』も動く。それこそ收拾がつかない事態になることくらい、わたしが言うまでもない。

『全力でなくとも、だ。今の君では不可能だろう。他生徒と同様寮住まいでもよかったのではないのか』

「……そうですねえ、先に引き取った輝燐ちゃんに彼が必要そうだったから、というのもあるにはあるんですが」

目を閉じ思い出す姿は、

「ワガママですよ、ただの」

わたしの小さなプライドを粉々に砕いた白銀の死神。

『……まあいい。君の道楽だろうと結果的に『死神』が役目を果たしてくればな』

「はい。それにしても難儀なことですよねえ。一つの危険物を処理するためにそれ以上の危険物を用意しなければならいなんて」

まったくその通りだ、といわんばかりに重い溜め息が返ってきた。

『ところで話は変わるが』

「はい？」

『どこにいます』

「高速を百二十キロ超でかつ飛ばしているところです」

『すぐに携帯をしまえ』

「え、大丈夫ですよ」

ちらとハンドルのほうを見る。わたしの手から完全に離れているそれは、勝手に動いて車を運転している。ペダル、ギアも同様だ。

『またそんな力の使い方を……。いいからしまえ、知らない人間が見れば携帯片手に運転しているようにしか見えん』

「……はい」

同僚のお小言にしょぼくねながらも素直に通話を切った。

Another eye end

生徒会活動終了後、いつの間にかキョウの姿は消えていた。逃げたな。

仕方ない、石崎先輩の言葉について問い質すのは後だ。先に教室へ向かおう。

彼女と話をすることに気の重さのようなものはなかった。どうせいつぺん話しておかなきゃならなかったんだ。その機会を彼女のほうからくれたのだから、ありがたく便乗させてもらおう。

さて、何から話すか、とりあえず謝らないといけないよな、とか考えながら教室の前まで辿り着き、ガラリとドアを開いた。

静かな教室に一人だけ。自分の席に着いて瞑想するかのように目を瞑っていたサイドポニーの女の子が扉の開く音に反応して両眼を開く。

「よう、き……」

いきなり詰まってしまった。輝燐とちゃんと話するのはこれが初めて。『輝燐』と名前を呼ぼうとしたところでいきなり呼び捨てにしているものか考えてしまったのだ。

「キミに」

その間に立ち上がった輝燐の方から話を切り出していた。仕方ないので先に彼女の用件を聞くことにしよう。

「頼みがあるんだ」

その言葉とは裏腹に彼女の目は睨むように鋭い。絶対頼み事をしようって人間のそれじゃねえ。

「聞いたらここ最近の噂話は止むのか？」

別に俺自身はどっちだろうと構わないのだが、このまま放置しておくともたまた獅子堂に睨まれる事になりそうだからな。

「かもしれないね」

そう答えながら教室の後ろのスペースに出る輝燐。黒板の前にいる俺と正反対の位置に。

「でももし頼みを聞いてちゃったらあの家を出て行かないといけないかもしれない。それでも聞く？」

「別にあの家執着があるわけじゃなし、第一お前俺に出て行ってほしいんじゃないのか？」

「そうだね」

「だからとつとと話せ。内容次第じゃ聞いてやるから」

「……別に難しいことじゃないんだよ」

その時。彼女の周りの景色が揺らめいたのを、

「ただ、殺しあってほしいんだよ、こいつと」

それを目の錯覚と思わなかったのは、経験則からだった。

出てくる。

霧の中から陽炎の道を通って。

この世界にそれが姿を現すと同時に。

光の球が俺に迫り来ていた。

第五話 対決 あるいはただの痼癢（前書き）

第二話のように主人公6人以外の視点はAnother eyeと表示して区別していますが、この話のようにバトルシーンなどでスピード感、流動感を重視したい場合はあえて区切りを入れないことにしています。

第五話 対決 あるいはただの癩癩

A few hours ago

「ウツってるよなー、キリン」

昼食時の食堂にて。勝手に俺の両隣りに陣取った例の（と言うほど二日目にして馴染みになりつつあることに溜め息を吐きたい）二人組のうち、藤田が唐突に切り出した。

「……感染る？ 風邪でも引いたのか？」

「輝燐」のイントネーションがおかしいことには突っ込まない。

「沈んでる、つちゅーことや」

「そーうつのけ、ってやつだぞ」

躁鬱の気、ね。そりやまためんどくさいことで。

ちなみに話題の当人は食堂に来てもない。購買に行ったか登校前に買っておいたか、まあ別にどうでもいい。

「浮き沈みが激しいんや、輝燐はん。あーゆー不機嫌な時には誰も近づけへん。なんせ霧学三強のひとりやし」

なにその恥ずかしい呼称。

「……お前ら普通に話してなかった？」

「普通に話せるのなんて伊緒だけや。ワイはおまけ」

「成程、確かにおまけっばい」

「ちょー！？ 今わいの存在そのものが伊緒のおまけにされた！？」
しかしな、下着姿を見られたって程度でそこまで後に引くタイプには見えなかったんだけどね。まあ、人なんて見た目じゃ分からんもんだけど。

「つーか、そんな頻繁に鬱になったりするわけ、あいつ」

「んー、たまにな。ウツってなんかやんでる。いつもなら姫のでばんだなー」

「……意外と繊細なタイプだったか」

あえて「姫」には触れない。

「ま、触らぬ神に祟りなし、うちゅーことでしばらくそつとしくのがベストやで。一緒に住んどるこおりはんは窮屈かもしれへんけどな」

返答せず茶を啜る。邪魔者扱いは今に始まったことじゃない。けど、

「つーわけだ、こーりん！ キリンのことはまかせたぞ！」

「そや！ …… ってわいのセリフ全否定!？」

「……………」

藤田に言われずとも関わらない訳にはいかなかった。今回は事情が事情、面倒でも避けたいけどいいだろ。が、

「何で俺？」

それはあくまで俺の理由。藤田が俺を推す理由にはならない。

「んー、なんとなくー？」

「……………」

ま、いつか。どうせ他人事だ。

……………さて。うまく話をするタイミングがあればいいんだが……………。

R e t u r n n o w

ガアアアンツ

「……………」

背中では破砕音が響く。扉を開け放ち転がるように廊下へと逃れた。危ない。陽炎に気付いてなかったら喰らってた。

「いきなりかよ、随分キレた真似しやがるな」

至極冷めた口調で、反対側のドアから出てきた輝燐を見遣る。

彼女の傍、足元に一匹の小さな生き物がいた。

> i 2 9 0 6 3 — 3 7 1 0 <

彼女の膝丈までの大きさ。額から後方にかけて逆立つ毛の生えた

丸っこい青色のぬいぐるみに目と口が付いている。口からは犬歯のような牙。明らかにこの世界の生物じゃない。

「ただ攻撃しろ、と言ってあっただけだから。こいつがせつかちなだけ」

「監督不行き届きっていうんだぞ、それ」

輝燐の睨み方が鋭くなった気がする。

「名前は？」

「名前？ キミ、そんなの付けてるの？ この化け物に」

……この化け物、か。言い方が刺々しい。どうやら俺と彼女では随分温度差があるようだ。

「……どうしたの？ 早く出しなよ」

次の攻撃が来ないと思えば、そんなことを言ってきた。

「キミにもいるんでしょ？ こいつみたいな化け物が」

俺の隣で陽炎が揺らめいた。

「まだだ。出て来るな。」

静止の意味を込めて腕を横に広げる。躊躇いがちに陽炎が消えていった。

「……早く出さないと死んじゃうかもよ」

「殺し合いじゃなかったのか」

「化け物同士の、に決まってるじゃない」
「やれやれ。」

とにもかくにも野良相手じゃないんだ。聞いておかなきゃいけないことは山とある。

「どうしてこの子のことを知ってる？」

「だって遥香さんが引き取ってきたんだもん。ボクと同じっていうのはわかるよ」

ボクと同じ。

「やっぱりお前、遥香さんと本当の姉妹じゃないんだな」

成り行き上だが、結局お前という呼び方になってしまった。

「そうだよ。聞いてなかったの？」

「実の両親はどうした？」

「……聞かなく、そういうこと」

その言葉とともに横にいる生き物に目を向けた。その目に宿る感情は憎しみ。

「放り出されたよ、こいつのせいで。キミだって似たようなもんなんですよ」

「……どうだろ。少なくとも俺は誰かが悪いと考えたことはないがね」

話を続けながら教室の中をちらりと見た。壁に出来た窪みから判断するに熱量より衝撃による破壊か。見かけだけで判断すると低レベルっぽいものになかなか威力がある。とはいえ、やろうと思えばどこでも秒殺出来るレベルだが……

「でも少なくともこいつがいなければボクは」

「お前以外にもこの子たちみたいのを連れてるのはこの辺りにいるのか？」

くだらない愚痴を聞かされるのは御免なので質問で言葉を遮った。彼女は不満そうに、それでも質問には答えてくれた。

「……いるみたいだよ。この学校にはたくさんね」

「……もしかして意図的に集められてる？」

「保護とかそういう名目らしいよ。生徒会長はそういう人から学園が選ぶらしいし、もしかすると役員にも結構いるかも」

何をやらせてるか知らないけど、要するに学園経営部……いや、理事会の下請け組織ってところか。

「そんなにいて何で俺に喧嘩売るんだよ？」

「だって誰がそうなのか知らないんだもん。遠見会長や杏李先輩は一人のところを見つucker機会がないし、寮に戻ったら手出しできないから」

「それで俺たちと殺し合いかよ。迷惑な話だ」

「別にいいでしょ、こんな奴らいたって迷惑なだけなんだから。それともキミはこいつら利用してるクチ？ それならそれで別に非難

しないよ、ただこいつを殺してさえくれれば」

「頼みを聞いたら出て行かなきゃいけない、ってのは？」

「ボクたちが引き取られたのはこいつらがいたからだもん。いなくなったらどうなるかなんて分からないよ」

なるほどね。向こうの事情はだいたいわかった。あと確かめることは二つくらいか。

「その子、名前はないって言ってたけどもしかして話したことかない？」

「話す？ それって犬や猫にするみたいに呼びかけるかってこと？」

そんなことするわけないじゃない」

やっぱりか。

「わかった。もういい」

聞きたいことは全部聞いた。

「そう。じゃ、こんなこととっとと済ませよう」

「ああ、そうだな。ただし」

俺は勢いよく輝燐に背を向け、

「お前の思うとおりに終わらせてやる気はないけどなっ！」

ダツと走り出した。

「なっ！」

そんな馬鹿馬鹿しい真似に誰が付き合ってるものか。

「待てえっ！」

待てと言われて誰が待つか。輝燐は呆気にとられた後追いかけてきたがそのタイムロスは大きい。しかも飛び跳ねて移動する隣生き物はさらに遅れ気味になる。

「何やってるの！ 撃って！」

その言葉に後ろを見ると生き物の口からさっきの光球が撃ち出された。

「甘いっ！」

横に移動して余裕でかわす。これだけの距離、しかも直進弾なら簡単だ。

その間ずっとあの生き物の方を見ていたが、二発目を撃つまでに一呼吸分の間がある。連射はない。

俺は三発目が放たれた直後、制服のポケットから既に取り出していた『それ』を輝燐へと投げつけた。

「!？」

「きつ！」

その生き物は一声挙げると輝燐の前へ飛び出し、自分から『それ』にぶつかつた。

がしゃっ、と携帯電話が廊下に落ちる。

……なるほど。

それを確認して俺は階段を飛び降りるようになり下りていった。

……階段を駆け降りる二人分の足音。その姿が完全に消えたのを確認して、彼らは姿を現した。

「ふうむ、これはなかなか面白い事態になったものだ」

うちひとり、長身の少年が身をかがめ、そこに落ちていた携帯電話を拾い上げた。

「……いいんですか、彼らを放置して。貴方たちの役目は彼の監視なのでしょう」

うちひとり、最も小柄な少女は一同の後ろで壁に寄りかかりつつ眺めていた。

「はい、構わないですよ。ちょうどどんな劇的な方法で彼に私たちの事を打ち明けましょうかと悩んでいたところでしたので。キリンさんの行動は渡りに船というものなのです」

最後のひとり、黒髪の少女は二人の間で微笑んでいた。

「……ほんっとーに、あれで間違いないのかしら。いきなり逃げ出しましたけど」

小柄な少女が半眼で視線を階下へ向ける。

「……えーっと、流石に私もそれは予想していませんでした。『最

強のミスティ』や『死神』などのように仰るからもつと好戦的な方だと思っていたのですが」

苦笑する黒髪の少女。携帯電話を弄びつつ少年が答えた。

「平和主義者ではないがね。言われるまま戦うのが馬鹿馬鹿しいとでも思っただらう」

ここに集まった三名は全員馬鹿ではない。既に全員の頭の中におりの方策は予想されていた。そして、その目論見が失敗に終わる事も。ならば、その後は

「結果は見えているが……イマイチ盛り上がり欠ける展開になりそうだな」

ひとり頷きつつ、彼は次の準備をすることにした。いわゆる、劇的な方法というヤツを。

俺が取ろうとした作戦は難しいことではなかった。

ただ職員室へ駆け込むだけ。時刻はまだ完全下校時刻を少し回ったばかり、何人か、少なくとも宿直の職員は残っているだろう。第三者が現れればその人が事情を知っていようがいるまいが、輝燐は手が出せないはずだ。

校外に出ればおおっぴらに手は出せないはず。その後キョウに連絡して向こうの知っている事情を全て聞きだした後、この二人のこゝとをどうにかする、

つもりだった。

開けようとした職員室のドアは鍵がかかっており誰もいないことを表していた。

だったら宿直室、いや、ここで大きな騒ぎを起こせば直接行かなくとも聞きつけてくるはず

「無駄だよ」

声のほうには階段を下りたばかりの輝燐がいた。

「ある人が手を回してくれてね。もう校舎には誰も残ってないんだ

よ。生徒だけじゃなく、先生も。残ってるのはボクたち二人だけ」
「んなつ」

「正直ボク自身も半信半疑だったんだけど……いい先輩を持ってよかつたよ」

言葉の終わりと同時に飛んできた光球を職員用のトイレへ飛び込んで逃れる。……はあ、空振りつて精神的にダメージ喰うなあ。

「ついでに言うところの辺、周りは皆学校の敷地だから、少しくらい逃げても無駄だし、騒ぎ起こしても誰も来ないよ」

「学園自体が馬鹿みたいにデカイしな……自分から男と二人きりだなんて大胆なことですね」

後半はすごい棒読みだったからか、フンと鼻を鳴らす以外に大袈裟な反応は無し。

「邪魔が入られたら困るでしょ。さすがに自分から助けを求めに走るとは思わなかつたけど。ちょっと情けなくない？」

「しょうがないだろ、それが今この場で最良の方法だと思っただから」

この後冷静に第三者も交えて話す気だったんだが、これはもうこの場で決着を着けるしかなさそうだ。

「……いい加減出しなよ、ほんとに死んじゃうよ」

「殺す気？ 俺を」

「嫌なら殺せばいいだけでしょ、コイツを。……それに、万が一死んじゃっても、殺したのはコイツでボクじゃない」

やれやれ。一度だけ波を広げた。予想通り、余裕ゼロ。目的で頭一杯で他を考える余地なし。それどころか目的の為なら全てを正当化しそうな感じか。

正直こんな他人事に付き合うのも馬鹿らし過ぎるんだが、流石にこれを放ったまま同居というのは難しいよな。

「……あー、聞くことがまだあったんだが、お前、この街に来て何年だ？」

「三年だよ。それがどうかした？」

「いや」

脅しは効かないな。

こちらへじりじりと迫ってくる。タイムリミットまでそうない。出来れば説明だけで理解してもらいたかったが、仕方ない。

「最後の質問だ。お前……」

一度言葉を切った後、言い直した。

「輝燐さ、悲しくない？」

「何が？」

「そんな小さな子供を罵っていたがって押し付けて、悲しくならねえのかって訊いてんだよ、このメスゴリラ」

足音が止まった。が、どうでもいい。

ここに誰もいないと分かった時点で既に計画は変更してる。まさか、ま・さ・か、だ。こいつ、俺を追い詰めたとか思ってるんじゃないだろうな？

だとしたらおめでたい。俺に喧嘩売った時点で、追い詰められるのは最初からお前のほうだ。

恨むなら逃げ道を塞いだ自分自身を恨め。

陽炎の扉が開く。俺の心とシンクロするかのようによろ。やるぞ。

レリーフ。

「お前の最大の誤算を教えてやる。俺の意思は
NA発動、クリアカタール」

「お前ごときが折れるほど脆くないんだよ！」

言葉の意味を図りかねて、足が止まってしまった。

子供。小さな子供。

誰の……いや、何のことを指してるかはボクでもわかった。

隣を見た。ボクが立ち止まると同時に立ち止まったこの生き物。

この化け物が……子供？

「馬鹿じゃない」

そう吐き捨てて 気付いた。トイレの前に何かが浮かんでいる。透明な……ガラス？ 水晶？ の葉っぱ？ それは何枚も、くるくると回りながら宙に留まっている。

手裏剣とか、ジグソーとかの類の刃物だと直感した。

……そう、ようやく出してきたってこと。

膨れ上がるのは歓喜か敵意か。正直もうどっちでも構わない。まるでボクのそんな感情に呼応するかのように化け物が光球を放つタイミングを読んでいたかのように。

トイレの入り口から腕が真横にすっ、と伸ばされた。

「GO！」

腕がこちらへと振られると同時にその葉っぱがこちらへと飛んできた！

「！」

それぞれが様々な軌道をもつてこちらに飛んてくる。殺傷範囲が広い。化け物だけじゃなくてボクにも当たる範囲 いや、まさかこの軌道。

狙いはほとんど……ボク！？

「くっ！」

全部は避けられない。そう思った瞬間、僕に当たる軌道の手裏剣は絶妙の地点ポイントで光の球によって砕かれていた。破壊できなかった刃物が隣の生き物を掠める。

砕けた欠片が降りかかった。これは氷？

ホッと息を吐く。その間隙、

「 どうした。自分が狙われるなんて考えもしなかったか？」

冷や水を浴びせるようなタイミングで声が飛んできた。

「それとも、狙われても何とかなるとでも思ってたか？ なら、まずその認識を改める。頭に上った血を落とせ。お前のいる場所が安全地帯だなんて思うなよ」

「この」

カツとなる頭のまま反論しようとするのを堪えて深呼吸、次いで構えを取る。中学の間習った空手。教えてくれる先輩も優秀だったおかげでそこそこ強くなれた。何より、加減の仕方を覚えることが出来た。

「キミの相手は、その化け物だよ」

「うるさいメスゴリラ。自分で殺す度胸も無いヘタレが。自分でやりたくねえ事を人にやらせようっていう、まずその魂胆が気に入らねえ」

「なっ、メス!? ヘタレ!?」

「ばっ、馬鹿言わないでよ! ボクにこんな化け物殺せるわけ」
「包丁で滅多刺しにでもすりゃ終わりだろ。化け物化け物連呼してるけど、そいつくらいならまだその程度で殺せるし。いや、もしかしてそんなものなくてもお前の身一つで殺せるのか?」

「!?!」

「あれ、凶星か? ま、殺し方なんてどうでもいいけど」
第二陣。氷の葉の群れが浮遊する。

「間違っても俺はその子を殺してやらねえから。理解したら刻まれるスライム」
ザコキメラ

「射出される、瞬間。」

光の球でその大半を破壊した。

「ふんっ、油断してるからだ! 前口上が長いんだよ!」
もついい。こいつは役に立たない。それにムカつく。

そんなに言うなら、やってやるっじゃん。ただし、殴られるのはお前の顔だけだね!

「駆け抜ける、その一歩目で、
ヒュンッ」

「光を切り裂いて何かが飛んできた!?!」

「その正体を見極める間もなく、
どん、と横からの衝撃。」

不意を打たれよるめいたボクの身体は横に倒れる。

「あいたっ」

床に尻餅をついた。カツ、とさつき飛んできたものが床に　ボク
の足が次に踏んでいただろう場所に突き刺さる。

鎌だ。

刃が極端に大きく、柄が握る部分しかない程短い、形状は鎌で間違いない。刃は全て真っ白。たとえ血に塗れてもまだ白さを保ち続けるんじゃないか、そんな幻想を抱く。

思わず血の気が引く。何考えてるんだ、こんなのを人に向かって投げるなんて。けど、こんなものをどこに持っていたんだろう。と、そこで閃く。もしかして、あいつのは生き物じゃなくて、武器なんじゃない？

壊してやりたい、そんな衝動が膨らむ。けどそれを実行に移す前に、ダツ、と地面を蹴る音がした。

トイレから飛び出した周防こおりがこちらに駆けてくる。

「……！　上等じゃない」

立ち上がり、構えるまでの間に、

「きつ！」

化け物がボクと彼の間に入った。

あの子が俺から輝燐を守る位置に入った。

息を吸うあの子の口に光球が形成されているはず。なかなか撃たないのは外れないようギリギリまで引き付ける気か。

予想通り、だな。

桜井輝燐。お前には戦う価値もねえよ。

敵も味方も分かってねえ、そんな奴に余計な手間も力も掛ける気はねえ。お前程度にはこれで十分だ。

「レリ！」

つーわけで、邪魔だからちよつと寝てる。

鎌が解ける。

一匹の生き物へと姿を変える。

> i29062—3710<

一抱えほどの球根に目と短い根のような四本の足が生え、額には大きな氷の葉。

俺の家族、レリーフ。

「なっ!?!」

輝燐が気付いた。だがもう遅い。

スベマセルティ

「SA発動! フロスト!」

あの子が光球を放とうとした直前、レリーフが氷の葉を地面に突き立てた。凍気が地面に広がり、輝燐の足、あの子の口までが氷で覆われた。

それほど強くもない、少し足止めできる程度の凍結能力だが、急に発射口を塞がれたあの子は

ポンッ!

「きいいいつ!?!」

口の中で光球が弾け、そのまま気絶してしまった。

よし、次。

「レリー!」

こちらに跳ねてきたレリーフに手を伸ばす。キンッ、と銀光とともに再び鎌へと変わったレリーフを逆手に持ち、

「チエツク」

氷を破って立ち上がろうとしていた輝燐の眼前へ突き付けた。

「……………」

睨まれてもねえ。

「いい加減、冷静に話が出来る程度には頭が冷えてると思うが? まだ足りないなら今度はその脳天氷漬けにしてもいいけど」

「……………」

…………… あー、自分から話をするつつつといてなんだが、あんまりにも今さらなこと聞かれそうな感じだし、今すぐ帰ってメシにしちゃ駄目かなー。駄目だろーなー、やっぱり。

「ボクばかり」

「ほーらーみーろー」。

すっごい溜め息が出た。睨まれた。

「決まってる。お前の思い通りにさせるのが嫌だったからだよ」

輝燐の表情が啞然となった。

「……そ、んな理由で、ボクの長年の望みを邪魔したの?」

「長いこと望んだからって願いが優遇されて叶えられるなんてあるわけないだろ。それにさっき言っただろうが、俺の意思をお前ごときが折れるかって。「そんな理由」つつうけどな、結局人と人とのぶつかり合いつてのは意思と意思とのぶつかり合いだろうか」

「……まさか、もうボクのことを折ったつもり?」

「折れた奴がそんな目してるか。大体折れるほど形保ってるのか? 熟成されすぎて腐ってるくせに」

「……」

黙ったか。ま、話も微妙にずれてるし、戻そうか。

「こんな馬鹿馬鹿しいことに巻き込まれる方の身にもなれ。そんな馬鹿馬鹿しくて下らない願いを叶えてやる義理がどこにある。それなら馬鹿馬鹿しくて下らないヘタレを叩きのめすほうがまだ有意義かなと思っただけど、馬鹿馬鹿しくて下らないヘタレの雑魚キヤラ相手に余計な力や手間を掛けるのも馬鹿らしい上にめんどくさいしで適当に済ませた結果が今の状況でございます」

「……こっちが黙ってもそっちの毒舌は変わらないんだね……」

「あとな、俺の意思を差し引いてもお前を狙った根本的な理由がある」

「根本的……ボクの方が弱いと踏んだわけだ」

「んなもん関係ない。お前を狙ったほうがあの子の動きが縛れる。」

そしてそんなことにも気付いてない人間様が相手だったってことだ「?」

輝燐はまるでわからないという顔をする。

「一つ話してほしいんだが、あの子に初めて会ったときどんな状況

「だつた？」

「？」

変な質問をするなあ、という顔をしている。

「小学校のとき……バイクを弾き飛ばしたの」

下校中だったという。赤信号で突っ込んできたバイクのライダーに、例の光球をぶつけて転倒させた。それからしばらくの間、あの子はずっと輝燐に付き纏っていたらしい。

「それ以来、ボクは化け物女扱いだよ。友達は離れてくし、嫌がらせだつて」

「で、遥香さんに引き取られた、か。陽炎の扉の開け方も、遥香さんから？」

「そうだよ。で、それがどうしたつていうの」

「むしろどうしてわからないかな。あの子はいつだつてお前を助けようとしてただけじゃない」

そのバイク事故だつて、今だつて輝燐の盾になるように動いていた。

「……………」

「……その顔だと、薄々気付いてた、つて感じだな」

「ボクが頼んでるわけじゃない」

「随分と子供の理屈だな」

「ふざけないでよ！ こいつ、クラスメイトにもあれ撃つたんだよ！ そんな危ないヤツ、助けてくれてるなんて感じられる！？」

「そりやお前が悪い」

考えるまでもなく即答してやった。しかし輝燐には思ってもみなかった言葉だったのだろう、絶句してしまう。

「ちゃんとそれはしちゃんいけない、それは悪いことだと教えないお前が悪い」

「な……なに、それ……」

「子供なんだ。『お前を守る』つてそれしか知らない子供なんだよ。そんな何も知らない子供相手に、お前は全部責任を擦り付けてるん

だ」

「何だよそれっ！　ボクがこいつに何も言わなかったと思ってるの！」

「どうせヒステリックに文句言っただけだろ。それじゃ怒ってるのは伝わっても何を怒ってるかはわからないよ。この子らはね、ちやんと話そうと思えば応えてくれるんだ。俺にはレリの声がちゃんと聞こえる。名前だってこの子自身から聞いたんだ。まあ、他の人には風が吹く音にしか聞こえないらしいけどね」

そう言っただけで苦笑する。が、すぐに真剣な顔に戻した。

「ま、よーするに育児放棄したママさんが擦り寄ってくる子供の言葉を聞かずに足蹴にした、ってところか」

「……勝手なことばかりっ、ボクはこんなヤツ望んでないっ！」

「今度は望まれない子供、ですか。あーやだやだ、なんか昨今の家庭問題見てるみたい」

大仰に溜め息を吐いてみせる。

ぱんつと手が払われた。パリン、と氷の碎ける音がした。

「さつきから勝手なことばかりっ！」

ズドン、と。

腹部から背中へ突き抜ける痛み。足が、身体が浮き上がる。

そのまま、何メートルも吹っ飛んで、背中から地面に叩きつけられて、バウンドし、ごろごろと転がってようやく止まった。

こつこつと、近づいてくる足音。すぐ傍でぴたりと止まる。

「……本気で殴ったの、いつ振りだろ」

自分の拳を睨んで、顔が悔やみで歪み、こちらに背を向けようとする。

「……まあ、全力で殴るわけにはいかんわな」

「！」

驚愕の表情でこちらを振り向いた。

「複雑骨折に内臓破裂、つてとこかな。即死でもおかしくないな。普通なら」

立ち上がって伸びをする。痛たた、こりや久々に痣でも残るかな。

「……は、はは。そつか、キミもおかしいんだ。ボクと同じで乾いた笑いを漏らす輝燐。ぺたり、とその場に座り込んだ。

「運が良かった、のかな。人殺しにならなくて、済んで」

「まあ、そうだな。自分の意思の外でいつの間にか人殺しになってた、つてのは最悪だ」

覚悟も決断も、納得だつてしてない。現実味すら乏しい。なのに、現実だけ突然背負うことになる。しかもやたら重い。そのくせ無価値だ。誰にとつても、な。

「……あいつが現れた後、いつの間にかこんな身体になってた。力が強いわけじゃないのに、何故か攻撃力だけが上がるなんて、化け物にさ」

「……その程度で化け物、ねえ」

「その程度つて何さ！」

がばつと顔を上げる。

「その程度の力も自分の意思でどうこう出来なかった未熟者つてことだけど何か？」

「……もう、大丈夫だし」

「そう。なら今さら愚痴る必要もないだろ。誰も殺してないんだろ？」

「そんなの結果論じゃない！ それに、化け物呼ばわりされたことは変わらないよ！」

「……さっきその程度つったけど、俺に言わせりゃそれこそその程度の事がなんだつーハナシなんだけど？」

「……なっ」

「正直紛れもない過大評価なんだが、それでも自分で化け物って自覚があるなら化け物って呼ばれた程度で騒ぐな。ただの事実だろうが」

「……………なにさ、それ」

「がばりと立ち上がった。すぐ目の前まで詰め寄られる。

「事実だったら何言われても気にするなつての！？ それこそありえないでしょ！」

「だから、気にするほどの事じゃないだろ。馬鹿とかヘタレとか言われて反発するのならわかるけどな、こんなもん人間が「お前は人間だ」と言われて怒るのと何が違うつてんだ？」

あ、絶句した。

「もつとも、俺から見りやお前が化け物とか笑い話にしかならんし。お前、自分がそれほど大きな存在だと思つてんの？ あの子すらまともに受け入れられない体たらくでさ。むしろその器の小ささであるの子と共生してることにこそびっくりだ」

「……………ふざけんな……………ふざけないでよ！ なにさ、さっきから無茶苦茶ばかり！ ……そうか、あんたずっと隠し通してきたんでしょ？ だからそんな、気楽なことばかり」

「初めに引き取られたところで、刺されそうになつたのを刺し返して、傷口を凍らせてから転居先だけ決めさせた」

ぴた、と、まるで一人だけ時間が止まったみたいに硬直した。

「ばれていじめだったか。それなら何度かあつたぞ。居候先にまで迷惑がかかりそうになつた時点で引越した」

なんでもないように言う。実際、なんでもないことだ。

「極めつけは一番始め、この街での事か。数十人殺してる」

あ、青くなった。いや、白か？

「……………ひ、ひどごろ、」

「そうだよ。人殺し。レリの力を暴走させて辺り一帯を破壊した。

誰かさんと同じ、未熟者の不始末って奴だ。ちなみに、そのことでレリを責めたことは一度もないけどね」

「……ど、どうして？ 人を、人を……殺してるのに……まだ、そんなのと一緒にいるなんて」

「レリのせいじゃない。止められなかった俺のせいだからだよ」

あの夏の日。泣き叫ぶ『レリーフ』を抑えるだけで周りは全く見えなかった。その惨状を知ったのはずっと後のこと

「レリが悪くないわけじゃない。けど責任を取るならそれは俺だ。あの時唯一レリを止められたはずの俺なんだ」

「どうして、そこまで……」

俯き顔からぼそりと聞こえたその問いの答えは、俺にとって実に当然のことだった。

「別の生き物と思うから考えにくい。家族だと思えば簡単だ。弟や妹だと思えば当然だろ。望んで得たのだからうとなかるうと、見捨てることなんて出来るか。例えば自分が見捨てられた人間であっても、いや、それならなおさら見捨てちゃいけないだろうに」

とんつと軽く押す。それだけで足の力が抜けたように座り込んだ。「お前と同じ？ 馬鹿言うなよ。俺は化け物だ。正真正銘、あらゆるものを破壊出来る化け物だ。そしてもう一つ。俺は人間だ。それは化け物、化け物と連呼したところで変わるほど安っぽいもんじゃない。化け物であることも、レリと共に在る事も、人間であることも 全部俺だ。で、お前は？ 少々『異質』な程度で自分を化け物とか言つといて、そのくせ他人から言われる分には拒絶する。人間であることにすら自信を持ってない。そんな自分って存在を何も定めてないお前。いつたい俺と何が同じだったんだ」

それから数分、沈黙が続く。いつまでだんまりしてる気だろ。もういい時間だし、とつと帰ってメシ作りたいんだけどなあ。もう、こいつ置いて先帰ろうか。

「……… かない」

ん？ なんだって？ 声が小さくてよく聞こえ

「わかない……わかないよお……… そんなこと今さら言われたって、もうなにがなんだか……… ひっく、う、うわああああん！！」

……泣かれたし。やっぱり俺が泣かせたことになるんだよなあ、これ。流石に放置するわけにもいかないのはわかるが……さて、どうしよう？

ちか、と背後からの光。

ぐい、と輝燐の襟を掴んで横っ飛ぶ。

「うえ!？」

突然のことに驚愕に包まれる輝燐には構わない。俺たちのすぐ横をレーザー光が駆け抜けた。

……はじめから当たる位置じゃなかったか。

そして気付く異常。既に世界は異界だった。

建物自体に変化はない。ただ、周囲に霧が満ち充ちている。

金色の『霧』。

てことは囚われた、ってことになるのか。背後、暗闇の向こう。

目を凝らしても何かの姿を見出すことは出来ない。波を広げた。…

いる。当面は二人。さっきの攻撃は挑発か。乗ってやる義理はないんだが……

「まあ、乗らないと帰らせてくれそうにはないよな」

暗闇の中へ足を踏み出そうとして、足がぐいと引っ張られた。

「?」

足元に目を落とす。ズボンの裾、そこに指が二本引っかかっていた。

「……畏ならもっとうまくやれよ」

「……ふえ?」

「歩き出したときを見計らって転ばせる魂胆。違うのか?」

「……あ、れ?」

ようやく輝燐の目の焦点が合う。視線の先は彼女自身の手。それを呆然と見ている。

「……無意識に畏を仕掛けるとは、未恐ろしいヤツ」

「なっ、ちがつ」

「じゃあ何か。一人で残されるのは心細い、とか? だからってさ

つきまで自分を罵りまくってた相手に縋り付くのは人選ミスだと思
うが」

「……せ、選択の余地ないじゃん」

「相手が人殺しの化け物でも？」

「ビクンと肩が跳ねた。ま、無意味に脅す必要もないか。

「心配すんな。あちらは俺に用事みたいだし。殺しもしねえよ、ち
よっとお灸を据えてやるくらいだ」

「あ……」

指を外して歩き出す。数歩進んだところで、

「あ」

唐突に思い出した。そうだ。そういえばすっかり忘れてたけど本
来の目的を果たしていなかった。

「おい、輝燐」

振り向くと、「ふえ？」と間抜けな声で顔を上げた。

「悪かったな、引つ越したばかりの時とか。ごめん」
ぺこりと頭を下げた。ふう、ようやく言えた。やれやれ。

「んじゃ」

「ちよ、ちよっと待ったー！」

ぐいっ

今度こそ、後ろから伸びてきた手が絶妙なタイミングでズボンの
裾を引っ張った。

びたーん！

……顔面から廊下に倒された。

「……ごめん。でもボクに殴られても平気なんだし」

「……耐えられるからって痛くないと思うなよ」
むっくと上体を起こす。

「で、なに」

「……なんで、今ごろ謝るの」

「そりゃ、謝ってなかったから」

「そうじゃなくて、その、こんなことした後なのに、って」

「それは関係ないだろ。元々俺の用事はこれひとつだったのに、余計な手間掛けさせやがって」

まったく、何を不思議そうに聞くんだけ。こんな当たり前のことだろうが。

「悪い事したと思ったら謝る。そういうもんだろ、人間って」

第六話 対決 あるいはただのコント と戦後処理

カッン……コッン……

黄昏時の校舎。元々無人の場所が、さらに『霧』によって外界と遮断され、今や完全な異界。その中でただひとつ、まるきり無警戒の調子で堂々と靴音を立てて歩いていく。無人に見えてもこの場には他の人間が存在し、さらにその人間に標的にターゲットされていると理解した上で。

『つくづく唯我独尊だよな、こおりつて』

腕の中から半分呆れたという声が投げられる。

「そう見えるんだろうけどさ。逆に言うけどわざわざ潜んで行動する意味ないだろ？ さっきの挑発は完全にこっちの位置を掴んだ攻撃だったし」

『じゃなくてね、あの娘の事』

「……うん？」

『向ここの事情に頓着しないでこっちの意思ばかり押し付けて』

「しかも一般的に正しい……かはともかくとして、多数派なのはあいつのほうだろうな」

『それでもこおりは自分の正しさを押し付ける、と』

「押し付けねえよ。あいつの考えがどうだろうが、どうなるうがどうでもいい。ただ意思と意思がぶつかったから、俺は俺の正しいほうを貫いた、それだけだ」

『人間』、そして『化け物』周防こおりの意思。それを俺自身が正しいと認識している限り、俺は絶対に意志を曲げることも、折れることもない。……まあ、唯我独尊とか自己中とかいう類だわな。

『どうするんだろうね、あの娘』

「さあ。二度と俺たちにこんな真似しないならどうでもいいよ」

同居してるんでなきゃこんな説教の真似事なんてしていない。所

詮他人事、あいつがどうするかなんて知った事じゃない。

そんなことより状況への対処が最優先だ。そろそろさっきの波で感知したポイント。仕掛けてくるならこの辺りか

キラッ

と、思った矢先、前方に光源。

チュインッ

今度は正確に、さっきまで俺がいた空間を貫通する光線。光が見えた瞬間、反射的に飛び退いていた。

しかし、その行動は予測されていたようで、暗闇の中から小型の物体が飛び出し、

「プフウッ！」

放射状に糸が吐き出された。被れば絡め取られて身動きが取れなくなることは容易に想像できた。

が、予測していたのはあちらだけじゃない。既にこちらは敵の数を把握している。波にかかったのは三人。そして二体。うち一人は傍観を決め込んでいた。つまり、相手は二組。それがわかっていれば、闇に紛れてもう一体が奇襲を仕掛けてくる、というのは簡単に予測がつく。

「スノウプレス」

鎌から元の姿に戻っていたレリーフの口から雪風が吹き出された。それは糸を覆い、撥ね退け、その寒波は向こうにいる生き物。ぬいぐるみたいないなイモムシにもダメージを与えた。

「ピュイッ！」

怯んだイモムシが戻っていく闇の先。そこから、

「あら、読まれていたみたいです」

声と共に女性的なシルエットが静々と進み出てきた。

闇に溶け込むような黒髪。場違いなほどに穏やかな笑みを浮かべたその女性の名前を、俺は知っていた。

「石崎先輩」

ついさっき会ったばかりだからか、俺にしては珍しく名前がすん

なり出てきた。まあ、インパクトも強かったしな。

「はい、こんばんはですこーりん」

「何の用ですか、こんな時間にこんな場所で」

「酷いですが、こーりん。またお話ししようといつ先程言ったばかりではないですか。それと、下の名前で呼んでくださって結構ですよ」

「いや、別に苗字でいいんで」

「名前で呼んでくださって結構ですよ」

「いや、だから」

「名前で呼んでくださって結構ですよ」

「……………」

「名前で」

「はいはい、杏李先輩。これでいいんでしょう」

上品な笑みを崩さず頷いた。見た目に寄らず押しが強い。いや、元生徒会長で元ミス研部員とかいう変人を外見で判断するってのがそもそも間違いのなのか。

「その君たち、場の雰囲気を見殺し過ぎだ」

パンパンと手を叩きながら登場したもう一人の人間は

「と言われてもだな、キョウ。無意味に場を緊迫させる理由もないんだが」

遠見京之介。幼馴染みで生徒会長。そして、

「おや、いったい何故だね？ 感動の再会を果たした幼馴染みに突然攻撃されるなんて、裏切りという世界の無情さに悔し涙を流すとともに敵意を剥き出しにするシーンだと僕は思うのだが」

不敵に三日月のような笑みを浮かべるキョウ。その背後の闇からぬろつと現れた、人ほどの全長があるそいつの体型は手の生えたオタマジャクシ。ただし顔はモニター、頭の上にはアンテナがあり、背びれが生え、手の形、尻尾の先はスパナの様だ。そいつが宙に浮いている。

俺や輝燐、それからそこにいる杏李先輩と同じ。陽炎の扉から生

物を呼び出し共生する人間の一人だ。

「……悪いが、俺がそんなことをするシーンがまったく思い浮かばない」

「非常に残念ですが、私わたくしもです」

「妄想力が足りないぞ、二人とも」

「知らない、そんな力は知らない。」

「わかりました。是非その力を上げる特訓法を教えてくださいませ」
「……今ここに腐女子が誕生する予感が。」

「つーかな、裏切りとか演出したいならせめて殺気くらいはまとも
に放ってくれ。正直、こつちのやる気がだだ下がる」

「ぴたり、とキョウの笑顔が固まった。」

「……難しいものだな。衝撃的な展開というものを心がけたつもり
だったのだが、演出がむしろ逆効果になるとは」

と、顔を伏せたのも一瞬、次の瞬間には、眼光の鋭さが若干増し
ていた。

「テレムス」

空中をウナギのように泳ぐそいつの名を告げるキョウ。その途端、
アンテナの先にパチパチと電気が弾ける音と共に光が収束し始めた。
こちらも若干気を引き締め、いつでも動けるよう身構える。さつき
までより近くなったこの距離で放出する瞬間を見極めて回避、なお
かつ杏李先輩側にも注意を払うというのはなかなかに厳しい条件だ
が

と、その辺りに注意を払っていたから、予期せぬ行動への対応が
遅れた。

テレムスがぬるっと、空中を滑るように俺へと一直線に泳いでき
た！

こちらに向けられているのはあくまでアンテナ。角のような硬さ
も鋭さも本来なら期待すべくではない。しかし、今はレーザーの発
射前。収束されたエネルギーを身に宿したアンテナは、いわば高熱
の槍に他ならない。そんなもので刺されるのは御免被る。

迎撃か、回避か。

回避を選択。この距離でアーツを撃ち合うのは危険だ。クリアカッター、スノウブレス、どちらも威力という点で決定打に欠ける。攻撃の為にレリーフを前面に出すのは、あのレーザーの威力と双方の距離を考えると避けたい。

後退しつつ、アンテナの直線上から逃れるよう横にずれる。それでもこちらの後退速度よりテレムスが迫ってくるほうがわずかに速い。それにこのままどこまでも下がっていくわけにもいかない。

反撃のタイミングを計る。右手には既にレリーフの鎌。狙いはアンテナそのもの。熱量を放射せず溜め込む、なんてのはアレの本来の役割じゃない。なら、今の状態は相当無理があるはず。おそらく今なら容易に破壊できるはずだ。

3、2、1 前傾姿勢で飛び込む！

一気に距離が詰まる。アンテナがこちらへ向きを修正する前に斬り上げ

テレムスの背中から、俺の真上に飛び出す影。

あれは、杏李先輩のイモムシ！？

「プファア！」

糸 粘性の糸が降り注ぐ。今度は迎撃も回避も出来ず、絡め取られる。当然、存分に腕を振り上げることも出来ない。そして、こちらを捉えるアンテナ。

「パラポラレーザー」

キョウウの無情な声と共に、光線が俺の胸に突き刺さった。

「……………」

熱さと衝撃に歯を食いしばる。糸は熱と威力で焼き切れ引きちぎられ、俺が吹っ飛ばされ転がる障害にはならなかった。

「……………げほっげほっ」

咳き込んで、痛みを覚えながら立ち上がる。制服の撃たれた場所が黒焦げになって穴が開いてるが、肝心の身体のほうは軽い火傷のみの軽傷だ。

「……確か、あの光線って鉄板を貫通しておられましたよね？」

杏李先輩が頬に手を当てて驚き眼でこちらを見ている。おいこら、そこで驚くくらいなら止めるよ。死んでたらどうする気だ。

「本当にデタラメな力ですね、『異質』というのは」

「まあ、それ以上に『ミステイ』がデタラメなのだがね」

「……で、満足したのか？ だったらさっさと帰りたいんだが。そろそろ買い物に行かないと、安売り品を買い損ねる」

「済まないが、今日は諦めて付き合ってくれたまえ。君だって、いろいろ聞きたいことがあるだろう？」

ふむ。まあ、確かに今の面倒な状況について説明が欲しいとは思っていたが。

「悪いんだが、優先順位はこっちが上だ。時間が惜しい、さっさと終わらせよう」

くいつと、挑発するように手招きした。キョウはそれを見て笑みを浮かべ、

「遠見京之介、“情報鰻” テレムス。行くぞ？」

「石崎杏李、“幼念虫” ワーミン。お手合わせ願います」

二人揃って礼儀正しく名乗り上げ、杏李先輩が何か液晶画面の機械を取り出した。

「……周防こおり。“六花の種子” レリーフ」

こちらも同様に名乗り、逆手に持った鎌を突き出す。向こうには殺意も敵意もないが、戦意だけはあつ。そして、こちらを値踏みするよつな意思も。

……俺を試す、か。まったく、面倒な事をしてくれるもんだ。それなら、

「リミテッドシंकロ
限定融合」

それなりに、見せつけてやるまでだ

「……………」

彼が去ってぽつんと一人になって。遠くで何かが壊れる音が聞こえて、でもここは寒いくらい静かで。

ボクにはまだ、立ち上がる意思すらなくて。ぐっちやぐっちやにかき回された頭の中。さっきまで確かに憎悪みtainなもので満たされてたそこには、今はぽっかり大穴が空いたみたい。

考えが纏まらんない。ていうか、まともな思考をしようとしてもすぐさまぼやけて霧散してしまう。

ただ、ひとつ。焼きついたみたいに鮮明に残ってるのは、ボクを精神的にフルボッコにしてくれた当の本人の、後ろ姿

「……きいいい」

か細い鳴き声。引き寄せられるように振り向いた。

青い、ぬいぐるみみたいな生き物。こちらを心配するような顔で鳴いている。

「……………」

見るたびに嫌悪と憎悪が浮かんできた、そのはずだった。でも、今は何も浮かんでこない。どういう感情を持ってばいいのか、わからない。憎悪が消えたからといって簡単に割り切れるほど、ボクらの時間は短くはなかった。

ただ、ボクはもしかしたら、

「……いいよ、心配しないで。大丈夫だから」
初めて、こいつの顔を見たのかもしれない。

……本当に、なんとなく。何も考えず。

ゆっくりと、手が伸びて、

ドカンッ！

「ふひゃあっ!?!」

身が竦んで手が引っ込んだ。な、何？ おっきな音と同時に校舎が揺れて、向こうから何かが

「飛んできたあっ!?!」

しかもまっすぐボク!?!

「とっつ」

横つ跳びで躲すとソレは廊下に叩きつけられさらにゴロゴロと転がった。……うわぁ、痛そう。

そのままピクリとも動かない。生きてる、よね？

「……痛い」

あ、生きてた。うつぶせの状態から顔だけ上げる。って、

「……キミ、何やってんの？」

よく見るとそばに目を回したおっきな球根　レリーフだっけ？
が転がってた。どうやら一緒に吹っ飛ばされてきたらしい。

と、背後でザツと足音。反射的に振り返る。

「……会長に、杏李先輩？」

二人が　いや。二人と二匹が姿を現す。と同時にこの状況を理解して、咄嗟に身構え

「ギブー。モーやめたー。俺の負けー」

まったく緊迫感のない声で力が抜けてしまった。

「はい。意外と簡単に勝てました。びっくりです」

「ははは、まあこんなものだろう」

……なに、この和やかムード？

「ええと……キミたち、殺しあつてたんじゃないの？」

「なんでそんな物騒な単語が唐突に出てくるんだ。こんなもん、ちよつとじゃれてただけだろーが」

「……そーゆーもん？」

「こーりんのじゃれあい随分過激なのですね」

「もう少し危機感を持って欲しかったんだが……正直、喧嘩にすらなっていないかったなあ」

「………」

ぐにっ

「おい、何故踏む」

「んー、なんかね。えらそーなことを散々言ってくれたクセにあっさり負けて帰ってきた誰かさんがムカついて」

立ち上がるうとする動きを見せたのでさらに体重をかけてやる。

うーん、なんかいいかも、コレ。

「ははは、なかなか屈辱的な光景じゃないか、こおりちゃん」

「……いや、俺としては今の格好よりその呼び方」

「……いいかも」

「へっ?」

「うん! その『こおりちゃん』ってのしっくりくる! それ、貰うね!」

「伝染した!? 屈辱的だからヤメ口って言おうとしたのに!」

「うむ。特許は取得していない。存分に呼びたまえ」

「勝手に認めるなっ! ……いや待てその外面大和撫子、何をしとる」

杏李先輩が携帯片手にこちらを眺めていた。

「はい、記念撮影です」

その言葉と同時にフラッシュが焚かれる。液晶画面に、顔面を踏みつけられたこおりちゃんがバツチリ写されていた。直後、

「……もうどうでもいいから、さっさと帰らせろ……」

何もかも諦めたように呟いて、床に突っ伏すこおりちゃんの姿があった。

「……というわけで、僕とこおりちゃんは運命的な再会を果たしたというわけさ」

「へえ、そうなんですか」

「キョウウさん、その話のもう三回目ですよ」

「はっはっは、良い話は何度話しても良いではないか、杏李女史」

「ああ、そうですね」

輝燐は話には上の空でただ相槌を打っている。その意識はリビングにはなく、俺がいるキッチンへと向けられていた。どうにもやりにくいが九十パーセント誇張で占められたキョウウの話を全く覚えて

いないだろうことは幸いだ。

「ほら、出来たぞ」

まずお盆に人数分のご飯、取り皿、ポン酢と大根おろし、柚子を乗せてテーブルに運ぶ。

「……ゴクリ」

それだけでもう生唾を飲み込んでいる奴が一人。

「熱いから気をつけるー」

そう言いながら今日買ったばかりの土鍋を鍋敷きの上に置いた。蓋を開けるとむわっと湯気が立ち昇る。中身はオーソドックスに水炊きだ。

エプロンを外しながら席に着くと隣から声が掛かった。

「こおりちゃん……これ、食べていいのかな？」

「どうぞお好きに」

「いただきますっ！」

言うが早いか具を片っ端から取り皿へと確保していく輝燐。ふーふーと冷ましながらポン酢につけた鶏肉を口の中へと放り込んだ。

「……美味しい。美味しいよこおりちゃんっ！」

「どうも」

他の三名はがつつくこともなく普通に適量とって食べていく。

「ふうむ、こおりちゃんが料理できるようになってるとは、意外だな」

「居候の身で家事もしないなんて迷惑者なだけだろう」

「それにしてもそこらのお弁当屋やファミレスよりずっと美味しいですよ」

「その手の食生活がどうにも気に入らないもので。となるとそれらより美味さで負けるわけにはいかないじゃないですか」

「……こーりんも難儀な性格していますね」

「こおりちゃん、ご飯おかわり」

「自分で行って来い」

その後、具の少なくなつた鍋にうどんを入れて鍋を最後まで味わ

った。

「こおりちゃん、明日お弁当」

「朝弱いから無理。味の保障しないなら可」

「ぐすん」

血が繋がってなくても姉妹って似るんだな。

「ふう。こおりちゃんの料理も堪能したことだし帰るとするか」

「そうですね」

「待てポケ会長コンビ」

しなきゃならない話を何もせぬまま帰る気か。何のために飯まで食わせたと思つとる。

「ははは、軽い冗談だよ。では、何が聞きたいのかな？」

「俺を生徒会に入れた本当の理由は何だ？」

「うむ、話すのは構わないが、物事は順序立てるべきだ。まずこおりちゃんがどこまで知ってるのかわからないという混乱が生じやすい」

「わかった。といつても、俺が輝燐から聞いた話は霧群学園に俺たちみたいな『霧に棲む生き物』を連れた人間が集められていることくらいだ。あとは生徒会が学園の下請けなんだろうってところだが、間違いないか」

「うむ、相違無い。輝燐くん、その話は遙香女史から？」

「私です」

意外なところから手が上がったのにはキョウも驚いたようだった。

「成程、今回輝燐に手を貸してたのはあんたか」

「どうもいろいろと思ひ悩んでいらしたようなので、何かの役に立てばと思ひこつそりと」

とか言ってるが、要するに扇動したんだろ。甚だ迷惑な。

「杏李女史の暗躍はともかく、それならば一から説明したほうがいいな。まず君たち二人もよく知っている、この世界とは違う場所にある霧に棲む生き物たち。それらは総称で『ミステイ』、その世界とこちらの世界を繋ぐ陽炎の扉を開けミステイを呼び出せる人間を

『オーナー』と呼ばれている。個人情報であるからどの生徒がオーナーなのかは教えられんが」

「興味もない」

「そう言うと思っていたよ」

「それより、そんなに一箇所にそのオーナーを集めて大丈夫なのか？ 多分野良が出やすくなると思うんだけど？」

「野良？」

輝燐が首を傾げた。

「遭ったことないのか。オーナーなしでこの世界に出てきちゃったミスティのことだよ」

「はい、確かにオーナーの密集地では扉が開きやすくなり野良ミスティが現れる確率が増加しますが、よくご存知でしたね？ こーりんのミスティの性質上、『霧』のこと自体ご存知なくても不思議でないと思うんですけど」

「昔会ったオーナーからいろいろとね。もつとも、あの人はミスティやらオーナーやらそういう言葉は教えてくれなかったけど」

自分の名前すら教えてくれなかったが、それでもあの人から教わったことは大きい。

「そのリスクを負ってでも僕らには保護と監視が必要というわけさ。特に生徒会に在籍させたような者はね」

「つまりはそれが理由か」

「君は特にね。転入後すぐテレムスの力を使って生徒会入りを承諾させたのも、本来生徒の意思を、たとえそれがオーナーであつても尊重するところを強引に納得させたのも、君がどれほどのレベルで危険かを考えれば当然の措置と言えよう？」

「それはそつちの理由だろう。危険性は自覚してる、俺たちが化け物ということも含めてな。監視するなら勝手にすればいい、だが縛られる気は無い」

「しかしですね、こーりん。現在の環境が貴方にとって都合のいいものであるのは確かかなはずですよ。家庭においても社会においても、

ミステイの隠蔽がずいぶん楽になるはずです。その見返りという程度に考えていただけばよいのではないでしょうか」

「もう一つ。何故今なんだ。もっと早い時期、それこそ四月のうちに俺を入学させるべきじゃなかったのか。それをしなかった理由は？」

「それは……」

「簡単だよ。今までは外部に置いたほうが良く、これからは手元に置いたほうが良い。大人の事情というヤツらしい」

言い淀んだ杏李先輩と対して、キヨウはすらすらとのたまった。

「つまり、俺を利用して何かやるうと？」

「うむ。当面僕に知らされているのは、こおりちゃんにオーナーを守ってもらいたいということだ」

「守るって、その野良からですか？」

尋ねた輝燐に対しキヨウは首を横に振る。

「それは学園側でやってくれる。特別に要請されない限りは僕らの仕事じゃないさ」

「それじゃ一体誰から」

「人間だろ」

先取りして答えた。少し考えりやわかる。

「この子たち ミステイは高レベルのものになると十分生物兵器として活用できる。オーナーを誘致する為に学校へ送り込まれてくる作員が相手、そんなところか」

「うむ。当然学園側でも対応に動くが、出現予測がついてきた野良と違ってこちらは後手に回らざるを得ない。現場に近い生徒たちのほうが迅速に動けるというわけだ」

「その対策にこおりちゃんを？」

「……最近、その組織の動きが活発になってきているそうだな。各地で学園の所属する組織との衝突が頻発したり、ここのような保護施設が襲撃されたりしているそうだ。それに、確かにこおりちゃんを戦力として加えたいということもあるが、放置したままで万が一と

「いう事態もありえた」

「確保はむしろ火に油じゃ、とか理由としちゃ弱い、とか思ったがあえて突っ込まないことにした。」

「……戦力、か。もしかして」

「おそらく考えている通りだ。周りに民家の無い広大な敷地。被害を縮小し迅速な隠蔽を行う。私立霧群学園はオーナー及びミスティの『守り場であり戦場』だ」

「オーナーつつつてもそれ以外はただの学生。それをプロの作業員相手に戦地へ送り出すってのは無駄駒もいいところだと思うが、その辺はまあ、他人事だ。」

「ふと全員の湯飲みが空になっているのに気付いたのでおかわりを注ぎ始めた。」

「いろいろ事情や思惑があるみたいだな。けどだからって俺の考えは変わらないよ。俺とレリの生活を守るだけだ」

「その為に僕たちの思惑に乗ってみる気はないかね？」

「自分から下手に藪を突く気は無い」

「強情だね、こおりちゃん。まあ、すぐにここを出て行く気は無さそうだし、今は普通に学園生活をエンジョイしてくればそれでいいさ。しかし君はきつとやるよ。そして今日みたいに成果を出すはずさ」

「小細工で追い込んでよく言う。言っとくが俺を生徒会入りさせたアビリティ、俺には効かないからな」

「え？」

「……説明もしていないのに一度使ってみただけでもう効果を把握しているのか？」

「無意識下に働きかける誘導、だろ。前情報が無いからこそ俺を生徒会入りさせるのにほぼ全員を賛成させられた。もしかしたら今日の放課後も学校から人を遠ざける為に使ってたかもな。どうだ？」

「……その通りだよ。それがテレムスのSA意識結界の効果だ」

「本心から脱帽、というように両手を上げるキョウ。これは貴重か

もしれない。

「本来一定の場所に入る気を無くさせるよう誘導する、という力なのだがね、応用すれば逆に一箇所に誘導することも出来る。もっとも余程はつきりとした意思があつては通用しないのだが。……ふむ、そうか。そういえばちゃんとした自己紹介はまだじゃないか。杏李女史」

「今頃気付いたのですか。ワーちゃんはもう待ちくたびれていましたよ」

頬杖を着いて溜め息を吐く杏李先輩。と、二人の周囲に世界のゆるめき、陽炎が発生した。

そこから勢いよく飛び出してテーブルの上に飛び乗ったのは、一抱えくらいの大きさの、耳（触角？）が生えたぬいぐるみのようなイモムシだった。

> i29064—3710<

「改めて紹介します。この子が私のミスティ、ワーミンです。私はワーちゃんと呼んでいます。可愛いでしょう」

自らのミスティをその豊かな胸が潰れるくらいぎゅっと抱く杏李先輩。……昨今の女子はイモムシを可愛いと呼ぶのだろうか。

ワーミンに遅れてキョウのミスティも陽炎よりぬつ、と顔を出した。

> i29065—3710<

モニター面まへのでかいオタマジャクシ……いや、胴の短いウナギという方が近いか。

「こおりちゃんもこの姿の彼と会うのは初めてだったね。今の名はテレムスという」

「この姿？」

まだミスティに抵抗があるらしい輝燐が複雑な顔をしながらも疑問に思ったところを訊いてきた。

「『シフト』っていつてな、ミスティの中には成長して姿形が変わる奴がいるんだよ。以前の名前はビジョムスっていつて、電波妨害

や盗聴なんかが出来たっけ」

「今も出来るぞ」

「というわけだから今度から秘密にしたい話は電話でしない方が身の為だぞ」

「わ、わかった」

「とつくに気を付けています」

「そんなに信用が無かったのか僕は。残念で仕方が無いよ」

と言いながら芝居がかった仕草で頭を押さえるキョウ。こいつにとつてみればある程度警戒されているほうが面白いのだろう。

「というわけで、困ったことがあればなんなりと生徒会室まで足を運んでくれたまえ」

「突然入れられた生徒会を辞めたいのですがどうすればいいでしょう」

「却下だ。次の生徒会は明後日だから忘れず来てくれたまえ」

明後日の放課後は全力で回避行動を取らなければならないようだった。

「いい加減観念したまえよ。悪いところではないぞ」

「集団行動する気はねえんだよ」

「でも部活には入るのですよね？」

「……それは何の冗談ですか」

「ミス研に加わってくれるのでしょうか？ 伊緒さんが面白い新人が入ったと仰っていましたよ？」

あのスピーカー女め。

「入りません、それでなくてもそんな怪しげな部活」

「今なら幽霊の姿が映るペンライトが付きますよ」

「そんな胡散臭いモン誰が欲しがるかっ！」

「うっ、春頃散々勧誘されたっけなあ、ボクも。結局名前だけ貸すってことで落ち着いたけど」

当時の光景を思い出したのか輝燐が唸る。あれに四六時中付き纏われれば根負けもするだろうなあ。……二の舞にはなるまい。

「ほら、こうして輝燐さんも勧めていることですし」

「勧めてない勧めてない」

この後杏李先輩による勧誘はキヨウが帰宅を切り出すまで続かなかった。

話も済み二人を送り出して自室に戻った後、ポケットから電子音が鳴り出した。

「う、まだ慣れないな」

苦虫を噛み潰したような顔で携帯を開く。画面に表示された名前前は『桜井遥香』。

「……もしもし」

『元気かなこおりくん』

「大筋の話はキヨウウから聞きましたよ」

『う、いきなり本題に入っちゃうの？ もう少しこう、雰囲気を和らげてからでもいいと思わないかなあ？』

「その様子だと今日起きたことはもう知ってるんですね」

『うん。ごめんね輝燐ちゃんが迷惑掛けて』

まったくだ。まさか「守ってほしい」と言われた人間に襲われるとは。

『本当はちゃんとわたしたちのこと話して引き取るべきだったんだろうけど、多分こおりくんはそれじゃ来ないと思ったから。わたしたちには絶対にこおりくんの力が必要だから、とにかく騙してでも『わたしたちの場所』に引きずり込まないといけなかったの。ごめんね』

「その理由ってヤツは？」

『それもまだ言えないの』

「秘密ばかりですか。そんな状況で俺が協力するだけでも？」

『どうせ話したところでこおりくんは協力してくれないよお』

よくわかってるみたいで。キヨウウから聞いたイメージか？

『今はフツ一の学園生活をめいっぱい楽しんでて。学生のうちほど自由な時間はないんだから、こおりくんはもっと楽しまないと損だよお』

……いや、違うな。おそらくこの人は今の俺の考え方を自分の頭で理解している。一昨日の学校帰りでの遣り取りを思い返してそう結論付けた。

「それじゃああと聞きたいことは一つです」

『えー、もっとおしゃべりしようよお』

「明日も早いんで。それで、輝燐を守ってほしいってのはどういう意味？ あいつに あいつのミスティに狙われるだけの理由があるって？」

キヨウや杏李先輩のように寮に入れるわけでもなく、遥香さんが直接引き取って育てているということから考えても、輝燐のミスティが重要か貴重であるというのは間違いないことであった。

『んー、今は心配ないかな。そういうことじゃなくてね、うん。もう大丈夫だよ。こおりくんがしっかり守ってくれたから』

「……？」

守って……くれた？ 過去形？

「どういう意味」

『じゃあおやすみこおりくん。もう遅いんだから夜更かししたらダメだよ。輝燐ちゃんと仲良くねえ、むふふ』

「待てなんですかその不気味な笑いは」

フツ一

切られた。まったく難儀な人だ。基本思考は天然なのに計算高い考え方も出来ると来た。初めて会ったときからずっとスタンスを崩されっぱなしということを考えてキヨウ以上に厄介な人間と思っ
ていいだろう。獅子堂のほうがまだ分かりやすい。

とにかく厄介事が一つ片付いた。確かに生活環境としては悪くない。特にレリーフの事が漏れる心配がないというのが一番大きい。
あとは向こうの要求をどこまで受け流せるか。

とりあえず、明日からはようやく普通に過ごす事が出来そうだった。

Another eye

「久しぶりに美味しいご飯でした」

桜井家のあるマンションを辞して学生寮へ帰る道中、杏李女史が不意に口を開いた。

時刻は午後九時を回っている。門限をとくに過ぎているが、当然寮監は事情を把握しているので問題ない。むしろこの場合注意すべきは副会長閣下か。うむ、怖い人だ。

「寮の食事が不味いというわけではないのですけどね、こーりんのご飯はまた一味違いましたね。細かいところに手間暇かけていらっしやるようでした」

「うむ。細かい作業は割と苦手だった様に記憶しているから正直意外だったかね」

振り返る。建物の狭間から彼らのマンションが見えた。

「……『最強』と仰つても、シフトできなければどうしようもない、ということでしょうか」

「……………」

夕方の事を言っているのだろう。結局、あの後終始こちらが押し込まれ終わったのだ。

「それは確かにあのシフトには驚きましたけれど……善戦されたというわけでもありませんし……いえ、同クラスで二対一なのでからそうなって当然なのですが」

「今一つ信用できない、と?」

目を伏せただけで返答はないが、肯定だろう。

「『上の指示』に背くのは私としても本意ではありませんが、やはりこーりんにはちゃんとした護衛を」

「必要ないな」

おざなりに手を振って遮ると杏季女史はきよとんとした表情を見せた。

「そもそも、今日の戦闘は何の判断基準にもならんさ。君も気付いていただろっ？ まるでやる気なかつたじゃないか、こおりちゃん
は」

『最強』なんて肩書きは他人が勝手に付けたもの。そんなものに固執して常に勝利し続けるなど、それこそ周防こおりという人間に似合わない。

「気分屋というのもそれはそれで困りますけどね。では、キヨウさんはこおり仰るのですね？ もしこーりんが戦う気でいらしたなら」

「相手にもならんさ、僕ら二人程度。ただの協力者である僕は言わずもがな、『組織』の正規メンバーであるキミだろうと、ね」

「……断言しますか」

「断言するさ」

彼女がどんな切り札を隠しているか、詳しい事は知らない。しかし、それを差し引いても彼が本当に負けるところなど、僕には到底想像できそうもない。それほどに彼は、

「格が違う」

『化け物』なのだから。

A n o t h e r e y e e n d

第六話 対決 あるいはただのコント と戦後処理（後書き）

ミステイの挿絵をそのうち入れたいなあ……実在しない生物は文章表現だけじゃ限界があります……。 (2011/8/10 有言実行。文章と異なる点があってもご容赦をば)

第七話 後味の悪い後始末

『ごおりくんつてば朝弱いから起こしてあげてね。情け無用なので』
『す』

そのメールを受け取ったのは寝る直前だった。

この時点で気付くべきだった。遥香さんからのメールの癖に『優しくキスして起こしてあげてね?』とかそんな甘ったるい言葉が使われていない時点で、この任務の過酷さに。
ミッション・インボッシブル

翌朝、部屋の中から響いてくる目覚まし時計の大合唱はもはや公害の域に達していた。いや、これはもう起きてるでしょ……. と思いつつも、そつとドアを開けてみると、

レリーフがごおりちゃんにのしかかっている……! ?

「!」

バツと部屋の中に踏み込み、球根へと手を伸ばす。しかし、額の透き通る葉はそれより速く動き

ぺちーん

「……………」

ぺちーん、ぺちーん

「! ! ! ! !」

往復ビンタをかましていた。ヒュー、ヒューと聞こえてくる風の吹くような鳴き声を良心に従って解釈するなら、「起きろー! 寝坊するぞー! 遅刻するぞー!」かなあ。

とりあえず、このクソやかましい目覚まし時計を一個一個止めていく。そのうちにボクの姿に気付いたのか、レリーフがボクを潤んだ目で見上げていた。

「、、!」

アテレコするなら、「おお、あなたが救世主か!」……. 流石に大袈裟かなあ。

レリーフがごおりちゃんの上から飛び降り、場所を空ける。そん

な外野のやり取りも知らず、すやすやと寝こけているこおりちゃんにボクはメールの通り、情けも容赦も一欠けらすら含まない踵落としを鳩尾に叩き込んだ！

ドゴオオオンッ！

「……………」

「……………」

「……………」

「呻き声すらナシ！？ ちょっとこおりちゃん起きてよ！」

「……………」

レリーフは言う、「神は死んだ」……………って、アテレコやってる場合じゃない！

それから格闘する事二十分後の事だった、こおりちゃんが寝ぼけ眼で起き出したのは。……………遥香さん、どうやって起こしたんだろう。きつと『情け無用』っていうのはいろいろ恨み辛みが込められた言葉だったんだろうなあ……………。

ってというかボクこれから毎日こんなのなの！？

三日目にはじめてこおりちゃんと一緒に家を出た。駆け足気味で学園に向かう　みたいなポーズを取る。

「ちこくちこくー」

「いや、まだ十分間に合うって」

「ちこくちこくー」

「って言いながら走ってもいないじゃん。遅刻なんてしないって」

「こおりちゃんが寝坊してちこくー」

「……………ごめんなさい」

不快そうに眉を顰めつつも謝ってくる。んむ、当て付けはくらいにしとこうか。

「……………こおりちゃん、今までどうやって起きてたの？」

でもこれは訊いときたい、今後のためにも。ところがこおりちゃ

んはあからさまにこちらと視線を合わせようとしない。

「……………あの？」

「耐性つてわかるか？」

「……………えつと？」

「はじめのうちは半分くらいだったんだよ……………目覚まし」

「……………」

もうなんて言ったらいいのかわからないのか、言葉が出なかった。もはや朝の格闘は避けられないらしい。

「……………いい運動になるよ」

「早起きなんてする奴は気が触れてる」

「ボク毎朝早起きしてランニングしてる」

有り得ないモノを見る目された。そっくりそのままお返ししたいけど泥沼になるだけだし、堪える。

「なんていうか、昨日のこおりちゃんと比べて……………みつともない」

「そりゃ昨日のお前が相当みつともなかっただけのことだろ」

「……………おっしゃるとおりデス」

……………話題の振り間違えた。ちょっと気まずい沈黙が流れる。学園に着くまでこの空気のままってのは、ちょっといたたまれない。

「……………誕生日は！？」

「……………んあ？」

唐突な振りに間の抜けた声が返ってきたけど構わずもう一度訊く。

「誕生日は！？ 何月！？」

「十二月だけど」

「ふふんっ、ボクは八月だよ！」

偉そうにのけぞったボクを不審そうに見てくる。うつつ、怯むな、ボク。

「それがどう」

「つまり、ボクの方がこおりちゃんより早く生まれたの！ 遥香さんはキミのこと『お兄さん』だなんて言ったけど、ボクの方が『お姉さん』なんだからねっ！」

「そう」

すっごくいどつでもよさそうな返事が来た。ちよつとくじけそう。

「……お前さ」

と思つてたら向こうのほうから話振つてきたよ。

「うんうん、何？」

「昨日まで蛇蝎のごとく嫌つてた相手に対して、少し変わり身早過ぎないか？」

「……」

今一番言われたくないことをピンポイントで……

「初対面からそうだったけどさ、こおりちゃん、人の地雷踏むクセなんとかした方がいいよ。いつか逆ギレされるから」

「よく言われる。で、答えたくないなら別にいいけど。結局他人事だし」

「……それもなんかムカつくなあ」

クールと根暗つて紙一重だと思つよ、こおりちゃん。

「……憑き物が落ちたつていうのかな」

それでも、話さないという選択はなかった。

「こおりちゃんに散々打ちのめされて、憎悪みたいなものがどっかいつちやった。だからつて今までのことをすぐ割り切れるもんじやないけど、少なくともあいつのことを前向きには考えれるようになったカンジ」

「……で？ それと今俺と普通に話してることがどう繋がる？」

「そりゃ、一応こおりちゃんは恩人つてことになるんだし、邪険な態度取れないよ」

「マゾか、お前」

「違うよっ！……わかつてて言つてる？」

「と言われてもな。実際俺がやったことつてお前を罵倒しただけだろ。感謝される謂われが無い」

「そう言われると確かに腹立つけど……ねえ、もっとスマートなやり方なかったの？」

「そもそも俺はお前の事情にまで介入する気はなかったんだ。それを逃げ道塞いだのはお前自身だろうが」

そうでした。

「運が悪かったな。俺の嗜好に強制的に合わせられたようなもんだろ、お前」

「そういう風に言うのはどうかと思うよ。ボクにはキミの理屈なんて全部無視して続ける選択肢もちゃんとあったんだし」

そう言っても処置なし、と言いたげに肩を竦めるだけ。こおりちやんの頑固さはそれこそ昨日の件でよくわかってる。しょうがない、ここはボクが折れることにしよう。

「……じゃいいよ、別の理由で」

「うん？」

「ご飯が美味しい。それじゃダメ？」

「いいや、納得」

肩を竦めたのは同じ。でも雰囲気はさっきよりずっと軽かった。

そんな感じでわりと久しぶりの清々しい朝。長年心にあったトゲが抜けて、まだ違和感があるけど時間が経てば消えていくものそう思える。今なら優姫先輩にも勝てるかもしれない。百パーセント錯覚だけ。

そんな感覚は教室に入った途端、いつペんに消え去った。

昨日戦った痕跡は何処にもない。学校側が隠蔽工作をしたのだから。けどそんな非日常ことはいつでもよく、今問題なのは日常でも十分起こりうる出来事。

「……………」

机に書き殴られた罵詈雑言の数々。そして、

「んー」

机の主は机の中を覗いただけでその後は何事も無かったかのよう
に席に着いた。

「……こおりちゃん」

「ん？」

反応したこおりちゃんの表情はボーツとしている。別にショックを受けてのものじゃない。普段とまったく変わらない、そう、まるで目の前のこと全てがどうでもいいことであるような

「怒らないの？」

「何を？」

その答えに、逆に、全く理不尽にボクの方がこおりちゃんに怒りをぶつけていた。

「見ればわかるでしょ！ こんなことされて怒らないの！？ 悔しいとか悲しいとか思わないわけ！？」

平手で机をばんつと叩いた。その音と怒鳴り声に教室中の視線を感じたけどそんなの気にしてらんない。

「ああ。別に机の様相が変わった位で叫ぶ事もないだろ」

さらりと。本当にたいしたことではないと。

頭が冷や水をぶっかけられたようになって、

「異臭のするものが入ってたわけでもなし、誰の迷惑になることもないだろ」

震える唇から出た言葉は、

「……どうして」

理解できないものへの問いだった。

「どうして何も言わないの」

「何を言えって？」

「わかってるんでしょ、誰がああ噂流したかなんて！」

わかんない、なんでボクがこおりちゃんを責めてるの？

「誰のせいでこんな事になってるか、わかるでしょ！ こんな酷いことしたヤツが目の前にいるんだよ、怒りなよ！！ 殴りなよ！！」

リフレインするのは幼少の記憶。化け物と蔑まれた頃。

あんな噂を流せばどんな結果が訪れるか、身を以って知っていたはずだった。わかっていたはずだった。それを知らない振りして自

分の憤りだけを晴らすとした、その罰。ボクにはそれが与えられて然るべきなのに。

「それか」

目の前の少年の口からはまったく理解の及ばない言葉だけが響く。「いい人払いになって好都合だった」

むしろそれこそが罰なのかもしれない。

地に足がついていない感覚がして、よろめいて机に手を着いた。顔を上げるとこおりちゃんの顔をまっすぐ捉えてしまった。その目が、話し相手であるボクを見ているのは間違いないはずなのに、思ってしまった。

この人の瞳^め、一体どこを見てるんだろう？

ぞくり、とした。

ああ、そつか。

初めから、この瞳が気に入らなかつたんだ。

「これから、もっとエスカレートしたら、とか考えない？」

声量は抑えられたが、今度は強張っていた。

「まあ、誰かに迷惑が掛からない範囲なら。所詮俺の事だし」

まるで他人事のように いや、他人事なんだ。

他人に興味がないとかいうレベルじゃない。こおりちゃんにとっては何もかもが他人事で、自分の事すら、もしかするとそれが一番他人事なんだ。

「……………」

言っても無駄だ。少なくとも今は。

ガラガラ、バンツ！ ……ガラガラツ、バンツ！！

一度教室を出て速攻で戻ってきた。手には濡らした雑巾を持って。机を拭き始める。こおりちゃんは何も言わない。ただボクの邪魔にならないように席から離れただけ。申し訳ないような顔も迷惑そうな顔もしていない。そもそも興味すら持っていない。

「おはー！ ん、どうしたー！ ……わ」

「おいおい、こりゃ穏やかやないで」

登校してきた伊緒と啓吾が驚きの声を上げた後、すぐに手伝ってくれた。本当にいい友達だ。

拭きながらその顔を親の敵のように睨む。そして宣言した。

「ボクがこおりちゃんを変えてやる。その見事な他人事っぷり、絶対に矯正してやるんだから！」

こおりちゃんがボクの憎しみを否定したように、ボクもこおりちゃんを否定してやる。その瞳にボクを映してやる！

「りん、ツンデレかー？」

「ぶっ！？」

ちよ、この娘はまたなんて発言を！

「ほう、これが流行の……。いや、輝燐はんはきつとそつだろつと思つとつたわ」

「ちつがーっ！」

「あぶしっ！？」

顔面への正拳突きに啓吾が倒れる様子も、その煽りを喰って机が倒れる騒音も、こおりちゃんには他人事のようにだった。

「というわけで、何とかしてください」

しかし、そう決意した一番初めにやるのが人頼みっていうのは、我ながら情けない気がする。

「まあ、困ったことがあれば頼ってくれと昨日言っただけだしな」

「これ以上大事になる前に收拾をつけたほうがよろしいですね」という訳で休み時間、遠見会長と杏李先輩に連絡をつけたところ、生徒会室にて秘密の相談と相成りました。

「うむ。怖い副会長が介入する前に片を付けたい」

「ですが、既に一人歩きしている噂をお止めになるのは、到底不可能だと思われるのですが……」

その辺は一応考えてある。やっぱり人任せだけだ。

「あれでどうにかならないですか？ ほら、会長のミスティのす、すべ……」

「スペシャルアビリティ SA。ミスティ一体につき保有する三つの力のうち、二つの技とは異なる、所謂特殊能力だな」

「……ボクのミスティ、一つしか使ったことないケド」

「それはノーマルアーツ NAだろう。人間と共生しているミスティが、唯一オーナーの指示無しで使用できる技だからな」

「え？ でも」

「ミスティと話せるなら残る二つの技がどんなものか自然と把握できる。そういうものなんだよ」

質問を先取りされた。確かに、ボクはまだ自分のミスティと話せていない。だから名前も知らない。当然能力のことなんて知るはずもない。あいつが、どんなヤツかってことも。

……向き合わなきゃ、だよな。

「……気持ちは分かる。自分のミスティを拒絶する人間というのは決して少なくない」

会長のその言葉からはどことなく哀愁が漂ってきた。そんな空気を払うように、杏李先輩がパンパンと手を叩く。

「お二人とも、今お考えになることはそれではないと思われませんが？」

「……うむ、すまないな杏李女史」

「構いませんよ、私はお二人の先輩なのですから。それで、どうでしょうキヨウウさん？」

「ふむ、意識結界か。確かに噂を一つの流行と考えれば、立ち消えさせるよう誘導するのは難しいことじゃないな」

その言葉にほっと一息。しかし、

「だが、それで万事解決といくかな？」

すぐに雲行きが怪しくなる。

「……どういう意味？」

「段階が早過ぎる。輝燐クン、確認だが……キミが流した噂は転校初日のものだけなんだね？」

「……そこを疑われるのは心外なんだけど」

「輝燐クン。キミが流した噂も誹謗中傷であることに変わりないんだよ？」

うぐ。その通りです。

「彼の幼馴染みとしては大本の原因であるキミに正直呆れているが……それでもまだ僕で良かったと思うよ。これが『彼女』の耳に入ったらと思うと、胃が痛くなりそうだ」

その言葉に瞠目する。あの優姫先輩相手ですら飄々としていているという噂の会長が、そこまで苦手意識を持つ相手！？

「その人、いったいどんな」

「おおっと、また話が大幅にズレているじゃないか！ いやあすまない！」

うわっ、強引だなあ。

「あらあら、気を付けないといけませんよ？」

杏李先輩が口元を隠してクスクスと微笑う。暗に「退いてあげます」ってことだろう。会長のハハハという笑いもどこか乾いている。

黒いなあ……。

そのやり取りの直後、二人ともすぐに切り替えたのは流石だ。

「キリンさんが噂を流されて、次の日にエスカレート、三日目には中傷の落書き……確かに早過ぎますね」

「ああ。これは……所謂愉快犯ではないのかもしれない。特定個人を対象とした悪意、つまり」

「こおりちゃんに何か恨みがある、とか？ 引越して来たばかりなのに？」

「昔の恨みというセンがあるだろう。ここは彼の地元だ。しかも敵が多いタイプ」

「キヨウさん。私の『友人』を疑っていらっしやるのですか？」

ビックリした。杏李先輩のこんな敵しい声をボクは聞いたことが

ない。いや、全校生徒の殆どがないはずだ。

「いや、失礼。誤解を招く言動だった。謝罪しよう」

それは長いこと生徒会で一緒に活動してたはずの会長も同じだったみたいだ。

「……別に構いません。『例の事件』の関係者を真つ先に疑うのは当然ですから」

誰のこと、なんて聞ける雰囲気じゃもちろんなかった。

そして今さら、ミス研繋がりで伊緒を通じて知り合ったこの先輩のことを全くと言っていいほど知らないことに気付いた。

「……どうだろう。ここは当面の噂を消すことだけに留めるというのは」

「え、でもそれじゃ」

「落書きの犯人は見つからないな。火種を残したままにするのは確かに不安だ。しかし噂に便乗したような人間だ、果たして噂が立ち消えた後でもそんな目立つ行動を取るかな？」

「……うん」

「そうですね。少々楽観的ですが、どちらにせよ今出来ることはそれくらいしかないのではないでしょうが」

「……うん。ボクもそれでいいと思います」

目的を履き違えちゃいけない。落書きの犯人を見つけるよりこれ以上の被害を食い止めるのが優先だ。……当のこおりちゃんは被害とすら思っていないけど。

どこの誰だか知らないけど。せめて姿を現さないとこおりちゃんの心に細波こはなひとつ立てられないみたいだよ？

翌日、テレムスの能力が効果を発し、噂がピタリと止まると同時に犯人を追及する手立てもなくなつた。

だが、この事件は後に新たな形で再燃することになるのだが、それは今は別の話である。

第八話 とある少女の人間観察

明くる日の授業後。ボクと伊緒と啓吾の三人は輪になって互いの顔を睨んでいる。

「……………いくよ」

「どんとこい！」

「今回こそは！」

ばっ、と一斉に互いの力を解放した！

「……………」

はらり

ボクの手から一枚の紙切れが落ちた。それは、そう……………成績表。

「いちばーん！」

「連敗脱出おめでとワイー！」

「うわああああん！」

ボクたち三人は一学期から小テストから定期テストに至るまでこうして勝負している。いや、成績がいいわけじゃなく、むしろ皆下から数えたほうが早いんだけど、だからこそ伯仲しているというか、いい勝負になるんだよ、うん。そして最下位は罰ゲームでその日の昼食を全員に奢らなくてはならない。ちなみにこの勝負、伊緒は何故か最下位だけは取らず常に罰ゲームから逃れている。

「ごちになります！」

「今回はヤバいと思つてたけど……………まさか啓吾に負けるなんて……………」

「すつごい失礼やなソレ！」

「なああっ!？」

突然後ろから響いた叫び声に驚いて振り向いた。手に持った成績表を破り捨てんばかりに握り締めたクラスメイト。

明野心さん。学年で常にトップの秀才で、銀髪が綺麗な娘。その顔は紅潮し、まなじりが吊り上っている。いつも結構余裕のある態度だから、こんな明らかな怒り顔を見たのは初めてかも。

「なにかしら」

視線に気付いて振り返る。その動作はいつも通り優雅といつていいんだけど、目は全く笑ってない。てか据わってる。こうなると愛想笑いと一緒に顔を背けるくらいしかボクに出来ることはない。

「どうせまたトップだろうのに何が不満なんかの？」

「さあ？」

小声で囁き合う。そんな雲の上の考えなんてわかるはずもない。

そもそも、勉強が出来たって社会に出たら何の役にも立たないんだし。でも学生のうちは切実だったりするんだよね、たとえば成績の良し悪しがお小遣いに直結したり、とか。

大体、今回成績が下がったのはボクのせいじゃないはずだ。直前にあんなことがあってテスト前はろくに勉強出来なかったわけだし

そっだ。

「ねえ、こおりちゃん」

ボクの呼びかけに顔を上げるこおりちゃん。基本的に話しかければ応じてくれる。噂は昨日の午後には収束し始めており、今朝には聞かれなくなっていた。ただし、それでも近寄り難い印象までは拭えない様でこおりちゃんに自分から近づこうという人はいなかった。……今は、ボクたち三人だけでもちゃんとこおりちゃんの周りにいないと。

「テスト、どうだった？」

机の上にはすでに成績表はない。そして問いにははあ、と溜め息を吐いた。

「別にどうでもいいだろ。数学や科学なんて社会じゃ何の役にも立たないんだし」

おお、同意見！ これはお仲間かも、と、ピンと閃く。

「それじゃあさ、成績悪いほうがお昼奢るってことでどう？」

流石にテストの存在自体知らなかった人より悪いなんてことないでしょ、ニヒヒ。

「何がそれじゃあなのか全く分からないんだが、やめとく
ええい、ノリが悪いなあ！」

「おや、そんなに自信ないのかな、こおりちゃん」
挑発でどうだ!?

「そうだな。ここ最近忙しかったつってもこれは酷い」

ぬあ、流された！ いやしかし、成績が悪い事をほのめかすセリ
フ。これは期待通りかも

「つべこべいわずにみせろー！」

がつ、と伊緒と啓吾の奇襲が入った！ 啓吾がこおりちゃんを押
さえ伊緒が成績表を引つ張り出す！

あつ、こら！ まだ言質とつてないのに！

しかし、止めるより早く伊緒がそれを見てしまった。くそう、結
局ボクが奢るハメになるのか

「……………」

あれ？ 伊緒が凍ってる？

両脇からボクと啓吾も覗き込んだ。

……………。

「あの、こおりちゃん。一つ伺いたいのですが」
「なんだ」

「一つマルして位を上げた、なんてことは」

「今時の小学生でもやらないだろ、それ」

「じゃあ……………三桁の点数ってどういうこと!?!?」

「なああああつ!?!」

それに対して真つ先に反応したのはさっき謎の叫び声を挙げた明
野さんだった。

「ちよつとソレ貸しなさい！」

言うのが早いか許可なく引っ手繰る。

「周防こおり……………理数系科目が軒並み満点……………」

もちろん学年一位だ。

「違う。よく見る、化学は七十六点だ」

「ちょ、どこが悪いのこれが!？」

「だからよく見る、国語や英語は平均にも達してない。いくら最近ドタバタしてたからってこれは酷いだろう」

結果総合順位は大幅に下がっているが、ボクたち三人から見れば雲の上だ。

「別にどうでもいいだろ、社会に出たらこんな点数なんて何の役にも立たないんだし」

「おまえ、いやみにしかきこえないぞ」
激しく同意だ。

「そう、あんた。あんただったのね……」

そんな驚きと呆れムードのボクたちの傍ら、明野さんより地の底から絞り出すような声が響く。

「これまでずっと、全教科あたしが一位だったのに……それを邪魔してくれたのは……」

「別に邪魔したわけじゃないと思うんだが、……名前、何だったっけ」

うわあ、それは火に油だよこおりちゃん!

「明野心よ、覚えときなさい! 近いうち、絶対あんたを跪かせてやるから!」

「高得点取った事を怒られたのは初めてなんだが……適当に間違えときゃいいのか?」

ぶちっ

あ、何かが切れた音。

「周防君、あんた、あたしのこと馬鹿にしてんのね。ぼっと出のヤツに負けた女ってそう嘲笑ってるのね」

うわあ、すごい形相。お人形みたいな整った顔が台無しだ! こおりちゃんもその威圧感に押され気味だ!

「待て、そりゃ被害妄想」

「うっさい! いつまでも調子に乗ってられると思わない事ね! 何がこおりだ、融けてドブ川に流れていくがいいわ!」

意味不明な罵倒をして明野さんは教室から出て行ってしまった。
一斉に息を吐く。

「こーりん、けんかうるのとくだいなー」

「自覚してるからやめてくれ」

「じゃ、治そうよ……」

見てる方の心臓に悪いよ、まったく。

「こら、テストの度に一悶着ありそうやな……」

ボクの真後ろで毎回こんな騒動が!?

「まあそのうち慣れるだろ」

慣れない！　ボクは慣れない！　だから一刻も早く治してこおり
ちやくん！！

「いやあ、あの明野女史を激怒させるとは、なかなかやるじゃない
か周防！」

今日も今日とて生徒会。連行されて生徒会室に入って開口一番に
キョウの口から飛び出した言葉がそれだった。

「君が来てから本当に退屈しないなあ！」

「俺は休まる暇が欲しい」

「はいはい、生徒会が終わったらいくらでも休みなさい」
席に着くとすっとティーカップが差し出される。

「それにしても周防が本当に優等生だったとは。編入試験はてつき
りブラフだと思っていたのだがね」

「そんなわけないでしょう、会長。学校側が不正入学を認めている
とでもいいますか」

……あるんだろうな、オーナーの不正入学が。いや、こういうの
も特待生と言っべきなのか？

「して、男子生徒の高嶺の花に詰め寄られた感想はいかがだったか
な、周防？」

「高嶺の花って、あのちっこいのが？」

「成績優秀スポーツ万能、幼くも可憐な容姿と常に余裕を忘れない貫禄とのギャップに落とされてしまいながらも手が出せない者が多いのさ。いや、実に生徒会に欲しい人材だったのだがね、無下に断られてしまったよ」

俺には常に睨まれてる印象しかないのだが。

「そこに今回激情家の一面が加わったのだが、それで人気が落ちるところか「踏まれたい」との意見が続出。まるで女王様のようにだよ」「それ全員病院へ送ったほうがいいわね」

「そしてそんな感情を見せた周防も注目の的だ。嫉妬の視線でな」「そうなんだ」

「自分の事でしょう」

「しかし、文武両道の優等生というならうちの副会長も負けてはいないな」

「武はともかく文はあなたのほうが上でしよう。それに、私にはあなたや彼女のような人気は無いわ」

「むしろ恐怖の象徴って感じたもんな」

「周防はもう少し考えてる事を口に出さないよう努力するべきね」「ハッ、獅子堂の戦闘力がどんどん上昇していく！

「待て、落ち着け。そう考えてるのは何も俺だけじゃないはずだ。あと、心当たりがないか自分の胸に手を当ててよく考えてみるという」

周囲の生徒会役員に顔を向けると皆一様に逸らした。ほら見る。

「そうだな、ああ、その通りだ。その風評に対し弁解するところはない。主に私を怒らせているのが同じ生徒会役員である、ということを除けば、だが」

「ううむ、これはいかな。ということだから周防、次からは真面目に出席してくれたまえ」

「いや、お調子者の会長が原因だろ」

「二人共だ」

ゴゴゴゴと擬音が聞こえてくるほど大気が震えている。う、これ

は流石に不味いか？

「嗚呼、今日こそは怒りの日。副会長の肅清の鉄槌が今まさに、横暴の限りを尽くしてきた会長とその配下に振り下ろされんとしているのか」

「不吉なナレーションしてるのはどこのどいつだ」

しかも洒落にならない。

声のほうに顔を向けるとそこには杏李先輩と何故か輝燐がいた。ナレーションをしたのは間違いなく毒を隠し持っている方だろう。

「ごきげんよう皆さん。今日も愉快なご様子で、もっと早く来ればよかったです悔やんでいます」

「余計に心労が増えずに良かった、と私は安堵していますよ」

「ひどいです姫さん」

「だからそれはやめろっ！」

口調が乱暴になった事から鑑みるに本当に嫌なんだろうな。ああ、わかる。

「おーい、こおりちゃん」

周囲から失笑が漏れた。だから、嫌だ、つつつてんだろ。

「何でお前が生徒会室に来てるんだ」

「む、ひどい言い種。せつかくこおりちゃんに会いに来てあげたつていうのに」

その言葉で周囲がざわめく。あ、なんか壮大な勘違いをされてる予感。

「周防、桜井、校則に恋愛を禁止するような項目はないが、時と場所を弁えるべきだと思っわよ」

「ゆっ、優姫先輩っ!?!」

「盛大な誤解をありがとう。ここのこれとは同居人でクラスメイト、それ以上でも以下でもない」

「そうなんですか？ てつきり私はこーりんが毎晩のようにケダモノと化しているとばかり」

「杏李先輩、実はあの噂広める側の人間だったでしょう」

「はあ、いつ来てもここのお茶は美味しいですね」

無視か、本当にいい度胸してるな。まあいい、ずれた話を元に戻そう。

「で、何の用なんだよ」

「あ、うん。今晚ね、伊緒と啓吾が家来るから」

「それが？ 別に誰が来ようが居候の俺が文句付けれる訳でなし」

「えっと、だからね、二人とも家でご飯食べてくの」

「……ああ成程」

要するに二人分多く作れ、と言いに来た訳か。

「別にいいぞ。二人分増えるくらいどうって事ない」

材料費は遥香さんが出しているのだし、料理をする際手間なのは量よりむしろメニューを考える事だ。

「すっかり主夫だな周防は」

キョウの言葉は無視だ。

「さて、そうになると、いささか材料が足りないか」

呟きと同時に輝燐の肩を叩いた。

「え、こおりちゃん？」

「というわけだから、ここは任せた」

囁くと同時にくるん、と自分と輝燐の位置を入れ替え、とん、と獅子堂のほうへ軽く押した。

「わっ」「えっ？」「きゃっ」「ふむ」

それぞれの驚きの声が聞こえる頃には俺は生徒会室の扉を開け、そして一目散に駆け出していた。

「家事都合で早退する！ それは代理に使ってくれ！」

「まっ、待て周防ー！！」

当然無視し、即刻この学校の敷地から出る事だけを考え走り抜けた。

数時間後、二人と共に帰宅した輝燐によって、鉄拳制裁をお見舞いされる事となる。

ボールが体育館の床を勢いよく弾む。

直後鳴らされるホイッスル。

「よおっし、あい・ういん！」

最後のスパイクを決めたテンションのままチームメイトとハイタッチ。

今日の二時間目は体育。女子はバレーボール、男子はバスケットボールだ。

「桜井容赦ないー」

「あんなの取れないって」

「手加減してよねー」

毎度毎度言われる言葉に、今回も苦笑いを返すことしか出来ない。もう十分手加減してるんだよー。

コートから出て額を流れ落ちる汗を拭く。入れ替わりで伊緒が入っていた。ホント球技だと楽しそうだなね、あの子。弱いけど。

床に腰を下ろして、ふと体育館の反対側、男子のほうが目に入る。選手にしても外野にしても、一番注目を浴びるのはボールの行方。そしてボールの持ち主だ。

こおりちゃんにパスが回る瞬間だった。

そのボールを保持することなくワンタッチで流す。

空いていたスペース。そこに走っていた啓吾にパスが渡る。

「ぬおおっ」

そのまま不恰好なレイアップを決めた。

「ひゅー。……ん？」

と、違和感を覚える。啓吾がぜーはーぜーはー息を切らしてるのは分かる。他、二人のチームメイトも同じだ。

バスケットは走り続けるハードなスポーツ。所詮体育のミニゲームとはいっても、普段から運動してない人には相当な運動量になるはず。だっていうのに、こおりちゃんのあの平静具合はどういうことだ

ろう。服の袖で汗を拭いっつもほとんど息を切らしていない。

疑問に思っただけならさく見ていると気付いた。

「サボってるな、こおりちゃん。」

いや、それは言い方が悪い。楽しってる、も違う。きちんとチームに貢献している。

動いていない。これが正しいか。ドリブルで切り込むところなんて一度もなく、パス出しに専念してる。

ただそのパスが絶妙だった。一瞬で最適なコースを選び、ときにフェイクも入れ、空いているスペースへ味方がギリギリマークを振り切る程度の速度で放り込む。味方にハードワークを強要するこのスタイル、Sだなあと思いつつ、敵チームが止めきれないことから功を奏していることが伺える。そういえば、相手チームにはバスケ部員がいるけど、点差はほとんど離れてない。

けど、これは結局味方頼みの戦法だ。二点のビハインド、残り時間数秒。味方の足はすっかり止まってパスを出す場所もない。このまま勝負あったかな、と思えば。

しゅっ、と。

ゴールネットを揺らした。スリーポイント。予備動作がほとんどなかった。

と同時にタイムアップ。あー疲れた、とでも言いたげにコートから出て行くこおりちゃんを啓吾がへ口へ口の足取りで捕まえる。

「……上手いもんだね」

強いというより上手いでもいいんだろう。一対一の勝負なんて攻めでも守りでも避けてみたいだし。……疲れるのを嫌っただけかもしれないけど。

生徒会役員じゃなかったらスカウトされてたかも、と思ったところで、

「へぶっつ」

意識の外から聞こえた声。一拍遅れてそちらへ顔を動かすと、

妖精が飛んでいた。

「はっ！」

スパンツと小気味のいい音。コートに突き刺さるスパイク。着地と同時にさらりと靡く銀の髪。

明野心さん。誰よりも小さな身体で、誰よりも高く跳んだ我がクラスの秀才少女。

「すごい、明野さん！」
「当然よ」

ともすればただ傲慢なその言葉も、彼女が口にすれば貫禄の一言。そして倒れていたクラスメイトに手を……って伊緒！？ もしかしてさっきの鳴き声、もとい悲鳴って……。

一度頭を抱えて溜め息を吐いた後再び顔を上げる。

明野さんの目つきが変わってた。具体的に言うとな睨んでいた。

視線の先をなぞる。……こおりちゃんがいた。

見事なまでに目の敵にされてるなあ。朝のアレも割とプライドを傷つけたのかも。

ふと、今朝の出来事を思い返す

A few hours ago

「うええ……」

靴箱に手を着き口許を押さえる。朝からもついい時間が経ってるのにまだ嘔吐感が消えてくれなかった。

「まだ気持ち悪いのか」

ふう、と一息吐いたこおりちゃんをキッと睨んだ。

「誰のせいだと思ってるの……！」

「いや、マジすんません……」

怨嗟の籠もった一言で一気に殊勝な態度になったものの、気分は晴れない。

毎朝習慣になつてランニングの後のことだ。帰つてくると、なんとこおりちゃんが起きていた。

昨日に引き続き、またバーリ・トワードで起こさなきゃならないのか、と思つてたところに予想外の吉報。しかも朝食の用意までしてくれてるといふ特典付きだ。ひゃっほう、と飛び跳ねたい気分だったね。

しかし、何の疑いもなく朝食を口の中に入れた途端

「何……あの汚染物質……」

「さあ……俺も知りたい」

「てか、同じもの食べてたのになんで無事なの……！」

「寝ぼけてたからだ……」

こおりちゃんの朝ご飯は危険。教訓つてヤツは常に苦い。苦い、なんて味じゃなかったけど。

「保健室行くか？」

コクコクと頷く。流石に責任を感じてるようで、こおりちゃんも着いて来る。と、その途中で、

「……悪い輝燐、ひとりで行けるか？」

「あう？」

疑問符を浮かべながらもこくりと頷く。と、こおりちゃんも頷きを返して身体を反転。そのまま、

「きやつ……ちよつと、何してるのかしら」

さつきすれ違つた明野さん、その腕に積み上げられていた資料の束を半分ほど奪い取っていた。

「いや、前見えてないだろお前」

「見えてたわよっ！……少しは」

「危ないことじゃ変わりない訳だ」

確かに、足取りがフラフラと危なっかしかった。

「つつ、だからって余計なお世話よ！誰がいつ手伝つてくれるよ
う頼んだかしら！」

「一人だと無理があるように見えただが」

「このくらい一人で十分よ」
「そうか」

と、頷くと同時に資料を明野さんの腕の中に戻した。
再び埋まる視界。

「……………」

「じゃ」

「……………待ちなさい」

そのまま立ち去ろうとしたこおりちゃんを呼び止める明野さん。
「ん？」

「やりかけた仕事を途中で放り出すのはどうかと思うわよ？ ちゃ
んと最後までやりなさい」

「いや、必要ないらしいし」

「い・い・か・ら、持ちなさいよ！」

「……………えー」

理不尽、という文句が顔に張り付いていたものの、それ以上特に
何を言うでもなく資料を持ち直し、二人は教室に向かっていった。

R e t u r n n o w

と、保健室に行くはずがつついっつい最初から最後まで見ちゃっ
てたけど…………

更衣室での着替え中、教室へ戻り途中　まだ思考は続いていた。
実はこおりちゃんのこんな行動は今朝に限ったことじゃない。人
手が足りないところへ手助けに入るって光景を何度も目にしている。
意外とお節介焼き？　お人好し？　かと思えば平気で放置したり
もしてるし、断られればあっさり退くし。どうやら自分ルールがあ
るんだろつなあ、って見当をつけた。

まあ、こおりちゃんはそれでいいとして、

…………明野さん、やっぱりこおりちゃんには妙にキツイよねえ…………？
先に教室へ戻ったのか、周りに特徴的な銀の髪は見当たらない。

彼女のキツイ態度、っていうなら見たことないわけじゃない。一学期に馬鹿な行動をとっていた男子を見下した態度で散々こき下ろしていたことがあったから。でも、こおりちゃんへ対するキツさはそれとは全くベクトルが違う。懐かない猫みたいだ。

……うーん、昨日のことだけであんな野良猫みたいになるもんかなあ。……いや、ボクも出会い頭に蹴飛ばしたりしてるし、でもでもそれは悪いのは向こうであって、

「桜井」

「ふひゃうっ!？」

「うおっ!？」

ビクッと過剰に反応してしまい、相手のほうまでビククリさせてしまった。

「な、なんだ、どうした」

「……なんだ、先生か……」

ボクに声をかけたのは担任の牧野先生、通称マキセン（伊緒命名）だった。

三時間目。

明野さんもこおりちゃんも遅れて戻ってきた。別々に、ではあるけれど。

明野さんはまたも不機嫌そうに。こおりちゃんはどこか面倒臭そうに。

「……………」

なんだろう。少し、

胸の中が、ざわめいた気がした。

第九話 対談三幕

昼休み。最近は輝燐なり誰なりがずっと近くにいたが今日は久しぶりに一人きり。というか、この季節には誰も来ないだろうという場所に一人出てきていた。

壁に寄りかかり左手に抱えた袋から取り出した肉まんを頬張る。

「はむ……」

咀嚼しながら見上げた空は雲の隙間からわずかに光が差し込んでくる。足元にはくすんだ雪。口から立ち昇る吐息は白く、気温の低さを視覚的に表していた。

他の場所が喧騒に包まれる中ここだけは静謐。その空間にギイッと音が響いた。

「うつつ、さむつ。やっぱり屋上なんかにいるわけ」

鉄扉を開いた女子生徒と目が合った。寒風に肩を震わせるサイドポニーの女の子。俺の姿を認めてすぐさま呆れたような表情になる。「信じられない。なんでこんな寒いところに好き好んで出てくるわけ？」

「別に寒くない」

「はいはい、そんな強がりはいいいからねこおりちゃん。早く中入ろう。あ、その肉まんちょうだい」

「自分で買って来いよ。ていうかこんな所に何しに来たんだお前は」
正直今一番出くわしたくないヤツだった。一人で居ようとする所を独りにさせまいとするヤツだからだ。

「優姫先輩、食堂までやってきてね。こおりちゃんのこと探してたよ」

「お前、あいつと親しいワケ？」

「このガツコ霧字入学以前からの付き合いだよ。空手部の先輩後輩なんだ」

その際培った牙が今は両方とも俺に向けられているというのとは

てもありがたくない話だ。

「そしてお前も俺を探していたと。副会長の狗め。晩のおかずはな
いものと思え」

「ちよつと待った！ 何その横暴っぷり!？」

「それが嫌なら黙って戻れ」

「だったらせめてこおりちゃんも中入りなよ、風邪引くよ」

「引かない」

「……じゃあボクも戻らない」

どうぞご自由に。

肉まんを一齧り。一人から二人になるだけで静寂は沈黙になる。

そしてそういうのが気になる人間と気にならない人間が存在する。

前者が輝燐で、後者が俺だった。

戻らない、って言ったものの……

優姫先輩の指令以外に何があったわけでもない。話題が見つから
ずそわそわし始めたボクを、こおりちゃんが気にする様子もなく肉
まんを頬張る。

と、こおりちゃんが肉まんを一つまみちぎり取る。そのまま手を
開く。

落ちていく欠片をただ目で追って ぼとりと、

透き通った葉の上に落ちた。

さらにぼんつと跳ね上げて、落ちてきたところをぱくり。

「……」

もう一度一つまみ落として、跳ね上げ、ぱくり。二人してもぐも
ぐと食べる。

「……ミステイってもの食べるの?」

「栄養摂取ってだけなら他に手段があるけどな。食べない訳じゃな
い」

ぼとり、ぼんつ、ぱくり。もぐもぐ。

「……仲良いね」

「ん、家族だし」

……家族。それは他人じゃないってこと。

「……こおりちゃん、その『周防』って苗字って、どこの家の？」
「唐突におかしなことを訊くな。どこの家も何も、生まれた家のに決まってるだろ」

普通はそう。でもねこおりちゃん。ボクの姓は『桜井』なんだよ。
「こおりちゃんは、自分を捨てた家の苗字のまままで平気なの？」

「捨てられたのならまだマシかな。死んでるかもしれないし、どっちにしてももう会う事はないんだろうな」

「こおりちゃんのお人好し」

「そうか？」

「そうだよ。今朝だって、明野さんが一人でプリント運んでるの見て手伝いに行ってたじゃない。他人事じゃなかったの？ それとも明野さんも特別？」

「他人事だよ。けど他人事だから放って置いていいってことじゃないだろう」

「やっぱりお人好し」

そんなもんじゃないと思う。

他人事だからこそ手を差し伸べるのは簡単だし逆に手を引くのも簡単。他人事だからこそ勝手な言を並べ立てられるし逆に無視されようが文句を言う権利も無い。要するに相手への責任なんて持たずに相手に介入するのだから非常に性質タチが悪いといえよう。

「ねえこおりちゃん、なんでそんなに人と距離を置くの？」

「問題ある？ 必要な事まで話さないなんてことはなかったと思うけど」

「それは質問の答えになってないよ」

ふう。自分こそお節介だろ、と思いつつもこれもやはり質問への答えじゃないので口にはしない。

「『化け物』だからな、俺は」

「それは勝手に壁作ってるだけじゃないかなあ。ホラ、ボクは普通に人付き合ってるし」

「一緒にするな、って言ったるメスゴリラ」

ぴき、と輝燐の額に青筋が浮かぶ。怒りを露わにしたいところを、しかし懸命に意志力を発揮し、どうにか落ち着いたようだ。

「別にボクに限った話じゃないよ。会長や杏李先輩だって」

「『化け物』じゃあないな。あいつらが自分自身を化け物と思ってるかは全くの別問題で、俺と同じ『化け物』じゃあない」

ふと、何かの疑問に答えが出そうになる。しかし、それが形になる前に輝燐からの問いが続いた。

「それじゃあ 『化け物』って何？」

思いがけず重い話になってしまった。でもだからってここで終わりにする気はない。

「ここは ここで踏み込むことを止めたら、多分ボクはずっと他人のままだ。」

「……………」

無言。いつの間にかレリーフの姿が消えていた。

沈黙。一分、二分。

話す気がない、と取るべきだ。どうする？

追及 ダメだ、その為の材料がない。

質問を変える。いや、何を訊く気さ。今の質問と同レベルの、しかも答えてくれそうな質問なんて、

ある。

でも、それを訊いていいの？ 多分答えてくれる。答えも予想出来る。ただ、答えてくれるという事実そのものがボクの口を鈍らせる。

肉まんの入ってた袋は既に空。今が昼休みだっことも忘れてた。いつこの場から立ち去ってもおかしくない。けど口は開かない。

と、こおりちゃんの視線が上を向いた。同時に、手の甲に冷たい

感触。ボクも顔を上げる。

はらりはらりと、ゆらりゆらりと、その白は降りてくる。
空も、大地も、世界を白で覆う雪。光に照らされ銀に輝く。

少年は穏やかな顔をして、でもその瞳がどこを見ているか、やはり判らなくて。

自然と、その問いを発していた。

「こおりちゃんは……人を殺した事、あるの？」

「……忘れるような言葉や状況じゃなかったと思うんだが、あるって言ったよな」

「じゃなくて！……えっと、暴走とか、そんな事故みたいなのじゃなくて、その……『殺した』ことって……」

「ああ、なるほど」

と、一つ頷いて、

「あるよ」

驚きは、なかった。ああやっぱり、と。

けど、

「……そんなあっさり言う事じゃないと思うよ」

「ただの事実だし」

「事実だから言えばいいってもんじゃないでしょ!？」

怖い。

こおりちゃんが怖い。勢いづけなければ震えてしまいそう。こんな初めてだ。

でも、これはこおりちゃんが人殺しだから怖いんじゃない。その類の恐怖や忌避はあまり感じない。むしろ平然と言ってしまう事が哀しいと思える。そして、

「まあ面倒事になるのは目に見えてるし、あえて言う必要はないよ

な。でも、絶対的に隠さなきゃいけないレベルの事じゃない」

ああ、あの瞳が、

得体が、知れない。

「……そんな、軽い事なの？」

声が震える。これは怒りだ、憤りだ。それは本心？ 誤魔化し？

「こおりちゃんにとって、人を殺すってことはそんな軽い事なの？

命ってのは、そんなに軽いつていつの！？」

「なわけないだろう。馬鹿かお前は」

「んなっ」

混乱。当たり前事を言われただけなのに思わず絶句してしまっ
た。

「重いよ。命ってのはとても弱くて、とても脆くて、簡単に壊れて
しまつて、簡単に壊せてしまつて。なのに有り得ないくらい重い。

他人事でもそれは変わらない。でもな。だからやらない、なんて
理由はないんだよ」

「……なんなの、その理屈……」

「別に理解してもらふ必要ないよ。これはただの、俺が決めた事だ。
それを、話せる状況で話す事を躊躇するようじゃ、自分の決断を信
じていないつてことだろ？ その程度の決断で人を殺してたまるか」

ああ、これは 『化け物』だ。力以前に、意思が既に『化け物』
だ。

反射的だった。拳が『化け物』の眼前で止まる。

反応、鈍。

突然目の前に突き出された拳をきよとんと見ている。その反応に
密かにほつと息を吐く。人間だ、間違いなく。

「……で、なんだこれ」

「今も避けられないなんて、化け物が聞いて呆れるんじゃない？」

そして、人間同士の戦いでボクがこおりちゃんに負けるなんて思
えない。

スパンツと足を払う。雪の上に倒れたこおりちゃんの腹に拳の打

ち下ろし。さらに顔面への蹴りは転がって回避された。

「けほつ……容赦ないな、本気で殴っただろ」

そんなことして無事な人間滅多にいないしね。

「人のこと散々見下してくれちゃって。見下すより見下されるほうがお似合いなんじゃない？」

「……はあ。喧嘩は嫌いなんだよ、痛いし」

溜め息と共にむっくりと起き上がって首を回す。

「……またどうでも良さ気だね。もう二、三発蹴っ飛ばしたほうがいいかな」

「そこまでだよ二人とも」

不意に割り込んできた第三者の声。その主はパンパンと手を叩く音と共に鉄扉を開いて現れた。

「キョウか」

「会長」

「そう、会長だ。故に校内での喧嘩沙汰を黙認するわけにはいかないな」

「校則で禁止する条項はない、どこるか推奨されてませんでしたか？」

え、なにそれ、と言いたげにこおりちゃんが顎を落とす。

「一方的な蹂躪や無秩序な乱闘を推進してるわけではないのだよ。

どちらにせよ生徒会役員が目の前で行われている暴力行為を放置することはありえんがね」

「……遠見会長つて、大抵そういう現場で煽り役やってますよね」
アシテーター

「ふむ。そこまで言うならば、物理的な抑止力を召喚しようか？」

彼女なら現場へ常に割って入るぞ」

「いや、それはマジで遠慮する」

「……………」

悔しいけどボクもこおりちゃんに同意。優姫先輩に勝てるなんて勘違いを抱く人間はこの学園に一人としていない。

だからって、この場に留まり続けるのは、行き場を失くした感情が許さなかった。

鉄扉が閉まる。脱兎のごとく駆け出した輝燐の後姿に溜め息ひとつ。

「……で、お前は何しに来たんだ？」

「ご挨拶だな。危ないところを助けたというのに」「両手を大きく広げ、大仰にポーズを取る。

「……それは、どっちを？」

「さあ？ どちらが強いか、僕ではわからんよ。もちろんミスティ込みなら、例外なく君だがね」

身体の基本性能は間違いなく輝燐が上だ。しかも武道の心得がある。

とはいえ、俺もただ殴られてやる趣味はない。明確に危害を加えられるようとしている状況なら、比較的緩い「制限」に設定してる“アレ”を使うことに躊躇はない。少なくとも初戦は勝てるだろう。

「質問を変える。どうしてここがわかった？」

「キミの行動パターンは読めなくとも行動基準は把握してる」

「暇人め。もつとマシな頭の使い方をしろ」

「フフフ。ではまた生徒会室で。キミも教室へ戻りたまえ、もうすぐ昼休みが終わるぞ？」

そう言っただけでさっさとこの場から消えてしまった。

「……本当に何しに来たんだ、あいつ……」

そして唐突に頭が重くなる。

「……重い話になった途端逃げたな」

『~~~~』

口笛で誤魔化せると思つとんのか。

半眼で見上げる。が、溜め息一つ、目蓋を閉じて、開くと同時に雰囲気切り替える。

「お前、普通に話すよな。『化け物』じゃない、ってことなのかな」

『その疑問には何年も前に答えが出てるでしょ。それなら僕は『思考同調』なんて出来やしない』

まあ、わかっちゃいるんだけど。

『もともと僕は化け物だしね。その分こおりより表に出る感覚が鈍いだけだよ』

「人間もミスティも本質は同じなんだがな……」

『それを『理解』してるのなんて人間にもミスティにもほんの一握りだって』

「……難しいな」

『わお、こおりにしちゃ珍しいセリフ』

「俺だつて高校一年の『人間』だ」

『うんむ』

鷹揚に頷いてぴょんと跳び下りる。陽炎の扉が揺らめき、レリの姿が掻き消えた。

続いて俺も屋上を後にする。

雪がほんの少し、積もっていた。

割と自己嫌悪だった。

「落ち着いたかね？」

「……はい」

屋上から立ち去った後、後を追ってきた遠見会長に促されてボクは生徒会室に来ていた。

「すまないね、真砂クンがいればもっと美味しい紅茶が飲めるのだが」
既に五時間目の授業は始まってしまっているのにも関わらず会長はボクを引き留め、落ち着くまで待っていた。結果、さっきの行動を冷静に振り返る余裕ができると、

精神的に追い詰められて実力行使とか情けなさすぎ……
穴を掘って隠れたい。

思わず出てしまった溜め息に、遠見会長が苦笑する。

「無謀なことをするね、キミは。もうこおりちゃんに喧嘩を吹っかけるなんてしないほうがいい」

流石にこの物言いにはカチンと来た。

「頑丈な以外はただの人間じゃないですか。普通のタイマンで負けるはずありません」

「勝ち負けの問題ではないよ。一度徹底的に負かされた身から言わせて貰うと、彼と戦うのは精神衛生上よろしくない」

そう言っつて薄ら笑いを浮かべる会長の顔をまじまじと見てしまう。

「……こおりちゃんと会長が？」

「うむ。詳細な経緯は省くが、ある時こおりちゃんが僕と同じオーナーだと気付いてね。しかし、オーナーとしてのあり方は全く異なっていた」

「というと？」

「便利なオモチャ」

どちらが、なんて聞くまでもない。

「で、同じオモチャを扱う人間同士、どちらが優れているのか試してみよう、などと馬鹿なことを考えてしまっつてね」

「で、返り討ちですか」

戦いの内容までは聞かない。というよりなんとなくわかる。この人と同類かー、ボク。

「いや実に恥ずかしい。若気の至りとはかくも恐ろしいものか」

「……でもそれはやっぱりミスティありの戦いでしょう？」

「ふむ。感じてないはずはないと思うのだが？ こおりちゃんの何が一番恐ろしかったか」

ぎゅ、と膝の上で拳を握った。

「こおりちゃんって……子供の頃からあんな、超然としてるっつていつか……意思の『化け物』って、そんな感じだったんですか……？」

恐る恐る、聞いてみる。すると、

「いや。というか……キミはそんな段階で躓いたのか？」

呆れられたー！？

「いや、だつてですよ!？ あれ、絶対まともじゃないですよ!？」

考え方が、じゃない。その意思を貫くためなら茨の道でも炎の中でも突っ込むだろうという、その『強さ』が、だ。

決めたことを実行する。周りの理解は必要ない。言ってしまうはこれだけだが、実行できる人間がどれだけいる？

しかし、

「所詮意思は意思だよ。実行力がなければただの妄言でしかない」それはその通りなんだけど、事実としてこおりちゃんは実行するわけだから、と続けようとして、

その前に、遠見先輩が額に手を当てて何やら考え込む仕草を取っていた。

「……まさか、本当に感じていない？」

「？ 何を？」

この返事で、遠見先輩が瞠目した。

「-！ 制御しているのか、まさか!？」

「え？ え？ え？」

「それならあれも説明が……いや、しかしだ、いくらこおりちゃんとはいえ……」

「？ ？ ？ あの、会長？ 遠見会長？」

名前を呼ばれてようやくハッと没思考から顔を上げた。その顔は、死人のように蒼白かった。

「ちょ、ちよつと、大丈夫ですか」

「あ、ああ。問題ない」

と言いつつも顔色が戻る様子はなく、手も細かく震えている。

「……輝燐クン。キミは一昨日、こおりちゃんと戦ったね？」

「え？ まあ、はい」

「そのとき、その……『恐怖』は感じなかったかね？」

「え？ んーと……そりゃ、人を殺したことがあるなんて言われた

ら、

「違うー!」

ビクツと身が竦む。

「意思への恐怖でも力への恐怖でもない! もっと そう、自分の存在そのものが握り潰されるような『恐怖』を、だー!」

「……………なに、それ」

それしか言えなかった。事実ボクはそんなものを知らない。この会長が取り乱す姿に困惑していた、というのもある。そして、そんな恐怖は想像する事も出来なかった。

ただ、ぼつりと、訊いた。

「『化け物』って、なに?」

「…………『分からない』。ただ…………こおりちゃんはその自覚がないようだった。少なくとも子供の頃は」

会長がガタリと椅子に座り込む。ふうーっと大きく息を吐くと、少し落ち着いたらようだった。

「…………こおりちゃんが転校してくる前日、僕は杏季女史に言ったのだよ…………『僕らなら問題無い』とね」

その言葉には自嘲の響きばかりが浮かんでいる。

「あの頃とは違う。僕も一人のオーナーだ。こおりちゃんの隣に並び立てる存在なんだ…………とね。いや、甘いつたらない」

この独白を、ボクはただじっと聞く。途中で口を挟むのが憚られる雰囲気だった。

「あの黄昏時…………名乗り上げまではよかった。普通に対応できた。

しかし、真つ直ぐ刃を向けられた途端、」

ふうっ、と一息切る。

「僕もテレムスも恐怖で動けなくなった。視界が暗転しかけた。イセクザイスが攻撃を止めた音で視界が戻り、こおりちゃんに威圧感がまるでなく とうかやる気すら皆無ということによく気が付いて、僕らも攻撃を開始した。杏季女史が普通に動いているように恐れる部分はまるでなく、なのに、僕らはこおりちゃんの身体が闇の中へ吹っ飛ばされて見えなくなるまで心も身体も恐怖し続けた」

会長の手がカップを持ち上げ、紅茶を呷ろうとして、中身が空なのに気付き苦笑する。

「……もう一度は無理だな。今度こそ潰される。……僕は、『彼女』のようにはなれない」

「でもボクはそんな恐怖なんて感じなかった」

「六年の間に制御できるようになったのかもしれない。現実味は無いが」

「その『化け物』が消えたってことは」

「楽観的で素晴らしい。縋りたくなるような言葉だ」

こうして話しててボクと会長で温度差が感じられる。会長が真剣なのはわかるけど、そんな恐怖なんていまいち信じられない。子供の頃のそういう体験って簡単にトラウマになるもんだしなあ……。

「ともかく、それがこおりちゃんの言う『化け物』」

「ああ、それは別物だろう」

「は？」

結論を纏めようとしたところで、今までの話の流れをさらりと、あっさり、完全にぶった切られた。

「こおりちゃんには悪いが、『あれ』と『人間』は間違っても同格に出来んよ。『あれ』を自覚していると仮定してだが、そのことに気が付かないこおりちゃんじゃない」

正直言っ、何を言ってるのかよく理解出来てない。けどまあ、今までの話がボクの元々の疑問に無関係だったのはとりあえず分かった。

「あー、えっと、会長？」

「なんだね？」

ん、会長もすっかり元の調子に戻ったみたい。さっきの取り乱し様が嘘のように、優雅な仕草で紅茶を淹れ直している。

「こおりちゃんの、『他人事』の理由ってなんですか？」

「……そこに行き着くまで随分脇道に逸れたなあ」

誰のせいだ、誰の。

「で、それを知ってどうするんだね？」

「その前に、会長は本当に知ってるんですか？ 理由」

「厳密には知らない。が、予想は出来る。これでも幼馴染みで生徒会長だ。キミの知らないことをたくさん知っているのさ。……あまり睨むな、ちゃんと教えるから」

おどけて肩を竦める会長。ティーポットから紅茶を注ぎ、椅子に座り直して足を組む。そして 雰囲気が変わる。

それは全校集会の時にも、先日ミスティイのことについて話したときにも見られなかった。さっきの怯え、切迫した様子とも違う。

その表情には、こちらが息を呑むほどの真剣さが在った。

「ならばまずキミが知るべきは七年前だ。彼がこの街にいた頃、そして彼がこの街を去ることとなった出来事を」

「……………」

日が暮れる。太陽が沈むその姿をボクは教室の窓から眺めていた。「どうしたもんかなあ……………」

結局はこおりちゃんの意識の問題だ。ただ、それを否定できるだけの持ち合わせがボクに無い。

根拠になってる力は本物だし、何よりこおりちゃん頑固だしなあ

……………

頭を抱えたところで教室のドアがガラリと開いた。

「スマン、遅くなった」

入ってきたのはウチのクラス担任、牧野先生だった。

ボクの前の机を逆向きにして席に着く。

「これがデートなら振られてますよー」

「言っつな」

八つ当たり気味のセリフに苦々しそうに返す。うわ、実体験アリか？

「桜井こそ午後の授業はいなかったそうじゃないか。何をしていた

んだ？」

「あ、あはは」

その欠席については会長の口添えでお咎め無しということになってる。一部の、というか一般の教職員より生徒会長のほうが権限が強いそうだ（理由は例によって例の如く）。しかしだからといって教師が心から納得しているわけもないだろう。

「えっと、こおりちゃ 周防くんの事ですよね」

「ああ、本当は本人と話すべきなんだがな」

お互いに気まずくなりそうな話題を早々に切り捨て本題に入る。

二時間目の後呼び止められたのはこれが用件だった。クラスに馴染めていない様子の転校生について話を聞きたい、と。

「なんというか、立場として言うては不味いんだが、どうも苦手だな。桜井なら一緒に住んでるんだし、それなりに打ち解けているんじゃないかと思ってな」

「そう、かなあ？ 結構距離あると思うんですけど……」

答えつつ、本人に直接訊けばいいのに、と思う。気難しい当人より話しやすい周りの人間に当たるといいうのは理解できるけど、好感は持てない。まあ、こうして気にしてくれる分良い先生なんだろうけど。

「それは、異性だからなあ。うーん、桜井より仲のいいヤツって分かるか」

「えっと、会……いえ、多分皆似たり寄ったりだと」

アブね、二人が知り合いなのは一応秘密だっけ。……それが無くても、何故だか口にしたくない気はしたけど。

「うーん、そうか……」

「やっぱり、こういうことって本人と直接話したほうがいいと思いますよ？」

まあ、結果なんて見えてるけど。

「……じゃあ、やっぱり桜井にしておくか……」

ところが、先生は一人で何かブツブツ考え込んでる。その様子を

怪訝に思う。

と、突然こちらに身を乗り出した。同時に懐から何かを取り出し、こちらへ向けた。

ねっとりとした視線。危機感。

慌てて下がろうとするも後ろの席が邪魔で大して動けない。左腕を盾にする。

押し付けられた黒い箱^{スタンガン}。

バチンと、意識が揺れた。

第九話 対談三幕（後書き）

所用につきお盆頃まで更新を休止します。それから一気に第一章を終わらせる予定です。ので楽しみにしてお待ちください。

第十話 「助けて」

ミスティがこの世界に現れる為通る陽炎の扉。それを意図的に開くことが出来るのはオーナーのみである。

ミスティが開くことは出来ない。彼らがこちらの世界に来るには、オーナーと共生するか、偶然空間に開いた扉を通るしか方法はない。故に、一度こちらに現れたミスティが元の世界に戻れずこちらの世界を彷徨うという状況が発生することもざらにある。

そして、オーナーの身が危ないと分かってても、自律的にこちらへ現れることも出来ない。

突然危機に見舞われた人間が、状況への対処と同時に陽炎の扉を開くという意識を思考に上らせるには若干の慣れが必要であり、桜井輝燐はそんな余裕もなく電撃を受け意識自体が朦朧となった。

バチンという衝撃とともに体がビクンと跳ねる。膝から力が抜け、体が傾いだ。

頭の中は真っ白で、目には暗い笑みを浮かべた男の顔が写っている。

それと、ゆらりと揺れる、陽炎が。

しかし、陽炎の扉を開くのに、その行為を意識に上らせる必要は必ずしも無い。でなければ、そもそも最初の召喚自体が不可能だ。

ミスティの召喚は無意識でも成立する。

たとえば、危機に対する防衛本能。思考は回らなかった。

しかし気絶には至らなかった。

故に、本能が働いた。

反射が、無意識が扉を開く。

「きいいっ！」

怒りの感情を露わにした青いぬいぐるみのようなミスティがすつと大きく息を吸う。

「！？ ミスティ」

パンツ

机に手を着いて床に倒れこむのを防いだ。その音に男が反射的にこちらを向く。

「きっ！」

その隙を突く形で光球が男の身体を直撃した。

「ぐああっ！？」

衝撃に周囲の机を巻き込んでもんどり倒れる。

「はあー、はあー」

息が大きく乱れている。体が痺れて痙攣が止まらない。冷や汗が気持ち悪い。

床に倒れてる男は どう見てもボクらの担任教師、牧野先生だった。

「どう……なつて……」

「い……痛てえ……」

呻き声。男 牧野が顔を上げる。鼻血を垂らし、その眼は血走っている。

「痛えぞこのっ、教師に何しやがる、この不良生徒があっ！」
「なっ」

その言葉で混乱があっさり吹き飛んだ。痺れる身体に鞭打って、二本の足で立ち上がる。

「なあにが教師だあっ！ 人にスタンガンなんか向けてっ、フルボッコにしてやるっ！」

「くそっ、てめえはただの人質だろうが、手間掛けさせんじゃねえっ」

口から泡を吐きながら呪詛を投げかける。こっちの言葉を聞かない 上等、叩き潰してやる。

「だが」

と、ちろりと視線がボクからわずかにズレた。視線の先を見遣る。そこにはさつき光球を放ったぬいぐるみ。

ヤバッ……いや、待て。

ボクのほうにもようやく冷静さが戻ってくる。こいつは、さつきなんて言った？

ミスティ？

「考え方によつては……クク、手土産が増えたってことじゃないか、なあ桜井」

牧野が緩慢な動作で身を起こす。平行して、ゆらりと、空間が揺らめいた。それも　大きい！

マズイ！

ボクのミスティの体を引つ掴んで背後に飛び退る。

「後悔するといい、そんなリトル程度で教師に楯突こうとしたことをな」

ズン、と。出現と同時にその重量で机が踏み砕かれた。

> i29068—3710<

足の短い四足獣、象ほどの巨体に厚い剛毛、鋼の如き強固な下顎、頭から象牙のような角。顔をブルリと振っただけで机も椅子も蹴散らされる。

それで十分。今までボクの見たミスティがとても可愛いものだったという事を思い知った。

「ブルエーウゴ」

「ブル……」

その名を呼ばれたのだろう牧野のミスティはギチギチと下顎を開く。

「シユートスピアー」

「ブルファアアー！！」

その咆哮と共にブルエーウゴの口から四本の円錐状の物体が発射された。鋼のような材質に見えるそれは、柄の無い馬上鎗ランス。

「……………」

一も二もなく、ボクらは教室を飛び出した。

このとき、ボクは気付かなかった。

周囲に立ち込める橙色の霧と、牧野の嗜虐的な笑みに。

新学期に入ってから時間と機会がなかった。たまたま今日はその時間があつた。

武道場で剣道部が竹刀を振る片隅で汗を流していたのはその程度の理由だった。昨日サボつた生徒会役員を、結局昼休みのうちに捕まえられなかつた鬱憤を晴らすためでは決してない。

身体に染み付いた型を繰り返し、気付けば下校時刻。普段生徒会を終える時刻と遜色ない。

やっぱり一人だとやれることに限界がある。組手をしようにも、その唯一の相手には先約があつた。

これがただの自己修練なら一人きりであることに不満を漏らすほうが間違っているだろうが、私にとって空手 部活とは趣味の範疇にあるもので、できるなら楽しいほうがいい。

……なんで剣道部があつて空手部が出来ないのかしら。

己が心身ともに磨かれる達成感と爽快感、それを理解出来る人が少ないことが残念でならない。そういう意味では剣道も同じなのだが、

こればかりは仕方ない。私にとって、剣は最早『道』足り得ないのだから。

下駄箱へ向かう。ちょうどその前、広く階上まで吹き抜けるエンランス。ただ通り過ぎるだけなはずだった私が足を止めた理由は、落ちてきた、わずかな音。

「……………」

目を閉じ、力を抜き、音を身体の中で反響、増幅。

軽量……………金属……………空洞……………衝突……………転倒……………多数……………中心……………

………声。

「あそこ」

目を開け始動。騒音の発生源に当たりを付け、階段を三段飛ばしで駆け上る。

確か、あの場所は、

「桜井の教室」

空手部の後輩。他にも一年生で付き合いのある生徒が集中してる。

藤田に乾。そして転校生、周防。

トラブルの種になりそうな面子ばかりが浮かんだ。

数十秒で問題の教室に辿り着く。勢いのままに扉を開いた。

そこには、

将棋倒しになった椅子と机、

それだけだった。

なんだ……これッ!?

教室から逃げ出し、すぐに第三者の姿を探す、あるいは学園から逃げ出す。

つい数日前のこおりちゃんと似てる。あの時は情けないとか言っただけど、打つ手が無い、本当の意味で逃げてるボクのほうが情けないに違いない。

そして、やはり数日前と同じように、失敗した。

誰もいない。

そして出られない。

学園からじゃない。霧から出られない。

いつの間にか周囲は霧に包まれていた。それも橙色の霧。明らかに普通じゃなく、咄嗟に口を押さえたけど、現状身体に異常は無い。視界を遮るほどの濃度でもない。だから、とにかく脱出を優先することにしたのだけ。

ある場所から一気に密集して向こう側も見えないほど濃くなって

おり、そこから向こう側へ進めない。触れるものなんて何も無いのに、見えない壁にぶつかつたみたい。なんとか外に出れる場所を探そうと校舎を走り回ってみても、完全な無駄足だった。それは完全に校舎の中を覆ってしまっている。

「なんなのさ、この霧……ッ」

間違いなく、あの牧野（もはや「先生」と呼ぶ気はまつたくない）が関わってるんだろうけど、と考えたところで思い出した。

「こおりちゃんも、遠見会長も、ミステイの事を『霧に棲む生き物』と呼んでなかつただろうか……？」

「当然のように話してるからスルーしちゃつてたけど……」

それに、確かあの日、あの黄昏時にも、金色の霧が……

カツ、カツ、

「！」

足音。人つ子一人見当たらない空間で。

壁一枚隔てた向こうから聞こえてくる。

教室と廊下。扉を開かれたらあっさり見つかる。

『……さっきまであちこち走り回ってたはずなんだが……隠れたか？』

拳を構える。開いた瞬間、打ち抜く。手加減は、無しだ。

……ボクの本気は、今傍で息を潜めているミステイの光球より強い。あれで相当体を痛めてたように見えたから、こおりちゃんみたいな頑丈さはない。優姫先輩みたいな技も無い。確実に、倒せる。殺せる。

「……ッ」

息が乱れそうになる。抑える。気付かれたら、あのミステイブルエーウゴだったか　が突き破ってくるに違いない。

アレに通じるか？　わからない。少なくとも一撃で倒せるほど甘くないだろう。対してこちらは生身、一撃でお陀仏だ。

オーナーへの初撃決着。それ以外に勝ち目はない。

でも、殺せるの？　ボクが？　人を？

殺さなければいい。気を失わせる程度の力で打ち込めばいい。それが出来るのが、ボクが学んだ空手だ。

けど、しくじったら？ 意識が残ったら？ ミステイに命じて、ボクを殺すんじゃない？

殺さなければ、殺されるんじゃない？

視界がグラグラ揺れる。目が回りそう。吐き気で倒れそうだ。

意識が朦朧としかけて、

大丈夫？

その声でハッと我に返る。

「大丈夫」

答えてから、ようやく廊下に誰もいないことに気付いた。完全に独り相撲を取っていたことに呆れて溜め息を吐く。

……つて、え？

「今の声……？」

きよるきよると教室中を見回す。当然と言うべきか、ボク以外に人なんかいるはずもない。いるのは青いミステイが一匹

「きい？」

いつも通りの鳴き声。

「……幻聴かあ」

よつぽど追い詰められてたんだなあ、ボク。

まあ、人を殺す殺さないの選択なんて生涯経験する類のものじゃないしね。と、同居する少年の顔が浮かぶ。彼なら、どちらの選択を選ぶんだらうか。

訊いてみたくもあり、訊くのが怖くもある。どっちみちここから無事帰れないことには

「……携帯！」

ポケットよりおいでませ文明の利器！

ソッコーでアドレス検索、発信！

呼び出し音。1コール、2コール、3コール……

呼び出し音が続きたび不安になる。まさか……繋がらないんじゃない

……
『はい、もしもし』

『もつと早く出てよ、こおりちゃんっ！』

あーもう、人の声ってこんな安心できるものだったんだあつ！

『……いきなりなんなんだ。晩飯のリクエストか？ 今スパーだから手早く頼む』

そんなこつちの気持ちも知らず呆れた声で訊いてくるこおりちゃん。

『そんなんじゃないよっ！ 今襲われてるんだから、ボク！』

『はあ。自力で撃退すりゃいいだろ、空手マン』

『ボク女の子ですけどね！？ ってそうじゃなくて、相手がオーナーで、今学園で、霧の中で出られないの！』

『もう少し詳しく話せ』

ノータイムで雰囲気切り替わった。今まであったことを順繰りに話す。

『その霧は、ミステイと同様オーナーが召喚したものだ。向こうが『霧の世界』と推察される一番の理由だ。一定空間を包み、指定した人間だけを取り込むらしい』

『脱出方法は？』

『無い。侵入は可能だが脱出は不可だ。呼び出した本人ですら解除出来ない。解除法は時間経過、あるいはそのオーナーのミステイを倒すしかない、と思う』

『……オーナーを気絶させるとかじゃダメ？』

『ダメだろうな。要はオーナーをオーナーでなくすこと、つまりミステイの撃破だからな』

『……難易度高いなあ』

『まあ、元の世界にはない利点もあるぞ？ どれだけ物が壊れ、人が傷ついても、霧が晴れば元通りなんだって』

『気休めにはなるかなあ』

『あ、でも死ぬなよ？ そればかりは治らないどころか、死体すら

残らないそうだから』

「……………ねえこおりちゃん、さっきから気になってるんだけど、「そうだ」とか「らしい」とか、伝聞ばかりじゃない?」

「そりゃ、俺霧喚べないし!」

超不安。でもボクよりは知識あるはずだし。

『橙色の霧、だっけ。霧の色でミステイの系統やタイプが凡そ分かるって話だが……………橙、ね。十系じゃあない、か。とすると種別かあ。そのミステイの見た目からだとな剛種かなあ。パワータイプで頑丈だ!」

「……………霧の色とか関係なくなかった?」

『気にするな!』

人選ミスったかなあ……………。

『問題は『階級』^{クラス}だな。こればかりはどうにもならん!』

「『階級』?」

『ああ。ミステイの存在に刻まれた厳然たる掟だ。下位クラスのミステイは上位クラスのミステイに『勝てない!』』

「……………え?」

その断言があまりに強く、戸惑いを隠せない。

『力の差以上の問題なんだ。同じクラスのミステイでも上位と下位の差は存在するが、それらは戦術や相性、運次第で補い、覆すことが出来る。だが、クラスの差は覆らない。対峙した瞬間に、勝敗は決定してる!』

「そんな、なんで断言!」

『手から離れた林檎は落ちる!』

それは、世界中の誰もが知ってる『ルール』。

『つまりそういうことだ。ミステイの能力つてのは物理現象というより概念現象だ。故に、こういった『ルール』による縛りが強い。それを突破する方法はあるが、今のお前じゃ難しい!』

それは、あまりに無慈悲だ。

『ちなみにレリーフのクラスは下から二番目。^{コモン}お前のは多分最下級。^{リトル}実際に戦闘に堪えるのはコモンの次、レギュラークラスからだな。』

えっと……牧野、だっけ？ キョウが言ったた職員だな。主戦力
だろうグレートはないにしても、レギュラーの可能性は十分アリ、
と」

生れ落ちた時点で、強弱どころか勝ち負けが決まっちゃっていい
るなんて。

「……………」

しばしの沈黙。それを受けて、こおりちゃんが、

『で、そろそろ切っていいか？ 電話してたらタイムセールで負け
る』

「なっ」

ちよつと、この人どこまで非情なの！？ 必死の状況で電話して
きたっていうのに、あっさり見捨ててお買い物ですか!？

いや、いくらなんでもそんな非人間的な人じゃない。それは流石
に分かる。じゃあ

「…………ごめんなさい」

「ん?」

「ごめんなさい！ 昼休みはボクが悪かったです！ いきなり殴つ
たり、あと言ったことも全部撤回するから！」

だから

『…………いや、別にお前が悪いとか思ってないし。つーか全く気にも
留めてないんだが』

…………あれえ？

「…………根に持つてるんじゃないの?」

『どつという思考形態でそうなった』

電話の向こうでおっきな溜め息。これで通算何回目だろう。

「だって、電話切ろうと」

『お前がいつまで経っても肝心な事言わないからだ。一体俺にどう
してほしいんだ?』

「どつする、って」

そんなもの、この状況で一つしか

『危ないから逃げる。仇を取ってくれ。夕飯に遅れる』
次々並べられる。ようやく、ボクはその一言を言っていないことに気付く。

『あるいはただの情報共有。もしくは』
こおりちゃんからそのフレーズが出る前に叫ぶ。その言葉まで彼に言わせるのは、

「助けて！」

流石に、甘えが過ぎる。

『了解、十五分保たせる』

その一言とともに電話が切れた。へなへなと崩れ落ちる。

なんか、随分時間を無駄にした気がする。初めからあの一言だけで来てくれたんじゃないだろうか、彼は。

自分の眼で能力不十分と判断したら言われなくても手伝う。けど今回は伝聞だけで十分な判断が出来ないから、ボクの判断に委ねたということなんだろう。そもそも、こんな危険な場所に自分から来てくれる人なんていないよね。そんな単純なことにも頭が回んなかったボクだけど、これはわかる。

そんな場所にたった一言、「助けて」だけで来てくれるこおりちゃん、間違いなくお人好しだ。

とにかく十五分。このまま隠れて、後はこおりちゃんに任せればいい。

……うぐ。そういう風に考えるとあんまりいい気分しないけどさ。軽く自己嫌悪したところで、あれ、と気付く。

こおりちゃん、レリーフはコモンだって言ってたよね？

どうやって勝つ気なんだ？ いや、それ以上に昼休みに得た情報とも矛盾してる。

『最強のミステイ』、『白銀の

ドオンツ、と轟音とともに頭上揺れた。パラパラと埃が落ちる。

なんだ！？ と天井を見上げる。と、

ガガガンツ

「ッ！」

壁に 教室と廊下の間の板から飛び出す巨大な棘。壁を貫通した四本の鎗。

見つかった！？ と思ったのも束の間、すぐ隣の教室にもガガンツと鎗の突き刺さる音。手当たり次第か……と安堵の息を吐き、汗を拭う。

カタカタ、と物音がした。

風か？ と思ひ音源の方を見る。四本の鎗が、いずれも細かく揺れていた。

……なんだ？

不審に思う間にその揺れは速く、細かく、ブウンと耳障りな音が鳴り響くくらいに。

ぞくり、と得体の知れない怖気が走った。

「SA発動、スピアーム」

「ブルウ」

その一鳴きで振動が臨界点を超え、全ての槍が廊下ごと吹き飛んだ。

第十一話 それほただ、圧倒的な

ブルエーウゴSA・スピアーボム^{スベシャルアビリティ}

発射した鎗同士を共鳴させ、爆破する能力。その威力は一定ではなく、場に散布した鎗の数と密集度に比例する。

現在の場合、放った鎗の数こそ多いものの、一教室あたりに四本とその密集度はあまり高くない故、大爆発とまでは至らない。しかし教室と廊下を挟む壁を吹き飛ばすには、その壁に鎗自体が突き立っていることもあり、十分な威力を持つていた。

そして、教室の中にいる人間に死なない程度の^{ダメージ}損害を与えるのも。

「くつつ、痛っ」

身動きと同時に走った痛みが意識を引き戻す。床に倒れている状態を認識して、しかし何故こうしているのか、その状況がわからない。

何が……起きた？

上半身を起こす。目に飛び込んできたのは跡形もなく破られた壁と、机や椅子の残骸が散乱する教室。

その光景で今の現状を思い出し、把握する。

「爆弾か……」

成程、戦闘向きだ。あの子の技とじゃ比較にならない。

立ち上がる際、再び身体が痛む。吹っ飛ばされてそこから中打ち身だらけみたい。

……この程度なら動き回るのに支障ないか。そう考えて、逆におかしいと気付く。

あの爆風の中で、怪我がこれだけ？

爆風自体からのダメージは、ほとんどない？

まじまじと体を見る。そこでようやく気付く。

体を薄っすらと覆う光の膜。それがぼろぼろと剥がれ落ち、拡散して 消えた。

「……なんだ、今の」

「ようやく見つけたぞ、桜井?」

しかし事態は、考える暇も与えてくれなかった。

破れた壁を挟んだ廊下、真正面に立っている牧野。そして巨大な図体のミスティ。

ああ、成程。この大きさのミスティでも自由に動けるように、わざわざ廊下を広くしてあるんだ、とかなりどうでもいいことに気付いた。

「あまり手間を焼かせるな。ミスティの力だつて無尽蔵じゃないんだぞ?」

壁を爆破しまくったことか。あんたが勝手にやったことであらう、ボクが責められる理由なんてない。

無言で構える。牧野が不快そうに眉を顰めた。

十五分。それだけの時間を稼げばボクの勝ちだ。その為には相手を刺激せず会話するのが常套手段なんだろうけど、生憎ボクにはこの状況で冷静に敵と話を出来る余裕の持ち合わせはない。結果相手の気分を害することになつても、押さえつけには全力で抵抗する性質^チなのだ。

もつとも勝てない相手に無理に勝ちに行く気もない。逃げるための一当て。そのために様子を伺い、隙を探す。

しかし、牧野が気分を害したのはボクが抵抗することに、ではなかった。

「お前、まだ動けるのか?」

ボクに抵抗する余力があること すなわち、自分の切り札が功を奏さなかった事をだつた。そして泳いだ視線が一箇所止まるとともにチツと舌打ち。

「そうか、リトルクラスのミスティ、ね。自分だけなら生き残れただろうに」

.....。
牧野の視線の先を追う。何故だろう、こんなに息が詰まるのは。口の中が乾くのは。心臓がうるさいくらい鳴り響いているのは。

振り向いた先にある、ぐったりと横たわる、青い毛並みを赤く染めたぬいぐるみの姿は、ボクがかつて望んだ光景ものの**はず**だったのに。「生存能力に優れたリトルクラスのミスティ……その能力を自分のために使っていればよかったものを、ああこそ、貴重な手土産が一匹減っちまった」

その言葉を聞いた途端、脳が沸騰した。

戦力の多寡も殺人の葛藤も頭から吹き飛び、一足飛びに牧野へと踏み込む。

しかしその進路上に割り込むブルエーウゴ。壁となったその顔を本気で殴りつける。

「ブルッ」

その威力は象ほどの大きさを持つミスティを怯ませるほど。しかし、

「くあっ……！」

右手がイカした。ヤツの硬度は想像以上だった。

ボクの能力で上がるのはあくまで威力のみ。決してボクの肉体自身が頑強になるわけじゃないのだ。こうなるのは自明の理だ。

そんなことはわかっていた。いや、わかってなかった。考慮の埒外だった。いや、考慮する余白もなかった。

ただ、痛みで思考が戻った今は、こちらを見るブルエーウゴの眼、開かれる口、次の瞬間発射される鎗を避けることは出来ないだろうな、と他人事のように考えていた。

事実、そうされていただろう。横合いからぶつけられた光球に気を取られなければ。

「……！」

行動の切り替えは迅速だった。

床を蹴り起き上がっていたミスティを確保、さらに方向転換、ブ

ルエーウゴから離れる軌道で廊下へ駆け出す。

「させると思うか！」

牧野がこちらへ手を振る、よりずっと早く光球が発射されていた。
「ひっ！？」

威勢のいい掛け声と裏腹のビビリ方でブルエーウゴの陰に隠れる。
その隙に廊下の向こうへ駆け逃げる。

「待て、クソガキがつ！」
「来る！」

その声に反応して振り向く。巨体の口から鎗が今まさに発射される瞬間だった。

「クリスタルヴェールッ、もう一度ボクにつ！」

「っ、失敗しくしたらゴメン！」

リトルクラスはミステイ最弱。その攻撃力は他クラスに比べ圧倒的に低く、体格も未熟。そんなリトルだが、その弱さゆえにある能力のみ上位クラスに匹敵するほどのスペックを有している。

すなわち、生存能力。たとえば防御能力、たとえば離脱能力、たとえば再生能力。敵を倒せずとも、その局面を生き残る力が、今日までリトルクラスに連なるミステイの絶滅を防いでいる。

それはこの子も例外じゃない。本来三つあるはずの技アーツ、そのうち必殺に位置するはずの技が存在しない。技が二つしかないというレベルの攻撃能力の低さだけれど、それと引き換えにしたかのような防御能力。SAクリスタルヴェール。体を覆う光の皮膜は上位レギュラークラスの攻撃からも身を守る。衝撃まで完全に殺せるわけじゃないあたりがリトルクラスの限界だけだ。

と、一気に頭に入ってきたそれらの情報にこめかみを痛めながらも、急制動をかけ体を反転。

クリスタルヴェールがさつき命令無しで発動していたのは命の危険に際して自動発動可能なSAだったため。本来この子の体を覆うはずだった膜がボクの体を覆っていたのは、発動直前でこの子がその意識したため。ある意味自己に近い関係性であるミステイとオー

ナーだからこそ成功した離れ業だ。……いや、結果クリスタルヴェールが展開されたのはボクのみだから、半成功というべきか。

それを、もう一度。以前の関係のままなら、それはボクだけを生き残らせるための指示に違いアビリティなかった。

しかし、今こうしてこの能力を使えているということ自体がそれを否定している。

果たして、光の膜は再びボクの体を覆うことに成功したのは槍がボクらに届く直前。けどボクの体の動き出しはもっと前。成功する確信があつたわけじゃないけど、どのみちやらざるを得なかった。

「セイツ！」

飛んでくる鎧を、素手で叩き落とすという離れ業を。

ガァンツ

打ち下ろして真下に落ちた鎧が大きな音を立てる。やはり衝撃までは完全に殺せず、痛みもあるが、左手に負傷はない。

「ッ！？　ポーっとしてんな、次！」

その結果に呆気にとられた分、次の行動はボクの方が速かった。

鎧を持ち上げ（重量は然程でもなかった）、円錐の底をおもいきりブン殴る！

「はあっ！？」

「ブルツ」

打ち出した鎧は途中で失速し、向こうまでは届かなかったが、床に落ちる前に向こうが発射した鎧とぶつかり妨害するという十分な役目を果たしてくれた。

その稼いだ時間で、向こうの射程範囲から逃げ出すことに成功していたのだから。

ボクらが逃げたのは上の階、つまり既に廊下の壁が爆破されて部屋の中に隠れるということができなくなっている場所。確かに下の階ならまた隠れることが出来ただろうが、また同じように爆発に巻

き込まれるのは御免被りたかった。それに、牧野のミステイのあの図体。下ならまだしも、上の階に移動することは難しいんじゃないだろうか？

一度陽炎の扉の中へ戻して再召喚 多分無理。こおりちゃんが言ってた「脱出不可能」っていうのはそこまで含まれてると思う。

そんな予想からようやく一息着く事が出来た。緊張がわずかに途切れて、

ぐたりと、ボクのミステイから力が抜けた。

「プニャモ！」

反射的に口から名前が飛び出した。プニャモが嬉しそうに笑う。体表を占める赤の面積が、さつきよりずっと広がっていた。

ああそうだ。思い出した。ボクはずっと前にこの名前を聞いていた。

あの冬の日。バイク事故。呆然となったボクの耳に、ボクを心配する声と、その名前が

「こんのっ、バカッ！」

プニャモを両手で抱えて目の前に持ち上げる。

「どうしてお前はいつもそう、勝手なことばかりかし！ 勝手に攻撃したり、勝手に守ったり！ ボクがどれだけ迷惑してるか分かんないの！？」

どろりと、手に血が粘り付く。不味い、この出血量は不味い！

こんな状態で技を使^{アッ}ったのか。NAだってキツかっただろうに、SAはそれよりエネルギーの消費がずっと大きい。

「それで、今度は勝手に死ぬ気！？ どこまでボクに迷惑かけるんだよ、少しは言うこと聞け！」

考えてみれば簡単な事。この子はいつもボクをかばってた。つまり、ボクが危険な目に遭えばこの子が盾になるに決まってる。たとえ、自分が死ぬってわかっていても。

じわりと視界が滲む。ぐっと目を一度強く瞑り、開く。

「死ぬな、プニャモ！！！」

ああ、この期に及んで命令するしかできないのか、ボクは。仕方ないだろ、他に言葉の掛け方なんて知らないんだから。

……そうじゃないだろ、ネガティブになってる場合か。どうすれば助かるか、それだけじゃないアタマを回せ。

そして改めてプニヤモの顔を見て、

「……なんで笑ってんだよ」

本気で、怒りが込み上げてきた。

「……？」

逆切れだつてことは分かる。けど、こんな状況で力を抜いた笑顔を浮かべて、

「なんで、生きるのを諦めてるんだっ！ お前は、たったこれだけの人生でもう満足してるのか!？」

今まで向けられたのと違う類の怒りに戸惑いを隠せないプニヤモ。構わずその顔をぐいと近づける。

「ふざけんなっ！ これからだ！ ボクらはまだこれからだ!! 勝手に満足して終わらせるな!!」

戸惑いと驚きで目を瞪るプニヤモ。しかしそれが晴れたとき、

「……きい！」

相変わらず顔に力はない。しかし、瞳に、生きる意志が戻っていた。

同時に、何か繋がる感覚。瞬間。

プニヤモが光に包まれた。腕の中から飛び出し空中に浮遊する。

「な、何!？」

強い光に目を開けない。手で光を遮り、ようやく少し目を開いて、光の中のプニヤモのシルエットが崩れていくのを目撃した。

まさか、これがミステイの最期!？」

「そんな……待て、待ってプニヤ」

手を伸ばす、その途中で気付いた。違う、理解した、でもない。理解が飛び込んできた。

これは

光がいつそう強くなり、次の瞬間弾ける。その場に青いぬいぐるみの姿はどこにもなかった。

「きああ」

ただ、子供ほどの大きさの青い恐竜がいた。

> i 2 9 1 0 8 — 3 7 1 0 <

「……………」

シフト。ミステイの成長・進化。

呆気にとられる。どつと力が抜けた。肩の力が抜け頭を垂らすボクを、人の気も知らずその子は肩なんか叩いてくる。慰めてるつもりかい。

「……………まあいいけどね」

結果オーライだ。シフトによる作用なのか傷が塞がってる上、一応パワーアップってことでもある。それでもコモンクラスなので、あいつの相手にはまだ心許ないけど。

「さて、どうしようかプニヤモ」

気を取り直して青い恐竜に話しかけると、その子はぶるぶると首を横に振る。「ん？」と首を傾げると、その子は新たな自分の「名前」を口にした。

「ああそっか。んじゃ改めて」

「み、見つけた、ぞ」

そんな和やかムードは、息せき切った闖入者の声でぶち壊しになった。

教室の手前に立つ牧野を、ボくら二人揃って睨みつける。ミステイの姿は、ない。

「待て待て、落ち着け。俺は話し合いに来たんだ」

しかしそんなボくらを押し留めるジェスチャーで制し、そんな今更なことを言ってきた。

「……………話し合い？」

「ああ、そうだ。撃たれてついカツとなつてしまつたが、先生としても生徒に実力行使をするのは本意じゃない」

そもそもがアンタがスタンガンを突きつけてきたのが始まりだろ、と思つたが口にはしなかつた。

「おお、そのミスティ、シフトしたのか。いや、素晴らしい。優秀な生徒を持つて先生は嬉しいぞ。どうだ？ その力を自由に揮つてはみたくないか？」

「……要するに、勧誘？」

「ああ、そうだ。俺たちはただの人間じゃない。普通の人間にはない力を持つ、選ばれた人間なんだ。だが、その選ばれた者の力は、愚図な普通の人間どもには未だ異端視される立場だ。どうだ？ その力を認めてもらえる場に連れて行つて欲しくはないか？」

「……………」

ああ成程、と理解する。ボクは、こんなと同じだつたのか。

「そして、そのコミュニティで、俺はさらに上を目指す！ 選ばれた者の、さらに頂点へと！ どうだ、素晴らしいだろう！ とともに、その栄光の階段への一步を踏み出さないか！？」

ミスティを、力としてしか見ていない。

「どうでもいいよ、力なんて」

言つてから苦笑する。「どうでもいい」つて、誰かさんの口癖がうつつたかな？

「ただ、この子と プルディノと暮らしていければ、それでいい」
そして、苦笑を嘲笑へと移す。

「だいたい、センセイにそんな力あるんですかあ？ こんなところで外回りやつてる下っ端のくせに」

精々嫌味な口調で嘲る。すると効果は靦面、余裕ぶつた表情がみるみる赤く染まつていく。

「て、めえ」

図星つて痛いよねえ。誰かさんに何度も抉られた実体験より。

「……そのたいした事ない力でもつと痛い目に遭いたいようだな」

「ごめんだよ」

構えを取る。すると、二足歩行になったからかプルディノもボクの見様見真似で構えたことに小さく吹き出す。

「……フッ！」

二人揃って牧野へ全力ダッシュ。ミステイがこの場にいないなら、おそらく攻撃方法は下からの爆破。なら、牧野を巻き込むほど近くに行けば使えないはず！

「F A 発動」

しかし、そんな予想を裏切る牧野の宣言。

F A 必殺技カテゴリー。

「グレートホーン！」

「クリスタルウォール！」

急停止、同時に危険信号のままにS A発動！

下の階から、厚い天井を突き破り、角を立て、ブルエーウゴが、飛び出してきた！

「……」

両手を突き出したプルディノが、ボクらの正面に発生させた光の壁。複数人を同時に守れる代わりに、防御力はリトル時代のそれより落ちていた。

ガシャンと壊される壁。その際生じた衝撃で後方へと吹っ飛ばされる。でもそのおかげでF Aの直撃を喰らう事も床の崩落に巻き込まれる事もなかった。

しかし、床に開いた穴のせいで牧野と完全に離される。そして、ブルエーウゴは穴のこちら側。

再び窮地。しかも、あのF Aの存在がある以上、後ろを向いて逃げることも出来ない。高速で飛んでくる巨体に確実に撥ね飛ばされる。

「……」

構えを解いた。だらんと腕をぶら下げる。

「ようやく諦めたか、手間掛けさせやがって」

舌打ちが聞こえてきそうなほど、忌々しそうに吐き捨てる牧野。
「……ねえ。これだけ力があって、なんで学校の先生なんてやってるの？」

俯いたまま、ぼつりと漏らした。その声は、ボクらしいかない校舎の中でしつかり牧野の耳に届いていた。

「……決まってるだろ、馬鹿な上が俺の力を分かかってねえからだよ。ただ教員免許があるってだけでこの学園のオーナーの動向の報告、なんて下っ端の仕事を押し付けられたんだぜ？ しかもだ、特定のオーナーの監視ってわけでもなく、誘致しろってのもねえ。不特定多数のオーナーの普段の様子を定期的に報告しろ、それだけだ。深入りして探るような真似はするな、とまでぬかしやがった！」

鬱屈した思いを撒き散らすかのように息を乱し叫ぶ牧野。その呼吸が整ったときを見計らって次の質問を漏らす。

「……そんな命令があるのに、どうしてボクを？」

「そりゃあ、俺にもようやくツキが巡ってきたからさ。まさか俺のクラスに『最高のオーナー』がやってくるとは」

今度はうってかわってにやりと笑う。

「『最高のオーナー』を手に入れたとなりや俺の評価は鰻登り！こんなちっぽけな仕事からはおさらば、俺を低く見積もった奴らの泡を食った顔は想像するだけで愉快になる！」

暗い愉悦を湛え笑う牧野。と一転、あたかも知的であるかのようなポーズを取る。

「とはいってもだ、流石に『最強のミステイ』なんてモンと正面きって戦い合うのは、無謀が過ぎる。ならどうするか？ 決まってる、手が出せない状況にしてやればいい」

「……ああ、ボクを人質にする気だったんだ」

「くく、一緒に住んでる女だ、情が移ってもおかしくないだろ。それとも、もうそういう関係か？」

「……………」

我知らず、溜め息が漏れた。幸い、自分に酔ってる牧野には気付

かれなかったが。

「しかし、まさかお前もオーナーだったとは。本番前からこんな手間取らせて……まあいい、結局収穫が二匹に増えたただけだからな」ところで、ボクには戦闘中に敵と会話できるほどの余裕はない。ボクにはそんな凶太さも強さもない。

「さあて、人質だから殺すわけにはいかないが……今までの礼だ、死ぬほど痛めつけてやるよ！ ブルエーウゴ！」

だから思う。一人じゃないって、こんなに心に余裕が持てるもんなんだなあ。ねえ、プルディノ。

ズン、巨体が一步を踏み出す。攻撃姿勢に移る、その瞬間、

「ふーん、そういう状況なんだ」

背後の闇から、声が響く。

時間稼ぎの、終わりを告げる声。

「他人の喧嘩に横入りすんだからさ、絶対命は取らないどころか思ってたんだけど……そうか、お前俺の敵か」

コツ、コツと足音が。

「なら決まりだ、狩るぞ。死んでも文句言つな」

『死神』の、足音が。

「お、お前、霧の中へどうやって」

「斬った」

震える牧野の声に、相変わらずなんでもない事のように答える。

コツ、その足音が、ボクの隣で一度止まる。

「悪い、少し遅れた」

「んむ、許してあげよう。ヒーローってのは、遅れて登場するのが相場だからね」

その言葉に、こおりちゃんは心底嫌そうな表情かおをした。

静寂。

予想外の闖入者。それに対して牧野は明確な対応が取れない。

いや 動けない。

そんな空気を意にも介さず、コツ、コツという足音だけが響く。この場の支配者は今、完全に彼 周防こおりだった。

その彼が、牧野を一瞥する。その仕草だけで牧野の身体がピクンと跳ねた。

「なあ、」

そして開かれた口。そこから飛び出した言葉は、とても予想外で、「来ていきなりで悪いんだが 帰っちゃダメか？」

……とても目が点になった。

「……は？」

呆気にとられる。しばしの沈黙。静寂ではなく沈黙。そこからいち早く脱却したのは牧野の方だった。

「……ハ、ハハハッ！ 怖気づいたか！ 最強だか何だか知らないが、所詮はただのガキだな！」

牧野の嘲笑に対してこおりちゃんは億劫そうに頭をぼりぼりと掻くだけ。……対して？

いや、違う。

「ハハッ、逃がすかよ。いい機会だ、俺をハブにしゃがった奴らに俺の実力を」

「そりゃさあ、助けてくれって言われたらさ、助けるよ？」

こおりちゃんの言葉が牧野の台詞を遮った。多分意図してやったんじゃない。だって、

「たとえ相手を取るに足りない三下だとしてもさ。けど、なあ……」

そこで一度言葉を切ると、心底どうでもよさそうに、のたまった。「三下以下相手に助けを求めるとのはさ、流石に甘えが過ぎると思うんだが、どうだろう？」

そう。さっきからこおりちゃんは、牧野を気に留めてすらいない。

「……」

嘲笑が止む。呆気にとられる。そして言葉の意味を脳が理解し、

「ッ、舐めるな、クソガキヤーツ!!」

激昂と共に鎗が撃ち出された!

「! おおりちゃん!」

マズイ! おおりちゃんがどれだけ強いかわからないけど、まだレリーフ ミステイを呼び出してない!

「プル」

「必要ない」

一言 心底つまらなそうな一言とともに一步前へ。眼前に迫る鎗、その脅威を、

ばん、と適当に振った手が払い除けた。

あまりにも適当な一撃。しかしそれは容易に鎗を弾き飛ばし、他の鎗も巻き込み、ガランガランと耳障りな音を立てて床へと落下した。

「……は?」

奇しくも、ボクと牧野の声がハモツた。それくらい……ナニ、今の常識外の光景。

「まあでも、一応俺にも責任があるみたいだし。面倒臭いことこの上ないけど」

しかし当の本人は、まるで埃を払った程度の気楽な調子で肩を竦める。

「ぐっ、偶然だっ!」

そう言っつて驚愕に目を見開いたまま鎗を連射する。

しかし結果は同じ。さっきボクがやったこととは比べ物にならない。単発でも連射でも乱射でも、こおりちゃんはいとも簡単に叩き落し、また時には掴み取って振り回したりぶん投げたりという神業をお見舞いしてみせる。

「……気は済んだか?」

いつの間にか鎗の乱射は止まっていた。こおりちゃんが掴んでい

た鎗の穂先を手放す。ガランガラと最後にまた耳障りな音がして、また足音が聞こえるようになる。こおりちゃんはちよつとボクと牧野・ブルエーウゴとの中間あたりまで歩み出ていた。

「ああ」

牧野がニツと笑った。こおりちゃんの周りには大量の鎗、それがカタカタと揺れて　ツ、しまった！

「逃げて、こおりちゃん！　その鎗は　」

「喰らえSA！　スパアーボムウツ！！」

一斉に、大量の鎗が起爆した。咄嗟に屈んで爆風から身を守る、けど真つ只中のこおりちゃんは　！

「ハハハツ、ザマア見ろ！　俺を馬鹿にしやがって、跡形も残らず吹っ飛べエー！！」

爆風の向こうから聞こえる牧野の高笑い。反射的に睨みつけようと顔を上げて、

「……………もう一度言っぞ、気は済んだか？」

煙の中から、五体満足の周防こおりが現れるのを目撃した。

「……………」

言葉が出ない。何で？　何であれを喰らって無事でいられる？

頑丈？　いやいや、まるでノーダメージなんだぞ！？

牧野も同じ心境なのだろう、煙が晴れて、その向こうから現れた顔は幽霊でも目撃したみたいに蒼褪めていた。

「けほっけほっ。あー、煙た。服も汚れてるし……………実世界だったらクリーニング代請求してるぞ」

一人だけ、別次元の会話をするこおりちゃん。そのこおりちゃんを震える指で指差す牧野。カタカタと鳴る歯の音が聞こえてきそう……………いや、震えているのはボクもか？

「……………なんだ、なんなんだ、お前は！」

「化け物。そういう人間だよ」

即答。

「けど、この状況はそれとは割と関係ない。俺が普通より頑丈な事

とも全く関係がない。関係があるのはたった一点。お前らには初めから勝ち目がない」

なんだろう、これは。どちらが教師か分からない。そして、今教師役を受け持っている方は泰然自若として、まるで今から世界の真理を説明しますとでも言うような

「くっく、クソツ、この役立たずが！ もっと、もっと強いミステイが手に入ってれば」

「それも一切関係ない。っていうか無理。つーか無意味。結果は同じ。ねえ、あんたにとつてさ、ミステイって何？」

「決まっているだろう、力だ！ 凡人には持ち得ない選ばれた人間だけが持てる力だ！」

「予想の域を微塵も出ない回答ありがとう。あんたさ、天然のオーナーじゃないだろ」

ぴくりと牧野の眉が動いた。

「そいつ元々は他の人間のか、野良のミステイだろ。詳しくはわからないけど無理矢理共生関係を結んだんだろ、どうにもミステイ自身の意思って物が感じられないし。で、だ。折角羨んでいただろうオーナーになったところ悪いんだけど」

……本当、こおりちゃんは、

「そんな程度じゃあんたがただの人間って事実是不変ならないから。器の大きさが変わるはずもなし」

他人の地雷を踏みまくる。

「グレエートホオーンツ！！」

何か振り切れたような絶叫とともにブルエーウゴが飛び出した。ロケット噴射でもしているかのように勢いよく、禍々しい角をこおりちゃんへと突き立てる！

「そんな器に納めなきゃいけないわけだから、当然、削らなきゃいけないわけだ。ミステイの存在そのものを」

ドゴオンという衝撃音。まるで何トンもあるトラックがぶつかったかのよう。

しかし。

「振るう力がどれだけ超常のものだろうと、今のこいつは存在そのものが人間以下。それを真に『理解』していれば、負ける理由が見つからない」

片腕一本。それだけの威力を止めるのにこおりちゃんが要した力は、たったそれだけだった。

「結論 敗因はあんただ。あんたにはミスティを受け入れる受け皿がなかった。だからミスティの力だけを欲して本質を削り取るなんて馬鹿な真似をやっちゃうわけだ。同情するよ、こいつに 終わらそう、レリ」

揺らぐ世界、陽炎の扉。その中からすうっと現れたこおりちゃんのミスティ レリーフ。

球根のようなぬいぐるみの身体は、次の瞬間には白い鎌となってこおりちゃんの手握られており。

くるり。こおりちゃんがこちらへ振り向くと同時より少し早く、その鎌が、飛んでくる。

「え？」

「同情するよ、こいつに」

それでも、俺は牙を剥いてきた奴には容赦しないんでな、諦めてくれ。

とはいえ、さすがにこいつを素手で倒すのは流石に骨か。根本的に俺自身の力は何も変わらないんだし、こいつの肉体を一撃で粉碎するような真似は出来ない。まあ、ここは楽な手を使わせてもらおう。

「終わらそう。レリ」

呼びかけから鎌へ変身したレリが吸い込まれるように手に収まるまで一呼吸。その際眼前まで持ち上がったレリをちらりと見て、そこに映ったモノへ攻撃の対象を変えるのに逡巡は要らなかった。

振り返る勢いで鎌を投擲。同時に逆の手の力を瞬間緩め、わずかに腕を引き、すぐさま突き飛ばす。

回転して飛ぶ鎌は驚愕で固まる輝燐　　の真横を通過し、その後にいるモノへ。

キーンッ

金属音。弾かれる鎌。音に反応して振り返る輝燐。元の姿へ解けるレリ。視界の外で大きなものが倒れる音。

そして、奇襲に失敗し飛び退る　　新たなミステイ。さらにその背後、橙の霧の中浮かび上がる人影。

「……………」

二足歩行の獣。両腕から伸びているのはおそらくブレード。当然、この世界には存在しない形態の生物だ。

しかし、ある意味それ以上に珍妙なのは人影　　オーナーと思われる人物の方だった。

メイド服だった。

仮面だった。

控え目に言って珍妙だった。

その格好に気を取られた内に、いつの間にか彼女(?)の両手にさつきまで無かったものが現れた。

左手にはフォークだった。

右手にはナイフだった。

指と指の間に挟んで三本ずつ。

奇天烈だった。だがそれだけのこと。

仮面の下から輝燐を射抜く目に、溢れる程の殺意が宿っていなければ。

投擲は、ノーモーションだった。

速い！　NAでの相殺　　間に合わない！

深く突き刺さる　　壁に。

常人の反射神経なら確実に突き刺さっていただろうが、生憎輝燐は並ではなかった。

しかし体勢は崩れる。そして投げられたのはフォークだけ。それだけのわずかな間に、メイドが輝燐の目の前に。右手のナイフを、鉤爪の如く振り下ろす。

「！」

その前に、今度は発動が間に合う。

F A スノウブレス。

二人の真ん中に飛び込んだレリが発動。雪風が両者を巻き込み、怯ませ、鈍らせる。

さらにメイドの後ろから飛び込む魔獣。その刃が届く前に輝燐の後ろ襟を掴む。

引つ張り、引き倒し、離す。平行してレリの武器化。

打ち合う。……重い。

流して、引いた。

間。

「……ふう」

「……今度は何？ メイド？」

俺が知るか。

後ろで輝燐の起き上がる気配を感じつつ、目の前の二人に視界は外さない。

魔獣のミスティと仮面メイドのオーナー。

そのメイドと視線が合う。そこに先程の殺気は感じられず、ただし戦闘続行の意を示すかのように再び食器 凶器を引き出した。

展開のあまりに急な変化。しかし四の五の文句つけても仕方がない。

「輝燐」

「ふえ？」

「お前はあつちだ」

ぶら、とおざなりに手を後ろへ振る。

「……ええっ!？」

間は後ろを振り向いて、俺の意を理解するのに掛かった時間だろ

う。

「いや待って、なにを」

「戦っただけならアレがいようがいまいが変わりないけど、お前守りながらこのメイドと戦えるほど俺は器用じゃないから」

「だからって、ボクにアレは無理だよ！ こおりちゃんだって言っ
てたじゃない、クラスが」

「どうにもならない、と言った覚えはない。それでなくてもアレは
三下以下だ、むしろどうにでも出来る」

そこで、ようやく後ろをちらりと見た。当然、メイド達への意識
は外さない。

機会を窺うようにこちらをただ見ている巨体のミスティ。その奥
のオーナーは無視。

視界を至近へスライド。

弱気な視線のサイドポニーと、

青い恐竜のミスティ。

「いい加減泣き言は終わりにしろ。大体、お前そんなおとなしいヤ
ツだったかよ？」

鼻で笑う。出会っていきなり蹴倒されたことは当然忘れてない。

「今のお前なら大丈夫だ」

視線を戻す。メイドの目に再び殺気が灯っている。

おいおい、何処を見てる。この状況で俺から意識を逸らすとはい
い度胸だ。

徐々に 戦う気になってるってのに。

「レリ、リミテッドシンククロスソフト
限定同調融合」

ピシリ、と鎌持つ右腕に変化が起こる。右腕が氷に包まれていく
のではない、右腕が氷そのものになる。

それは肩まで広がり、さらに首筋を通って顔の右半分まで侵食する。

鎌もまた、柄が木の枝のように歪に伸び、刃の面積を広げ、氷の、しかし白銀の大鎌へと変化する。

古代種たるレリーフの持つ能力、その限定発動。

『化け物』たる我らの一端。

「枝葉の氷柱”レリーフ”」

名乗り上げ、大鎌を横薙ぎに振るう。

一瞬、その後ろ姿に、

純白の外套を纏い白銀の大鎌を携えた死神の姿を幻視した。

「……ミステイと、人間の融合だと……化け物め……」

すっごい後ろの方から何か呟きが聞こえた。だから、化け物だつて言ってるんだろ。

「さて　いくぞ」

応じるように、魔獣とメイドが武器を構える。

仮面の下、少女が笑った、ような気がした。

第十二話 死神と仔竜

改めて言うまでもないことだが、オーナーはミスティと二人一組だ。

一般的にミスティの思考能力、知能指数はそれほど高くない。S A、F Aの発動はオーナーの指示無しでは発動出来ない。これらの事情から必然的に、戦闘時においてオーナーが司令塔の役割を果たすことになる。

しかし、オーナーは所詮人間だ。身体能力、特異性など、戦闘能力においてミスティより遙かに下回っている。

故に、標的ターゲットにされミスティが防御に釘付けにされるなどという、足手纏いと化してしまうケースは決して珍しいことじゃない。そうさせないよう戦うのが戦闘技術であり、司令塔たるオーナーの腕の見せ所だ、と言ってしまえばそれまでだが。

しかし、そもそもそんな常識セオリーを無視出来る人間がここにいた。

「フッ」

浅く息を吐き出すとともに大鎌を振るう。魔獣のミスティは受け止めるという選択をせず射程外まで引く。

振り切った鎌を返し、踏み込んで斬り上げ、に移る前に飛んできたフォークを柄で弾く。

その間に踏み込んだミスティ、その刃を氷の腕でいなし、柄で打って間合いを開く。

魔獣はそれに逆らわず、大きく跳んで距離を開けた。

「ヘル、ブラックシックル」

魔獣の右腕ブレードが一瞬で黒く染まり、振り下ろしと同時に黒い刃が飛んでくる。

鎌で迎撃、破壊。だが終わっていない。両腕から攻撃の意識を感じ取る。

続けて両腕から黒刃が二発、放たれる直前に射線からずれ、お返しに氷の鎌と重なって形成されたもう一枚の刃、それを鎌を振り投

射。
ブレードで破壊。その合間に距離を詰め、大鎌を振るおうとしたところにナイフとフォークが飛来。撃墜。

踏み込んできたミスティへ大鎌を突き出す。交差した刃で止める。鏢迫り合い。

俺とメイドたちの戦いは屋上へ場を移していた。一応校舎の外だが、ここもまだ霧の中。その証拠に、天上に広がるのは瞬く星ではなく濃い橙の霧。

本格的な戦闘になり、メイドは完全にミスティの支援へと回っている。こちらの虚を突くタイミングで凶食器が飛んで来る。

……もつとも、今の俺から完全に虚を突く、というのはかなり難易度が高いと思うが。

ともかく、先程のような接近戦を挑んでくるようなことは一切しない。そしてそれが当たり前だ。

ミスティ相手に前面に立つ人間なんてそうはいない。

俺みたいな、特殊な事例を除いて。

「流石だよ、コージ」

均衡による停滞。生まれた空隙を見計らったのか、メイドが仮面の下の口を初めて開いた。

くぐもつてはいるが、明らかに少女の声。片言だが顔が見えない以上外国人だと断定は出来ない。

「限定同調……アの教会騎士筆頭の固有技能を会得してルなんてね」
ギリギリと鬨ぎせめ合いを演じる大鎌と氷の右腕にその視線が注がれている。

エンシェント
古代種。

その名が示す通り、霧の世界における古代に存在したミスティ、その生き残りの種族。

彼らの特徴として現代に誕生したミスティが持たないいくつかの

特性を有している事が確認されている。

オーナーと共生関係を結んだ古代種^{エンシェント}は自らの意思で扉を開く事が出来る事。

武器への変身能力を有する事。

そしてシフト能力。

正確には太古の姿への帰還というのが正しい。通常シフトというのは一方通行の変化だ。しかし古代種^{エンシェント}は向こうの世界から『発掘』された物質の使用やミステイ同士の融合といった手段により一時的なシフトを行う事が出来る。

だが、今回の場合 ミステイと人間の一体化というシフトは当然「回帰」というケースに当てはまらない。現代において新たに発見、あるいは開発されたシフト形態だ。

そして、俺とレリはその融合をあえて不完全に留めている。

理由は単純 強力すぎるからだ。

不用意にシフトすれば、余波だけで辺り一帯を吹き飛ばしそうなほど。

こんなチャチな霧など問題にせず、実世界ごと破壊する。

たとえば七年前、

この街を氷嵐で蹂躪したときのように。

……実はこの限定融合、初めて行った時はマジで頭がぶっ壊れるかと思つた。

完全融合状態と違い、一つの体の中で二つの意識が同時に顔を出している。しかも身体の支配権が両方にある。これはかなりキツイことだ。精神のバランスを崩せばどっちか、或いは両方の精神が消滅しかねないくらいに。

まあ、二度目でコツは掴んだけど。

おかげで精神同調の精度がさらに上昇（同調融合出来た時点でもそも成功率が高かったのだが）。オーナーとミステイの関係において精神の同調が齎す効果は実はかなり大きい。

そして、掴んでしまえば成程、これは使い勝手が良い。強すぎず、弱すぎず。レギュラークラス相当の力ゆえに、制限の必要が無い。

そして、人間俺とリトルレリ、両方の攻撃力不足を補える。

そして、レギュラークラスであるにも関わらず

「コリーなら、ソの状態でグレートヲ斬り伏せるのだからうネ」

それは皮肉や嫌味がまるでない、純粋な称賛、そして畏敬。

「デモあの女を放置したのは失敗ダよ」

一転、メイドの口調が忌々しげに変わる。

その向きは輝燐へ。含まれる感情は、憎悪と嫉妬。

「あんな真似が出来ルのは、コリーを含めてほんの一握り。アの女は、クラスのままに潰されて死又だけ」

「……………」
返答はせず。ただ、繋げて、廻した。

ドライブ。

勢いよく鎌を押し出す。

「！」

想像以上の力で押し出されたミステイが慌てて後退。メイドがいつの間にか手にしていた食器を投げるタイミングを失う。……それが分かっていったから、このタイミングで均衡を崩したんだが。

洞察力、観察力が鈍い鈍いと言われ、その自覚もある俺だが、今の俺はこいつらの動きがよく分かる。広げた波が、こいつらの意思が振り向けられた位置を検知する。次に身体の中の部位を動かすかどうかの位置に注目してるか分かれば、次の行動の予測は立つ。

追撃はかけず、下段に構える。構えて、思う。

確かにメイドの言う通り。『理解』がなければ、その法則は絶対的な拘束力を持たない。輝燐は殺されるかもしれない。

しかし、同時に思う。それでも、あのオーナーがド雑魚であるこ

とに変わりはない。だから、

「殺されるほうが馬鹿だ」

漏れた呟きとともに、形成した氷刃を射出した。

あの二人がこの場から消えてすぐ、堰を切ったように鎗が飛んできた。

その鎗を避けながら遠めに見てもわかるほど、牧野は恐怖で狂気に染まってる。

恐らく……いや、確実にこおりちゃんともう一度相対するなんて出来ないだろう。たとえ人質を取ったとしても。

つまり、ボクは用済みってことで。

「どうしろってんだ、こんなもん！」

飛んで来る即死確実の鎗をときに避け、ときに、

「プルディノ、フォトンアーム！」

「きあ！」

光に包まれたプルディノの両腕が弾き逸らす。おかげで直撃は無いが、周りに鎗が溜まっている。

こんな状態であるSAを喰らえばひとたまりも無いが……その可能性は低いと踏んでる。

何故なら、ここまでにあいつはSAとFAを最低でも二回ずつ使っている。繰り返し言うが、ミステイのエネルギーは無尽蔵じゃない。大技を使うにはそれなりのエネルギーを必要とする。それだけのエネルギーがブルーエーウゴには残っていない……ハズ。

……たとえそうでなくともあの技は始動から爆発までタイムラグがある。その間に影響圏内から脱出出来る……多分。

とはいえ、いつこおりちゃんが戻ってくるかわからないこの状況、どこかのタイミングで無理にでも使ってくるに違いない。

そのタイミングを見逃さず、確実に回避するのが助かるための最善の方法であるのは間違いない。

間違いない、んだけれど。

A few hours ago

「…………『最強のミスティ』?」

遠見会長の口から語られるこおりちゃんの過去。それを語る際に一番最初に伝えられた単語がそれだった。

「あの…………レリーフ、でしたっけ? あれが?」

「そうだ」

大真面目に頷かれても、正直「えー?」って心境だ。

アレが?

不覚を取ったボクが言うのもなんだが、全然そうは見えない。

「疑っているようだが、事実だ。確かに、正確には『レリーフ』が、ではないのだがね」

「?」

言っている意味が分からず、疑問を挟む前に会長は答えを提示した。

「シフトという言葉覚えてるかね?」

「え? えっと、確かミスティが成長して姿が変わること……………あ」

「そういうことだ。一口にシフトと言ってもいろいろあってね。大きく分けて一般的な恒常的シフトと特殊な手段を用いた一時的シフトがある。ビジョムスからテレムスへのシフトは前者で、レリーフは後者さ」

「そのシフトした姿が『最強のミスティ』か……………。それって、具体的にどのくらいの力なんですか?」

このとき、何も考えず興味本位の質問をしたことを、ボクは後悔する。

「そうだね。実績としては この街を半壊させた」

ドクン、と鼓動が早まった。

思い出せ。こおりちゃんは何と言っていた？

この街で数十人、殺しているよ。

「そもそもがレリーフはとて稀少度が高いミステイだ。故に子供の頃からどちらの組織も監視を付けていたらしいんだが……片側の監視がわずかに外れた隙にもう片方に接触されたそうさ。この事件が起きた当日僕は家族共々親戚の家に行っていたのだが、それは果たして幸だったのか不幸だったのか……」

遠い場所を見るように目を細める会長。ふうっ、と息を吐き出し、話を続けた。

「時期が悪かった。真夏の日中、それも四十度近くにもなろうという真夏日だった。レリーフのコンディションは最悪に近い。でなければ別の結果もあったのかもしれないが、それは言っても詮無いこと。起きた事実はひとつ。レリーフの暴走。数時間に渡る氷塊の竜巻により、鳴海市の半分が粉碎された」

「それって」
何度か聞かされた覚えがある。前例のない大災害。鳴海市七不思議のひとつ。

「そうだよミス研部員。『白い死神』とは、まさに核心を突いている。『白銀の死神』。それこそが『最強のミステイ』、及び周防こおりに与えられたコードネームのひとつなのだから」

息を呑む。街を、半分吹き飛ばすほどの力……。

「そして。街を半壊、と言ったが、その結果はあくまで暴走状態だったからに過ぎん。正気で破壊する気だったなら街一つ潰す位では悠々お釣りが来る、との見解が正しい。半壊で済んだのは力の無駄な使い過ぎ。自滅してしまったのさ」

「……え」

耳を疑う。それだけの力が……本気じゃない？ むしろ、程遠い？

「じゃあ……本気を出したら、どうなるの？」

「……そもそも暴走していなければ無闇矢鱈に街を壊すなんてしないだろうが……そうだな、少なくとも断言できることは、」

一度言葉を止め、

「核爆弾程度では止まらない」

あまりにも、現実味がない言葉だったからか。ボクが気を保っていられたのは。

「ちなみに、現在のオーナーの人数は世界人口の1パーセントほどだそうだが、そのうちこおりちゃんたちに比肩しうるコンビはどれだけいると思う？」

「……そんなのいるわけ……」

「二組だ」

「……………」

少ないと取ればいいのか、多いと取るべきなのかももう分からなくなってきた。スケールが違いすぎる。その内心を会長は正確に捉えた。

「そんな力、理解出来ないだろう？ 僕も出来ない。同じ力を持つ

『化け物』にしか理解出来まい」

「そつ、そりやそうだけど！ 確かにそれは『化け物』だけど！

でも、それで距離を取る必要なんて！」

「違うよ、輝燐クン。また勘違いだ。確かに無関係ではない、だが力のことを直接的に『化け物』と呼んでるわけじゃない」

……まだ、なんかあるってのか。

「なあ、輝燐クン。こおりちゃんはこの街を壊したんだ」

こくりと頷く。さっきから言ってること、もう一度言われなくても分かってる。

「こおりちゃんは、自分の住んでる町を壊したんだ」

もう一度頷きつつ、眉を顰める。なんで同じことを繰り返す？

「……輝燐クン。こおりちゃんは、『何』を壊したと思う？」

もう一度、こくりと頷きそうになって。停止して。言われていることを反復して。答えも出てないのに。

何故か、寒気に襲われた。

そして予想を裏切らず、氷柱が突き刺さる。

「……まさか、子供がひとりで暮らしていた。なんて思わないよな」?

あ。あ。あああああ!?

捨てられたのならまだマシかな。死んでるかもしれないし、どっちにしてももう会う事はないんだろうな

待つ……て、まさか、そんな!?

「……確証はない。現場から遺体は見つかっていないからな。しかしそんなものは何の慰めにもならない。凍結されて砕かれたならあつという間に塵と消えたに違いない」

待てて言ってるだろ!

いや、言っていない。声が出ない。口を開いても掠れ声が出るだけ。「ちなみに両親はレリーフのことを知っていた。関係は……最良、と言うほかない。正直、ただの一般人だったことが今でも信じられない。普通の家庭なら子供共々怪物扱いのミスティを、何の迷いもなく息子と同等に扱っていたよ」

ボクの立場と比べて、羨むべき環境。しかし、この出来事の前ではより深い悪夢へ誘う材料でしかない。

そして、信じられない。

これほどの悪夢を見て、何故こおりちゃんはまだレリーフと一緒にいる!?

「『最高のオーナー』周防こおり。彼ほどのオーナーだと、自分とミスティの存在を同一のものとして捉えている節がある。でなくとも、彼に己の責任から逃げ出すような弱さの持ち合わせは無いだろうね」

相変わらず声は出ない。しかしボクの心の叫びを見透かしたかのように、会長は答える。

「とはいえ、こおりちゃんの中でトラウマとなるに十分な出来事であつたには違いない。ここで得た印象が心に刻み込まれるのも無理からぬ」

「い……」

「ん？」

「いい加減はつきり言つてよ！ 『化け物』つてなんなんだよつ！ ようやく出てきた声　『ごほごほと咳き込む。落ち着くのを待つて、会長は言葉を続けた。』

「……要は心の問題さ。意識の問題と言い換えてもいい」

言葉を切る。この動作は何度目だろう。

そして次に来る言葉こそついに……核心だ。

「こおりちゃんにとって『人間』は……下手に突けば壊れるほど脆く見えてるんじゃないか？」

「……………」

否定なんて出来るはずもなかった。実際……脆かつたんだろう。

夏の氷嵐を前にして。

「『人間』だけじゃない、『ミスティ』もだ。当時収集に乗り出した者のうち、九割が手も足も出ず粉碎されたそうだ」

想像してみる。『人間』も、『ミスティ』も、自分の周り何もかもが脆い。

それは、どれだけ不安なことだろう？　自分の立っている足場さえ不安定つてことじゃないか。

「他人事のようになるのも無理はない。あまりに……隔絶しすぎている。ならば山奥で仙人にでもなればいい、と言つかもしれないが、こおりちゃんが他人にそんな気を利かせるわけがない。それにこう言つたろうね、人間的な生活を送ることは『人間』の当然の権利だ、と」

『人間』……ああ、そうか。こおりちゃんも人間なんだ。

他人事の『人間』、なんだ。

「……なんで、そこまでして『人間』であろうとするの？」
「簡単だろう。そうありたいから、だろう？」

……ああ。

やっぱり意思の『化け物』じゃん。

いつの間にか乗り出していた身を、ギツと背もたれにもたれ掛けさせる。固まった背中が痛い。

詰め込まれた多くの情報。パンクしそうな頭をとりあえず一休み。

「それで」

させてはもらえないらしい。

「これらを知って、キミはどうするんだね？」

話の前と同じ問い。

答えは、返せなかった。

R e t u r n n o w

……なんで今そんな話を思い返すかな。

余計なことを考える余裕なんてない。気を抜けば次の瞬間串刺しだ。

耐える。耐えて、こおりちゃんが戻ってくるのを待つのが一番いい。任せればどうにでもしてくれる。あんな規格外、居るだけで勝負が決まるんだから、無意味にリスクを犯す必要なんてない。

それが、厳然たる事実。
でも。

ブルエーウゴの向こうで目を血走らせる牧野。

ブルディノとともに鎗をしのぐボク。

こおりちゃんに怯える牧野。

こおりちゃんに縋るボク。

どちらも、こおりちゃんに屈してるのは同じじゃない？

「……………！ ああああッ！！」

咆哮一喝、ガアンツ、つと壁に頭を打ちつけた。

「「！？」」

一瞬、場が止まる。が、すぐにそんな必要がないと気付いたのか、鎗の攻撃が再開される。ボクはやはり防戦一方だけど、心の中はそれどころじゃない。

なにを、

なにを考えてたんだ、ボクはっ！！

宣言しただろ、こおりちゃんの他人事っぷりを矯正するって！

なのに、なんでアツサリ膝を折ろうとしてんのさ！

『化け物』がなんだ、なんて言えない。勝てるなんて言えない。

でも、「屈さない」っていうのは意思だろ？ 意思で折れて、どうしてそれが出来るんだよっ！！

そして。目の前の巨体。

ボクは、全力でアレに対抗したか？ はじめっから、こおりちゃんに頼りつきりになってなかったか？

意思だけで現実には曲がらない。どうにもならないことはたくさんある。けど、こおりちゃんは言ってたよね？

「お前なら大丈夫だ」って。

ボクなら 違う。ボクとプルディノなら大丈夫だって！

『最高』のお墨付き。だっていうのに、危うくこおりちゃんどころかあんなのにまで屈するところだったよっ！

呼吸を整える。正面を見据える。

鎗の乱射。けど同時に放てるのは四発。疲労が出てる。次弾発射までの間隔が広がっている。

「……………次で行こう」

すぐ傍にだけ聞こえる音量で呟く。プルディノがちらりとこっち

性』“耐久”は硬くなるのではなく耐性の強化。身も蓋もない言い方をすれば、身体が超我慢強くなるってコト。

殴られても我慢する。壊れなければいい。

燃えても我慢する。火傷しなければいい。

無茶苦茶だが、そういう無茶を屁理屈で押し通すからこそその異質。しかし、抜け道は何にでもある。

斬撃。硬度は変わらないから刃は通る。斬れたものをどう我慢しても斬れてることに変わりない。

だから、さっきまでならコーリに切り傷くらい残せたカモだけど……もうムリ。当たらなきゃそれも叶わナイ。

ずるずる引き延ばす、未練がましい女は嫌われる。

次を最後の1撃に決めた。

ケド、最強の1撃。

コーリに、刻む！

「ヘル、FA発動」

でも、それすら叶わナイ。

サファイが最後に見たのは、天頂を指すコーリと。

巻き上がる、氷の竜巻だった。

吹っ飛ばされたメイドがフェンスの向こうへ落ちていく。

……まあ、死にやしないだろ。霧は二階より上を覆ってたから地上激突とはならんだろうし、何よりミステイも一緒に落ちてったし。

追いかける気はない。矛盾した話だが、あのメイド、俺への戦意はあっても害意は一切なかったからな。生命への脅威（この場合の脅威とは殺意、あるいは実力行使による誘拐といった生命活動への害意の有無を指し、具体的な危険度を意味しない）でないのに追撃をかける必要はないし、殺害は論外だ。

俺は、俺の理由で「殺し」はしない。

俺が殺すのは、俺の命を自分の勝手にしようとする相手。そんなヤツなら、自分自身の命を粗末に扱われても文句は言えないだろう？

……さて。輝燐を使って俺の命を好きにしようと考えたド三下はどうなったかね？

突然身体が軽くなった。

さつきも感じた、何かが繋がる感覚。それを覚えたかと思えば、ブルエーウゴが、目の前にいた。

「ブ……」

驚愕で身体が固まった相手を、

「き……」

「アアッ！」

二人がかりで殴りつける！

「ブルオオオッ！！」

悲鳴を、上げた。何をやっても微動だにしないとまで思った、巨体が。

左手も死んだ。けど、痛みは意識に上らない。この流れは途切れさせない！

「いけっ」

「きあああああああ！」

連打、連打、連打！

光る拳を幾度も幾度も顔面に打ち付ける！ ず、と巨体が後退する。

喚き声が耳に入る。けど形にはならない。

ただ二人、目の前の障害を打ち砕くことに集中する！

「ブルアアッ！！」

強引に鎗が放たれた。避けられる距離じゃなかった。

射線から外れてたのは本当に幸運。串刺しにだけはならなかった。高速で飛ぶ鎗の腹がぶつかっただけでもかなりの衝撃だった。

身体の中が碎ける音。ぐらりとよろめく。

その最中、後ろに倒れこみながら、ブルエーウゴの口を指差した。

「……フラム！」

プルディノの口内から飛び出した凝縮された光は、真っ直ぐブルエーウゴの口へと飛び込み、

業火を撒き散らして爆発した。

「ブオ……」

口より炎と黒煙を漏らして後ずさるブルエーウゴ。

「お、おい……」

今になって牧野の狼狽した声が聞こえるようになった。同時に、脇腹への激痛。

「……ガホッ」

苦悶の声を漏らす間もなく吐血した。プルディノは……左腕を押さえている。

「ブ……」

そして、

「ブルオオオオオオ!!」

ブルエーウゴが、怒りの咆哮とともに鎗を見当違いの方向へばら撒く。

「……」

絶体絶命。この状況で、ボクは、

コイツは倒せる、と確信していた。

さっきのフラム。あれは、クラスの差とやらで倒せなかったんじゃない。

倒さなかったんだ。殺すことを、躊躇した。

……なら、もう一度やればいい。

身体に鞭打ち上体を起こす。ブルエーウゴが角をこちらに向けている。オーナーからの命令待ち。いつでもボクらにFAを撃てるよ

う。

上等だ。

もう一度さっきの状態に持っていく。そして。

今度こそ、殺してや

「ストップだ」

それは、狂熱渦巻く思考を凍らせる一声。

「殺されそうだから殺す。そこに文句はない。いや、俺が文句をつけるべきことでもない」

足音が近づく度に、この場の温度が低下する錯覚。

「だが、それが衝動からの行動なら止めとけ。判断して、納得した行動じゃなけりや、必ず後悔することになる」

その、重く冷たい言葉の主は、

「さあ、どうする？」

言うまでもない。『最高のオーナー』周防こおり

その姿を見た瞬間、瞳に宿った炎が消えた。

「……お願い」

「よし。……という訳で再度選手交代だ。俺にはお前らを殺す理由があるんでな。というかお前らに殺される理由があるって方が正しいんだが」

鎌を軽く振って宙を斬り払う。続けて詠う。

「我が手には白銀の鎌、下すは死神の裁き　そして死する汝に祝福を」

まるで殺す前に弔うかのような唄。同時に直感する。

ああ　これで“死”が決定付いた、と。

そんなことを考えて　あまりにもこおりちゃんに意識が集中しすぎてたからか、カタカタという耳障りな音にようやく気付いた。

「どこまでも俺を見下しやがってエッ、そのクソアマだけでも道連れにしてやらあッ!」

気付いてても、起き上がることも出来ないんじゃないだろうもな
いけど。

「スパアーボムツ!!」

振動していた槍が一斉爆発した。轟音と衝撃と粉塵が周囲を覆う。
のは一瞬の事。粉塵も爆風も、全て巻き起こった風に吹き飛
ばされた。

こおりちゃんを中心とする氷塊混じりの竜巻。冷気と氷塊が天井
を破壊し、霧の頂点まで立ち昇る。

「FA、ゼロストーム」

「う、わあ……」

口から感嘆の声が漏れた。影響のない中心地から見上げる光景。
吹き抜けた天井から、煌いて降り注ぐ氷の粒。

「……ッ、グレエートホオーンツ!」

最早、破れかぶれの絶叫だった。身体の限界も省みず、命令のま
まに飛来、突進するブルーエーウゴを、

「チエックメイト」

こおりちゃんは、欠片の躊躇もなく両断した。

勢いのままに背後へと吹っ飛ぶ二つに分かれた身体は、地に着
くこともなく分解され霧となって消えていった。

同時に周囲に張られていた霧が、潮が引くように消えていく。

「……あ、本当に治ってる」

身体の様子を確認しながら立ち上がる。両手も、脇腹も無傷。周
囲にも破壊の痕はどこにも残されていない。おまけにさっきまでと
場所が違う。

「……教室?」

そう、ボクの教室だ、今回の事件の始まりの。でも机が倒れても
いなければ潰れてもいないし、ましてや壁が破れてるなんて事もな
い。夢や幻を見てたんだよ、と言われれば信じ込んでしまえそう。
でも、幻じゃない証拠に。

シフトを解いたこおりちゃんがいた。頭の上にレリーフがいた。

プニヤモでなく、プルディノがいた。

おまけに、

「てめえら、よくも」

口角から泡を撒き散らして、何事か喚こうとする牧野を、鳩尾への一撃で黙らせた。

どさりと倒れる牧野。こおりちゃんはそれを興味無さそうに見て、「んじゃ、帰るか。つたく、安売り買い損ねた」

……今まで起きてた戦いより、そちらのほうが余程重要らしい。流石にボクはそこまですっぱり切り替えられず、今回のことを思い返す。

結局最後はこおりちゃんに頼ることになっちゃった。

けど負けちゃいない。屈したまま終わりにはならなかった。

……今は、それだけ心に刻み込もう。ボクは、目の前の『化け物』

……『人間』より弱いから。

だから、

「こおりちゃん」

改めて、宣言しておく必要がある。

「ん？」

目の前の背中がくるりと振り返る。

それは、きつと最難関。自分の手で壊してしまった大事なもの。

「ボクが、こおりちゃんの家族になってあげる！」

それでも、屈さずにいれればいいかは

「見てなよ。その他人事っぷり、微塵も発揮出来ないくらい傍にいてあげるから！」

びしりと、指を突きつけた。

その言葉に、きよとんとして、ぼそりと言。

「聞き様によつちやあプロポーズだよな」

どうやら俺は、これまでで最大級の地雷を踏んだらしい。

「は、え？」

指を突きつけたまま固まって、自分の言葉をもう一度よく思い返す。そして、

顔が、信じられないくらい赤く染まった。

「~~~~ツ、こおりちゃんの、バカ~~~~っ!!」

視界に入ったのは茹蛸もかくや、というほどに真っ赤な輝燐の顔、顔面に迫る右拳。そして、

ああ、人間って空を飛べたんだ、そんなことを他人事のように考えた。

エピソード

Another eye

深夜の学校。本来ならとうに誰もいなくなってるはずの校舎に動く影が一つ。幽鬼のような足取りで荒い呼吸を立てながら歩いている。

「くそ、どいつもこいつも馬鹿にしゃがって、俺はこんなもんじゃねえぞ！」

目は血走りセットした髪は崩れ鼻血を拭く事もしない。

「力だ。もつと強い力だ。それがあやあんなガキに舐められる事も」

くすくす。

「誰だあ、笑ったのは！」

怒鳴り声が無人の廊下に響く。ぜえはあ、と息を切らす音が響く。

「そりゃ、だつてさあ」

「ねえ」

いつの間にか、それはそこにいた。

髪から靴まで白い少年と、

髪から靴まで黒い少女が、

手を繋いで影の後ろに。

「あまりの無能っぷりなんだもん、仕方ないよ」

「おまけに危うく『光竜』を殺しそうになるんだもん、救えないよね」

「なんでこんなのにミステイあげちゃったんだろ？」

「ほんと、無駄にしちゃったよね」

罵倒されている。貶されている。見下されている。なのに、

影は呻き声一つ出す事ができない。汗の落ちる音を聞いたとき、初めて震えることを思い出した。

気付いたときには、世界は白い霧に包まれていた。

「これはお仕置きが必要だよな」

「ダメだよ、そんなこと言っちゃ。怖がって震えてるよ」

「じゃあお仕置き、しないの？」

「まさか」

くすくすくす。

ずっ、と、空間を割り裂くように巨大な剣が突き出てくる。

「サヨウナラ、大根役者さん」

影と神々しき剣が重なり、影は二つに分かれた。

霧群学園学生寮。女子寮の談話室にあるソファに獅子堂優姫はどつかと腰を下ろした。

「ふう」

「あら、姫さんじゃないですか」

眼鏡を掛け直してから声の方へ振り向くとそこには普段着姿の石崎杏李がいた。飲み物を手に優姫の向かいに腰掛ける。

「……姫は止めてと言ってるでしょ」

「どうしましたそんな格好で、姫さんらしくもないですよ」

憮然とした文句をさらりと聞き流す杏李。対して問われた優姫の格好はノースリーブにタンクトップといったラフな格好で、肩に掛かっているバスタオル、濡れた前髪、曇り気味の眼鏡から風呂上りということは一目でわかる。

「……何かおかしいかしら？ 暖房が効いてるから特に寒くはないけれど」

「おかしいですよ。いつもの姫さんなら他の人がそんな格好しているのを見たら間違いない」だらしない」って注意していますよ」

「……そこまで四角四面ではないつもりだけれど」

そう言いつつもなお、はあと溜め息を吐く優姫。

「お疲れのようですね」

先輩に対する敬語も忘れるくらいに、と思ったが今は指摘しない。「……そうね。寮に帰ってから一騒動あったし……それでなくても最近では心労が増えてるっていうのに」

同時に二人の頭に転入生の姿が上る。

眉間に皺を寄せる優姫。

クスクスと微笑う杏李。

「キョウさんといい、お守りご苦労様です」

「本当……いつも真面目にやってくればどっちも苦労しないのに」

その言葉に杏李は「あら？」と思う。

「何ですか？」

「いえ。姫さんは、こーりんの能力に疑問がお有りで、生徒会入りを反対されていたのではなかったのですか？」

その問いに優姫はぴくりと表情筋を強張らせる。が、すぐにそれを治め、

「あの実力テストの結果を見て考え直しただけよ。会長の気まぐれは思わぬ拾い物だった……とは思えないわね」

と話の矛先を別の人物へ移した。それに気付いていながら、杏李も乗る。

「そんなに勘繰るのですしたら霧群学園最強の武力を以って問い質してみればいいじゃないですか」

こおりと京之介が幼馴染みである事を知っている杏李がいけしゃあしゃあとそんなことをのたまった。

「……どうしてこう、うちの学園って優秀な人に限って人格に問題があったりするのかしらね」

そして三度溜め息を吐く。

私立霧群学園二年、生徒会副会長獅子堂優姫。またの名を霧学の苦労人。

「お疲れ様です、遥香さん」

「うん、もおくたくたよお」

事務員からコーヒーを受け取った桜井遥香は休憩室のソファに深々と座り込む。

「またしばらくここに拘束されるのかあ。改めて思うわあ、職場間違えたって」

「お給料はいいですけど」

「今はお金なんかより青春の方が大事！ 二十台なんてあつという間に過ぎていくんだからあ！」

泣きべそをかきながらテーブルを引き寄せ、弁当の蓋を開けた。

「ぐすん、いただきますあす」

もぐもぐと咀嚼する事数口。

「……お弁当の味、落ちた？」

「いいえ、変わらないと思いますけど」

「……そっか」

寂しげな瞳をしたかと思うと、その表情をきりりと引き締めた。

「残存個体数は？」

「本日0時時点での105体から98体まで減少しました」

「百切ったんだ。シフトした個体も増えてるはず。しばらくは減少が早くなるかも」

「塀川部長もそう仰ってました」

そして二人は同じ方向を見る。その先、何枚もの厚い壁で区切られた先にそれはいる。

何体もの念系ミスティで創り出した空間に隔離幽閉した、それ。

『最悪のミスティ』。

「……早く、毎日こおりくんのご飯を食べたいな」

呟いて、弁当の続きを食べ始めた。

Another eye end

『今日は大変だったねこおりちゃん』

その言葉で今すぐ電話の向こうの男を殴りに行きたくなくなった。

『いい度胸してるな、キヨウ。高みの見物は楽しかったか？』

そもそも、あの『霧』の中は一種の異世界だ、携帯が通じるわけがない。特殊な手段で、何者かが中継しない限り。

『はっはっは。しかしだよ、こおりちゃん。輝燐クンはいの一番にキミへエマージェンシー・コールを送ったんだ。ならば、本人の意思を尊重すべきだろう？』

「……もっともらしいことを」

溜め息。同時に確信。やはり、こいつらはまともに俺を『守る』

気はないらしい。むしろ……

「……そういや、その輝燐だが。お前、あいつになんか喋った？」

『ああ、こおりちゃんの昔のことを少々』

他人のプライバシーを漏らしたつてのに悪びれもせず肯定か。別にいいけど。

『自分の口から話すよりはよかったです。どうだい、お節介の甲斐はあったかな？』

「どうでもいいよ。ただの事実だし」

『……ふむ。まあいいか。僕としてはこおりちゃんが生徒会の仕事をしてくれるだけで満足さ』

「生徒会の仕事？ そんなに人手不足には見えなかったか？」

『オーナーの護衛に決まってるじゃないか』

「は！？ やらないつつつてるだろ」

『やったじゃないか。今日、牧野教諭の魔の手から、輝燐クンを見事守ってくれただろう』

「ありや成り行き上、」

『今後その成り行き上がどれだけ積みあがっていくのだろうねえ、はっはっは』

「ふっ、ざけ」

ツーツーツー

笑い声を耳に残して切りやがった。怒りをぶつけるように携帯をベッドへ叩きつける。

「ったく」

部屋からリビングに戻りながら、ふと、あのメイドの素性については、結局話題にも上らなかつたなと思案する。

キヨウも霧の中で起きた事の詳細は把握してないのか。全く想定外で、本当に知らないヤツなのか。それとも、知ってて黙ってるのか。

……どうでもいいか。

皿を洗って、それからアイスでも食べよう。

……石崎先輩との会話は、疲れる。あるいは、会長の相手をする以上に。

本当に意地が悪い。言葉の端々に平気で毒を混ぜてくるし、姫はやめると言っても聞かないし、さりげに自分のスタイルを強調してくるし。

撤退のタイミングも完璧。こちらの青筋が切れそうになる直前でそそくさと部屋に戻っていった。わざと走って戻ったのは、怒りのまま大声で注意させて、多少のガス抜きを図るためだったというのは、怒鳴った後で思い至った。

物腰穏やかな表の性格。

毒吐き腹黒な裏の性格。

これが私の知っている石崎杏李。

でも、ときどき思う。

これが、本当の石崎杏李なのか、などという根拠もない疑問を。

……。

ただの直感。答えを出す気もない。そこまであの人に踏み込む気は、私にはない。私があの人と関わるようになったのは去年（今年度）生徒会に入ってから約三ヶ月、しかも偶に顔を出される程度

であり、そこまでの関係性を築いてはいない。少々辛辣な言い方をすれば、

他人に過ぎない。

あの転校生も、そのはずなのだけだ。

周防の能力が高いなんてことは、初めて会った瞬間に『理解』^{わか}っていた。

わかっていて、反対した。

今、周防に関わるのは、単に生徒会役員や問題児という理由だけじゃないという自覚がある。

そこまで思考したところで、部屋の前に帰りついた。自然な動作^{ルーションワーク}で鍵を差し込んで、

開いていることに気付く。

「……………」

思考を正常に戻すのに半秒。集中して中の気配を探る。

……………一息吐く。勢いよくドアノブを回して扉を開く。

「勝手に来るなど言ってるでしょ、サファイエル！」

「あつ」

いきなりの怒声にも、部屋の中にいた人物は驚くどころか満面の笑みを浮かべる。

褐色の肌、エメラルドの瞳。しかし、世俗一般に照らして真っ先に注目が行くのはその格好だろう。……………私の実家では珍しくもない格好なのだけだ。

メイド服。

「お帰りなさいませ、オナーサマ」

礼儀正しく礼をする従者を半眼に、まず不法侵入の説教だな、と眉を吊り上げた。

閉じかけた扉に足を挟んで押さえた。

「ひゃうっ？ こ、こおりちゃん？」

慌てて扉から離れる輝燐を追って部屋の中に侵入。

「輝燐」

そして、出来るだけ優しく、言った。

「あの馬鹿、出せ」

「は、はいっ！」

「!?!」

輝燐はとても素直に、ベッドの下に潜り込んでたレリを引きずり出してくれた。いい子だ。

「レ・リ？」

ぶるぶる震えるレリを両手で受け取る。そして、

「ま・た・お・ま・え・は・ひ・と・の・ア・イ・ス・ま・で、食いやがってえっ!?!」

ぎゅーっとおもいつきり左右に引き伸ばした。

「!?!」

ギブ？ 知るかつ！

それから約一分、解放されたレリは涙目で陽炎の中へ逃げていった。

「………たく。匿うなよお前も」

「いや、なんか慌ててたからつい………って、こおりちゃんも女の子の部屋勝手に入ってこないでよ！」

「んぐ。悪い」

また鉄拳制裁されちゃたまったもんじゃない。とっとと退散しよう。

あんまり邪魔するのも悪いし。

と踵を返す、その前に、

「こおりちゃん」

呼び止められる「

ん？」

「ありがとね、助けてくれて」

と微笑んで言った。

「ああ、気にすんな。俺のとばっちりみたいなもんだし」

「だけじゃなくて、こないだの事」

「？」

「ありがとね、ボクのこと止めてくれて。大事なもの、失わないで済んだよ」

そう言っただけでベッドに座っていたその頭の頭に手を置く。そして俺は遥香さんの言葉を思い出した。

『うん。もう大丈夫だよ。こおりくんがしっかり守ってくれたから』

……ああ、そういうことか。

「あれこそ気にすんな。それこそただのお節介だ」

「もう」

苦笑する輝燐。さらに溜め息を吐く。

「でも情けないなあ。助けられてばかりじゃない。ボクの方がお姉さんなのに」

「ああ……それなら本当に気にする必要はないな」

「え？」

そう、本当にどうでもいいこと。だから今まで言わなかったけど。

「キョウウから聞いたな？ 『事件』のこと」

数日前の二人の会話を思い出す。あの時、輝燐はどんな表情をしてたっけ。

「えっと……」

「その直後俺は半年以上眠っててな。その間当然学校には行けなくて、一年遅れてんだよ、俺は。つまり」

偉そうな態度で、

「俺の方が一歳上って事だ」

笑っていたっけ。

エピローグ（後書き）

第一章、これにて閉幕です。

第二章はメイン主人公（変な言い方だね）が変わります。輝燐と彼女の立場の違いにより知識量の差は相当なもので、解説臭い文章が増えるかも、とか予防線を張ってみる。

ちなみに、主人公は第一章で全員出揃ってます。誰がそうなのか、予想してみるといいかも。

第一話 周防こおり逃がすべからず

カタカタ、タンツ

キーボードを打つ手を止め、書き上げた報告書を一通り見直す。

「……ふう」

目に疲労を感じて目蓋の上から押さえ、椅子の背もたれに体重を預けた。ギツと軋む音に慌てて姿勢を正す。

このボロつちい木製の椅子が壊れたとして、代わりの椅子をかう予算は無いんだから。

椅子だけじゃない。慎重に歩かないと抜けそうな床も、そこから雨漏りする天井も、それを理由に予算の上乗せを申請したところで色よい返事が返ってこないことは、『教会』の財政事情を大まかにしか知らない新米のあたしでも予想が着く。我が家^{ウチ}で最も高価なものは、あたしの目の前のノーパソだ。

ま、そんなの今に始まったことじゃないものね。正式に修道騎士になって　つまりここでの一人暮らしの期間こそわずか一年弱だけれど、貧乏暮らしは今に始まったことじゃないもの。

だから、そんな新米にこんな大役が任されるとは正直驚いた。

『最強のミスティ』。『凍王』。『白銀の死神』。

数々の呼び名を持つミスティと『最高のオーナー』、周防こおり。その少年が編入する学園、学年、クラスまで同じだったことが、あたしが彼の監視を任命される理由となった。

本当に監視、観測、あるいは連絡役以上は期待されてないのだからうけど。

けどそんなこととは関係なく、あたしはその任務に歓喜した。

浮かれ気分は前日のうちに消し去った。

緊張を持って迎えた当日の朝　期待は失望へ転落した。

ピークに達したのはあの日。二対一とはいえ、劣勢を跳ね返す気構えすら感じられなかった。

こんな墮落した人間に、あたしが劣っているなんて思えなかった。そんな人間に、負けた。そんなの、認められるはずがないじゃない。

だから、行動に移した。結果は失敗に終わったけど。……放課後に学園へと戻る周防君を見つけたのは本当に偶然だった。

学園からは『霧』の気配。そこへ通常とは異なる手段で侵入する彼。

数十分後、彼は桜井さんとともに出てきた。

そこで何があったか、予想はつく。となると、やはりあたしも侵入したほうがよかったか。

手助けをするためじゃない。彼の力を見極めるために。

でも、あの日あたしがあの場にいたの気付かれてたらしいし、下手に隠れて警戒されるのも厄介よね。そう考えたから結局踏み込まなかったんだけど。

……やっぱり安全圏から監視し続けるより、当事者になるべきかしら。といっても、彼に直接ぶつかるのはもう無理だし……

そこまで考えて気が滅入った。はあ、やっぱり報告行ってるわよね。だとするとあたしが報告を隠したところで、叱責が余計に増えるだけだし……

全部周防君の所為ね。今度会ったらただじゃおかないわ。

そう結論付けて、送信ボタンを押した。

「三十八度五分」

体温計の表示から正面の女の子へ目を移す。パジャマ姿の体は布団の中、彼女のトレードマークであるサイドポニーは下ろされている。顔は紅潮し、額には濡れタオル。

「立派な風邪だな」

「わかってるよ……」

億劫そうに返事をするこの女の名は桜井輝燐^{きりん}。俺の同居人だ。

子供の頃起こした事件以来、度々引越しと転校を繰り返す生活を送っている由緒正しい高校一年生であるところの俺、周防こおりが輝燐の義姉である遥香さんに引き取られてまだ一週間にも満たないところ。

どうやら彼女らは俺を家族とみなしているようだが、俺の視点では居候という意識である。昨日その点で輝燐がいろいろ熱弁を揮ってたが、未だその関係は変わっていない。

さて、その彼女だが、俺が朝起きるとベッドの中で赤い顔でうんちん唸っていた。起きられないくらいだるいとの事で額に手を遣ってみるとこれがまた熱い事。

「気が抜けたら疲れがどつと出たカンジ……」

こいついざ何かやるとなったら豪快なクセに繊細なところあるからなあ。

「こおりちゃんなんて寒空の下屋上でぼーっと突っ立ってたのに……」

「俺は寒さに強いんだ」

ちらと時計を見る。時刻は九時になったばかり。

「それにしても気を付けろよ。俺がこんなに朝早く自力で起きてきたなんて奇跡に近いんだから、本当なら昼頃まで誰にも気付かれる事なくベッドの中で動けなかったんだぞ」

「それは、偉そうに言う事じゃ、ないと思う……」

突っ込める余裕があるなら問題ないだろ。

「きああ」

台所から呼ぶ声が聞こえた。三分経ったか、レトルトパッチのお粥が出来上がった時間だ。本来ならこういうものに頼るのは俺の主義に反するのだが、寝起きの俺の味覚は馬鹿になつてしていると自覚している。幸いにもこの家は俺が来るまで手料理というものに縁がなかったおかげでその手の買い置きには事欠かなかった。

「食ったら薬飲んで寝ろよ」

「レトルト嫌あ」

「我慢しろ」

部屋を出ると入れ違いに輝燐の家族が部屋に入っていった。……今爪の先に抓んでいた物は俺が今まさに取りに行こうとしてたものじゃなかるうか。

「それそのまま飲むモンじゃない、熱ちっ！」

「きあつ！？」

……なにやってんだか。とりあえず皿とスプーンと、雑巾も取ってくるかな。

朝食を食べて間もなく、俺の携帯が着信音を響かせた。表示されている名前は、石崎杏李。

「……………」

この電話を取るべきか取らざるべきか、数秒思案する。この外面だけ清楚な、中身真つ黒の先輩との会話が、俺にとって愉快な方向へ転ぶ場面がどうしても想像出来ないからだ。

結局、通話のスイッチを押した。ここで無視して、家まで押しかけて来られるような可能性を考えれば電話のほうはまだマシだ。

「もしもし」

『おはようございます、こーりん』

「……………おはようございます」

折り目正しい朝の挨拶。実際に電話の向こうで頭を下げているんじゃないかと思わせる涼やかで落ち着いた声を聞いてもなお警戒感が抜けないのは、俺の猜疑心が強いだけ、じゃないだろう。

『ご機嫌がよろしくないようですが、もしかして寝起きでいらしたのでしょうか？』

「いや、今日は珍しく起きてましたよ」

暗に普段は寝てる時間だから電話なんかかけてくるな、と言ったのだが伝わらなかつたのか無視してるのか、「そうでしたか」と一

言で流された。

『では、今日一日何かご予定はお有りでしょうか？』

話が一段飛んで一気に怪しくなった。

ここで再び思案。適当な用事をでっちあげるか、正直に話すか。

……虚実織り交ぜるのがベストか。

「……実は輝燐が風邪を引きまして。今日は一日看病に追われることになりそうです」

風邪を引いたのは事実だが付きっ切りでいるほど重病じゃない。

『あら、それは大変です。わかりました、そういうことでしたら』

「はい」

意外なほど素直に引いたな。

『すぐ、ご用意いたしますので』

「はい……はい？」

と思つたのも束の間、用意？ 何の用意？

「準備つて」

聞き返すも、受話器の向こうからはツーツーとお馴染みの音。…

…無闇に不安を煽り立てやがるあのアマ。

そして判決を待つ被告の気分で、特に何をする気にもなれずリビングで過ごすこと二十分、小槌が打ち鳴らされるが如く玄関のチャイムが鳴った。……誰が来たかなんて、クイズにもならない。

……すっげー無視してえ……。

けどなあ、さっき俺はずっと家にいますって自白してたようなもんだし。買い物つて言い訳が通用する時間帯でもないしなあ。

諦めるしかない。玄関までのったり歩くことでせめてもの抵抗を示してやる。そんなもん意に介する女じゃないだろうけど。

鍵をガチャリと開ける。すると、

「キリン、いきて」

間髪入れず開いた戸からアホ毛が呐喊してきた。

ガインッ

「ぶへっ」

しかし、チエーンはかかったまま。勢いづいて止まらなかったのか、突っ込んできたアホ毛がドアと壁に顔面を挟まれていた。

「ふごおっ！」

無駄に勢いづけて変形した顔を引っこ抜く。両頬をさすりながら蹲ったアホ毛はクラスメイトの藤田伊緒だった。

「……………何やってんだお前」

いや、それ以前に何故こいつがここに？

「とりあえず、チエーンを外してくれませんか、こーりん？」

と思つたら、藤田の後ろに杏李先輩が。

「……………」

訝しみながらも一度ドアを閉めてチエーンを外す。同時に玄関脇へ退避。

「キリン、いきてるかー！」

予想通り、すぐさまドアが開き藤田が飛び込んできた。一直線に輝燐の部屋へ。靴ぐらい揃えてけよ、つたく。

「伊緒さんは元気ですね」

「あいつは風邪と無縁でしょうね」

プルディノ見られてないか、と少々心配になったが、まあその辺はあいつも今まで気を付けてた事だろうし、大丈夫だろ。

「では、これでもう何の心配もございませんね。参りましょう、学園へ」

「……………はい？ 学園？」

何を言ってるんだ、この先輩は。今日は土曜日、週休二日制の例に漏れずこの学園も休みのはずだ。

「はい、学園です。正確には、生徒会です」

「げ。うちの生徒会って休日に来てまで活動してるのかよ」

「いえ、特別な行事がなければ普通にお休みですよ。ただ、今回は緊急の召集なのです」

「それでわざわざ家まで。ご苦労なことです」

受験生じゃないのか、この人。……………あ、推薦受かってるんだっけ。

要は暇人か。

「そんな用件ならさつき電話で伝えればよかったじゃないですか」

「そうしたらこーりん、お逃げになるのでしょうか？」

「当たり前じゃないですか」

平日ですら面倒臭いのに何故休日まで出頭せねばならんのか。

「実に堂々としていらっしやいます。それでこそこーりんです」

「だがもう少し周りに気を配ったほうがいい」

……なんかこんな展開、覚えあるぞ。

「私の前で堂々とサボリ宣言をして、逃げられると思っていないだろうな、周防」

キイツと大きく開かれるドア、さつきまで陰になっていた場所にそいつは立っていた。

ショートヘアにヘアバンド、眼鏡に堅物な性格と見事なまでの委員長の見本。霧学の女帝、生徒会副会長獅子堂優姫。

「……えーと、おはようございます獅子堂先輩」

「ああ、おはよう」

「改めておはようございます、こーりん」

朝一番の挨拶がとて空々しかった。

「あー、獅子堂先輩？ 杏李先輩には伝えたんですが」

「聞いている。私たちも、用事のある人間にまで突然来いとは言えないわね」

よし。獅子堂は決して理不尽な奴ではない。こちらに相応の理由があれば譲歩してくれる。

「石崎先輩の言う通り先に電話しておいて良かったわね。桜井の看病は藤田が快諾してくれたわ」

……先に理由のほうを潰されたた。

「……なんで獅子堂先輩に協力したんですか、杏李先輩」

小声で訊く。この人はもう引退した身で、度々生徒会室に出てきてはいるものの仕事には関わっていないという話だ。俺の捕獲に協力する理由はないはず。

「つい、面白そうでしたもので」

「……………」

「というのは冗談で、私の身の回りにも関わ^{わたくし}る案件でしたので、絶対に本音だった、さっきのは。」

「時間が惜しいわ、さっさと用意してきなさい。念のためもう一度言っておくわ。逃げられると思うな」

この副会長は怒ると言葉が乱暴になるという癖がある。

否やは、言いようがなかった。

「……………あのさ、俺を捕まえるのに必要な体力と時間を生徒会の仕事に充てた方が遥かに効率的だと思うんだけど」

「周防が逃げなければいいだけの話なのだけれどね。あ、協力ありがとうございました石崎先輩」

「いいえ、お構いなく。萎縮されたこーりんを拝見出来る機会はそうそうありませんので」

性格悪いな、この人。流石に獅子堂も同意のようで呆れた視線を向けている。

生徒会室に着いて俺の両隣にこの二人が座っている。ここまで来たらいくらなんでも逃げやしないっての。

「逃げたばかりだろう、この間」

ぎろりと睨まれた。また顔に出てたか。

……………にしても女二人、それも片方は学園の人気美少女（外見だけは）に挟まれてる俺って、周りからはどう見えてるんだろうね。さつきから視線が突き刺さってるんだが。まあ、どうでもいいけど。

どうでもいいいついでにざっと見たところ、出席率は八割ってところか。……………俺を半ば無理矢理連れてくる意味あったのか？

「で、周防。早速だけど下着ドロに心当たりはある？」

「はっ」

いきなりの話に面食らう。そこへ杏李先輩が説明を入れた。

「昨日の昼間寮に泥棒が入ったみたいなのですよ。女子寮のベランダに干されていた下着が片っ端から盗まれていたそうなのです。酷い人は室内を物色された形跡まであるそうです」

伝聞口調から鑑みるにこの人は被害に遭わなかったクチか。

「して、本日は予定を変更し生徒会は臨時に捜査本部を設置する事となったのだよ」

がらりと扉が開かれ、入ってきた男子生徒。名前を遠見京之介、俺の幼馴染みでこの学園の生徒会長、なのだが……。

「何その荷物」

キョウのその手には何故かコピーしたプリントの束が。そういうのって下っ端の仕事だろ。

「ペナルティさ」

「偉そうに言うな。昨日午後の授業をすっぱかしたんだ、この男は」
「はあ、それで獅子堂の怒りを買った、と。くわばらくわばら。」

「……で、下着ドロ？ そんなもん警察に任せとけ」
「ふざけるな！ こんな辱めを受けて黙ってみているだけなんて霧学生徒会の名折れだっ！」

獅子堂のこめかみに青筋が浮かぶ。ああ、なるほど。

「獅子堂先輩は盗まれたクチか」

「……で、前科のある周防をまず締め上げてみよっという意見が出てた訳だが、尋問は私が行って構わないな」

「待て待て待て待て尋問ってあんたってか前科って何そもそもその意見はどこからそれは八つ当たり過ぎないぞ！」

拳を鳴らす元空手部の副会長に危険を感じ思わず早口に捲し立てる。

落ち着け、俺。意見の出所なんて、こんな事を言いそうな奴は二人しかいないだろう。

プリントをクラス毎に纏めてる現会長と隣に座ってる元会長。

「仕方ないですよ、こーりんは覗きが趣味の変態さんですから」

「他人の趣味を捏造するな」

まだそのネタを引っ張るか。

「大体俺は寮なんて近づいたこともこれから近づくことも無い。全くの無関係だ」

「……念の為に聞いておくけど、昨日の昼休みはどこにいたかしら？ どこにも見つからなかったけど」

一昨日生徒会をサボった件で探されてたんだっけ。

「今後の為にも秘密。ただ学内にはいたぞ。輝燐に聞きゃ裏は取れる」

「……もう、見つけたら連絡してって言ったのに」

獅子堂は眉間を揉みながら溜め息を一つ。大分落ち着いて冷静になつてきたみたいだ。

すつと女子生徒が俺の前に紅茶を出した。そういえばいつもは席に着くと同時に出されてたっけ。容疑が晴れるまでお預けしてたところか。

「む？ 来ていたのか真砂クン。てつきりキミは休むと思っていたのだがね」

「私も寮生だから。放置出来ない」

「しかし真つ先に確認されるとは俺って信用ないみたいだな」

紅茶を啜りながら軽く言った。皮肉る様な口調は一切無くまるで他人の評価をするような感じで。

「……周防、そういうのはあまりよくないわ。濡れ衣を着せられた事への受け止め方は自由だと思う。無関心だって構わないと思う。

けど、あなたのは……何か違うわ」

「ふうん」

「……暖簾に腕押しだな」

静かなまま口調が変わる、つてのは初めて見るパターンだな。それはともかく、言わんとすることは分かる。

俺は『化け物』だが、同時に『人間』でもある。故に自分自身の事すら遠く他人めいて感じられる。危機意識の低さといったものはおそらくそういった点が起因していると思う。

正直、これは最早本能レベルで染み付いてる。これがなくならない限り輝燐の言う家族というのには到底なることなんて出来ないだろうな。

「さて、一通り周防をいじったところで本格的に話し合いと行こう。犯人は内部の人間と思うがどうだ？」

「ええ、残念な事です。この学校って寮も校舎も無駄に高いセキュリティを備えてますからね。必然的に寮の中の人間が犯人という事になるでしょう」

「……そうなんですか？」

隣の杏季先輩にだけ聞こえるくらいの声で囁く。二度も完全下校時刻後の無人の校舎で襲われている身としては素直に信用できない。「ええ。まず普通の人間は入って来られないと思いますよ」

つまり、侵入者があつたならそれは普通の人間ではないということか。

そうやってぼそぼそと話していた間にも会議は進んでいた。それはいいが、この会議すぐには終わりそうに思えない。いつになったら帰れる事やら。

と、そんな事を考えていた俺の目の前にぽんと書類が置かれた。「？」

条件反射的に手に取って見るとそれは学生寮の見取り図のようだった。他にも現場の写真、警備システムの詳細なんてものまである生徒会つっても所詮学生だろ、こんなもん見せていいのか。

「そんなに暇なら現場検証でもして外から入れる余地がないか確認してきたまえ。終わり次第帰っていいだろう」

「俺が女子寮になんて入っていいのか」

「杏季女史が同行するなら構わないだろう」

「私は構いませんが、キョウさんは外部犯とお考えなのですか？」
「念の為だよ。いい機会だから洗い直しておくのもいいだろう」

俺の肩にぽんと手を置きははと笑うキョウ。一日雑用の癖に。まあいい。会議に参加するよりは楽だろう。

「では参りましょう。現場検証ということは姫さんのお部屋にお邪魔したりもするのでしょうか」

「……外回りや廊下だけで勘弁してください」

学生寮は学園がある高台から坂を下つてすぐにある。周囲に雑木林が広がるほど馬鹿でかい敷地を持つにも関わらず学園の傍に建てられていないのは、万一どちらかが大規模な襲撃を受けた際に一網打尽を防ぐためだろう。

私立霧群学園は全国からオーナーを集めた保護施設であると同時に、彼らを狙い来る人間を迎え撃つための戦場だ。その為中心街から離れた場所に広大な敷地を陣取っている。『霧』を喚べば隠蔽工作の必要すらないとはいえ、出来るだけ戦いやすい環境を整えたいということだろう、廊下の幅も普通の学校よりいくらか広い。それに制限時間が来ても戦いが終わらないという可能性もあるし、そもそも『霧』を張らずに戦い出すこともある。やはり戦いに適した場は必要なのだろう。

そんな訳で学生寮は全寮制ではないのだが、ある種オーナーの生徒は絶対に入らなければならぬらしい。十分電車通学できる距離に実家があるキョウだつて寮住まいだ。例外は学園が属する組織の人間である遥香さんが保護者になっている俺と輝燐くらいのものだろう。

言い換えれば、寮へ行くというのは顔見知りのオーナーと鉢合わせる可能性があるということだ。

杏李先輩に案内されてまずは外観を一回り。下着ドロの影響が冬場だからか、ベランダに洗濯物は干されていなかった。

「残念でしたね、こーりん」

無視。

次に重い足取りで屋内へ入ると。

「……ここ女子寮よ。なんであんたがいるのかしら周防君」

玄関先でその少女と鉢合わせた。てかすっごい蔑みの目で見られ

た。

俺の隣の席のクラスメイト。小柄な女子。幼い顔立ち。後頭部から二つ揺れる尻尾しっぽのような髪の色は銀。名前は確か……

「もしかしたら昨日起こったっていう下着ドロの犯人があんたなの？ 犯人は現場に戻るって言うものね。それともその手に持ったデジカメからすると今度は盗撮かしら」

仕事用にとキョウウに渡されたものだったが、成程、男おれが持つてるとそう思われなくもないか。

「生徒会室での事といいなんとなく俺のイメージってそんなのみたいだな。とにかく外れ。この人と一緒に生徒会の仕事だよ」

そう言つて後ろにいた先輩を指差す。

「ああ、石崎先輩。お仕事ご苦労様です」

「いえいえ、どういたしましてこころん」

ああ、そつだ。こころん……じゃなくて、明野だ。明野心。

態度をコロリと変えた明野がねぎらいの言葉をかけると先輩はぺこりと会釈で返す。知り合いなのか？ あだ名で呼んでるくらいだし。と、表情に出たのか杏李先輩が答えてくれる。

「伊緒さんがそう呼んでいますから。実際にお話した事はあまりありませんね」

「あたしは少し話してみたいと思つてましたよ。生徒会長を務めたほどの優秀さと人望の厚さ、何より古代種エンシェントを従える『ブリッジ』の若手有望株ですから」

明野は言葉に敬意を含ませながらも、その瞳を挑戦的に輝かせている。その言葉の中に、いくつか彼女がある種の人間であると示すワードが入っていた。

そう、明野もまた『ある組織』に所属するオーナーであり、

昨日、真つ昼間から俺に挑みかかるといふ暴挙をかましてくれたのだった。

第二話 銀と金と雷雲

A day ago

ピーッ

試合終了のホイッスルが響く。今は二時間目、授業は体育で種目はバスケットだ。

一試合終えコートから出る。すると、へろへろの足取りで同じチームだった乾がこちらにやって来た。

「お疲れさん……」

「ああ」

「……なあ、こおりはん」

「ん？」

「今試合終わったばっかやっちゅうのに汗一つ掻いてないっちゅうのはどういうことぞっしゃる？」

「汗くらいはかいてる」

「いやそこが論点やなく！ どんな体力しとんねん！ ……ぜえぜえ」

息切れ起こしてまで突っ込みたいのかお前は。

別に体力が化け物みたいにあるわけじゃない（いや俺は『化け物』だけどそついう事とは関係無しに）。体力に限らず足の速さやその他体力測定において測る様々な数値において十人並みの能力しかない。要するに動いてないのだ。とはいえ授業を疎かにしていた訳ではなく、必要最低限しか動かなかったのである。あとは小手先の技術でどうにかしているのだ。

「まあええけど。こおりはんがボールブンブン投げるの追っつたらなんか勝つてもうたし」

「一敗毎にスクワット五十回とか聞かされたんだ。容赦なく勝ちにいつて当然だろ」

こういつた体育の集団競技では俺はかなり自分勝手に行動している。他人のペースに合わせるより自分のペースでやる方が楽だから自然と司令塔のような役割をしていることもしばしば。協調性が無いと言われようが事実としてこれで上手くいつてるのでこれからも変えるつもりはない。

「へぶうつっ！」

と、体育館の反対側から潰されたカエルのような声が聞こえてきた。いや、カエルが潰れるとき本当にあんな声を出すのかは知らんけど。

とにかくそちらに目を向けてみると、そちらでは女子がバレーボールをしていた。そして声の元はコートの中、一人顔面にボールの跡を付けたまま倒れている女子と推定。……あのアホ毛は藤田か。

そしてボールはコートの上空でまだ生きている模様。それに跳び付く一人の女子。周りの人間よりも小さいくらいの背なのに、その跳躍、その打点は誰よりも高い。

「はっ！」

そして打たれたスパイクはブロックを抜け相手コートに突き刺さる。鳴り響くホイッスル。着地した女子生徒は銀の尻尾をさらりと靡なびかせた。

「すごい、明野さん！」

「当然よ」

集まってくるチームメイトとハイタッチ。そして倒れたままの藤田に笑顔で手を差し出す。

「ナイスレシーブ、藤田さん」

「おー！　こころんもな！」

「その呼び方は止めて欲しいんだけど……」

苦笑しつつも手を掴んで引き起こした。

「……………」

明野心。キョウの言によれば頭脳明晰、スポーツ万能の優等生。自信家で高飛車な物言いはあるが決して自分勝手という訳ではなく

むしろ面倒見のいい性格で男子、女子に関わらず人気者との事。

ふと、視線が絡んだ。

睨まれた。

……とてもキョウの言葉と一致しないなあ。俺に対してだけ。

正直、彼女がどんな人間かなんて俺にはどうでもいい。ただ、何故俺が目の敵にされているのか、それだけが知りたかった。

クラスの人間は俺が彼女に睨まれているのは前回のテストが原因だと思っっているみたいだが、それはあくまで追加要因でしかない。俺は知っている。何故なら、俺は最初の接触の時点で彼女に睨まれていたからだ。

そもそもその最初の接触というのが教室の中ではない。その前、登校時学園に至る坂を上りきったところで後ろにいた明野に気付いたのがそれだ。転校当初学園に流れていた俺の悪評すら聞いているはずも無いタイミングで一体何が彼女の気に障ったのやら。

別に彼女との仲を改善したい訳じゃない。結局俺と彼女は他人であり最終的に俺が嫌われていようがいまいが知った事じゃない。いっその事避けるようになってくれれば労力が一つ減って大助かり、とまで思っている。

しかしあの時俺の何らかの行動が彼女にとって不快であり。それが俺自身も認める人間として至極真つ当なものであるなら。

俺は謝るべきなのである。他人だから迷惑をかけても放置したままでいいなんてことは決してないんだから。……はあ、なんかこの街に来てすぐにもこんな事あったな。あの時は原因が分かってたけど。

そう、今回は原因不明。然るに本当に俺が謝るような事が理由なのかもはっきりしていないのだ。当人に訊くのが確実というかそれ以外の手段は無いだろうが、それが地雷を踏む行為である事くらいいくら俺でも分かる。

よって保留。そもそも積極的に解決しようなんて社交性は俺には皆無なのだ。そのうち機会があれば分かるだろう、と所詮他人事に

向ける意識なんてその程度のものなのである。

ところが、その機会は思いの外早く訪れる事になる。

「こおりはんは……容赦ない……」

体育館から教室への帰り道、耳元で恨み言を呟く乾がウザい。しかし言葉にこそしないものの俺のチームメイトは皆、目でそう訴えていた。

「ドリブルで切り込むような技術がないんだから周りを使うのは当然だろ。あと疲れるの嫌いだし」

「絶対本音は後のやる！ そんなんわいだって嫌いや！ つかこおりはん上手いやん！ シュート落としたトコなんて見てないで！？ げほげほっ」

むせるくらいなら突っ込むな。

「集団競技なんだから一人で頑張ったところで意味無いだろ。事実負けたし」

それに二戦目はチームメイトの動きが目に見えて悪くなってきたからこつちもそれなりに動いてたんだけどな。

「せやからて極端とちゃうか……」

ぶちぶち文句を呟きながら歩いていく乾。その姿がすうっと消えた。

「……………」

気が付けば他のクラスメイトどころか人の姿一つ見つからない。

その代わりに現れていたものは、

霧。

「またこれか……」

深い溜め息が出た。この霧はある特殊な人間が異世界より呼び出したものだ。この霧の内部は本来俺たち人間が住む世界とは別空間であり、霧を呼び出した人間とその人間が指定した人間だけを取り込む。この際霧の外の元の世界はどうなっているか知らないが、少

なくとも霧の中で破壊された物や傷ついた生物は霧が解かれると同時に元の状態へ修復される。……ただし、死者はどうやっても蘇らないが。そして一定時間が経過するまで霧が晴れる事は無い。それまでは誰も霧から出る事は出来ないのだ。

そのシステム上この霧が張られる時、大抵その使用目的は、

『決戦場』。

……また厄介で面倒極まりない状況になったもんだ。俺としてはこんな事に関わらず静かに生活したいというのに。それもこれもこの街に引越してきたのが原因なのだが、それを今愚痴つても仕方ない。

牙を剥く者がいれば潰す。それだって今まで通りの事なのだ。

廊下の真ん中に立ったまま、一度だけ波を広げた。

……いるな。誰もいないはずの世界ですぐ目の前の教室から人の気配がする。霧を張った人間で間違いない。そいつが他の人間を巻き込んで囿に使うような奴でなければの話だが。まあその可能性は低いか。普通の人間ならこの状況に困惑してとっくに廊下まで出てきているだろうし。

第一、こつもはつきりと攻撃の意思を感じられるのだから疑うのも馬鹿らしい。

その教室の扉は開け放たれている。霧が張られる前から開いていたのかもしれないが、誘いを掛けられてるのは間違いないので迂闊には近寄らない。この規模、この外膜の密度の霧なら散開まで十五分程度か。その間睨み合いを続けていても構いやしない。

……これもあの人から聞いた事だったな。

『いいかい少年。霧に囲まれたなら脱出は不可能、すぐに頭を戦闘態勢に切り替えること。そして霧は相手の力を知る重要なフアクターだ、ざつと見でいいから観察しておくことだよ』

霧の規模×外膜の密度で大体の力の大きさが分かる。屋内で正確な大きさが分からなかったり複数人で張る事もあるそうだし、そもそも今回の場合どう考えても短時間で散開するよう調節してる。そ

の程度の技術があるってことだが、まあ参考程度にしかなるまい。それよりはつきりわかるのは色だ。張った奴の系統・種別により霧の色が変わる。この間と同じ金色……だがまたキヨウの悪ノリってわけじゃなさそうだ。……確か、この色は十系の一つで、

キインツ！

金属が打ち合わされる音が鳴り響く。

背後から飛び掛かってきた生物の硬質の角。受け止めたのは俺の手に逆手に握られた白い刃の鎌。二つの刃がカチカチと拮抗する。

「ふっ！」

呼吸とともに吐き出し鎌を払う。宙空にいた生物はその力に逆らわず距離を取って着地するとそのまま地を蹴って角を突き立て突進。鎌を立てて角を受け後ろに逸らし、その擦れ違い様に鎌を振り抜き斬り裂くが、手応えは無い。

鎌を振るった勢いのままに半回転し振り向く。そこにはさっきの生物。大型犬ほどの大きさの羊、ただし本来ある二つの角の他にもう一本額からまっすぐ伸びる角があり、その下にジグザグのマーク？ 傷？ がある。が反転し距離を取ってこちらを向いていた。さっきの斬撃はやはり体毛を斬り裂いただけに留まったようだ、出血している気配も無い。

> i29741—3710<

武器化を解除する。鎌が解^{ほど}け、俺の足元に一匹の生物が現れる。

一抱えほどの大きさの球根。目があり根のような四本の足が生え、額には大きな氷の葉っぱがある。名前はレリーフ、俺の唯一の家族だ。

どちらも本来この世界にはいない生き物。この霧で満たされた異世界に棲む生物たち。彼らは総称して『ミステイ』と呼ばれているらしい。

そして羊のようなミステイの傍には、さっきの交錯の間に教室から出たのだろう、一人の人間が立っていた。

ミステイと共生関係を結び異世界から呼び出す事が出来る人間。

『オーナー』。

そのオーナーには対立関係になる二つの組織が存在するらしい。そしてここ霧群学園は、その片方の、オーナー保護施設の一つだそう。俺も保護の名目の元連れてこられた一人だがそれにしちやあいろいろおかしなことを要求されそうな雰囲気なのは今は割愛するとして。

そうか、なるほど。

そういう組織の人間なら転入前から俺の事を知っていても不思議ではないわけだ。

藍色と白のセーラー服。小柄な背にさらりと揺れる二房の銀髪。こちらへ向けられる視線はすつと鋭い。

その口が開かれる。

「『教会』所属オーナー、『修道騎士』明野心。契約ミスティ、アライエス」

彼女は胸を張り、立ち塞がるかのように立っていた。

「見極めてあげるわ、周防君」

たんつと足を踏み鳴らす。すると羊型のミスティ　アライエスの体毛が一気に膨張した。その体積は先程までの二倍以上。

「見せなさい、あなたの全力を！」

その言葉と共に体毛が弾ける。もこもこの毛の塊がいくつも宙にばらまかれて滞空する。その様子を見ながら俺は、

思いつきり溜め息を吐いた。

「……何よ、その溜め息は」

不審そうな、咎めるような声だったが気にせず話す事にした。

「いや、あんたさ、初めて会ったときから俺のこと睨んでただろ？ てつきりその時俺何かしたのかと思ってたんだけど、この様子だ

と何か違いそうじゃない」

もう一度溜め息を吐く。

「考えるだけ時間の無駄だったなあ、って」

「……………へえ」

それは、どこか危険な響きのある声だった。

「言うじゃない、この状況で。余程危機意識に欠けてるのかしら」
宙に浮く毛玉からパリツという音が聞こえた。

違う、これは毛玉じゃなくて、

「舐めてんじゃないわよっ、サンダークラウドオツ！」

金の霧のミステイは、雷系。

毛玉、いや雷雲が放電した。

ドシャアアアンツ！

「……………かぶ」

落雷を受けばたりと倒れる。その俺に荒い息を上げながら明野が叫ぶ。

「何が『最高のオーナー』よ、何が『最強のミステイ』よ！ いつまでも調子に乗らない事ね！ すぐにこのあたしが化けの皮剥いであげるわ！！」

「……………どっちも自分で名乗った記憶は無い。ここに来てから周りの奴が勝手に言ってるだけだ、欲しけりゃ持ってけ」

むくりと上半身を起こす。同時に身体の子エック。身から上がった煙は治まり電撃の痺れはもう取れた。我が身体ながら呆れる耐久性だな。

「いずれは手に入れる予定よ。でもとりあえず今はあなたがそれ程の人間じゃないと確かめるのが目的かしら。さあ、そうと分かっただから見せなさい、あなたの全力を」

「断る」

速攻で拒否した。明野の眉が跳ね上がる。

「そう、あたしには全力を出すほどの価値も無いってこと」

「いちいち訂正したくもない。どう思おうが自由だ。ただし、その

結論から出た如何なる感情にも巻き込んでくれるな。そんな他人事に付き合うつつもりはない」

立ち上がる。と共に後ろへ跳びわずかに距離を広げた。

「そのくらいで雲から抜け出せると思わないでよっ！」

わかっているさ。形を成しているものだけじゃない、あれはあくまで発生源。今俺は山の中で雲の中に入ったのと同じ状態だ。その中にある限りどこにいても雷は当たる。

「サンダー」

「レリ、スノウブレス」

両腕で抱えたレリーフに指示する。レリーフの口から雪混じりの寒波が吹き出される。

「！」

それを続けさせたままその場で一回転。それだけで周囲の雲は拡散していく。さらにそのまま二人へ向けて固定。ミステイには効かなくても人間は堪えるだろう。

「……確かにやるようね、一回見ただけでサンダークラウドの能力から弱点まで看破するなんて。一応、あたしの経歴に傷をつけただけのことはあるわ」

「!?!」

しかし予想に反して明野の声がはつきりと発せられたことに驚く。震えによる声の乱れ一つない。

「けど、それだけであたしとアライエスを攻略したと思ったたら大間違いよ！」

氷雪の向こうで電光が煌く。

フィニッシュアーツ
「FA発動、サンダードライブ！」

ズバツと音がしたかと思う間もなく電撃が地面を走り迫ってくる。俺は跳躍と同時に寒波を吐き続けるレリの口を床に向けた。跳躍の高さを少しでも上げる為だ。

しかしそれは結論から言うが無意味な行為だった。何故なら、地を走った電撃は俺が先程まで立っていた場所まで到達すると急に跳

ね上がり俺へ一直線に迫ってきたからだ。

空中。速度。回避不可。レリーフの技では迎撃不可。威力は先程の広域電撃以上！

バチイイイン！！

電撃との衝突。奔る閃光。舞い上がる黒煙。

「……………」

固唾を呑みこちらを探る明野。

「しやう 枝葉の氷柱こぶ」

大鎌を横薙ぎ、黒煙を斬り裂いた。

煙の中より現す俺の姿は、右腕と顔の右面が氷と化している。そして右手に握られるのはやはり氷の、しかし白銀の大鎌。

「レリーフ」

名乗り上げと姿を認め、明野が確認するように訊いてきた。

「それは限定同調融合リミテッドシンクロシフトね」

「ああ」

『シフト』。ミステイの中にはそう呼ばれる進化変身を遂げ、全く別の姿となる種が存在する。そのシフトには二種類あり、成長に因る一方通行の通常シフトと、器具や融合といった手段を用いた一時的なシフトが存在する。今俺たちが行ったのは後者、ミステイとオーナーの融合だ。

「……………そうか。あの時、霧の中にいたもう一人はお前か」

「……………気付いてたの」

わずかに目を瞪る明野。こちらへの警戒心が少々高くなったように感じる。

「ええ、その通りよ。そこまではもう確認してるわ。見せなさい。その先、完全同調融合シンクロシフトを」

「断ると言った。他人の思い通りにされるの嫌なんだよ、俺は」

駆けた。鎌を振り下ろす。角で応じるアライエス。二合、三合と打ち合い、ガキツと噛み合い再び拮抗。

「じゃあ無理矢理にでも引き出すわ。そして貴方たちを見極める。」

それが修道騎士たるあたしの使命よ」

「……使命とやらが何か知らないが、ストレス解消にかこつけるのはどうかと思うぞ?」

「!」

ぼそつと呟いただけだったんだが、どうやらすっかり耳に届いたようだ。顔が紅潮しているのは羞恥か、怒りか。

アライエスの体毛が膨れる。角が帯電する。

先程の電撃は十分致命傷になり得るものだった。本気の攻撃、ならこちらが遠慮してやることもない。これ以上のお喋りは無用。痛いのも嫌いなんだよ。

牙を剥く者は、潰す。

「我が手には白銀の鎌」

「!?!」

明野の表情が驚きに包まれる。しかしそれを問い質す気はない。

今の俺にとってそれはただの隙だ。

「下すは死神の裁き、そして」

「おっと、そこまでだ」

チュインツ

その声と音に詩は遮つたられた。示し合わせたように鎌と角を離し距離を取る。

さっきまで俺が立っていた場所の真横、その床に黒い穴が開いていた。……パラボラレーザーか。

「やれやれ君たち、まだ授業中だっというのに何をやっているんだい」

振り向いた先に立っていたのはやはりキョウ。そいつの口調と表情は咎めているものではなくむしろ楽しささえ感じられる。

「ほら、生徒会長の目の前でいつまで喧嘩腰でいる気だい、明野くん?」

「周防こおりの力を見極めるといっなのは教会の意向です。先輩に邪魔される謂われはありません」

「ならば僕は学園側より学内のオーナーの統括を任された人間だ。ここで君が僕の警告を聞かずまだ学園の保護対象に攻撃を加えるというなら、上から教会側に抗議してもらおう事になるな」

「……………」

沈黙を了解としたのか、アライエスが帯びていた電気が沈静していく。それを確認して俺も融合を解いた。

「今回はこれで退きます。けどこれで諦めたわけじゃありませんから。特に周防君、ちゃんと覚えておきなさいよ」

「随分とややこしいことになってるみたいだな。ややこしいついでに一つ聞いていいか」

「どうもその自分には関係ありませんって感じの言い方が気になるけど、何よ」

「最早どうでもいいことなんだが一応はつきりさせとこうと思ってあんた、結局どうして俺の事敵視してるんだ？」

「……………これでもね、はじめは敬意を払ってたのよ」

ぼつりと苦々しそうに、恥部を暴露するかのような口振りで話し出した。言いたくないなら別にいいんだけど……………まあいいか。

「七年前、当時『最高のオーナー』と呼ばれていた人間を破りその座を奪ったオーナーはその時まで小学生だった。そんな人間に会えるというんだもの、期待しない方がおかしいってものでしょ」

ところが、と続ける。

「転校初日に寝坊して遅刻しかけた上、学園では痴漢だのの噂が流れているわ、その真っ只中当人は半日寝こけているわ！ あたしの『最高のオーナー』のイメージをグチャグチャにくれたのよあんたは！」

THE・言い掛かりだ！ 正当性の欠片もねえ！

「あつはつは、なるほどなるほど。だがこおりちゃんは前回の実力テストで君より上の点数を出しただろう。それなりに評価出来るのではないかね？」

こおりちゃんヤメ口。

「だからムカつくんでしょうがっ！　あたしはこんなのより劣ってるっていうの!？」

「こんなの呼ばわり来ましたー。」

「ああ、思い出したらイライラしてきたわ。やっぱりここで決着つけましよう周防君」

「コラコラ、止めに来たと云っているだろう。さあ、早く教室に戻って遅刻しましたと素直に怒られるがいい」

「……キョウこそサボってるじゃないか、生徒会長の癖に」

「生徒会長だからこそ、堂々と宣言して抜けてきたのだよ」

「ああ、また獅子堂が怒り狂うな。」

と、視線を離れた間に明野の姿は消えていた。気付けば霧も引いている。

「結局何だったんだ、あいつは。お前と同じ組織の奴か？」

「いや。彼女の所属しているのは『教会』という組織でね、この学園が所属する組織とは協力関係にはあるが、見ての通り一枚岩というわけでもないのさ」

まあ俺の知った事じゃないな。それより俺も早く教室に戻らないと。

「授業、ちゃんと受けてるのかい」

と、歩き出そうとしたところで話しかけられた。

「ああ。不真面目にして居候先に迷惑かける訳にもいかないからな」

「転校初日から爆睡してた人間のセリフとは思えないねえ」

「ほっとけ」

今度こそ歩き出す。まったく、幼馴染みってのは何かと面倒だ。

特にコイツには昔からいいようにされてきたからなあ、出来るだけ関わらないのがベストなのかもしれないけど……

「それこそ無駄な努力だな」

疲れたような口振りで、けどどこか明るい声が出た。

入り廊下から屋上、非常階段まで手元の資料と見比べながらときに写真を撮りつつ見回っていく。ちなみにカメラマンは杏李先輩に任せた。

すれ違う女子生徒から不審な目で見られた　　と思うのは果たして被害妄想だろうか。隣に先輩がいるとはいえかなり肩身が狭い。

「女子寮になんてこれからも入ることはない、でしたっけ？　舌の根も乾かないうちに、とは正にこの事ですね」

「うるさい」

あつ、もうひとりいたか。周りから見えてるかは怪しいが。

「何か不穏なことを考えなかつたかしら、ヘンタイ」

「別に何も」

背が低いっつーただの事実を……って足踏むな、痛い痛い。

「っーかなんで着いて来るんだ、お前」

「決まってるでしょう。女子寮に入り込んだ不埒な輩を監視するた

めよ」

「仕事だっつーの。誰が好き好んでこんなトコ来るか」

「どうだか。そもそも男子を女子寮に寄越すなんて……なに考えてんのよ、霧学ウツチの会長は」

それは俺も知りたい。「終わったら帰ってよし」の一言で了承した数分前の自分を出来るなら止めに行きたいくらいだ。ここまで精神的負担がかかると思わなかつた……そのうち慣れるにしても、いや慣れたいと思わないが。

「石崎先輩ひとりでよかつたんじゃないですか？」

「またも同意。」

「いえ、私はただの付き添いです。ここの調査は全部こーりんにお任せします」

途端、明野が胡散臭そうに俺を見た。

「警備システムを見直すだけだ、女子部屋に入るわけじゃない」

「こーりんってばつまらないのです。折角男子生徒にとつて禁断の園である女子寮へ足を踏み入れたというのに浮き足立った様子一つ無いのです」

「仕事で入っただけだったのに何を期待する事があるっていうんですか」

「夏場ですと薄着の女の子が無防備に廊下を歩いていたりするのですよ」

「……ふうん」

間に意味は無い。本当だぞ。

「このムツツリ」

「ムツツリ野郎さんですね」

「うるさいっ」

別にいいだろ、俺だって男なんだし。

「こんなの任せて二次災害が起きなきゃいいけどね」

「こころん、そう簡単に成果なんて出ませんよ。エッチなこーりんが女の子の秘密の園を公的に観賞なさつてこのお仕事はおしまいです」

……キヨウよ。お前の人選は実に適切だ。これで何も仕事せず終わったらからかうネタを一つ提供することになるわけだ。誹謗中傷なんかで負うダメージなんて欠片ほどもないが、わかっててからかわれるというのはそれなりにストレスが溜まる。

結局またキヨウの思惑通りか、くそ。

自分の適応力の高さはつくづく異常だと思う。いや耐性、あるいは鈍感力か。

調査が終わる頃には女子寮の空気なぞ欠片も気にならなくなっていたんだから。

「こんなところ、かね」

結局不審者が入り込めるような死角は見つからなかった。まあ、真面目にやるうがやるまいが無いものが出てくることはないってことだ。

「侵入経路は分らずじまいですか」

「文句があるなら自分で探してください」

「いえいえ。となるとやはり内部犯でしょうか。談話室までは男子がお入りになるのも許可されていますし」

「あとは業者とか、か」

まあ、そこから先を考えるのは俺の仕事じゃない。

「あたしはもう帰るわ、これ以上いてもやれることもなさそうだし
そう言っ外に出ようとする明野にあれ、と思う。」

「オーナーは寮暮らしなんじゃないのか？」

「それは『ブリッジ』の管理下にいるオーナーの話よ。あたしは別組織。寮入りなんてしたら行動に支障が出るだけだわ。今日は友達から話聞いて来ただけよ」

「ブリッジ？」

そついやさつきもそんな名前出てたが。

「この学園の所属する組織の名称ですよ。『人間とミステイの架け橋』です」

そんな説明を聞いている間に明野は出て行った。ガラス戸から見える背筋をぴんと伸ばして歩く後姿が遠ざかって消えていく。

「姫さんとはまた違うタイプでこーりに厳しいですね」

その言葉は無視して先輩に書類を押し付けた。

「つと」

「調査も終わつたし帰ります。気付いた事とかそこに書き込んでおきましたので持つてってください」

「はい、構いませんよ。どうせ生徒会室に戻るところでしたから」

二つ返事の了承を受け玄関の扉へ向かう。

「こーりん」

その背中に声をかけられた。無言で振り向く。めくった書類で隠

れ表情は見えなかった。

「こーりんには皆が期待しています。私やキョウさんだけでなく、本当に皆が、です。彼女もきつと、『最高のオーナー』という者に期待を持っていた一人だということ、覚えておいてください」

「他人の期待に応える気はありません」

すらりと、まるで条件反射のようにその言葉が出た。遥香さんら、その『ブリッジ』とやらがどんな理由で俺をこの街に連れてきたか知らないが、目の前にいる先輩が言ってもこの反応だ、何処の誰とも知れない『皆』の期待なんて知った事ではない。

「……そうですか」

彼女は顔を隠したまま、静かにそう言うのみだった。

第三話 プレゼント

「……で、何故お前らはこの家で飯まで食ってる」

「ん？」

口をもごもごと動かしながら藤田と乾が同時に反応した。

ここは桜井家、そのリビング。テーブルの上には種類のサンドイッチとサラダ、各人に生姜のスープ。俺の向かいに座っているのは藤田と乾。

藤田はいいだろう、輝燐の看病に來た訳だし。しかしそれなら自分で作ってもよかったはずだ。あといつの間に來た乾。そして何故しっかり用意してる俺。

「こーりんのメシがうまいからにきまってるだろ！」

「このカツサンド、ソースウマツ！ こいつぁ金取れるで。これなら來年の文化祭はがっぽり儲かりそうやな。同じクラスになることを期待してるで」

「どれだけ先の話をしてるんだお前は」

まあいい、確かに今さらだ。既に三分の二を消化している状態で言う事でもなかったかもしれない。

「お前ら、野菜もちゃんと食えよ」

「こおりはん、今のおかんっぽかったで？ 案外家じゃ世話焼きか？」

「うるさい」

黙らせながらも否定は出来なかった。先住人が二人とも家事スキルが壊滅的だった所為で日々主夫化が進行している気がしないでもないからだ。

「ところで、どうしていきなり生徒会に呼ばれたんや？ またなにかやらかしたんか」

「またつてなんだ。寮に下着ドロが出たんだと。二人とも知らなかったのか？」

「うむう？」

「こちらの質問に藤田が首を傾げる。

「寮で暮らしてりや噂の一つや二つ入ってきてるんじゃないのか？」

「ああ、なーる」

乾は合点がいったと言うように頷き、しかし否定した。

「わいら寮住まいやあらへん。二人とも隣町のマンションに住んでるねん」

「……ああ、そっか」

今日寮に行つたからつい勘違いしてたらしい。

「あははー、ようぎしゃふたりはっけーん！」

そう言つて目の前の男二人を指差す藤田。つくづく失礼だよなこいつ。

「生徒会でもそんな扱いだったが、とことんそんなポジションに置かれてるらしいな俺は」

「生徒会動くん？」

「ああ。警察に任しときゃいいのに」

その言葉にてつきり同意が来るものだと思つていたが、

「そっかー。ならつかまりそーだなー」

「あの生徒会やもんなー」

……どんな生徒会だよ、おい。キョウは一体あそこをどんな魔窟に作り上げたつていうんだ。いや、杏李先輩が会長の頃からそうだったのを引き継いだのかもしれない。……いかん、容易に納得がいく。魔窟で全つ然おかしくねえ。

「しつてるか、わんこいるんだぞあそこ！」

「犬？」

そんなのとは遭遇しなかったが、誰か部屋の中で飼っているのだろうか。

「なんか寮監のセンスが飼つとるらしくてな、夜になると寮の前に出て来て番犬みたいな事やつとるんやと。ちよつと変わった見た目らしいけどな」

「わんこはわんこだー!」

そう言う藤田自身が尻尾を振りそうなほどハッスルしている。寮生のいる夜間にだけ出てくる変わった番犬の正体に当たりを付けつつ(なるほど、他のシステムよりこつちがキモな訳だ)藤田に訊いてみる。

「そんなに好きなら自分でも飼ってるのか?」

「うちマンションだからなー」

そう言うてはははーと笑うが、一瞬笑顔の質が変わっていた。乾いた作り笑顔。いつも馬鹿みたいに笑ってばかりいるこいつには似つかわしくないそれを、当然俺より付き合いの長い乾も気付いているはずだが何も言わないところを見るとこのまま流した方がいいのだろう。まあ、元より深く追求する気もないのだが。

「こーりんはペットかわないのかー」

「手間がかかるのは輝燐で十分」

レリはペットじゃない。勘違いする馬鹿がいないとに限らないので念のため。

「ほほう、輝燐はんはこおりはんのペットかー。風邪引いたんも、

ゆうべはおたのしみやったからやな?」

「……………」

皿を回収し立ち上がる。乾の皿にはまだ残ってたが構わずキツチンへ。

しかし逃走失敗。変態は回り込んできた。

「無視はアカンやる無視は! せめて一言くらい何か突っ込んで!」

「失せる変態」

「ひどっ!」

「あははー、こーりんはDSだからなー。DMのけーとあいしょうバツチリだ!」

「根も葉もないこと言うんやない! そんな言葉どこで覚えてくるのこの子は!」

「んーと、けーのベッドのした?」

「わああああ！」

慌てて口を塞ぐとする変態、もとい乾の手を藤田はひよいとかわす。

「藤田、輝燐の様子は？」

帰ってきた時寝てたからすぐ昼飯の用意に取り掛かったんだが。

「おー、まだおきあがるのたるそうだったぞ」

「身動き出来ないのをいいことに手籠めにする気やね!？」

「ひどそうか？」

「んー、ねてればあしたにはなおるだろーな」

「あれ、放置プレイ？」

「あしたもみまいきていいかー？」

「ご自由に」

「すみません、本当に何か一言でいいんで仰って頂けないでしょうか……」

「へこんで外れる程度の似非関西弁なら始めから使うなよ」

「余計なお世話や！ そしておおきに！」

突っ込んで貰えた位で泣くな。

「あははー、こーりんはドSのくせにおひとよしだなー。しかし三又研はそんなゆーをひつようとしている！」

「俺には必要ない」

そもそも誰がドSなんだ、まったく。

「おー、こーりんまった！」

自室に戻ろうとした、その背中を呼び止められる。形式的に首だけを向ける。

「おねーさまからとどいたモノ、こーりんのへやにほーりこんどいたからなー！」

……誰？

差出人は桜井遥香と書かれていた。

「……本当に『お姉さま』なんて呼ばせてんのかあの人は……」

最初にこの家に来たときその呼び方を求められたのを思い出す。ギヤグのつもりだと思っていたがまさか本当に呼んでいるヤツがいるなんて思わなかった。いや、もしかしたら藤田にそう呼ばれたのを気に入ったのかもしれない。何にしても溜め息の出る話だった。

まあいいか。そう呼ばせようとする当人は今ここにいないのだし、とりあえず目の前の箱を開けてしまおう。

ビリビリと包装紙を破っていくとレリが咎める様な視線を送ってきた。むう、別にいいだろ、取っておく訳でもなし、すぐに捨てるんだから。

そして箱を開けると、中には緩衝材に包まれて二つの物が入っていた。

一つはソフトボールほどの大きさの球形の機械。もう一つはPD

A。

「なんだこりゃ」

呟いても返ってくるのは首を傾げるレリの動作のみ。箱の中を探っても説明書の類は同梱されていなかった。なのでとりあえずPD Aのボタンを適当に押してみる。……まさかいきなり爆発するってこたないだろ。

ウンともスンともいわなかった。コンソールに何も表示されないし、そもそも起動音すらしない。壊れてるんじゃないよな？

ひとまずPDAはレリの方に放り出してボール型の機械を手にとってみる。……こっちはもつとわからない。半分を開く以外のギミックは見当たらず、ボタン一つ付いてない。こんなものだけポイント渡されても部屋の隅で埃を被る以外使い道は

……待った。これ、この機械、

「……どっかで見えた事ある、よな」

呟きは疑問ではなく確認だ。ちらっと見た程度の記憶だが確かに覚えがある。実際に触っていじってみたならまず忘れてないだろうから、どこかに置いてあるのを見たか誰かが持っているのを見たか

……しかしそれ以上はどうしても思い出せない。遥香さんから送られてきた事から察するにミスティ関連の物だと思っただが

「と、そっか。この家にはもう一人オナーがいたっけ」

もしかしたら同じ物を貰ってるかもしれない。さつきやかましい二人組も帰っていったことだし訊いてみるか、と腰を上げ輝燐の部屋へと向かった。

部屋の前に立ちドアを控えめにノックする。

「輝燐、起きてるか？」

「ん……こおりちゃん？ 入っていいよ」

許可が下りたのでドアを開けると二つの視線が向けられていた。

一つはベッドの上で寝たままの輝燐。朝に比べれば幾分かマシだがまだ熱が下がりきっていないらしい。

もう一つの視線の主はベッドの傍らの床に脚を投げ出し座っている。その大きさは小学校低学年位の子供ほど、その姿は青い恐竜。なかなかシユールな光景だがレリを見慣れてる俺からすればごく一般的な光景である。

この恐竜の名前はプルディノ。輝燐のミスティだ。

「寝てたか？」

「んー、さつきまでプウと話してたんだけどね。ちよっとウトウトきてた」

「プウ？」

「プルディノ。こおりちゃんだってレリーフのことレリって呼んでるじゃん」

「ああ、なるほど」

「プルディノ」ってのはミスティの種類の名前でもあるからな。個別にニックネームを付けておかしいことは全くない。

しかし、名前まで付けるといふその様子からはつい数日前までこのミスティを嫌悪していたなどは微塵も感じられなかった。完全に和解したのが昨日の事、それからは家の中ではミスティを呼び出してても良い事になったというのは俺にとってもプラスな決定だった。

「あつ、そーだ。ちょっとこおりちゃんに訊きたい事があったんだけど」

「話次第で聞くが、その前にこれ何か分かるか？」

「そう言つて遥香さんから送られてきた物二つを見せる。」

「何、それ？」

「いや、知らないならいい。で？」

「ああ、うん。なんかブルディノと話してるとね、どうしても言葉が伝わってこないところとか出てきて」

「ああ、『霧の世界』関連の事だろ？」

理解しようという気さえあればオーナーは共生するミステイと会話する事が出来る。しかし一部、例えば「向こうの世界はどんな世界なのか」などの内容を含む言葉は鳴き声のまままで伝わってこないのだ。この現象は『検閲』と呼ばれているらしい。

「なんだ、こおりちゃんとレリーフもだったんだ」

「あからさまにホツとした表情をする輝燐。」

「……まあ、一応な」

「……何、その間は？ 何、一応つて？」

耳聴いな。

「気にすんな、寝る。まだ熱下がってねえんだろ」

「ええっ！？ ちよつ、そんな言い方されたらボクかえって寝れないよ！ ねえ、眠るまでお話してくれてもいいじゃん」

「……はあ。こんな仏頂面と何で好き好んで話なんかしたがるんだか」

「じゃあこおりちゃんが仏頂面止めればいいだけじゃん。夕べの笑った顔、けっこう、その……」

「………………は？」

何故か赤面してぼそぼそと口籠もる輝燐だが、その前にちよつと聞き逃せない、つていうか有り得ない事言つてなかったか？

「誰が、何をしたつて？」

「え？ だから、こおりちゃんが笑つたつて」

「……何話でつちあげてんだお前はよ」

「え、えええっ!?!」

驚いた顔で布団を跳ね除け身を起こす輝燐。心外だって表情だがそれはむしろこっちのセリフだ。

「そりゃないよこおりちゃん! 折角こおりちゃんも家族って認めてくれたんだと思ってたのに!」

「勝手に決めるな、ただの同居人」

「ね、笑ってよもう一回」

「鬱陶しい」

なんかの見間違いに違いないのもう一回と言われてもどうしようもないっての。他人相手に本当の笑顔になるなんて俺には出来やしないってのに。作り笑顔でこの場を凌げるならやらないこともないがそんなものが求められてる訳じゃないだろうし、ああ、それ以前に作り笑顔なんてやった事もねえや。いや、誤魔化し笑顔ならあったかな? 顔引きつってたと思うけど。

「ねえ、笑ってよ!。笑ってくれたらさ、『お義兄ちゃん』とか呼んであげるよ?」

……………。

「……何、そのこいつ何言ってるんだキモッ! って顔は」

「こいつ何言ってるんだキモッ」

「わざわざ言うなあっ! プウ、フォトンアームっ!」

「きあっ!」

プルディノの両手が光に包まれる。って、

「待っ」

ドゴオン!

「ふんっ、こおりちゃんの馬鹿! おやすみっ!」

パンチ一発で廊下の壁に叩き付けられた俺の耳にその声とドアが閉まる音が届いた。

「で、説明してもらえますよね会長」

「ん？ 何の事だい優姫くん」

「すつとぼけるな」

うむ、怖いな。

本日の生徒会活動は終了したが、活動中優姫くんが残るように視線で訴えて、もとい脅していたので今ここにこうして残っている。

もつとも、課せられたペナルティの分活動時間内で出来なかった仕事を終わらせなければならなかったので元々残る予定ではあったが、なお、杏李女史も一緒だ。

バンツと目の前の机に叩きつけられたのは一組の資料。所々にある書き込みの文字は、昔のそれより随分と読み易くなっていた。

「なんなんです、これは」

「女子寮の警備体制の資料だが？」

「そんなことはわかってるんです。私が聞いているのは周防のことよ。 いったいどうやってたら初見の場所であれだけの死角を見つかけられるというのだ!？」

戻ってきた杏李女史が渡した資料を見た途端、優姫くんは生徒会室を飛び出した。おそらく いや、間違いなく女子寮へ確かめに行ったのだろう。その人間の意識からもセキュリティからも死角になっっている場所を。そして彼女なら、それが正しいか否かの判別も付いたはずだ。

もちろん、それが下着泥棒と関係があるとは限らない。しかし今問題にしているのはそんなことではなく、周防こおりがそれをいとも簡単に見つけてしまったということなのだ。

「私はむしろこーりんが犯人のような気がしてきましたよ、ふう」

それは本音とも冗談とも聞こえるな杏李女史。

「優秀な生徒 そんな一言で片付けていい能力じゃないわ。これは異質よ」

……それを君が言うかね優姫クン。

「答えて。何者なの、彼は」

……何者、か。難しい質問だな。ただの人間と答えればいいのか、彼自身が言うように化け物と言うべきか。

「やれやれ、失敗したかな。彼に女子寮の調査を命じたときに君が止めなかった時点でおかしいと思っていたが、ここまで喰いつかれるとは」

というより僕は反対だったのだが。上の命令じゃなきゃ彼にこんな「実験」はさせなかつたとも。

「それは私の台詞よ。倫理観より貴方の真意と調査の結果に欲求の天秤を傾けてしまった拳句、こつちの斜め上をいかれるなんて」

「それがこおりちゃんさ。昔からこちらの予想以上の成果を出してくる。畏にかかってからぶち破るタイプ。呑み込んだ怪物を内側から解体し放り込まれた迷路を粉々に粉碎する。なんだ、本当に優姫クンとそっくりじゃないか、ははは」

ヒュンッ

「……やっぱり。知ってて彼を生徒会に入れたのね」

ハラハラと髪が舞い落ちる。僕の顔の数ミリ脇には優姫クンの拳が。……うむ、怖いな。

「知っていると。忘れるはずがないとも。高みを許容出来たなら惹かれるしかない。どこまでも。許容出来ないなら拒むしかない。いつまでも」

「さすがに誇張しすぎに聞こえますよ、それは」

杏季女史が苦笑したか呆れたか。まあ仕方ない。こおりちゃん自身が高みを望んでいないのだから。人間と同じ場所を望んで、でも人間以上を自覚してしまつたから人間と同じでいられない。

……くそ。僕だけは大丈夫などと思つた自分が愚かしい。僕らの関係性は悪い言い方をすれば昔を引きずつてるだけなのだ。いつ他と一緒になつてもおかしくないだろう、馬鹿が。

「しかし会長がそこまで言うというのは興味あるわね。どんな子供

だったのかしら」

ぴくっ

「それはもうっ！ 天才、神童、怪物といった名を恣あつにしていたさ
っ！！」

「……私、聞いちゃいけないことを聞いたかしら」

「世界が広がれば失われるような紛い物ではない、本ツ、物！ 故
にして特殊、異質であることはむしろステータス！！ その彼に僕
は一つの称号なを送ろう」

「長くなることだけは間違いありませんね。あ、お茶淹れましょ
うか」

「『暴君』と」

Another eye end

……やっぱり一日経つてると相当修復されてるわね。

心の中で溜め息を吐いて、壁や一部の天井が損壊した校舎を歩く。
現在の時刻は夜の十一時。夜独特の澄んだ空気や人のいない鉄筋
の建物は小さな音でもよく響かせるもので、普通に歩いてるだけで
もコツコツとよく靴音が響く。学園の警備システムというのは基本
侵入者対策であり、校舎の中は職員室といった特別な場所以外は手
薄とはいえ、物音がすれば警備員が見に来るのが当然の事。

しかし、あたしは誰憚ることなく優雅と言える足取りで校舎を闊
歩する。何故なら、今ここにはあたししかないのだから。

あたしが構築したこの『霧』の中には。

あたしがここに来たのは、昨日周防君が戦った痕跡を調べるため。
『霧』が散開すれば人体も物質も修復される、とは言うがそのまま
すぐにその場で『霧』を展開すれば損壊も負傷も復活するのだから。
このことから『霧』内部はあくまで元の世界のコピーであり、修

復された訳じゃない　という説が現時点でメインの説だけど、それじゃ人体が修復される理屈が説明出来ない。また、過去に霧が強制的に解除された際、損壊も負傷も修復されず元の世界に現れた、という事例があるらしい。ミスティと同様、霧にもまだまだ説明されてない部分が多いってことね。

閑話休題。

本当なら昨日周防君が出てきたすぐ後に現場検証をしたかったのだけど、『ブリッジ』の動きが思った以上に早く、この時間になってようやく監視が手薄になったのよね。霧の中の損壊は時間経過とともに修復されていく。当然、一日も経ってれば事件直後とは随分様子が変わってるわ。

それに相手の情報も入ってきてないし。周防君のミスティにしても、姿形とクラスしかインデックスでも閲覧できないし。これじゃどこまでが周防君でどこまでが相手側からの被害なのかもわかりやしないわ。どうやら周防君が関わる件に関して、ブリッジはとことん情報開示を渋るらしいわね。同盟を結んでいるはずの『教会』にも彼を招聘した目的が明かされていないし。……その辺りを探るのもあたしの仕事だけど。

……周防君を連れてきた上で霧を展開すれば負傷具合くらいわかったかしら。

意地の悪いことを考えて、そろそろか、と見切りをつけた時、

「　また霧が現れてたから何力と思えば……」

届いた呟き声にはっと振り返る。キラリと反射光が目に入り、反射的に腕で顔を庇う。

ドスリ、左腕に熱く鋭い痛み。

「くうっ」

呻き声を歯を食いしばって抑え、腕に刺さった刃物を引っこ抜く。本来なら出血量が増すためやっっちゃいけないことだけど、現状だとそのままにしていた方が後で面倒なことになる、と考えたからだ。

視線を戻し、この傷をつけた相手を睨む。

「オネーサマの敵を探してイる時に、余計ナ時間を取らせテ……」
メイド服に仮面、ね。どこの仮装大会よ。似たような格好を見慣
れてるから驚きはしないけどね。

「しかモ、コーリを探ル気ダツたな？ 不遜な輩メ」

その両手にすつ、とあたしの腕に刺さつたのと同じ凶器が現れる。
両手合わせて計六本。

「少々痛い目を見るがイイ！」

投擲 想定よりずつと速い！

ぐつと身を屈めて回避。仮面メイドがさらに刃物を取り出して突
つ込んでくる。

「おとなシク制裁を受け口！」

「お断りよ！」

突き出された刃物を、右手で持ったままだった刃物で受ける。け
ど速度と体重の分押し負け、腕ごと弾かれた。

振り上げた刃物が、振り下ろされ、

次の瞬間、メイドの姿が視界から消えた。

いや、この空間から消えた。それも違う、あたしの現在地が変
わっていた。

「……ふう、ギリギリね」

とは言いつつも特別焦りなんかはなかった。散開時間シヤウキョウが近いこと
は把握してたもの。

霧が解除された際、中の人間は基本的には霧に入った地点に戻さ
れる。だから不用意にアライエスを呼んで情報を与える真似もしな
かった。

腕から刃物を抜いたのは、元の世界に戻っても刺さつたままとい
う可能性があったから。実際、銃弾を受けた先輩が、元の世界に戻
つて傷が修復されたとき、体の中に銃弾が残っていて結局手術を受
けるはめになったというケースがある。

……とはいえ、傷が治つても刺されたことには変わりないわけで、
痛みが残ってるんだけど。

……あのメイド、「また」って言ってたわね。それに周防君を知ってるみたいな口振り……昨日のこと何か知ってるかしら。まさか現場に居たとか？

追うべきか……いえ、止めときましよう。相手のミスティも分からない状態で、不要なリスクは犯すべきじゃない。それにあんな危ないの、捕まえてもろくに話も聞けないでしょうし。

けど今度対峙するようないことがあれば、と右手に持ったままの刃物を見る。

フォークは武器じゃないって、しっかり教育してあげないといけないわね。

第四話 通り雨の教会にて

いい天気だ。

こつちに来て初めての休みだ。……昨日がそのはずだったんだが、忘れる。

宣言しよう。

「掃除だっ！」

この家の先住人の奴らは！ ろくに掃除機もかけてない！ 水周りの手入れもしてない！ 埃も落としてない！ 年の瀬の大掃除もやっっていない！

料理ほど掃除にこだわりがあるわけじゃない。しかし、この家の状態は俺の許容範囲をオーバーしている！

「つーわけで、ほら起きろ輝燐！ いつまで寝てるんだお前は！」と、輝燐の部屋のドアを開けたら枕が顔面にぶち当たった。

「るっさい！ こおりちゃんこそ寝過ぎだっ！」

……はい。目を覚ましたらお日様はてっぺんに昇ってました。だつてさ、休みの日は午前中いっぱい寝てるってのは人間として基本だろ？ ……ごめんレリ、冗談。だからそんな冷えた視線浴びせないで。キミ身体は冷たくても心は温かい子。ね？

「なんだ、まだ熱下がってないのか」

枕を放り返す。次いでレリを額に押し付けてやった。

「んー、微熱つてとこ。だるいー。……これ結構気持ちいいね。ちよーだい」

「だめ。寝過ぎじゃね？」

「けち。だからこおりちゃんには言われたくないって」

「飯は？」

返事の代わりに腹の音が返ってきた。

「わかった。お前は？」

「……………きつ」

「はいはい」

まったく、返事一つにそんな渋るなよ。まあ、第一接触がアレだったからな、わからんでもないが。

「きあ」

「急かすな」

俺はてめえらの召し使いじゃねえつつの。

ばたん

「……………あれ？」

閉ざされた扉からベッドの脇へと目を移す。

「きあ？」

その大きな瞳と視線が合う。

ボクのみステイ、プウ。

…………… ニュアンスかな？

ボク、通訳してないよね？

と、変にハイテンションになっていたみたいだが、実際言った程念入りにやった訳じゃない。生活空間をある程度、見れるくらいに片付けただけだ。具体的には家中の床を雑巾掛けしたり風呂場の力ビ取りをしたり、汚れたまま放置されていた箇所を目に付く端から片していったくらい。家具の裏とかカーペットをひっぺがすとか棚の中のものを全部引っ張り出すようなことはしていない。

掃除用具なんかは揃ってた。ほとんど使用された形跡はなかったが。調理器具なんかもそうだったが、恐らくこの部屋を用意したのは遥香さんの組織の人でちゃんと家事なんかをやる人だったのだろう、生活用品をきちんと揃えておいたのだ。今の今までその気遣いは完全に無碍にされてたわけだが。

で、一通り終えて時刻は三時。買い物ついでに散歩に出ることにした。ここに越してきて一週間、学園以外へは一人で出かけたこと

がなかった。遥香さんと一緒に出かけたのも駅前のデパートと近隣のスーパーだけ。そろそろこの辺の地理にも慣れておこうと思ったのだ。

そして、今の状況。

簡潔に述べよう。

迷った。

病み上がりのクセにカレーが食べたいとかぬかしやがった輝燐。当然要求は却下だが、ふと新しいスパイスの調査パターンを考え耽ってしまった。気付けば住宅街の真ん中に一人ぼつんと立っていたのである。考え事に嵌ると周りが見えなくなる癖、直したほうがいいんじゃないかなあ。まあ、今に始まったことじゃないしその度に同じ事考えてる気がするけど。

もう慣れた。自身をすら他人事として見下ろす事により生じる慣れ。それは恐ろしく便利で、危うい。例えどんな危機的状況に直面したとしても他人事として冷静な対応が出来ると同時に危機感の足りなさゆえ更に危険を積み重ねる事もしばしばある。と、またいつの間にか没思考に陥ってるし。

ひゆう、と冷たい風が通り過ぎる。動くものは枯れ葉が一枚風に舞うのみ。人の気配どころか猫一匹すらない。

はあ、どうしたものか。

「お前、道分かる？」

手に提げたエコバックに話しかける。こんもりと膨らんだそれもぞもぞと動き、ぴよこりとレリが顔を出す。

「僕はカーナビじゃないよ。こおりこそ、ケータイってジーピーえす？ とかつての付いてるんじゃないの？」

「そんなの、俺が使い方知ってるわけないだろ」

「つーかそれ以前に携帯忘れたし。」

ダメか。しゃーない、大体の方角は見当つくし適当に歩いてみるか。

溜め息が白く染まる。見上げた空はいつの間にか雲で覆われてい

た。

と、一滴。鼻の頭が濡れた。

それを皮切りにぼつ、ぼつと降り注ぐ水滴。

雨。

瞬く間に本降りに。

「洗濯物がッ!!」

……真っ先にこのセリフが出てくる辺りが主夫呼ばわりされる理由だろうな。ひとまずそれはおいといて。

雨脚があつという間に強くなった。雪の中傘を差さずに歩くのは好きだが、雨はただ濡れて鬱陶しいだけだ。レリもそれは同じ……って、いつの間にかバツクは空。自分だけさっさと避難しやがったアイツ。後でお仕置き決定なのはいいとして、俺もさっさと避難しないと。

と、視線を巡らせた先に引っかけたソレ。築年数からくるものか、あまりに周りの住宅街に溶け込んでしまっていて気付かなかつたが、ソレと気付けばどこか浮いているというか、特別性を感じさせるというか。

「……こういうときに進んで迎え入れてくれるもんだよな、神さまつてのは」

そう勝手に結論付けて、駆け足でその教会へと入っていった。

……ん？ げ、雨!?

こおりちゃん、確か洗濯物干してくって言ってたよね!？ 読んでた漫画をばいと放り出してベッドから

飛び出ようとしたりとここで玄関ががちやりと開く音がした。

あ、こおりちゃん帰ってきたんだ。任せよつと。

依存し始めているのには気付かない振りをして布団を被り直そうとして、

気付いた。話し声に。男の声と女の声。

「……………」
こおりちゃんなら、洗濯物があることわかってるはずだからもつとドタバタと、それこそうるさいくらいに駆け入ってきたはず。つまり、すぐそこにいるのはどこの誰とも知れない、

……………泥棒？

さつと扉に耳をそばだてた。プウには手で待機の合図を出す。この子は本当に最後の手段だ。

何か話してるようだけどよく聞こえない。でも、どこかで聞いたような声…………？ぱつと伊緒と啓吾の顔が浮かんだけどそれとは違う声だ。

と、潜めた足音がこちらへ向かっているのに気付いた。 どうする…？

人の気配が扉の前までやってきた瞬間、おもいつきり扉を開いた！
バンツ！

「ぴゃあつ！？」
扉にぶつかって女性の悲鳴が響く。ボクはそのまま廊下へと躍り出て、

「せいやあつ！」

男のほうにハイキックを叩き込んだ！

「ぐはあつ！！」

男の顔はボクの蹴りと壁の板挟みになり、そのままずりりと倒れて……………つて、アレ？

「……………遠見会長？」

気絶した男性の顔はよく知る先輩のもので、閉まる扉の陰から現れたのは顔を押しさえて蹲る杏李先輩で、ボクは蹴りの体勢のまま固まって、

その間に洗濯物は全滅していたことなどボクは知る由もなかった。

ぎいっと錆び付いた蝶番が音を立てて両開きの扉が開かれる。 —

歩踏み出すたびに木製の床が軋みを上げる。左右に並ぶ長椅子のクッションの色もすっかりくすんで……

「ボロいな」

素直な感想が呟きとなる。あと何年保つのかと心配になる程の古さだ。

しかし決して廃墟ではない。礼拝堂のどこにも蜘蛛の巣はかかっていないし、床も壁も埃が溜まっていることはない。奥の小さなステンドグラスは特にしつかり磨かれている。桜井家の住人にこの十分の一でも見習って欲しいくらいだ。

それは、偏ひとへに、

目の前で膝を着き、祈りを捧げる修道女の信仰心の賜物か。

俺が入ってきたことに彼女は気付いているのだろうか。まるで彫像のようにぴくりとも動かないその姿は熱心を通り越して必死ともいえる程。この空間に神聖さと厳かさを保つための最重要パーツ。この場の主役は奉られる神様ではなくかすず傳き祈る彼女だった。

それにしても何をそんなに祈ることがあるのか。神様がいるかいないかなんて論議する以前にどうでもいいが、考えて、行動して、実現するのは今ここに居る自分たちでしかないというのに。故に願いを捧げることも生の感謝をする必要もない。仮にこの世のこと全てが神様の意のままに起こってるとしても、だとするならその祈りという行為ですら神様の自作自演だということに気付いてないのだろうか。それとも、彼女にとっては祈るという行為そのものに意味があるのか。どれにしても俺とは縁の無い事だ。

……あえて、神様に届ける言葉があるならば。それは間違いなく願ねがいなんかではなくて。

誰にもぶつけることの出来ない、懺悔か恨み言

「ボロくて悪かったわね」

棘の籠もった声で思考は中断された。いつの間にかやら祈りを終え

た修道女がこっちを見て　否、睨んでいた。

「末端の教会まで潤沢な予算を割けるほどウチは裕福じゃないのよ、『ブリッジ』と違ってね」

その声と同年代に比べ発育の遅れた背格好。そこまでで大体ついていた目星が取り払われたフードから現れた銀髪で確定となる。

「いくら古びた教会だからって勝手に入り込んだ拳句シスターの真似なんかするのはいただけないんじゃないか、明野」

「真似じゃなくて本職でここはあたしの家よっ！」

なるほど。『教会』って本当にそのまま教会のことだったんだな。

「周防君こそ何しに来たのよ。……ああ、そっか。そっちから一日の続きをしに来るなんて、なかなか殊勝な心がけじゃない」

そう言った明野の目が凶悪に吊り上がったかと思うと、ゆらりと陽炎の扉が開きアライエスがこちらの世界に飛び出しざま帯電を始める。

「待った待った！　散歩してたら雨に降られて雨宿りに飛び込んだだけだ！　そんなお前にとってだけ都合のいい俺に何の得もない解釈をするな！」

本気で慌てるノリで制止する。全身濡れ鼠で電撃なんか喰らうのは流石にゴメンだ。

それでも獅子堂に相対する時のような本気の必死さが表れないところが俺の俺たる所以なのだが。

「……冗談よ。下手打って『ブリッジ』と溝を広げるわけにもいかないし、あんたに構ってるほど暇でもないから」

ひらひらとおざなりに手を振ると羊モドキも矛を収めた。「冗談で呼び出すか普通。」

「お前も応じるな」

「ンメエ」

「忠実な事で」

息を吐き、長椅子に腰掛けようとして、

「座らないでよ。クッションにカビが生えたら取るの面倒なんだか

ら

と止めるや否や奥の扉へ引つ込む明野。すぐに戻ってきてタオルを投げ渡された。

「助かる。正直すぐに追い出されるかと思ってた」

「ここは神の家よ。頼ってきた子らを無碍に追いつたりするはずがないじゃない」

おざなりに頷いてわしわしと濡れた髪を無造作に拭き取る。

「ただ、雨宿りとそのタオルの分くらいあたしの訊きたい事を正直に答えてくれればいいのよ」

そう言つて清廉潔白であるはずのシスターさんはまるで悪魔のような底意地の悪い笑みを浮かべて下さいました。

「……シスターってのには無償ボランティアの奉仕の精神が必要だと思う」

「まだ修行中の身だから。おお神よ、この未熟な私めを許したまえ、アーメン」

本当は似非シスターなんじゃねえのか、こいつ。

「まあいいけど、どうせ俺の事だし。ただこつちも訊きたい事いくつかあるんだけどさ」

「図々しいわね」

「お前には言われたくない。とりあえずこと俺の住んでる家との位置関係と、近場の商店街教えてくれ」

「……なに。あんた、もしかしてここに迷い込んできたワケ？」

「……………」

「正直に答えなさい。あんたにはその義務があるのよ」

「その通りですがそれが何か」

「……フツ」

鼻で笑われた。小馬鹿にされた。かと思つたら睨み付けられた。忙しい奴だな。

「本当、なんでこんな奴が『最高のオーナー』なんて呼ばれてるのかしら」

「知らん、キョウにでも聞け。そついや転校初日の朝会つたのつて

やっぱり偶然じゃないのか」

なんか今と似たようなことを呟いてたような気がする。

「……………」

「別にどうでもいいけど」

「訊きなさいよっ！ このあたしが『どうでもいい』扱いされてるのが一番ムカつくわ！」

事実どうでもいい。だって他人事だし。

「マンションからずっと尾けてたわよっ！ 『最高のオーナー』に会うのが待ちきれなかったわよっ！ 期待を裏切られた拳句遅刻しかけるとは夢にも思わなかったわよっ！！」

顔を赤くしてぜーはー息を切らしながら一気に捲し立てられた。

「まあ落ち着け」

「うっさい、慰めなんかいらないわよっ！」

少しも慰めてないが。

俺の言葉が功を奏したわけではないだろうが、すぐに呼吸が平常通りになり、表情も整う。鋭い視線が向けられる。無駄に睨みつけられる状態が俺に対する彼女のデフォルトと既に化しているのだから。

「少しは『最高のオーナー』としてのプライドとかないの？ 突然手に入ったものにしてもそう呼ばれて光栄でしょう。それに見合った行動や言動を心がけるものなんじゃないかしら」

「まったく。全然。ちつとも」

明野の瞳が大きく見開かれる。何をそんなに驚くか。

「むしろ迷惑だ。その勝手な呼ばれ方のおかげで変な事に巻き込まれそうだし。俺はレリと二人でゆっくり暮らしていけりゃいいってのに」

「……………信じられない。オーナーとなるべく育てられたあたしたち『修道騎士』にとってその称号は目標といえるもの。それなのに……………」

「んな、大袈裟な」

「大袈裟なことなんてないわよ。ミスティというのはね、あたした

ち『教会』の教えでは主から賜って『契約』するものなのよ。その契約者として『最高』であると認められるということがどれほどの名誉か、あなたにはわかんないようね」

「わからん。わかるのは、お前らがミステイとかオーナーってヤツを過大評価してるってことぐらいだ」

「別に突飛つてことはないわよ、普通に物理法則を超えた力を持つ生き物だもの」

能力で言えば、確かに人の理解を超えてるけどな。……そこを問題にしてる時点で俺と大きくズレてるんだが。

「でも周防君のは……そう、『家族』かしら」

「それは光栄だな。しかしどう考えてもそちらより俺たちの方が大多数だマジョリティと思うが」

「そうね。でも周防君のそれが異常であることも事実よ。普通は人間生活を第一に考える。ミステイを生活の基礎に置くなんてありえないわ」

「まあ、他人がどう思うかとか比べてどうかとかどうでもいいけどね」

眩しくて目を細める。窓から光が差し込んでいた。どうやら晴れたようだ。

「さて、そろそろ最初の質問に答えてくれないか？」

しかし明野は答えることなく俺に背を向けた。

「ちょっと待ってなさい、着替えてくるから」

「ついて来る気かよ」

「あら、感謝して欲しいくらいよ？ また迷ったりしないように道案内してあげようっていうんだから。親切でしょう」

恩着せがましく言ってくれるが、要するにまだ質疑応答を続けるってことね。

「元々あたしだって買い物に行くところだったしね。ちょっと集中してお祈りしてたらいつの間にかあんと話し込むことになっちゃった訳だけど」

そう言って奥の扉から出て行った。アライエスも続いて。

「……ちよつと、ね」

誰もいなくなった礼拝堂で一人呟く。とてもその程度で感じではなかったけど、本人がそう言うならそれでいいんだろ。

「いやあ、元気そうじゃないか。見事な蹴りだったよ、はっはっは」
「鼻の頭がひりひりします、うっ……」

「……………」

リビングでボクの向かいに座る二人。二人の会話は軽快なのにボクの空気だけ重いよう。

悪くない、ボクは悪くない。遥香さんから鍵預かってるからって勝手に入ってきて、驚かせようとひそひそしてたこの二人が悪いんだ。うん、ボクは悪くない。

「うむ、三強の一角に蹴り飛ばされるというのもそうそうないことだ。いい経験になったよ輝燐くん。はっはっは」

「今年に入ってからはまだいっぺんも転んでいませんでしたので久しく忘れていた痛みです。やはり私は生涯この痛みと付き合っていかなければならないのでしょうか、うっ……」

「……………」

悪くない、と思うんだけどなあ……。

「……ごめんなさい」

「うむ」

「はい」

うっっ、なんか理不尽だ……。

「……ええつと、遠見会長、大丈夫です？ 顔とか、首とか」

ちらりと見た会長の頬に貼られた湿布が痛々しい。

「うむ。まあ『異質人』の攻撃でこの程度だと思えば軽いものだ」

「……………異質、人？」

「ミステイを呼び出せるような人間は、やはり普通でない者揃いだ」

という事だよ」

会長はあつけらんかんに言うが、ボクとしては突然出てきた新単語に關してもう少し説明が欲しい。と、それを汲み取ってくれたのか杏季先輩が補足してくれた。

「たまにいますですよ、オーナーの中にそういう特別な能力や才能の持ち主が。そういう人間がオーナーとなるのか、或いはオーナーだからこそそういった能力を所有されるのかは分かりませんが」

「生まれた当時から発達した思考能力、人体構造上有り得ないほどの運動能力、数は少ないがいわゆる超能力。キミ自身だって十分に覚えがあるだろう？」

「それは……」

言われるまでもない。プウが現れた頃から突然に生じた攻撃力の
みが高くなるという現象。それは年上の男の子がパンチ一発で伸びたり、殴った壁に亀裂が入ったりっていう程で。全力を出したら、
プニヤモの光球より破壊力があつた。プウのことと併せて悩みの種
だつたつけ。優姫先輩に空手部に入れられなかったらボク本格的に
グレてたかもしれない。

「優姫先輩の方が全然強いから、最近じゃ気にしなくなつてたんだけどなあ」

「まつたくだな。『異質人』に勝てる普通の人間など、ある意味彼女が一番異質だよ」

「人によつて能力の強さはバラつきがありますけど、キリンさんは強い方なんじゃないでしょうか。多分コモンくらいまでなら勝てると思いますよ、^{アイツ}技無しという条件付きですけど」

でもそういう能力なら頭が良くなる方がよかつたかも。きっと学校の試験とか余裕なんだろうなあ。……目の前の二人はそれっぽい。すぐく。勉強だけじゃなく会長としての手腕も優秀だし。

「こおりちゃんのアレも『異質』ですよね？」

そのボクの全力の正拳突きを喰らつてピンピンしてたのは記憶に新しい。

「……アレというのがどれを指してるのかは判らないが、間違いなく『異質人』だとも。それと、『異質』ではなく『異質性』と言うのが正確だよ」

「それをご指摘になるのは、少々細かすぎるのではないですか？」

「そんなことはない。『異質な能力を持つ人間』と『異質性のある人間』というのではまるで違うからね。自分の存在そのものに異質なものがあると認めたらがない人間が、能力のみが異質なのだと主張する意味を込めて、自らを『異質持ち』と呼んでるようにね。そのくせ己が普通の人間より上等だという思考を持つものが多いから困ったものだよ」

……牧野と対峙した夕暮れを思い出す。あの男はミステイを手に入れた自分を特別な人間と言い、しかしこおりちゃんはそれをバツサリと切り捨てた。その程度でただの人間ってことが変わることはない、って。

……こおりちゃんから見れば、『異質人』もただの人間に過ぎないんだろうか。

「……こおりちゃんって、こういう知識どのくらいあるんでしょうか？」

「さあねえ。ある面では僕らより遥かに豊富かもしれないし、ある面ではまったく知らないのかもしれないし。こればかりは当人の頭の中を覗きでもしない限り判りはしないな」

そうなんだけどさあ。どうにも釈然としないところへ、

「キリンさん。先程からこーりんのことばかりお訊きになっておられませんか？」

「ふえっ？」

杏李先輩から思いがけない横槍が飛んできちゃった。

「キリンさんも『異質人』なのですから、ご自分の力についてご質問なされるものと思っていましたが……。あらあら、キリンさんとこーりんの関係はどこまで進んだのでしょうか？」

「ぶっ!?!? どこまでって、何もありませんよっ!?!?!」

「いえいえ、隠さなくてもいいのですよ。夕暮れの学校で殴り殴られて友情を深め合い、共通の敵と助け合い戦って、そして一つ屋根の下の男女となれば、もう後は爛れた生活に雪崩れ込むだけじゃないですか」

「「じゃないですか」じゃないですつ！ ボクとこおりちゃんの間には杏李先輩が妄想するような関係は微塵たりとも存在しませんっ！ 家族、義理の兄妹！ わかります!？」

「ああ 背徳の関係というものですね、わかります」
「全っ然わかってないじゃないですかあつ!！」

テーブルをバンバンと叩いて抗議するボクをくすくす微笑う杏李先輩。この人は、これさえなきやいい先輩なのに。ああ、熱ぶり返しそう。

「ていうか……そもそも二人とも何しに来たんですか」

順当に考えればボクのお見舞いなんだろうケド、とてもそうとは思えない。ていうかボクを悪化させに来たんじゃないのかこの人たち。

「ふむ、そうだな。今日の本題を思えば今こおりちゃんがいないのはむしろ幸運だったな」

「?」

続きを促そうとしたところで、

ぴんぽーん

とドアチャイムが鳴った。

「……今度は誰だろ」

二人に断りを入れて玄関に出る。ドアを開けると、

「……え?」

意外な人がそこにいた。

第五話 これはデートですか？ いいえ、メイドじゃありません

駅前の開発、発展につれて昔ながらの商店街というものはどんどん寂れていくものかといえは案外そういうわけではなく。

「いらつしゃい心ちゃん。お？ なんだい、男連れかい？ こりやウチの息子が泣くねえ」

「馬鹿な事言わないで下さいよおじさん。それより今日のおすすめなにかしら？」

「おう、今日は脂ののつたいい」

「秋刀魚を二 いや、三尾。刺身でもいけそうだ」

「……兄ちゃん、いい目してるね」

代金と交換に魚の入ったビニール袋を受け取り魚屋を後にする。

「……主夫ね」

明野がなんともいえない視線を向けてくる。修道服から着替えて出てきた明野はいつもの髪型に使い古しと見えるコート、ロシア人が着けるような帽子を被っていた。そして首から提げた十字架のネックレス。

「今さら注目しなくても。普段から学校で着けてるわよ」

「そうだったか。意識すると目に付くが、あまり前面に押し出している感じはしないな。ていうか学園で宗教関係の話題出たこともないよな？」

「あら、あたしが普段どんな言動してるかなんて覚えてるワケ？」

「いや、まったく全然意識の端に留めたこともないな」

「予想通りだけどそれはそれでム力つくわね。これでも誰もが注目する美少女優等生で通ってるっていうのに」

「体型はお子様だけだな」

ピキリ

あ、地雷踏んだな。思った瞬間右爪先に明野の全体重がかけられた。

「もういっぺん言ったら死ぬわよ、あんた」

「御意」

フンと鼻を鳴らして足がどかさされる。さすがに痛かった。つーかこういう陰険なやり口は優等生としてどうなんだ。

「話が逸れたわね。日本人って宗教意識が薄いじゃない。普段から神の教えがうんたらかんたら言ってる敬遠されかねないでしょ」

まあ、そうかも。少なくとも俺なら「宗教の勧誘なら間に合ってますんで」とか言ってソツコーで距離を取るだろう。

しかし明野からそんなイメージはない。それはここの商店街の人たちが明野へ寄せる親しみからも明らかだ。

駅前が若者たちの遊び場ならこの商店街は主婦たちの憩いの場と棲み分けが出来ているらしい。ちようど時刻は主婦たちが夕飯の買い物に出る頃、通りかかる年配の女性たちが口々に明野へ話しかけている。話の内容は隣に男を連れていくことへの勘繰りみたいだが、まあ知ったこつちゃない。要するに明野は学校だけでなく近所でも人気者って事だ。単に美人はお得って事かもしれないが。

雑貨店で買い物籠に牛乳を放り込む。

「……それより、周防君は一体どこでウチの教えを受けたのかしら？」

「あん？」

何を言ってるのかこのチビツ子は。そんなわけの分からない宗教なんかに関わったことなんていっぺんたりともないっての。

「唱えてたでしょうが、あんた。『教会』の“送り唄”を」

あ、卵が安い。

「ああ、あれか。昔会ったオーナーに教えて貰ったんだよ」

？我が傍らの姿を瞳に刻め、下す裁きを教えよう、そして死する汝に祝福を与えよう？

これは魔法の呪文だ。ある一つの誓約の元にオーナーとミステイ間の『ある力』を引き上げる。まあ自己暗示以上の効果があるとは思ってないけど。して、その誓約だが、

「この唄って要するに「お前を殺す」って宣言なのよね。あんだ、あの時あたしかアライエスを殺す気だったでしょう」

「自業自得」

殺られる前に殺れはこの世の基本原則です。自分の命を守るために無関係な人間の命を差し出す屑になりたくはないが、逆に言えばそうならない限りは敵性に対し容赦や情けが介在する余地無しである。一度決めたら迷わない。ん、でもここで砂糖や塩、小麦粉まで片っ端から買い込むのは迷い処かも。

「まったく、誰よこの危険人物に洗礼施した馬鹿は」

「名前なんて教えてくれなかったし、訊かれる事もなかった。結局、最初から最後まで『先生』と『少年』て呼び合ってたし。てか洗礼って何さ。そんなの受けた記憶はさっぱりないんだけど」

彼女は自分の名前だけじゃなく『ミスティ』や『オーナー』といった固有名詞、組織図なんかを一切口にしなかった。今思えば『先生』は俺をこちら側の世界に踏み込ませる気はなかったんだろう。ミスティに関して教えて貰った事は多いが、それは自分の力の制御や責任を学ばせる意味合いが大きかったと思う。

そういう人だから洗礼なんてある意味縛り付ける行為をするはずがないのである。ところが明野はこれに反発を示した。

「そんな訳ないでしょう。ちゃんとした洗礼も受けずにこの唄の効果が現れるわけないんだから」

「と言われても。俺は『先生』が使ってるのを真似してるだけっほいし」

「ちょ、それでその人何も言わなかったワケ!？」

「『好きにすればいいんじゃない？』みたいなカンジだった」

もちろん生命いのちを奪うということの重さがしつかり刻み込まれてる事を確認して出た言葉だったとは思っけど。生命なんてこの手に持った豆腐みたいに脆いんだから。

「ちよつと………いったいどこのお天気騎士よ、そいつ。教えなさい。一度文句つけてやらなきゃ気が済まないわ」

「だから名前聞いてないんだって」

「それでも特徴とか風貌とか分かるでしょ」

「女。年上。ガイジン」

「……これ以上あたしを怒らせないほうが身の為よ、周防君」

「痛い嫌い」

そうは言われてももう五年近く前、それも一週間程度の事だ。細かい印象なんてすっかりばやけている。それでも会えば彼女と分かる確信はあるが。

「えーと、じゃあミスティは？ もっとも、同じミスティのオーナーもさらにいるから決定打にはならないでしょうけど」

「んー、犬っぽい。レリと同じ同調融合型古代種^{ミンクロシフト エンシェント}」

だからこそ俺にいろいろ教える事が出来たという訳だが。

どさりと重たい籠をレジに出す。結局結構買い込んだな。

ん？ なんか明野が固まってるが、まあいいや。

支払いを終える。商品を詰め込む。店を出ようとす。

「ど、どうということよおっ！」

「どわっ」

^{リリース} 急に硬直から開放された明野が般若めいた形相で掴み掛かってきた。たたらを踏み、外に押し出される。買い物客とぶつかりそうになったが、向こうが避けてくれて助かった。

「なんで、なんであなたがアウレリア様を知ってるのよ！」

「知らんがな、誰だよそれ」

「あんたが言ったんでしょが、金髪金眼、白磁のような透き通る肌の見目麗しくも勇猛果敢な凛々しい御方って！」

言っただけ。つーかさっきまでボロクソに貶してただろ、こいつ。しかし不味い。どう考えても注目を浴びまくってる。とりあえずこいつを鎮めないで。

「まあ落ち着け。折角築き上げてきた優雅な優等生のイメージが台無しだぞ」

「うるさい！ あんたはあたしの訊いた事に黙って答えりゃいい

のよー!!」

「それは言葉として矛盾してると思う。自分の発言を省みれるくらいには頭を冷やすべきだと思わないか？」

「少なくともあんたの腐った脳みそよりまともなものを考えられる自信はあるわよ!!」

うん、彼女曰く腐っているらしい脳みそでも理解した。俺が何言っても火に油にしかならんようです。

選択肢 A：自然鎮火を待つ。

選択肢 B：強制終了させる。

さて、どちらがこの場をより面倒無く治められるんだろうなあとしエイクされる頭で秤に掛け始めた所、

「心。それに周防。邪魔」

第三者の声でぴたりと止まった。その仲裁者の方に首を向けると、割烹着メイドがいた。

「……………」

目を逸らす。

擦る。

もう一度同じ方を向く。

割烹着メイド。

どうやら幻ではなかったらしい。

割烹着なのに家政婦でなくメイドとはこれ如何に。しかしイメーシが無粋な理屈を飛び越えて「これはメイドだ」と訴えかけるのだ。この服のデザイナーは余程メイドにこだわりがあるのか、それとも割烹着の新たな境地を目指したのか。

……かなりどうでもいい考察だった。どうやらまだ脳が処理しきれしていないらしい。つい最近も奇怪なメイドを見た気がするが、あの時は状況も普通じゃなかったしなあ。

「真砂」

しかも明野の知り合いらしい。ある意味納得。

つまり、係わり合いにならない方がいいって事だ。

「じゃあ俺はこれで」

襟元を掴んだ手を解く。しかしその手が返しざま俺の手首を掴む。どうやら逃がしてくれる気はさらさら無いらしい。とにかく、人の目からはさっさと逃れたかった。

「それでは少々お待ち下さいませ」

定番の文句とともに割烹着メイドが去っていく。

「コスプレ仲間じゃなかったんだな」

「だから本職だっつってんでしょ」

甘味処「おゝとり」。商店街の中でも比較的新しい店舗の中に俺たちはそそくさと逃げ込んだ。店には買い物帰りの主婦たちの姿だけでなく俺たちと同年代の姿も多い。この商店街の活気が保たれている一因は間違いなくこの店にありそうだった。

「で？ 一体どんな因果が働いてあんとアウレリア様が出会ってるのよ」

さっそく明野が話題を蒸し返す。

「因果って、んな大袈裟な」

明野の目がぎろりと吊り上がる。はあ、なんで沸点がこんな低いんだこいつは。

「あんたはわかんないの！？ あんとあのアウレリア様が会ってるってことの重大さが！？」

「あの、と言われても」

「アウレリア」ペトラルカ」

不毛な会話が続きそうだった所へ再び第三者の 割烹着メイドの声割り込んだ。

「『教会』所属の修道騎士。古代種ミスティ・ウォンを従える『教会』最高最強のオーナー。しかし現在世界各地を一人飛び回っており、偶に各地の教会へ報告が入る以外の足跡は知れない。そして

」

ばつが悪そうにしている明野をちらりと見る。

「心の目標で憧れ。でしょう」

「……悪かったわね、お店で騒いで」

「いい。でも次は追い出す」

「……なんでそんな世界の裏事情知ってるんだ、このメイドさん」

「ウェイトレス」

そう訂正した以外は何も喋らない。まあ別にいいけど。

「鳳真砂。そりゃこの娘もオーナーだもの、『ブリッジ』所属のね。つて、あんたたち二人とも生徒会所属でしょうが」

「な！？ ちよつと待った、うちの学園ってバイト禁止だろ！？」

これは何だ、鼻唄か！？ それともキョウのヤツ、こつメイドいう趣味なのか！？」

「家業の手伝い」

「食いつくとこおかしいわよあんた……」

揃って白い目で見られた。

「話戻すわよ。あんたの身柄はね、この鳴海市を離れてからずっとどこの組織も手を出さないよう牽制しあってきたの。そんなあんたとあたしたち『教会』の誇る修道騎士筆頭が邂逅していた。しかも『教会』はそんな報告受けていない。ここに何らかの意図や因果を考えずにいられると思う？」

「さあ。他人の思惑なんて興味無い。俺と『先生』が出会って、色々な事を教わって、そして別れた。それ以上でもそれ以下でもないよ」

「しいて言うなら。」

「おそらく今でも俺の最も信頼する人間は彼女なんだろう。」

「お待たせしました」

「コトシ」

目の前に湯飲みとアイスが置かれる。いつの間にか割烹着メイド鳳が注文の品を取りにいなくなっていたらしい。

「ん」

「ずず、と緑茶を一口　美味しい。そしてこの味は、ああなるほど。」

「本業が淹れてたのか。そりゃ美味いはずだ」

生徒会室で飲んでるのと同じ味　でもない。

「いや、いつものより雑味が無くなってる……か？」

「わかるのか」

鳳が目を見開いてこちらを見る。

「ん……まあ、微妙な違いだけど」

「これは父が淹れたものだ。私はまだ甘い」

ぐ、と握り拳に力を入れる鳳。まあ、俺としても美味しい茶が飲める分には大歓迎だ。

にしても明野の中では『先生』のイメージがかなり美化されてるみたいだな。確かに容姿は彼女の言ったとおりだが、高笑いしながら銃を撃ちまくるような人だぞ、あの人は。勇猛果敢？　凜々しい？　豪快っていうんだあれは。

「……ん？　あ、そうか」

で、思い出した。なんだ、そういう事だったのか。

じゃあもう一つの方は目の前の奴に訊いてみるか。

「なあ明野、これ何か分かるか？」

アイスを食いつつテーブルの上に取り出したのは昨日遙香さんから送られてきたPDA。……これも美味しいね、うん。

「……ただのユグドラシル・インデックスじゃない」

明野の反応からするに特に珍しいものではないみたいだ。

「ただの、と言われても俺は知らないんだが」

「オーナーの組織は『ブリッジ』側と『レオンハルト』側で二分されるのが今の世の仕組みなんだけど、どうしてその二組織が中心になってるか知ってる？」

首を振る。『レオンハルト』というのは初耳だが文脈から考えて

『ブリッジ』の対立組織だろう。

「というか、そもそもなんでその二つの組織は対立してるんだ？」

「そこからのね、まあいいわ。ミステイの商業利用に関しての方

針の違いよ。『ブリッジ』が保護派で『レオンハルト』が推進派ね」
「……だったら俺は『レオンハルト』派だな。金銭を伴わない技術が発達するわけがない。つーか、その組織って資金面どうなってるんだ？ 民営の企業なら、どっちだって利益出さなきゃやってけないだろ」

「周防君の考えてる保護っていうのは、「商業として利用しない」ってことでしょ？ それは私たち『教会』の考え方ね」

「だから貧乏なのか？」

「……『ブリッジ』にしても『レオンハルト』にしてもミスティの能力そのものを商業利用することに異存はないわ。さっき周防君が言ったとおり、技術発展のためには必要という考えね」

あ、流した。

「違いはね、「ミスティそのもの」を商品として扱うか否か、よ。

顧客として多いのはやっぱり軍事関係なんだけど、オーナーごと派遣するなら人件費を捻出する必要があるわね？ けどミスティだけなら食事代すら必要ない」

「……そんな人工オーナーなんて作る意味あるのか？」

「？ 意味なら今言ったじゃないの」

「そうじゃなくて、そんなあつさりやられる雑魚未満を量産する意味……メリットがどこにあるんだって言うてんの」

「あんたこそ何言ってるの？ 軍事に出すレベルなら少なくともレギュラー以上に決まってるじゃない。十分生物兵器として機能するレベルよ」

「だからそうじゃなく……あー、もういい」

まあ、大多数にとって不都合なければそれでいいんだろ。もしそんな人工モノで構成された部隊と対面したら、五分以内で壊滅させる確信あるけど。武器化だけで。

そんな馬鹿よりは『ブリッジ』派だな。とはいえ、どちらかに付く気はさらさらないけど。今は『ブリッジ』に保護されているという立場なワケだが、だからといって素直に従う義理なんてない。そ

れ以前に「保護」する気なんてないんだろーし。

「なんかこつちが釈然としないんだけど……。まあ、しばらくは軍にオーナーが続々配備される、なんて状況にはならないでしょうね。『ブリッジ』が抑えてるから」

「？ それは人工モノに限らず？」

「ええ。ミスティの軍事利用はまだ禁止する、というのが『ブリッジ』の方針よ」

「どうしてだ？」

「ミスティという存在が未だ公にされていないというのがその答えね。早過ぎる、そう考えてるのよ『ブリッジ』は」

「……しばらくは水面下での様子見、ってことか」

「とはいえ『ブリッジ』にだって実働部隊がある以上、完全に抑制できる立場ではないよな。ある程度の実験部隊は組織されてる、くらいに考えておくべきか。」

「……で、ようやく本題に戻れるわね。ミスティに関する情報量が圧倒的に違うのよ、その二組織は。こちらの世界に現れたミスティ全てを記録する装置。それをその二組織だけが所有している。しかも世界のどこの誰がどんなミスティと契約しているかもわかってるっていうんだから」

なるほど。下手に対立しても自分の手駒は相手に筒抜けというところか。

「その装置の名前がユグドラシル・インデックス。これはその末端の端末ってワケ。もっとも、情報開示レベルは各人によって異なってるわけだけど」

「で、ウンともスンともいわないんだけど、これ」

「ちよつと貸してみなさい」

と、許可を出す前に取り上げられ、いろいろいじった結果、

「充電しなさい、馬鹿」

という言葉とともに投げ返されました。基本中の基本ですね、はい。

にしても意外と親切だな、こいつ。訊いた事にはこちらが理解しやすいよう答えてくれてる。そういえばキヨウも面倒見がいいと言ってたっけ。

……ん？

その明野が一点を見つめている。いや、睨んでるのか？

視線の先を追う。鳳がいた。テーブル席の前で何やら話しているようだ。

「困ってる」

そうなのか。表情の変化は無いが俺より明らかに付き合いの長い明野が言うならそうなんだろう。しつこいナンパにでも遭っているのか。

がたりと立ち上がる音がした。すらりと優雅な足取り、しかし何故かずんずんという効果音が似合って仕方が無い。

そして鳳の隣に立つ事数秒後。

今度は明野が目に分かるほど狼狽えた。

ちらりと店内を見回す。誰かが助け舟を出しそうな素振りはない。仕方ないか。

「どうした？」

とテーブル席の相手がよく見える位置まで近づけば状況は明らかだった。

外人。多分英語圏内ではない。

「何しに来たのよ」

無駄に睨まれた。

「~~~~~」

「多分ロシア語。話せるか」

「話せるわけない」

「だと思っていた。期待はしていない」

結構辛辣だな、この割烹着メイド。

「~~~~~」

「どっつする心」

「どうするも、あたしたちじゃどうしようもないし」

「地図」

「……はい？」

二人の顔がこちらを向く。

「地図持ってきて霧学の場所教えてやれ」

それだけ告げて席に戻る。一拍遅れて半信半疑で地図を取りに行く鳳と俺に詰め寄ってくる明野。

「……言葉、解るの？」

「そう訊かれたら解らないとしか答えられない」

「……出鱈目言ったワケ？」

「いや、そんな事実はまったく」

あ、戻ってきた。

「ちよつと、あんまりいい加減なこと言ってるると本当に」

明野の言葉が止まる。件のテーブル席の方を見ると鳳と（多分）ロシア人がぶんぶん握手していた。そのままメモ用紙片手に店を出て行くロシア人。

「……」

「そろそろ出るか」

「あ、うん」

言われるがままついてくる明野。レジには鳳が出た。

「お代はいらない。私が奢る」

「……なんで？」

「さっきのお礼」

「……勝手にすれば」

ただし他人事として。仮にこれで問題が生じたとしても絶対に責任を取る気は無い。それが俺の他者への最低限度介入ラインだ。

身勝手だな。それでも放っておけなかった。他の誰かが解決してくれるのならそれで良かったが生憎あの場の誰も動かなかったから俺しか解決できなかったから。何も出来なければ、あるいは断られれば何の未練も無く見捨てていた。……捨て犬を拾って、親に「飼

「つてもいいか」と訊いて、OKならそれでよし、駄目なら元の場所に戻してくる。捨て犬があいつらで子供が俺。勝手だな。輝燐が「お人好し」とか言ってたがまったくの的外れだ。

店を出るともついい時刻。そろそろマンションまで案内してもらおうと明野へ振り向くと、

「周防君」

明野は真剣だった。

「あたしと戦って。全力で」
けど。

「お前はさ、蟻が潰れないよう大岩を乗せることが出来ると思う？」
それは、俺の唯一の他者への責任。

自らの力の管理。

「よしんば、万が一何らかの偶然でお前は生き残れたとしよう。岩つてのは球状でも平らでもないからな。潰されずに済む隙間に偶然いたんだ。けど周りはそうはいかない」

「……『白い死神』」

かつて鳴海市で起きた『異常気象』の俗称。その正体は俺たちの暴走。

「珍しいことじゃないわよ。最初に扉を開く際強い感情が引き金になるのはよくあるケース。結果傷害事件、更には人を殺してしまう事だってある。周防君のそれも似たようなものよ」

明らかに規模は桁違いだけだな。

「初期暴走時とは違う。今は霧についての知識がある。霧を喚べばそんな心配をする必要は無い。……なんて思ってるわけじゃないだろ？ 『先生』について詳しいんなら知ってるんじゃないのか？」

古代種の特性くらい」

古代種。己が姿を武器に変え、人工的シフトで太古の姿を取り戻す。その力はいずれも強力。

しかしここで一つの疑問。そのような強大な種族が現在何故卑小な姿でわずかに残るのみなのか？

古代種が古代種となった理由。それは

「霧を分解する」

「そつだ。向こうの世界において霧の持つ役割はこちらでいう食料、薬、大気　ミスティたちが生きていくのに必須のものだ。しかし古代種はそれを分解してしまふ。力が強いものほどより顕著に。だから強いものほど早く周囲の霧を失い死んでいく。最後に残ったのは霧に影響を及ぼさないほど弱体化したものだ」

そして当然、この作用はオーナーが召喚した霧にも適用される。

「レギュラー一体分くらい『成る』だけで消し飛ぶ。当然の帰結ながら古代種のオーナーである俺は霧を喚ぶ事が出来ない。つまり」

「もういいわよ」

明野が気の抜けた溜め息を吐いた。

「もういいわ。戦つてあんたを調べるつていうのは諦める。もともと『最強のミスティ』に勝てないのはわかりきつてたし、あたし個人として確かめたいのはあんたに『最高のオーナー』と呼ばれる資質が本当にあるのかつて事だから」

んっ、と伸びをする。

「それにしてもさすがアウレリア様。ただ振るえる力を説明するだけでなくちゃんと成り立ちから教えていらつしやる。力の意味を知るといふのはとても大事な事なものね」

「……………」

こつそりと息を吐く。

もし、今仮に。これは『先生』から学んだことじゃなくて。

レリーフに教えてもらったつて言つたら。

『検閲』を破れると言つたら。

彼女はどつという反応を示すだろつ？

そんな他人事が珍しくも頭を過ぎつた。

第六話 今度こそコスプレです

帰ったら、玄関に大量の靴が並んでいた。

……まあ、輝燐が何人友達を家に連れ込もうがあいつの勝手なんだが、晩飯の準備は二人分＋ しかしていない。今から追加されてもどうしようもないからな。

リビングのドアを開いた。

「お帰り、こおりちゃん」

「お邪魔しているよ」

「お帰りなさいませ、こーりん」

「おかえりー」

「邪魔しとるでー」

「遅いわよ、周防」

「……………」

キョウに杏李先輩、藤田と乾、獅子堂までいる。どいつもこいつも知った顔だった。

「で、何の騒ぎなんだこれは」

「違うぞ周防。騒ぎはこれから始まるのだよ」

「あっそう」

まあ勝手にやってくれ。

とりあえず買ってきたものを冷蔵庫に、つて、おい。

藤田に買い物袋を取られ、輝燐と乾にぐいぐいと部屋の中央まで押し出された。

「今日の主役がどこへ行く気よ。いいからそこに座りなさい」

「主役？」

と、気付いた。テーブルの上には既に料理が並べられていた。手で取って食べれるものがほとんどの所謂パーティー料理。その中央にケーキが1ホール。

「誰かの誕生日でもやるのか？」

「あなたが主役だつて言ったでしょう」

「あれや、あれ」

乾が指差した先。そこに掛けられた垂れ幕。

『よーこそーりん』

……………。

「藤田が書いたな」

「おーいえーす！」

「つて、まずそこかい！」

「まあ、状況は理解した」

これは、確かに俺がいなくちゃ話にならないだろう。もう準備は整つてる上、特に立ち去らなきゃいけない理由もない。

素直に席に着いた。順次皆も席に着き、一人輝燐だけが立ったままごほんとか払いした。

「えー、それでは。これより周防こおり君の歓迎会を行います。つ

きましては、乾杯の音頭を不肖、ワタクシ桜井輝燐が」

「かんぱーい！！」

藤田の音頭で全員が高々とグラスを突き出した。

「うあー！ーん！ お約束はしないつて言つてたのにー！！」

輝燐が大泣きしてグラスの中身を一口で空にした。

「……………お前、風邪はどうした」

「なに野暮言つてんのさ！ 折角のパーティーで微熱くらい気にしてらんないよ！」

……………まあ、本人がいいつて言うならいいか。どうせ明日も休みだし。

「ほら、こーりんも早くグラス空けてくださいな」

杏李先輩が横からひよっこりと顔を出す。その手には2リットルサイズのペットボトルを抱えて、つて、

「なんですか、その格好」

「うふふふふ、今日はこーりん専属のメイドさんなのです」

そう言つてひらりと一回転。またか、またメイドなのか。俺をメ

イド好きにでもしたいのか、あるいは俺をメイドにでもしたいのか。……うん、想像したらかなりキモい。

「うおおおーい！ こっち空ですメイドさーんっ！」
乾が鼻息荒くして手を振っていた。関西弁付けるのも忘れるほど興奮してやがる。

「ダメです。今日はこーりん専属だつて言っただけじゃないですか」

「いいません。勝手に飲んで勝手に食います」

「ホラこおりはんかてそう言っではるやないですかー！ 是非わいの方につ」

「ですから、これはこーりんのですつて言ってるじゃないですか」
そう言っつてペットボトルを守るようにその豊満な胸へと抱え込んだ。ただでさえ胸元が強調される衣装だつていうのに、ペットボトルに潰されてさらにエロい、いやエロいことに……

ブシャツと乾が鼻血を噴いた。

「……………はっ!？」

思わず凝視していた事に気付く。しかし目を逸らすことも出来ない俺の目の前で杏李先輩の口元が扇情的に動く。

「ねえ、こーりん？ 貴方のメイドさんに何をしたいですか？」

……………ごくり

思わず生唾を飲んだところで、

ぼん。

肩に置かれた手から全身へと急速に危険信号が駆け抜けた。

「石崎先輩、流石にそれ以上黙つて見ている事は出来んぞ」

「あはは、少しおイタが過ぎましたか」

「伊緒はもーすこしみてたかつたぞー」

「藤田っ！」

目の前で女性陣が何やら騒いでるがそちらに処理を割く程頭の中に余裕は無い。警戒発令アラートがガンガンに鳴り響いているにも関わらず身体は金縛りに遭ったかのように動いてくれない。

そして、審判の時、来る。

「こおりちゃんの、節操無しーっ!!」

また、俺の身体は宙を舞った。てか、藤田に邪魔された鬱憤まで俺にぶつけるんじゃないかねえ。

「……………」

「まだ機嫌直らないの、こおりちゃん」
「別に」

皆お行儀よくテーブルに着いていたのは最初だけ。パーティーはいつの間にか立食形式になっていた。壁にもたれかかっていた俺に静々と話しかけてきたのは輝燐。

「でも、だって口数少ないし無愛想だし」

「普段からだろ」

「でも、パーティーだし、だからいつもよりも楽しそうにしてもよさそうなのに……………」

なるほど、そういう理屈になるワケだ。

でもな、本当にさっきのはもうどうでもいいんだよ。

「お前はさ、他人のパーティーを見てて楽しいの？」

「……………」

痛々しそうな表情になる。それに対しても「ああ、悲しいのか」と感想は抱いても感情は出て来ない。

遠い他人事。

輝燐がとぼとぼと去っていく。彼女は俺の感覚改善に努めようとしているらしいが甘いのだ。会食くらいでは、むしろ感覚を引き立たせるくらいにしかない。

……………にしても、アレは凄まじかった。

輝燐のパンチではなく杏李先輩のアレ。生徒会室で何度か間近に寄られてももう軽く流せるからとつくに慣れたと思ってたが、今日のは破壊力が段違いだった。恐るべし、巨乳。

「あまりふしだらな事考えると今度は私が殴るわよ、周防」

「うわっ、獅子堂！……先輩」

「呼び捨てでいいわよ、同い年なんでしょう。思えば石崎先輩にだけ敬語なのは彼女だけが年上だからだったのね」

「そう言っただけの隣に並ぶ獅子堂。」

「……どこから？」

「あなたの幼馴染み。周りに余計な気を遣われると疲れるから隠してるって」

「そういう事になってるのか。「気を遣わせたくないから」じゃなく「疲れるから」って辺り俺の台詞っぽさが滲み出てる。」

「キョウに何聞かされた」

「天才とか、神童とか。彼、あなたのこと随分崇拜してるみたいよ」「その割に扱いが荒いがな。話十分の一に聞いとけよ」

「大丈夫よ。人の心が読めるなんて与太話信じる方がどうかしてるわ」

「俺はときどき皆が俺の心を読んでるんじゃないかと思う」

「周防が顔に出易いだけよ」

「そんなに出てるか。」

「今、周防は『そんなに顔に出てるか』と思った」

「やめてくれ、気が滅入る」

「でも。」

顔に出るのは全部どうでもいい他人事だ。

レリについて追求されたところで手掛かり一つ浮かべない。

「……ありがとう、周防。正直、あなたはこうした会を開いても参加しないかと思ってたから」

「参加しない理由がなかっただけ。今ここにいただけと思ったほうがいいよ」

「……別にいい。ただそれを皆には言うな」

もう輝燐には言ったようなもんだけど。それに「いい」って言う割には口調が乱暴になったし。こいつも俺並に分かり易いよな。

「俺には副会長殿が参加してる事の方が不思議なんだが」

「あら、今日は副会長として来たんじゃないわ。ミス研新入部員を歓迎に来たのよ」

「……………ん？」

イマ、コノヒトハナントオツシヤイマシタカ？

「えー、俺は間違ってもミス研に入った覚えはないとまず強調しておきますがその前に、何故貴女がミス研の新入部員を歓迎するのでしょうか？」

「何言ってるの。私がミス研部員だからに決まってるでしょう」

「……………獅子堂が壊れた！」

「失礼な事をぬかすな！」

くそう、この場は不意打ちが多すぎるぜ。

「人がどの部に入ろうが勝手だろう！ 余計な詮索をするな、いいな！！」

完全に同意。

「それはおいといて、入部届けとか出してないし。藤田が勝手に言ってるだけだ」

「……………私のほうから藤田に注意しておこう。もっとも、素直に聞くとは思えないが」

鬼の副会長を無視か。馬鹿か大物だな。そう呼ばれる奴って大抵馬鹿だが。

「ところで料理の方はどう？ 私と藤田でつくったんだけど」

「ん？ そうなのか？」
てつきり買ってきたものだと思ってた。だから何も言わなかったんだけど。

そうか、それなら言わせてもらおう。

「平均三十点。ついさっき飲んできた美味い茶を台無しにされた気分。人を祝うならこの倍は腕を磨け」

うん。周り中から「空気読め」って視線を感じるな。

「忠告は受け取ろう。しかし言葉は選べ。不必要な恨みで背中から

刺されたいなら話は別だが」

そう言い残して離れていく獅子堂。月のない夜道には気を付けよう。

カクシゴト。

二つの隠し事。

レリーフ。大勢の一つになることで一人だけの隠し事ではなくなった。

もう一つ。誰にも知られてはならない。

隠し通せ。化け物であっても、人でありたいなら。

認めるな。化け物であっても、人でありたいなら。

誰にもだ。

そう 『誰』にも。

第七話 霧学捕り物帳

「ねえ、こおりちゃん」

成人の日を挟んで翌々日、ゆつくり休んで快復し、一緒に登校していた輝燐が話しかけてきた。割と不機嫌に。

「キミはどうやったなら朝自分で起きてくれるのかな？」

「無理だな」

「即答すりゃいってもんじゃないよ！」

朝からテンション高いなあ、こいつ。

「苦労してんだよ、ボク！ 殴っても蹴っても一向に起きないし！
そんだけ朝から運動してたらそりゃテンション高くもなるよ！」
だから人の心を読むなって。

「おまけに朝ごはんは手抜きだし！ なにあの目玉焼き！？ レンジでチンするだけなんて！ ジャムは手作りでおいしいけどさ！」

「……朝起きられないのも朝の味覚が馬鹿になってるのも体質。自分の意思じゃどうしようもありません。夕飯の残り物で我慢しろ。でなきゃ自分で作れ」

「無理だよ」

「即答すりゃいってもんじゃなしらしいぞ」

「……言ってて情けなくならないのかしら？ あなたたち」

呆れ声に振り向いた。目の前にはロシア帽。視線を下げると銀色の髪が。

「……今、チビとか小さいとかちっこいとか考えなかったかしら？」

「被害妄想」

当たってるけど。そして足を踏むな。

「まあいいわ。おはよう、桜井さん。ついでに周防君」

「おはよう、明野さん」

「おはよう」

「で、何？ さっきから聞いてれば朝起きれないだの料理出来ない

だの、そんなの努力すればどうにか出来る事じゃない」

「……明野さんは朝のあの惨状を知らないからそんな事が言えるんだよ。あの目覚まし時計の合奏はもう公害だよ」

「そうなのか」

「こおりちゃん他人事のように言わない！」

「いや、俺寝てるからわからんし」

「習慣になれば難しいことじゃないわよ。あたしなんて四時には起きてるんだから」

未知の生物がここにいます。

「……なんでそんな時間に起きるの？」

「いろいろやる必要があるからよ。礼拝堂の掃除や朝のお祈りとかね」

「礼拝堂？ お祈り？ ……ああ、明野さんって教会の人なんだっけ」

俺は日曜に知ったばかりだがそれは周知の事実だったらしい。そういうえば学園じゃ有名人だっけこいつ。

「あれ？ そういえば明野さんっていつももっと早く登校してるよね？ どうして今日はこんな時間なの？」

「……別に気にすることじゃないわ」

ん？ 明野がちらりとこちらに視線を向けたが、まあいいか。

ブロロロロ

後ろから車の音がして脇に寄る。……なんだあれ。黒塗りのリムジンって、実在の乗り物だったのか。その存在だけでも異様なのに、更に異様なのはそれを誰も気に留めていないということだ。まるで特別大した事ではないというように。

と、リムジンがすぐ前で止まった。そして一人の女性を降ろしてリムジンは走り去っていった。

「おはよう、桜井、周防。明野も一緒なのね」

「……獅子堂？」

「おはようございます、優姫先輩」

「おはようございます」

二人が挨拶を返す中、俺はぼかんと呆けてしまっていた。

「何を朝から呆けているの。眠気が取れていないのなら冷水で顔を洗いなさい」

「いや、あれを初めて見たら呆けもしますって」

「いつもの事だからすっかり慣れきってたけど、これが正しい反応よね」

何に対して呆れているかも分からない周囲を他所に、俺の中では一つの結論が出来上がっていた。

「……ヤクザの跡取りか」

「ウチは真つ当な企業だっ！」

「馬鹿なツ!？」

「周防が私の事をどう見ているか、よく分かった。今日の生徒会活動は楽しみにしてるといい」

今日こそは全力で逃げ切らないと命がないらしい。

「……獅子堂財閥。ニュースで聞いた事ないの？」

「世相には疎くてな」

「というかテレビをあまり見ない。」

「実家が遠くて。入寮してるんだけど週末は実家に帰るのよ」

「そして休み明けの朝はリムジンでご登校のお嬢様が見れる、と」

「……あまりそういう言い方をして欲しくはないわね」

「というか何でそんなお嬢様がこんな辺鄙な学園に通っているのか。」

「そつえば明野、会長から話は伺ってると思うけれど」

「その話ならもう直接お断りしました」

「そう。私も貴方なら任せられると思ったのだけど」

「……何の話ですか？」

輝燐が見えない話能耐え切れず割り込んだ。

「明野に次期生徒会長を打診しているって話よ」

「へー。……って、まだ半年以上先の話じゃないですか!？」

「でも半年経とうが現一年生の顔ぶれが変わるわけじゃないし。今のうちから有能な人間に声をかけておこうって」

「その評価は嬉しいですけど、あたしはその役職にふさわしい人間じゃないですから」

謙遜ではなく事実だろう。能力的には問題ないかもしれないが、生徒会入りするって事は『ブリッジ』の下働きをするって事だからな。まあ、俺みたいに無視ぶっちぎってる奴もいるけど。……もしかすると俺だけ？ まあいいけど。

「まあ、桜井の言う通りまだ半年あるから。心変わりしたらいつでも言ってくれていいわよ」

明野は無理に否定することはしなかった。とはいえそれは認めたといいことではないだろうけど。

そのまま四人で校門をくぐり、玄関で獅子堂と別れた。登校中、やたら注目されてたのは気のせいだろうか。

「新しいセンセは若い女やぞー！」

教室に飛び込んできた乾は開口一番にそう告げた。

沸き立つ男子。それを白い目で見える女子。例外は約三名、他人事の俺とあははと笑っている藤田、それにきよんとしている輝燐。

「？　なんでこんな半端な時期に新しい先生が来るの？」

「そりやお前、前の教師が辞めたからだろ。なんてったっけ」

「牧センなー」

「ああ……」

輝燐が複雑な表情を浮かべる。あの状況、あの場では敵と割り切れても、いざ日常に戻ればいろいろな感情が溢れてくるものだ。この反応が普通だろう。

俺としては予想していた範囲の事ではない。むしろあんな事件を起こした上でまだこの学園に在籍していたなら学園の無警戒さと教師の厚顔無恥さに胆を潰していたところだ。

「嫌いやなかつたんやけどな、あのセンス。堅物やけどそれなりにおもろかつたし」

「そーかあ？ 伊緒はニガテだったけどな、うらがドロドロっぽくて」

「……………」

藤田の言い回しはよくわからないが、俺にはどちらの評価が正しいか判別する事は出来ない。それは同じ場にいた期間の短さもあるし、そもそも相手の深い人格など気にかけるはずもない他人なのだからわかるはずもなかった。それはその教師だけに限った事じゃない。目の前にいる藤田や乾、俺を家族と言う輝燐や遥香さんだってそうだ。遠く隔てた、あるいは区切りの向こうに見える他人事。俺自身の事すらそうで、例外は唯一レリの家族だけ。この話を聞いても全く動揺なんてない。今までの転校と同じだ。俺が出て行ったか、向こうが出て行ったかの違いに過ぎない。何にしても他人事だ。

「……………それにしても若い女性っただけではしゃいじやって。美人だと決まったわけじゃないのにさ」

輝燐は答えの出ない感情を一先ず引っ込めて、今の流れに乗ることにしたらしい。

「夢を壊すようなことを言うなー！」

「そうだ、こうして騒げる内が華なんだー！」

そうだそうだとヒートアップする男子ども。女子達の視線の温度が更に下がる。

「まったく。あたし以上の美人なんてそうそう現れやしないってのに」

こっちはこっちですごい自信だな、チビツ子。

と、乾がフッフッフと不敵な笑いをこぼす。

「心配するんやない、皆の衆。このわいの嗅覚が訴えとる……………新任教師は美人やと！」

結論から言うと、確かに美人だった。

「あー、今日からこのクラスの担任になった松沢昇だ。教科は現国。たまに体育も任せられるかもしれん。よろしく」

ただし、それはちゃんと身なりを整えれば、の話だ。

服装は上下のジャージ。長い髪は適当に纏めただけでくせつ毛もそのまま。垂れた目元の下にはクマが出来ている。大きな欠伸を手で隠すこともしない。自堕落な大人の見本だった。

男子どもの視線が殺意を伴って乾へ集中する。いやん、と身を縮める乾。ぬか喜びと期待外れの代価は相当大きそうだった。

「えーと、桜井輝燐と周防こおり。いるかあ？」

と、名前を呼ばれて顔を上げた。斜め前の席でも同じような反応

「一限終わったら職員室来てくれ。以上、HRホームルーム終わり」

パンパンと出席簿を打ち鳴らして教室を出て行く。ひよっこりとこちらに首を伸ばす輝燐。

「何だと思う、こおりちゃん？」

「さあ」

まあ、この二人の共通項といえば……

「おーう、こっちこっち」

二人揃って職員室に入ると松沢教諭がぶらぶらと手を振った。椅子にだらしなく腰掛け口には煙草を吹かしたままで。獅子堂が見たら一瞬でキレそうだ。

「いやあね、なんか生徒会の副会長？ ってのにいきなりタメ口で注意されちまった。まったく、生徒会つてのはいつの時代もイイ子ちゃん揃いで嫌いやなるねえ」

すでにキレていた。つーか、それは教師側からすると喜ばしいことのはずではなかるうか。

「つつても何？ あーれーは、只者じゃないね。アタシも喧嘩慣れしてる方だけどき、格が違うわ。アレが筆頭じゃ三強にもなるか。つーかあんなのがあと二人もいるのが驚き」

「獅子堂の話しに呼んだんなら、帰っていいですか」

「おいおい、何生き急いでるんだい若者。焦らずゆっくりしていきな。吸うかい？ 吸ったら指導室行きだけどさ」

「戻ります」

「だーっ、キレんな！ 若い奴つてのは本当キレやすいよな！」

そう言っでぐりぐりと煙草を灰皿に押し付ける。

「二人だけで生活してて困ったことかないか？」

この二人のセットで思いつく用件っていうとそれくらいか。

「いや、別に。けど、教師が私生活まで気にかける必要ないでしょう」

それとも不純異性交遊とか勘繰ってるのか。そんな熱心さとは対岸の岸っぼいが。

「遥香の奴からお前らの事頼まれてるからだよ」

「遥香さん？」

「知り合いなんですか？」

「昔からの腐れ縁兼同僚だよ」

そう言いながら新しい煙草を取り出して火を点けた。

「もしかして……オーナー？」

輝燐が小声で訊く。教諭は首を振った。

「タダの事務員だよ。まあ、ちつとばかり荒事には慣れてるけどね」
にひ、と笑い、引き出しを開けてすぐに閉じた。……なんだろう、黒光りするものが見えた気がする。教育の現場にとてもふさわしくないもの。荒事の内容については聞かないほうがよさそうだ。

「しっかし、遥香が子育てなんて聞いた日にやどうなることかと思っただけど、なんとかなるもんだねえ。昔っから仕事人間で家事なんてからつきしだった癖に。こりゃ、アタシが用意した鍋やら包丁やらはムダにならなかつたかな？ はっはっは」

豪快に笑う松沢教諭と対照的に引きつり笑う輝燐。ええ、有効活用させてもらってますよ、俺が。

「こおりに輝燐だったか。二人とも元気そうにしてたって伝えとく

よ。もつとも、携帯繋がらない事も多いからいつになるかわかんねけど」

「……えっと、松沢先生」

「あー、カタい！ 昇でいい！ 先生もいらね！」

この人、多分教師としての自覚無い。

「えーっと、じゃあ昇さん。遥香さんってどんなお仕事してるんですか？ ボク、一度も聞いたことなくて」

「あん？ んー、……アタシも知らね。今何やってんだろ？ なんかトップシークレットとかって話で情報も下りて来ねえ。ああ、そういうえば……」

教諭が吐き出した煙がぷかーっと輪になって浮かぶ。

「以前遥香が『害虫退治』とか言ってたな」

と、教諭の視線が動き、ついで煙草を揉み消す。

「そろそろ時間だな。教室戻れ」

「あ、はい」

「なんか困ったことあったら来いよ。やれることならやってやる。

避妊だきやしとけ」

「ぶっ！ だからそういう事はないんですってば！！ なんで皆そういう事言うの！？」

「そーゆー反応が見たいからに決まってるじゃん、けけけ。っ

と、こおり、お前はもちよっとだけ残れ」

「？ はあ」

「……ッ、じゃ、先行くね！」

輝燐が一足先に職員室を出て行く。教諭はぼりぼりと頭を掻いて、
「実はさ、遥香にはアンタの方を特によく見といて欲しいっつわれ
てただけど……ゴメン、無理だわ」

ふーっと息を吐き、頭を揺らすように首を振る。

「アンタの瞳、怖いよ。昔の遥香みたい。自分を特別な人間だと思
ってる奴の瞳 じゃない。特別な人間の瞳だ」

昼休み。屋上で一人肉まんを頬張る。生徒会に追われてるわけではない。ただの気分だ。

そうして、少し考える。

特別な人間、か。

先週の事を思い出す。あの男はオーナーになって自分は特別な人間になったと思っていた。思い込んでいた。

そう、それはただの思い込み。ミステイを喚べても普通の人間であることに変わりはない。オーナーになっただけで資質や器が変わりはしない。仮にあの男が手に入れたミステイが最強の名を冠していたとしても、力に溺れる事すら出来ず滅ぶ。化け物にすらなれない。

……そう。滅んでいた。ただの『人間』なら、『化け物』になんてならなかった。暴走を起こした一人のオーナー。それ止まりのはずだったのに。

自分がどれだけ異質だったのか。どれだけ異常だったのか。どれだけ特別だったのか。理解出来なければ耐えられず、『別物』になんてならなかったのに。

『化け物』ですらない、『別物』に。

受け容れられるという事自体を受け容れられない。

「……何を考えてるんだ、俺は？」

少し、自分でも意味がわからない思考に嵌っていた気がする。起きながら夢でも見てたのか、俺は。

ああ、でも何でだろう。少し昔のことを思い出した。

『面白い。君は『オレたち』が未だ見誤ってる事実を、その歳でも『理解』しているのだな』

……『先生』、か。間違いなく『化け物』ではない『人間』だった。なのに。

『よろしい、ならば『化け物』を飼いならしてみろというのはどうだい？ なあに、難しくはないさ。君は既に『化け物』と『人間』

は同列の『存在』だと『理解』しているんだから。それに、『人間』
というのはね、脆い生き物ではあるが 決して弱い生き物ではな
いのだよ』

その言葉を他人事として処理しなかったのは、彼女がまさにその
『人間の強さ』を体現しているようだ。

『先生』。俺は貴女に憧れています。貴女のような『人間』で在り
たい。

……俺も明野の事は言えないな。まったく。

紙袋の中に手を突っ込む。手が底に着いてがさりと音がした。

……あれ？

紙袋の中を漁る。覗き込む。空っぽ。いつの間に全部食べたっけ。
顔を上げる。

輝燐。両手に肉まんを掴んでもふもふと。

「……おい」

手を伸ばす。届く前に二つとも口へ放り込んでむしゃむしゃごく
ん。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまじゃねえ。」

「油断大敵だよこおりちゃん。考え事しながらごはん食べてるから
そうなるんだよ」

「お前の今日の夕飯は卵かけご飯のみ」

「ちよっ!?! ふ、ふふん。いいもん、こおりちゃんのごはん強奪
してやるから」

「俺の今日の夕飯も卵かけご飯」

「敵に大打撃を与えるためなら自軍の損害を気にしない人だ!」

「選べ。たかだが売店の肉まんを買いなおしてくるか、卵かけご飯
か」

「こっつ、このオニごおり!」

「あと一分」

「行ってまいります、サー!」

鉄扉の閉まる音とともに輝燐の姿が校舎へ消えた。フェンスへ寄りかかる。

ジャンジャジャーン

「……………」

着信音の変更ってどうやるんだろうと考えながら電話に出た。

『やあこおりちゃん』

「お前か俺の携帯の着信音いじったのは」

『昨日否携帯電話になってる際にちょこつとね。ああ、ちなみにパスワード設定になってるから変えられないよ』

「今すぐ変える」

『それより今どこにいるんだい』

それより変えろ、と返そうとして留まる。口振りこそいつも通りだが何やら急ぎの様子を感じられたのは幼馴染み故か。

「屋上。それが何」

『下着ドロが出た』

「……………は？」

『ウチの制服を着て潜入していたらしい。見覚えのない生徒を不審に思った優姫クンが職質したそうだ』

「はあ。そりゃ相手が悪い。つかそんな報告わざわざ入れんな」

獅子堂が見つけたって時点で「捕まえた」と同意じゃねーか。

『ところがどっこい、ただ今校内を逃走中だ』

「……………何故に？」

『優姫クンも年頃の女子ということだよ。逃げる際に、女性物の下着や体操服をばら撒いたらしい。それらの回収を優先したそうだ』

「……………やっぱり俺は必要ないと思うぞ？」

そこまでされて怒り狂った獅子堂が逃がすはずがない。

『相手が一人ならな』

「……………複数犯かよ」

『一人は確実に捕まえるだろうが、バラバラに逃げられてはもう一人を逃がす可能性がある。しかし、犯人は学園生の格好をしている。』

紛れられては顔を知っている優姫くん以外見つけるのは難しい』

「それを俺に探せ、と」

『出来るだろう？』

はあ、と溜め息。あの女子寮の件からそうだろうとは思ってたが、やっぱり俺の“アレ”に気付いてたか。まあ、子供の頃は控えてもいなかったし、バレてても不思議はない。

プチツと携帯を切る。こんなことで「制限」を解く気にならないんだけどなあ。

しかし、逃がしたときの獅子堂の怒りの矛先が向く場所を想像すると……。

己の身を守るため、屋上を後にした。

職員、生徒会役員、そして有志の面々がどたばたと校内を駆け巡る。なんでも学園内に入り込んだ下着ドロが見つかったらしい。

……女子寮に続いて学園まで。セキュリティどうなってんのかしら。霧を喚ばれた時点で結局は無効化されるといつても逆に言えばセキュリティが働かなければ霧無しで潜り込まれる危険性があるということでしょうに。

……あるいはセキュリティの詳細が洩れていた？ 下調べの上で行われた、計画的犯行ということかしら。捕まえればわかることだけれど。

あたしの出る幕ではない。身体能力が高いことは戦闘能力の高さじゃない。せいぜい簡単な護身術を習った程度だ。こういう場面で役に立つのは獅子堂先輩や……桜井さん。

異常攻撃力“Attack”の『異質持ち』。彼女だけじゃない。優秀なオーナーというのは大抵『異質持ち』だ。

……やめましょう。もう何度も考えたことよ。

思考を切り替えようとした、その時、

ドンッ

「おっと」

前から歩いてきた生徒と肩がぶつかった。

「悪いな」

「いえ、あたしも上の空だったもの、気にしないで」

ちらと見る。ガタイのいい見覚えのない男子。……上級生かしら？
通り過ぎるのを視線で追って、

「おーい、明野」

呼びかけられた声に、苦虫を噛み潰したような表情で視線を正面に戻した。

周防君がこちらにすたすたと歩いてくる。

「珍しいじゃない、周防君のほうから呼び止めるなんて。何の用よ」

「いや、特にお前に用はないんだけど」

口の端がピクツと跳ねた。次の言葉を口に出す、その前に周防君がすつと指を差す。

「それ、下着ドロ」

「……………」

「えっ」

バツと振り返ったとき、男子制服の下着ドロは窓から飛び降りていた！

ここ三階よ！ と窓に駆け寄り下を覗くと、男は見事に着地していた。……力の使いどころ間違ってるわ、絶対に。

それよりどうする、ここから出来ることは、と視野を広くして

「……………え？」

三階下の地面。下着ドロの対面。

周防君が既にそこにいた。

正体を看破された瞬間、下着ドロの意識が向くのは窓か、
窓みぎに向いた瞬間、傍の窓を開いた。

飛び降りたのは、男と同時だった。

着地と同時に“Ripple”再展開。

目の前の男は驚愕により停止中。
再起動。逃走を再開。
接触まで残り五秒。
痛いのが嫌いなものになあ。

地面へと降り立った周防こおりは、突進してきた男にあっさり吹っ飛ばされた。当たり前前よね、あれだけの体格差、正面衝突して押し負けるのがどっちなんて決まってる。

こうして派手な登場をした割に周防君の出番はあっという間に終了、下着ドロは逃走を続け、場内大ブーイングの嵐……って、なるかと思われたんだけど。

周防君の反対側。そこに下着ドロの男が大の字に倒れていた。立ち上がるうとして、よろめき尻餅をつく。

皆は何が起こったか分からないって顔してるけど、あたしは見えた。二人がぶつかる瞬間、周防君が男の顎に一撃、カウンターをお見舞いしてたのを。

そして、先に立ち上がったのは周防君だった。ダメージなど微塵も受けた様子なく、平然と。冷静に。ただ男を見下し続けている。

男が立ち上がった。逃走から戦意へ切り替わる。

「警告する。次は容赦しない」

男が両手を上げた。戦意は継続。嘘か。

警告無視と判断。戦闘続行。

平常の歩幅で敵へ接近。行動意識を右腕に確認。

降参の意を示したはずの男が右腕を思い切り振り回してアップパー
気味に殴りつける！

が、周防君は軽くかわしたただけでなくその肩に腕を絡め、足を払い倒れこむように男を正面から地面に叩きつけた！ 更に背中を取って右腕を極めたまま後頭部に掌底を打ち込み地面に打ち付ける！

「ぐあああああ！」

男がみつともなく悲鳴を上げた。

「強い……」

誰かの口から洩れ出た言葉が耳に入る。

これは……。

もしかして……。

四人目……？

呟きがざわめきとなる中、あたしは周防君が男の腕を解放しても未だその場から目を離せずにいた。

だからか、気付いた。男の右腕が不自然に曲がっていることに。

まさか……折ったの？ さっきの悲鳴は……まさか！？

「容赦しないって言っただろう、この五流芸人」

男に背を向ける。

男の戦意が再び増加する。敵意と憎悪も。やれやれ、それだけの根性があるならもっと他にやれることがあるだろうに。

振り向いた。伸びきった左肘へ足裏で蹴りを叩き込む、その行動に移る刹那、

すぐ背後に凶悪なまでの存在感を捉えた。

馬鹿なッ！

向けられる戦意。作為的？ 行動意識は 読めない！？

咄嗟にしゃがみ込み、回し蹴り気味に足払いをかける。

しかしそれを軽くかわした気配の主は俺の身体を跳び越え、男の側頭部に飛び蹴りを見舞った。

完全に意識を立つ一撃。放ったのは誰もが知る生徒会副会長・獅子堂優姫。

「……………」

“Ripple” 終了。

「……で、なんで俺を攻撃しようとしたの」

「……鋭いのね。いつもの鈍さが嘘みたいよ」

「答えなよ」

「……あのままだと、あなたがどこまでやるかわからなかったから。意識を私に向けさせるのが一番だと思った」

「作為的と感じたのはそれが原因か。」

「……いつから見てた？」

「貴方が押さえ込んだところ」

「もう一人は？」

「雑木林の中で捕まえたわ。気絶させた後は先生に任せて戻ってきたの」

雑木林から校舎まで数分で往復かよ。つくづく人間離れしてるな。何より、それまで一度も“Ripple”に掛からなかったなんて。

「折る瞬間、一瞬も躊躇わなかったわね」

「決めてたから。悪い？」

「悪くはない。むしろ敬意すら覚える。しかし、危険だ」

「まあ、なんでもいいけど」

他人からどう思われようが知ったことではない。

「……生徒会に入れて正解だったな。しっかり躡けてやろう」

「ん？ なんか言った？」

「なんでもないわ。それより、コレどうしましょうか」

「警察に引き渡しゃ万事解決だろ」

気絶した男をつま先でつつく。しかし獅子堂はそうじゃないといわんばかりに首を振る。

「……さつきから聞こえてるでしょう、このコール」

……なんか面倒なことになりそうだから気付かないふりしてたつてのに。まあ、流石に無理があると分かってたけどさ。

校舎をちらりと見上げる。いつの間にやら窓からこちらを見下ろす大勢のギャララーども。

周防！ 獅子堂！ 周防！ 獅子堂！ 周防！ 獅子堂！
学園中に響かんばかりに俺と獅子堂の名前が連呼されてた。頭を
痛そうに押さえる獅子堂。

「……何コレ」

「……対戦カード希望、ってとこかしらね」

「何ソレ」

「お祭り好きってことよ、うちのガッコ」

「教師は」

「あの通り」

指差す先でジャージ姿の新任教師が煽っていた。

「いつもはだいたい生徒会が止めに入ってお開き、って感じになる
んだけど……」

当事者は二人とも生徒会役員。俺たち自身の言葉じゃ弱いつてこ
とだろう。しかも一人は副会長、下の立場の者が止めに入ったとし
ても收拾はつくまい。キョウや杏李先輩は……むしろ煽るほうだな
「なんにしても、無駄に殴りあう義理はないな。痛い嫌いだし」
「少しは空気読みましょう。ここで私たちから解散なんてしたら大
顰蹙ひんしゅくよ。……とはいえ、流されるまま喧嘩けんかし始めるなんていうのは
私もゴメンだけど」

個人的には顰蹙ひんしゅく買おうが構いやしないんだけど。

「昼休みが終わるまで待つとか」

「その前に乱入者が出そうね。私はともかくあなたって未知数だか
ら」

その言葉が終わるが早いか二階からボクシンググローブを着けた
男が飛び降りた。

「……………」

展開。馬鹿馬鹿しいので感情分析無視。

「シッ！」

繰り出された右ストレートを左手甲で払いざまの右掌底。カウ
ンターで男はひっくり返った。

終了。展開するまでもなく相打ちでも倒せたけど痛いのだし。

「払うタイミングもポイントも的確」

解説いらぬ。野次馬沸き立つな。

「まあでも、お前の相手より楽そうだ」

「……いや、私が闘ろう。無駄に怪我人が増えそうだ」

……今なんと仰いました、この人。

「……俺は怪我してもいいと？」

「……」

無言で眼鏡を外す獅子堂。何？ 割れたら危険だからとか？ ま

さか眼鏡を外したら本気モードとかって設定はありませんよね？

「……ごめんなさい、周防さん」

何やら呟くと同時に構える。場が一転、静寂に包まれ

ジャンジャジャン

「……」

とても場違いな音が響いた。携帯を取り出す。……輝燐か。

「……もしもし」

『じっ、ごおりちゃん、いまどいお』

「……とりあえず鼻をかめ」

電話の向こうからちーんって音がした。

「……校舎裏にいるけど」

「肉まん買ってきたよ、一分で戻ってきたよ、なんで屋上にいないの〜」

「……ああ」

忘れてた。

『夕飯、卵かけご飯オンリーじゃないよね？ ね？ ね？』

「あー、はいはい。わかったからそこ動くな。肉まん抱えて待つて
る」

そんな会話をしながら自然に、あくまで自然に校舎入り口から中へ。ぼかんとするその他大勢。次の瞬間。

ブーイングの大合唱が、さらに獅子堂の一喝で沈静された。

第八話 その少年の異質性

状況の終了を見て取り生徒たちが解散してもあたしはまだ窓辺に張り付いたまま一人思考の海に潜っていた。

「Resist」の『異質持ち』、か……」

三階から飛び降りて平然としてたり、明らかに体格差のある相手に突き飛ばされても怪我した様子もない理由をそう結論付ける。あの夕暮れ、遠見先輩のミスティ、テレムスが放った熱線をまともに受けて負傷した様子もなかったことから予想が着いていた事だけ。あたしの時だって、本気ではなかったにせよアライエスのサンダークラウドをまともに喰らってすぐに起き上がったきたし。

単なる硬化のような防御能力じゃないと推測したのは、あたしたちの電撃。打撃や熱ならともかく、電撃の効果は単に攻撃を受けた箇所の負傷に留まらず、身体の内部に浸透して影響を与える。その影響を受けた様子もなかったことから、周防君の『異質』は防ぐ力ではなく耐える力だと判断した。

耐衝撃、耐電、さらに耐熱も。異常耐久力、それが周防君の『異質』。

そして、これは周防君にふさわしい『異質』だ。

ミスティの戦闘において、オーナーはパートナーであると同時に足枷だ。ミスティの動きを制限するために狙われたり、同時に範囲攻撃へ巻き込まれたり、あるいは余波だけで死んでしまうかもしれない。

その対策としてオーナーには『ミストクローク』という能力がある。簡単に言えば霧による防護服だ。結界として張る霧と同様、内と外を遮断している。もつとも、完全な空間遮断というわけではないし、高レベルミスティにはあまり効果がないけれど。でも何も備えが無いより遥かにマシ。

だが例によって周防君は霧を喚べない。しかも、ミスティと融合

する周防君は従来のオーナーと違い前線に立つて戦う立場となる。身の守りが無くてはいくら命があつたつて足りはしない。

「なるほど……ね。まあ、『最高のオーナー』なんて言われてる位だし、『異質持ち』であることくらい予測の範疇だけだ」

「有用ではあるが特異な力ではない、といったところかな？」

……慌てて振り向くような真似はしない。余裕を持ってターン。

「まあそんなところですよ、遠見先輩。確かに驚きましたけど、『Resist』の『異質持ち』は何も彼一人ではありませんから。それにあの高さから飛び降りて着地するというのも人体構造的には可能です。現に下着泥棒もやってみせていましたか？」

とはいえ、着地時の衝撃でなかなか立ち上がらなかつたのに対し、周防君は平然とした様子で足をプラプラと振っていたけど。……限界値も従来の“Resist”より上のようね。

「うむ、全面的に同意しよう。流石は学年にも数人いる知能強化型『異質人』の生徒を制して主席を維持し続ける明野女史だ」

「それほどでもありませんよ」

向こうは嫌味を言ったつもりだろうが笑みすら浮かべて返してやる。

あたしが特別な人間でないことはあたしが一番よく知っている。だから、遠見先輩の言ったことはあたしにとつてはむしろ勲章なのだ。

……つい最近味わつた敗北を思い浮かべるとこめかみに血管が浮き上がりそうになるけど。

「しかし、そんな君でも一つ間違いがある。そう、根本的な間違いが」

「？」

言われて前述を反芻してみるが間違いなんて見当たらない。いったい何が間違いだつていうのかしら？

「周防が持つ『異質性』を、君は本当に把握していると言えるのかい？」

「……は？」

言葉の意味が一瞬理解出来なかった。数瞬して思考が追いつく。確かにそれは根本的で、大前提を覆すことだけ……

「何言ってるんですか。あれは明らかに“Resist”でしょう。それともまさか周防君は特別な訓練を受けて肉体改造しているとも言ってますか」

「いやいや、“Resist”は間違いなく彼の『異質性』だろう。だが」

ふと、遠見先輩は言葉を止め、

「むづ。もう昼休みも終わってしまうな。どうする？ 生憎生徒会長の放課後は忙しいのでね、続けるなら」

「授業は休みます。場所はどうします？ 生徒会室ですか？」

即決した。これは周防こおりについて重要な情報だ。『教会』の『修道騎士』としても、明野心個人としても。

「思い切りがいいのは好ましいが、知らないぞ」

あたしに背中を向け歩き出す。

「結果、何を覗き込む事になったとしても」

「……カッコつけるのは構いませんけど、その為だけに生徒会室と逆方向に歩き出すのは馬鹿ナルシスト扱いされても文句は言えないと思いませんか？」

「よんきよーかくてーおめでとこーりん！」

「……は？」

教室に入った途端、たくさんの視線に囲まれ、藤田に不可解な言葉を告げられた。

「え、うそ、なんでこおりちゃんが！？」

一緒に教室に戻ってきた輝燐がいち早く反応した。信じられないといった様子で。

「どうして！？ こおりちゃんたいしたことないよ！？ ホラ！」

ドゴツ

「ぐほっ」

鳩尾におもいっきり拳を叩き込まれた。

「お前……」

「あ、ごめん、驚いたから、つい」

つい、で人を殴るな。

「でもホラ、見ての通りでしょ」

「いやあ……だって輝燐はんやし」

「キリンはすげーな！ マツチヨぼこったこーりんのつくあうと！」

……状況がまったくわからん。知りたくはないが。

「輝燐はんが何言いはっても条件はクリアしとるし。何より副会長

殿のお墨付きや」

「ちよーせんしゃ、姫！」

「……って、まさかこおりちゃん、優姫先輩と闘ったの!？」

「有り得ない」

間違ってもあいつとだけは戦う日が来て欲しくない。

「だいたいな、ふつー輝燐はんにとてっばら殴られたら十分は悶絶

しとるで。わいは今こおりはんがこうして立つとるだけでスゴイと

思っわ」

周りがうんうんと頷く。……話の内容はちんぷんかんぷんだが、

周りが勝手に盛り上がってる分にはどうでもいいや。

「ねえ周防くんって桜井さんみたいに格闘技とかやったりしてたの

？」

と思つてたのになあ見知らぬ女子！

「……てか何の話してるかさっぱりわからないんだけど」

仕方ないからそう答える。あ、そっかー、ごめんごめんと周りか

ら一様の反応が返ってくる。

「この学園のちよつとした伝統。要するに、強い順トップ4だよ」

「ウチのガツコってさー、とにかく実力主義！ みたいなところあつ

て。成績のいい奴や部活で入賞したりするような奴はいろいろ優遇

されるわけだ」

「それとか何でも順位付けしたりね。定期テストどころか小テストまで順位発表するんだよ、信じられる!？」

「そうするうちにじゃあ一番強いのは誰だ? ってハナシになって、上位四人までは決まったけどあとは鬪るたび順位が変わって、じゃあまとめて四強って呼ぼうってことになったのがその始まりってワケだ」

「今代の四強は獅子堂先輩、石崎先輩、桜井、そしてついさっき周防が加わったばかりだな」

「石崎……って、杏李先輩も?」

意外すぎる、と思ったら乾が激昂した。

「アホぬかすな! 杏李先輩はな、始業式の日壇上へ向かう途中に転こけ、お辞儀をしてはマイクに顔をぶつけ、戻るときにもう一度転んだという伝説を残すほどのドジツ娘やぞ!? そんな乱暴なこ
と出来るわけあらへんやないか!」

乾。お前は杏李先輩を擁護したいのか貶おとしめたいのかどっちなんだ。

「あんあんじゃなくてすいすいだな」

「石崎翠すいか歌先輩。二年で杏李先輩の弟だよ」

ふーん。弟なんていたんだ。

「ところで、俺の前に四強って呼ばれてた奴が一人いるはずじゃないのか?」

正直こんな称号なんていらないので熨斗のし付けて返品してやりたいところが皆一様に苦笑して続きを話し始めた。

「……一昨年の春までは四強だったらしいんだよねえ」

「ところがだ。杏李先輩にちょっとかい出してた当時の四強の人を新入生だった翠歌先輩がのしちゃって」

おや、シスコンですか。

「で、その内輪だった他の四強の人たちが敵討ちとばかり挑んだんだけど振り返りにして」

「で、調子に乗った石崎先輩を目に余った獅子堂先輩が秒殺しちゃ

って」

「うわー。流石と言うかなんと言うか。」

「で、リターンマッチに石崎先輩は長物を用意して、かなりいい勝負になったんだけど結局獅子堂先輩の勝利」

「で、二人が新しい四強になるのは確かだったんだけど、他の人とあまりに実力が離れすぎてるでしょ？ だから結局その年は二強になっちゃって」

「ちなみにこの年から四強への加入条件に何らかの伝説を残すことというのが追加されました」

「で、今年輝燐が加わってから今までずっと三強体制だったわけだけど」

「今この時をもって、四強の復活と相成りました！」
辞退したい。ものすごく。」

「要するにな、こおりはん。なんだかんだ言うたが簡単に纏めるとやな、四強つちゆうんは厄介事が起きたらとりあえず腕っ節で片付ける連中の集まりってことや」

「あと、ときにまわしちゃいけないべすとふおーとかな！」

「……そうか。結局認識の問題である以上俺がどうこう言っても仕方ないってことか。じゃあこれ以上考えるのは止めよう、他人が何か適当なことを言ってるに過ぎないというだけのことだ。……単に諦めの境地に達しただけかもしんない。」

「おう、説明あんがと。じゃあ席に着け、もうチャイム鳴ってんだからよ」

「ばつと皆が一斉に声の方を見る。松沢教諭が教科書片手に立っていた。蜘蛛の子を散らすように席に着く面々。」

「よかったねこおりちゃん、一躍人気者だ」

輝燐がウインクしながら呟く。まあ散々変態呼ばわりしてたくせに調子いいと思うのは同意するところだが、個人的には望ましい状況じゃないな。

「ん？ おーい、優等生クンどこ行ったか聞いてないかー？」

その教師の言葉で初めて隣の空席に気付いた。
「……んー、ま、いつか。明野心、欠席、と」
それだけで何事もなく授業は進んでいった。

「よかつたのかい？」

遠見会長はあたしの前に紅茶を出すと同時にそう切り出した。

「よくなければ着いてきてません」

授業を一回サボったくらいで落ちる成績じゃない。減った勉強量はその分努力して補えばいいだけのことだもの。

紅茶をわずかに口に含む。同じ茶葉を使ってるはずなのに真砂が淹れるものとは全然味が違った。……あたしも淹れ方習おうかしら。「前置きは結構ですからさっさと本題に入ってください。でなければそれこそ無駄に授業をサボることになりますから」

「あまりせつかちなのもどうかと思うのだが、いいだろう」

そう言って会長の指定席に腰掛ける。目を瞑って長く息を吐き出し、切り出した。

「天才、神童、怪物　いわゆるそう呼ばれる存在だったのだよ、こおりちゃんは」

その呼び方で、この二人の関係がただの庇護対象者ではない事に気付いた。そういえば日曜、周防君は遠見先輩の事を『キヨウ』と通称で呼んでいなかった？

隠す理由　それはおそらくこの人が、周防君　『最高のオナー』の何か重要な秘密を知っているから！

「しかし、僕はこう思う。こおりちゃんは『暴君』であったと」

「……我侂でやりたい放題だったってこと？」

昔の話。おそらく『白い死神』以前の。

「素直ないい子だったさ。先生の言う事をよく聞き、困ってる人を助け、人の心を汲めるいい子さ」

「……どこが暴君？」

正反対じゃない。

「性格的にはね。しかし、自身の受け入れられないものには決して従わなかった。例えば授業内容とか。こおりちゃんの成績ってよかったと思うかい？」

「そりゃ……」

天才と周囲から呼ばれている人間なんだから良いと答えるのが当然のほすだけど、あたしは答えを詰まらせた。この人の含みを持つ問いの正答が順当な答えとは思えなかつたから。それを察したのか先輩はあたしの返答を促さず話を続けた。

「悪かつたんだよ。何せ、簡単な漢字の書き取りもまともに出来なかつたくらいだから。授業を投げ出すようなことはなかつたがね」

「……それで何で天才なんて呼ばれるんですか」

ニヤリと笑われて、しまったと感じた。この言葉を出させる為に誘導されたっ！

「じゃあ君は、僕らが算数の掛け算割り算を習つてる時に、一人有名大学の入試問題を解いてる子供を頭が悪いなんて言えるのかい？」

なんですって？

先程の悔しさが塗り潰されるほどの衝撃を受けた。

「一度見せてもらったことがあるが、あれは数学と物理だつたんじゃないかな。答えが合つてたかは分かるわけもなかつたが、まあ出鱈目は書いてなかつただろう。結局教師の方が匙を投げたよ、教えることがないんだから。しかしこんな勝手をすれば成績が悪くもなるだろう？ 正確には内申がな」

はははと軽快に昔話を語られるがあたしの頭はそれどころじゃなかつた。一部能力の異常発達、これは『異質持ち』のよく見られる傾向だ。

「演算能力“Operation”、これもやはり珍しい『異質性』ではないがレベルは段違いだな。“Resist”にしても、まさかレギュラークラスのFAに耐え切るほどとは予想外も」

「有り得ないっ！！」

声を荒げた。優雅な優等生の姿なんて忘れ去って。

「そんな馬鹿なことがあるわけないでしょう、『異質』が二つなんて！ 何かの間違いに決まってるわ！！」

「ほう。何故？」

「何故って、そんなのルール違反でしょう！？」

「誰がそんなルール決めたんだい？ 前例が無い事は否定の材料にならないよ。そして落ち着きたまえ、話はまだ続くのだから」

その言葉でようやく自分を取り乱していたことに気付く。グツと歯を食い縛って飛び出しそうになる感情を抑えた。

「……まだ続くって、これ以上何があるんですか」

「うむ。さっき言った通りこおりちゃんも国語の成績が特に悪くてね。しかしだ、その割に難しい言葉の意味はよく知っていたんだよ」

……特別気になるような事ではない気がするけど、こうやって話題に出る以上気に留めておきましょう。

「スポーツは運動会以外大活躍だったな。もともと、専門に習ってた子には及ばなかったがね。喧嘩も強かったな、複数相手でも負けなかった」

その辺りは今と大差ないわね。そう聞くと万能選手だけど、まだ優秀な子供という範囲で収まっているわね。あるいはガキ大将かしら。

「勝手といえば、極めつけはレリーフだな。学校にまで抱えて連れてきてたんだよ？ 僕は後にビジヨムスと同じ生物だと気付くわけだが、初めはぬいぐるみをいつも抱えてる変な子だと思ったものだ」

あつはつはと笑う先輩と対照的にあたしは呆れていた。陽炎の扉の開け方が分からなければミスティはこっちにいるしかないでしょうけど、だからってそこまでして一緒にいる必要はないでしょうに。

「……子供の頃、僕の母親が亡くなった」
話が飛んだ。

「母親とはビジヨムスの事で争いが絶えなくてね、拒絶に近い態度をとられてたかな。そんな中で死んだから正直悲しみというものも浮かばなくてね。しかし知能強化型『異質人』でそれなりに頭の良

かった僕は　ああ、その当時学校で習っていたレベルの内容は僕も楽々理解できたけど、こおりちゃんと違って器用だったから少しいい生徒くらいにカモフラージュしてたけどね　で、それが不自然であることを理解していたから悲しいフリをしたんだ。完璧だったと今でも思う。誰も不自然さを指摘する人はいなかったしね　ところが」

一度話を切って息を吐く。

「その当時はまだこおりちゃんとそれほど仲がいいわけじゃなかった。ただ、クラスで葬式に参加しただけだった。その時たまたま二人きりになる瞬間があつて。レリーフを抱えたこおりちゃんは言ったんだ」

『なんで、悲しくないのに泣いてるの？』

「……………」

押し黙る。まだ先輩が何を言いたいのかわからない。続きを待ちましょう。

「それから……………まあ、いろいろあつて僕はこおりちゃんの友達になつたわけだが、ある日のことだ。道で外国人に話しかけられた」

ん？

「何語だったかは覚えていない。しかし何語にせよ日本語しか知らない僕らには解らないという事に変わりない。だが」

ちよつと、ちよつと待って。まさか、

「こおりちゃんは彼の手を引いて、交番へ連れて行って。そして、言ったんだ」

『アサイさんって人のおうち、知りませんか？』

「……………」

『地図』

『……………はい？』

『地図持ってきて霧字の場所教えてやれ』

「その後こおりちゃんに英語の本を見せる機会があったが、読めるわけないと突っぱねられたよ。嘘ではなかったと思う。素直な子だったんだ、当時は」

『……言葉、解るの?』

『そう訊かれたら解らないとしか答えられない』

手に汗が滲んだ。異様なモノをあたしも感じ始めている。

「……先程『ルール違反』と言ったね」

先輩の傍の空間が揺らぐ。陽炎の扉からそれはぬつと顔を出し、そしてその姿全てを現した。

「テレムス。僕のミスティだ。シフト前の姿はビジヨムス」

隠すように掌に滲む汗を服で拭っていた動きが、

「こおりちゃんと話していた」
完全に凍り付いた。

「気がする」

「どっち!?!」

詰め寄った。これは、かなり重要な話。だって、それが本当ならさつきとは違う、明らかなルール違反なんだから。

オーナーが話せるのは契約したミスティだけ。それは前例が無い事は云々なんて屁理屈で納得してはいけない、絆のルール。

「分かるものか! ビジヨムスの言葉に相槌を打っていたと感じた程度だ! ビジヨムスだって僕以外の人間の言葉は理解できないのだし、君のミスティだってそうだろう!?!」

遠見先輩も珍しく興奮した面持ちで声を荒げている。そうそうこんな話を話す機会はなかっただろう、もしかして前会長の石崎先輩にだって話してないのかもしれない。そしてあたしは逆にその姿を見て落ち着きを取り戻し始めている。

「……ミスティが理解してないって事は会話してるわけじゃないって事ですよね」

冷静に意見を述べると先輩はただこくりと頷いた。

「周防君が一方的に相手の言葉を理解していると仮定して。“Language”……じゃないですね、それじゃ先輩の件が説明できないわ」

そもそも、“Language”の『異質持ち』がミステイの言葉を理解出来るならあたしたちはこんなに動揺していない。大体、一人の人間が三つもの『異質』を持っているなんて……。

「……推測に過ぎないが、一つの結論が出ている」
今までよりも重い声で、告げた。

「詳細は不明だが、おそらく読心能力系『異質性』だ」

眩暈がした。

「……本気？」

今度こそ、目の前の男の正気を疑った。全部この男の妄信が産み出した妄想であつてくれればいいと。しかし、

「この話をした『ブリッジ』の上層部が出した説だ。周防こおりは一人で三つの『異質性』を保有する人間だと」

余人の預かり知らぬ場所で、それは真実と認められていた。

「今でこそこおりちゃんは力を隠しているようだが、昔なら訊けば教えてくれたのかもしれない。思つてなかつたんだ、自分が特別な人間だとは。周りと違う人間だなどとは。ただ一人頂点を歩き、味方を惹き付け従わせ、敵を蹴散らし轢き潰し、己が意思のままに生きる者 すなわち『暴君』だとは。だから隠すのだろう、自らが化け物だと理解しながら、それでも人間を望むこおりちゃんは」

「……これは、あたしの中に渦巻く感情は、

「……これが、周防こおり」
後悔、だろうか。

「これが、『最高のオーナー』」

三つもの『異質』。溢れんばかりの才能の塊。それはまるで、何の才能も異質もないあたしを真っ向から否定するかのようだった

た。

翌日、水曜の二限目は欠伸を堪えるのに必死だ。時に睡魔との格闘にも発展しかねない。それほど退屈な時間なのだ。

何せ、それはもう子供の頃に全部覚えたことだから。

だからもう退屈で退屈で仕方ない。教科書には貰った時に一応目を通して、子供の頃と差異がないかだけは確認してそれ以降見えない。開いてはいるがポーズだけだ。

子供の頃はずっと先の勉強を一人で進めていた。結果、当時の大卒レベルの数学的知識は身に付けていると思う（それ以上の数式も理解できるだけの能力はあったが生憎文章理解のほうで行き詰った。式は解けてもそれが何を意味するのか解らない）。が、例の事件以降はしていない。異常だからだ。

そう、俺は異常だ。異常であることにずっと気付かなくて、それが普通なんだと生きていた。けど違う。

普通の人間は、脳内に高速演算装置など持ちはしない。

普通の人間は、屋上から無傷で飛び降りれない。

普通の人間は、周囲の人間の感情を読み取れない。

特に三つ目。常の状態で「制限」の対象としている、俺が“Ripple”と名付けた能力。

仮にここで“Ripple”を展開する。俺が起こした波は少なくとも両隣のクラスまで広がり、全生徒、教師から波紋となって返り俺に感情の種類、含有率、指向を伝えてくるだろう。それだけの情報量が一度に頭に入れば普通なら頭がパンクしてしまうのだろうが、幸か不幸か俺の頭はそれを処理するだけの能力を持っていた。

また、相手が自分の身体の中の部位に「動かす」という意識を向けているか汲み取ることで、次の行動、タイミングの予測が可能である。逆にどこに意識を向けてないか 死角も丸分かりなのだ。

女子寮のときもこれで人の意識が向いていない場所を探し出したのである。

……改めて獅子堂の恐ろしさを思い知る。あいつはすぐ近くまで“Ripple”にその存在を察知させず、また行動意識も読み取らせなかった。本当何者だよ。忍者か？

さらに応用編。普通この能力は相手が考えていることまでは分からないが、相手が会話という形式で伝えようとするとき、その意思が分かるのである。あのロシア人（仮）の時も、俺は相手の言葉を理解したのではなく、声という「波」に含まれる意思をこちらの波が読み取り理解したのである。翻訳した訳ではない。同じ事を文章で示されてもちんぷんかんぷんだ。ああ、だから昔は国語の授業とか嫌いだったっけ。聞けば分かるんだから。ま、今でも苦手なんだけど。

故に、俺に『検閲』は意味がない。あれはミスティからオーナーへの翻訳を阻止するものだが、そもそもこの力は翻訳する必要がないのだから。その気になれば猫や犬、レリ以外のミスティの言葉も解るし。

そして、この力は発動する類のものではない。むしろ意識的に抑えているのだ。結果、相手への感情把握力や危険察知能力が常人より鈍くなるという弊害を負っても。……いや、それは他人事視点が原因か？ ま、どっちでもいいけど。

普通の人間の枠から少々かけ離れた能力。枠というより線ラインや道と言う方が近いか。“Operation”や“Resist”は「頭がいい」や「頑丈」という線の延長にある力としてまだ誤魔化しが効く。それに、それらはいくまで俺個人の特徴として片付けられるという点が大きいと思う。

けど他者の感情を読む“Ripple”はある意味、直接的な力よりも危険視される。これが知られれば間違いなく俺は排斥の対象となる。化け物を自認し、人間を他人事とする俺ではあるが、それでも人間社会で生きていくなら自分が異物であることは隠し通さな

きやならない。

なんて、上つ面の理屈だ。実は使わない理由に全然なつてない。

排斥されようが割りとうでもいい、とか考える一面も俺にはある。簡単だ。ちよつとした意識の問題。『普通の人間』の枠から外れた、少々特別な力を多用してるとまるで自分が『特別な人間』であるみたいな、そんな勘違いを抱きそうになる。少々特別な力があるうが、それで『特別』なんてことありはしないのにな。それだけの簡単な理由だ。

……特別な人間の瞳、か。そう言ったのは二人目だ。『先生』に言われて以降抑えてきた訳だが、それでも分かる人間には分かるらしい。鏡なんかで見てもどこがどう特別なのかさっぱりわからないのだが。

まあでも、あるものはあると割り切ることも肝心だ。常用はしないが、殴られそうになつてまで抑えているほど人が出来ちゃあいない。比較的「制限」は緩めに設定してる力だ、平常時と緊急時の切り替えは柔軟にしている。

たとえば今、こんな場所とか。

……どうしてこつ毎日トラブル続きなんだ、まったく。

誰もいない教室で一人、

「時間くらい選んで欲しいわよね、まったく」

二人、溜め息がユニゾンした。

ガラリ

数学の授業中、突然教室の前のドアが開いた。当然、教室にいた誰も 当然教師も がそこに注目する。遠見会長だった。

「失礼、二年の遠見だが周防はいるかね？」

気まずさなど微塵も感じた様子なく軽快に用件を述べる。先生の睨みなんて何処吹く風だ。

こおりちゃんの席はボクの斜め後ろ。そちらに首を回すと、

あれ？　そこは空席だった。授業が始まる前は確かいたような気がするんだけど。

皆が注目した席を見て取ったのか、もともと知っていたのか、遠見先輩はこおりちゃんの不在を確認すると何やら「ふむ」と頷いた。「いないのでは仕方ない。輝燐くん、代わりに来てくれないか？」

「え、ボクですか！？　でも」

ちらりと先生の方を見る。今にも怒り出しそうな顔で、しかし何も言わなかった。

「えっと、いいんですか？　授業中なのに」

「問題無い。今の状況においてあの教師より僕の方が権限は上だからね。ちゃんと上に報告書を出しておけばお咎めは何もないさ」

「生徒会長権限です。もつとも姫さんに知られたら個人的な制裁は免れませんが」

教室を抜け出すと廊下には杏李先輩もいた。それから人目に着かない場所まで移動してやっと話が始まった。

「えっと、今の状況、って？」

「ええとですね。今この学校に霧が張られているのです。そこにこおりんは取り込まれてしまった、ということなのですよ」

弛緩していたボクの頭が急に引っ張り起こされた。

「ええっ！？　霧って、まさか」

「ご存知の通り、オーナーが召喚する霧です」

「まず『レオンハルト』　対立組織のオーナーとみて間違いないだろうな。それもピンポイントでこおりちゃん狙いだ。事情を知る職員たちが全てのクラスを確認して回ったが、生徒が減っていたのは君のクラスだけだ」

「こおりんがいなくなっても誰もお気付きになられなかったのは誤魔化しかかるからなのです。この世界から消える瞬間、或いは戻ってこられる瞬間、その方のおられた場所はどなたからも死角になっっているのですよ」

状況を説明する先輩たち。けど突然そんな事を言われてもボクの頭は着いていけてない。だって、先週起こった戦いの時と違って周りには何の変化も無い。なのに今ここで戦いが起こっているとわかれても全然ピンとこないのだ。そう話すと、

「霧を視認出来るのは向こうだけだからね」

「それでも何度か霧に出入りなされれば感覚で今この場所、或いは付近に霧が張られていると分かるようになるのですけどね」

つまり、ボクが分からないだけで今先輩たちはその感覚を感じているって事か。

「霧の規模は校舎からグラウンドを覆うくらい。結構広いな」

「強力なミステイか、複数人が相手ということですね。こーりんが本気で戦えば物の数ではないのでしょうか」

こおりちゃんのミステイ、レリーフは『最強のミステイ』と呼ばれるほど強力なミステイにシフト出来るらしい。けどこおりちゃんはその力を使わない。それは、余りにも無意味に命を奪い過ぎるから。

「こおりちゃん一人ではさすがに分が悪いか」

「！ だ、だったら、こんな所で話し込んでる場合じゃないじゃないですか！ すぐ助けに行かないと！ 生徒会ってそういう組織なんでしょう！？」

「あ……えっと、それは……霧の中に入る手段が……」

目を泳がせしどろもどろに話す杏李先輩の肩に手が置かれた。

「杏李女史、ここは嘘を教えるべき時ではないよ」

「ですけど……」

言ったきり杏李先輩は俯き口を嚙む。代わりに遠見会長が話を引き継いだ。

「霧の中に侵入する手段はある。ほぼ全てのオーナーが可能な手段だ。もつとも、それなりの訓練はいるがね」

「じゃあ」

「輝燐クン。これから僕が話すことはこおりちゃんには絶対に内緒

にしてくれ」

不吉な前置き。続く言葉は、

「僕たち生徒会は、周防こおりが襲撃されても助けに入ること認められていない。その他『ブリッジ』の属するオーナーも全て、だ」
「……………待って」

呟きと共に手が動いていた。遠見会長の胸倉を掴み上げていた。

「どういうこと。こおりちゃんを保護するためにこの学園に呼んだんじゃないかったの」

言葉は静かで。でも手は痛いほど握り締めて。多分ボクはキレている。

「すまない。だが必要なことなのだ」

「答えになってない。殴りたい？ それとも先輩レベルじゃわからないとか？ だったら上の人呼んできてよ、学園長とか」

「キリンさん」

「話したところで僕らの結論が変わりはしないよ。そして絶対に言わない」

腕が掴まれた。渾身の力で握られる。痛みで顔を顰めた。

「僕が……好きでこんな事を受け入れていると思っっているのか。あの当時、あの事件を知っているこの僕が。その上でまだ話したいなら、よかるう、話すがいい。ただしその後、如何なる事態が起きようと全ての責任を取ってくれるのだからうな」

ぎろりと睨み返される。その目は、ただ感情に任せているだけのボクを怯ませるには十分だった。

「……………」

乱暴に手を離す。むせて堰を何度かした後、遠見先輩はいつも通りに戻っていた。

「さて。キミをここへ呼んだ本題だが、今言った通り我々は動けない。しかし不測の事態に備えていつでも動ける人員は必要だと思っ
てね」

……………なんか読めてきたかも。

「輝燐クン。キミに霧の喚び方、及び霧への侵入方法を教えようと思うのだが、どうだろう？」

「やっぱり。」

「強制はしないよ。どれだけ他人には息巻いてもいざ自分に降りかかってくれば及び腰になるのは仕方の無いことさ」

「……なんだか、今までの一連の会話が全部先輩のシナリオ通りみたいなのがしてきた。」

「やるよ、やりますよっ！でも、これってそんなにすぐ出来るものなんですか？」

「なんとなく癪に障ったので杏季先輩に訊いてみる。」

「私は諸事情で喚べませんので。役立たずで申し訳ありません。どうなのですか、キョウウさん？」

「霧は感覚的にはミステイの召喚と変わらぬからすぐだろうが、侵入方法は数日かかると思うぞ」

「ダメじゃないですか！」

「戦いはもしかしたらもう始まっているかもしれないのに。」

「はっはっは。安心したまえ。気付かなかったかな？キミの後ろの空席に」

「後ろ？空席？」

「援軍ならもういるよ。今のキミよりずっと頼りになる、ね」

「軽い挑発。その誰かに軽い嫉妬を覚えさせるような言葉。」

「けど、ボクは、」

「……すぐ始めましょう」

「遠見先輩が思ったより、そして自分で思っているよりずっと深い嫉妬を抱いていた。」

「……なんでお前がいるの。この霧、お前じゃないだろ」

「周囲に漂う霧の色は朱。こいつの金の霧じゃない。」

「あら、知らない？」

真横の席に座っていた女生徒　明野が立ち上がる。と、彼女の周囲を金色の霧が薄く取り巻いているのに気付いた。

「『ミストクローク』。霧の防護服ってとこよ。これを纏えば張られた後でも霧に入り込めるの。まあ、今回はあたしも同時に霧を喚んだだけけど」

「知るわけないだろ、そんな使えもしないもん。霧については『先生』から最低限の知識を教わっただけだ」

言いつつ立ち上がる俺を、明野が身体中をチェックするように眺め回す。

「怪我はしてないようね。まあ、どっちみち先週のならもう治ってるころでしょうけど」

「……てことは、霧を張り直すと以前に受けたダメージも戻ってくるんだな？」

「あたしたちだけじゃなく建物にもね。霧が張られてない間に自動修復されるけど」

なるほど。この仕組みなら一度霧を解除して完治した後にもまた喚び直す、なんて真似は出来ないわけだ。どうやら霧を解くと傷が治るといふより、俺自身の身体も含めて元の世界に在った物と同じ形をした別のモノだと考えたほうがいいかもしれない。

二人と二匹揃って廊下に出る。窓の外にも霧が広がっていた。

「結構大きいな」

遠くまでよく見えないが、少なくともグラウンドが見えている。

「そうね。少なくともあたしと敵で二人分とはいえ、これは厄介かも」

「そついやお前も霧喚んだんだろ？　なんで朱色なんだ？」

「最初に喚んだ奴のが反映されるのよ。あまりにクラス差があれば高位のが反映されるけど。どうやらリトルクラスってことはなさそうね」

それ以前にそんな奴が刺客として送られてはこんだろ。

「しかし、戦闘前に自分の系統が知られるってリスク高くないか？」

「霧と同じ系統のミステイが強化されるのよ」

「なるほど、メリットとデメリットが表裏一体なワケだ」
ちよつとした講義を受けつつ、周囲の警戒は怠らない。

霧に取り込まれた際に一度波を広げた。敵は二人。場所は校舎内一階。遠くて行動意識まで読み取れなかったがおそらく二手に別れての挟撃。敵意は言うまでもなし。

さて、どうする？ やはりこちらから迎撃に向かうか？

「……………」

ん？ 明野？ 何やらこつちをじつと見ているが…………

「…………後ろから刺す気か」

「しないわよっ！ あんたはほんとにあたしをなんだと思ってるのっ！」

「一番ありそうだと思っただが…………。じゃあ何でお前も入ってきたんだ？」

「本気で言ってるし…………本当に刺してやるつかしら…………いいえ我慢よ心、任務に私情は捨てなさい…………」

ブツブツと独り言を漏らす明野。恨み言だらうな、随分と黒い才一ラを放出してるし。

「…………決まってるでしょう、任務よ。あんたたちの能力を見定める絶好の機会じゃない、逃す手は無いわ」

「…………それは自分からこの場所に飛び込んできたって事でいいんだな？ 俺がお前の命の心配をする必要はないんだな？」

「何言ってるの、危険なんて承知の上よ」

「そうか。俺はあるものは使う主義だからな、遠慮なく利用させてもらうぞ。ホラ、来た」

周防君が背後を指差す。何かが迫ってくる気配。けど慌てる事はない。

「アライエス！」

呼びかけとともに振り向く。雲の拡散は既に済ませてある。後は

あたしの指示一つで雷撃が

そんな余裕はあたしたちに迫りくる飛来物を確認した瞬間失われた。

岩の塊が数個。炎の弾やエネルギー光といった超常的なものではない。しかし、だからこそあたしたちには分が悪い！

「~~~~ツ、行って！」

アライエスが飛び出す。と同時にその角が電撃を纏う。

「ンメルアア！」

身体ごと角を振り、飛来する岩を砕き、発生した砂礫が体に降りかかる。

「！ 防御！」

時間差で一発、飛んできた岩に体勢を立て直す余裕がない。咄嗟にアライエスの体毛を膨張させる。

岩弾がアライエスの体に直撃した。けれど体毛が衝撃を吸収して大きなダメージにはならなかった。SAの副次能力。けど完全に無効ってわけでもないから頼りにしすぎちゃいけない。

視線は前。敵の姿が二つ。一つは人間、スキンヘッドにサングラス、黒スーツの大男。……どこのマフィアよ。似たようなものでしょうけど。

そしてその男よりさらに大きな岩の巨人。ユグドラシル・インデックサス Y・Iを開くまでもない、ポピュラーなミスティだ。

> i30244—3710<

ロックギガンド、地系剛種、レギュラークラス。

厄介な相手だ。あたしたちにとっては。

地系ミスティというのは大別して二種類に分けられる。身体が岩や粘土そのもので構成されているものと大地からエネルギーを汲み上げ技として使用するもの。このロックギガンドは見ての通り前者アーツな訳だけだ。

クラス的には問題ない。問題なのは相性なのよね。

岩の身体、岩の砲弾。その全てが電撃を通さない。サンダークラ

ウドのような普通の電撃は効果が無い。実質上、こちらの攻め手を一つ奪われた形だ。

それでも戦^やれない事はないけど……

「周防君、代わってくれないかしら」

折角二人いるんだから無理に苦手な相手と戦うことはない。そもそもあたしの目的は周防君の戦力調査なのだし。

「断る」

「……楽しそうだったってそうはいかないわよ、どうせあいつらの狙いはあんたなんだし」

ちらりと振り返った、そこに、

既に限定融合状態の周防君と対峙する人影。……あれってこの前のロシア人（仮）？

「~~~~~」

「……何て？」

「おとなしく着いて来てくれれば手荒なことはしませんって常套句」
周防君の返事は決まっていた。鎌を振り上げて、振り下ろす。刃が射出された。回転しながらロシア人へと飛んでいく。

バキンと砕いたのは、二本の刀。

ロシア人の前面に開いた陽炎の扉から現れた二本の腕。そのまま空間を広げるように腕を広げ、その身体全てが姿を現す。

四本の腕。二本の腕には刀が握られ、二本のカラクリ腕には鉄爪が装着されている。身体のサイズは人間大。頭は無く、胸の部位に両目があった。

> i 3 0 2 4 5 — 3 7 1 0 <

似たようなミスティを知ってる。けど身体が一回り大きくなって、何より腕は二本だった。おそらくシフト後の形態。

Y・Iを開いた。検索。

ジャスリン、素系刃種、グレートクラス。

グレートクラス!?

「あっちと戦いたいなら話は別だけど。勝算があるなら代わって」

いぞ」

「……あんだ、勝つ気？ ミステイの基本原則くらい知ってんでしょ」

下位クラスのみステイは上位クラスのみステイに勝てない。二対一なら可能性はあるがこの状況では望みようも無い。

「で、結局どっち？」

「……どうやら、腹を括らなきゃならないみたいね。

「……後から泣き言言っても助けないわよ」

「お互い様」

そして、あたしたちの背中では離れた。お互いの敵へ向かって。

第九話 ハーモニアス・ドライブ

Another eye, a few days ago

私立霧群学園。

その広大な敷地は小高い坂の上であり、また周囲には民家の一軒もなく校門の反対側は雑木林に囲まれている。

こうした立地条件から周辺道路の夜中の交通量は少ないため、設置されている街灯も疎らである。雲間から差し込む月明かり以外はほとんど真つ暗闇であった。

そんな学園の校門前で、二人の男性が何かを話し込んでいる。ペーライト片手に資料を覗き込み、時折ちらちらと校舎の方を流し見ている。

その資料のうち一枚、ある男性の写真が載った紙を再度見て男の一人が嘆息した。

『まさか、昼間の少年が例のターゲットだったとは……』

発せられた言葉は日本語ではなかった。その男自身も日本人ではない。外見から推測するにスラヴ系。もう一人の男の身長は180センチ前後と決して低くないが、外国人の男はそれより10センチは高かった。

『残念だったな、手柄を独り占め出来るチャンスだったものを』

もう一人の男は同じ言語で返したが、こちらは日本人である。剃り上げた頭に黒いスーツという格好からヤクザな職業を連想してしまうのは、勝手な思い込みだろうか。

『それは違う。店の中で人が消えれば流石に騒ぎになる。それにあの場所では霧の展開まで一分は掛かる。圏外へ逃げられるだけならまだしも、逆探されその場で反撃されるほうが危険だ。霧の召喚中はミステイも喚べない、その場から動けないと完全に無防備だからな』

これが学園が戦場に選ばれる理由である。ミスティの召喚と違い、霧はいつでもパツと喚び出せるというものではない。その速度は召喚主の錬度よりも空間への依存度の方が遥かに高い。一秒掛からない場所もあれば、五分要する場所だってある。

そしてこういった場所はすなわち『霧の世界』と繋がりやすい場所であり、向こうの世界の情報を抜き出す『発掘』において重要な場所ということでもある。

『店の中だとさっき自分で言っていただろう。十六そこらのガキにそこまでする度胸があるものか』

『侮るな。人間のほうも『最高』と呼ばれているんだ、どんな隠し玉があるかわからん』

禿頭の男も決して新米ではないが、経験値で言えば外国人のほうが遥かに上だった。『異質人』との戦闘経験もある彼にとって、オナーとはミスティに命令を出すだけの存在である、などと誤った認識は持っていなかった。

再び資料と学園を見比べる。

『……林から侵入出来ないか？』

『グラウンドと林はフェンスで区切られてる。いくつかある出入り口は防犯カメラで監視されている』

彼らがここにいるのは、戦場の現地チェックだ。とはいっても実際にやっていることは現地確認と手に入れた見取り図によるチェックで、学園内部には侵入していない。

霧を喚べばセキュリティは意味を成さない。しかし、ある程度慣れた者なら近場で霧が発生すれば感覚でわかる。それは無駄に相手の警戒を招きかねない。

『しかし……本当に「時間」はそれでいいのか？』

外国人が禿頭の男に訝しげに聞いた。

『ああ、それで問題ないらしい』

そうは言うものの、禿頭の男も納得しているわけではないらしく、眉を顰めた。

『それで上手くいくほど警戒が薄いのなら、今まで落とせていなかった方がおかしいんだが……』

『ある意味他の人間の身動きが取れない時間ではあるがな、真面目な学生なら』

本音からそう言ってる訳ではないようで、肩を竦める。

まあ仕方がない。上役の命令である以上彼らには従うほかに道はない。いざという時の撤退方法、経路について相談しつつ、彼らは学園を離れていく。

『……そういえば、アレはどうする？』

アレ。数分前、姿を見せた奇怪な格好の人物。彼女は自分が二人より上の立場の人間であることを示し、それから最優先で命じてきたある仕事。

『どうする、と言われても……やるしかないだろう』

『……なんで俺たちが……』

外国人の男は空を仰ぎ、呆れ声でばやいた。

『下着泥棒なんて捕まえないといけないんだ……』

その少女は日本語で話していた。だから禿頭の男が翻訳して伝えていたのだが、その場で伝えていなかったことがひとつ。

『……姉のカタキとか呟いてたぞ』

A n o t h e r e y e e n d , r e t u r n n o w

ロックギガン드가肩に生成した砲身から岩弾を撃つ。身体の一部を放っているはずなのにどうして体積の減った様子が無いのか、なんて疑問に思うだけ無意味。だって、そういう存在なんだから。

アライエスは岩弾を破壊し、時に回避しつつロックギガン드의懐に潜り込もうと試みる。

この学園の廊下は広く、高い。それは今のような戦闘時を想定してるからだ。しかしロックギガン드의背はそれ以上に高い。片膝を

着かなければ収まりきらないくらいに。それはすなわち、機動力の低さを示している。こういうパワータイプの相手は通常、接近戦こそ警戒すべきものだが、ろくに動けない状況では小回りの利くアライエスには当たらない。つまり、こちらが一方的に攻撃できる。

注意すべきはあたしの方。アライエスが懐に飛び込むということ。はあたしの守りが薄くなるということだ。ミスクロークは絶対防衛じゃない。岩弾がぶつかれば怪我はしなくても間違いない吹っ飛ばされる。何発も当たればクロークは削れ、いずれ肉を裂き骨を砕く。

それでも接近する。いえ、接近戦しかない。S AもF Aも、雷撃による遠距離攻撃は全て無効化されるから。

ただし、懐に飛び込んだその時は、一撃で決める。アライエスのF Aの真価を見せてあげようじゃない。

今は回避に集中。集中。集中。

「！」
見えたっ！

アイコンタクト。アライエスが駆ける。岩弾を潜り抜けるラインを走る。

抜けた！ 懐にはまだ遠いが岩弾を撃つには近すぎる距離。

角に電光が集中する。ベストなタイミングはロックギガンドが所持する石剣を振り下ろしたときか、あたしに向けて岩弾を放ったときか。どちらにせよ終わりよ！

「……ロックギガンド！」

その時、今まで一言も喋らなかつたスキンヘッドの男が発した声、それと同時にロックギガンドは石剣を振り上げ、

「ギギギツ！」

天井に突き刺した！？ と同時に立ち上がって剣を振る。天井を砕く。砕かれた天井がロックギガンドとアライエスに降り注ぐ。

しまった！ 巨体で頑丈なロックギガンドと比べ、軽量のアライ

エスは天井板の下敷きになつたら大きくダメージを受けるだけじゃなく格好の獲物に成り下がる！

落ちてくる天井板を回避、だがそこにロックギガンドの石剣が振り下ろされる。

「ンメエエエエ！」

ガキイッ！

石剣とアライエスの角がぶつかり合う。しかしパワーも体勢も向こうが有利。なら、

「壊せっ！」

あたしの叫びとともに角が電撃を纏った。NAエレクトロホーン。この角が帯びている電気はこちらの世界にはない、向こう特有のもの。焼き尽くす電撃ではなく、電気というカタチを得た破壊の意思。追加効果として多少の痺れは与えるものの、本質は純粋な破壊力。何の付加効果も無いただの石剣なら、

「SA発動、ステイフェン！」

スキンヘッドが命じる。確かロックギガンドのSAって……身体硬化！？

「ンメツ……」

石剣を破壊できないままジリジリと押されるアライエス。あの石剣も身体の一部って括りらしい。ホント、相性悪いわねっ！

「戻りなさい、アライエス！」

呼びかけに応え、角を払い一旦距離を取らせる。その際わずかに掠めたのか削り取られた体毛が宙を舞う。こうして送られてくるだけの事はあるわね、ミステイ自体よりオーナーの指示が的確なのが厄介。多分あたしよりずっと経験を積んでる。

けど、それならなおさら負けるわけにはいかないのよ、あたしは！
「セット！」

掛け声とともに膨張した体毛からパリッと静電気が弾けた。

ギンツ

ガギンツ

ザツ

ギヤリイッ！

距離がわずかに離れた。その間に息を整える。

頬から血が流れる。全身数箇所服に切り傷が出来、そこから血が滲んでいた。

輝燐や教師の時とは違うクラス上の敵、それにこの先二度と会うこともない相手だ。“Ripple”を抑える気はない。行動意識は読めている。次手は分かっている。しかし行動が追いつかない。間に合わない。

そもそも四本の腕から繰り出される攻撃をこっちは鎌一本で食い止めてるんだ。どれだけ先読みしても四撃に一撃は入れられている。流石にグレートクラス、それにこないだの教師や向こうのハゲと違って天然のオーナーか、楽にはいかない。やっぱり向こうを先に片付けとくんだったか。今さらだけど。

敵が動く。その瞬間サイズカッターを射出。理屈では対応できないタイミングのはずだがカラクリ腕の一本が反射的に迎撃した。おそらくあのカラクリ腕の操作がN A。何度か自動で入る迎撃を読み取れなかったことから神経接続で意思の介在しない反射的な行動が可能なのだろう。

お互いまだS AやF Aは使っていない。手の内の探り合いという段階だ。しかしこのまま続ければジリ貧で追い込まれるのはこつちだろう。現に今切り結んでいる最中にも身体の傷は増えている。少しずつ速度が、剣戟の重さが上がってきている。

……まあ、仮にこの鎌が防御を掻い潜って奴の体に届き、発動させたF Aが奴を吹き飛ばしたとしても、奴に致命傷を与えることは叶うまい。それは奴の肉体強度だけが理由ではなく、どちらかといえば世界が決めた制約リミットに近い。仮に俺たちの攻撃力が上位クラスに属するミステイの肉体を破壊できる力を持っていたとしても、その

制約を破って勝利を得るにはミステイ一体の存在では小さすぎるということだ。

もっとも、上位クラス的能力が下位クラスを圧倒的に上回るといふのは現実的に間違いないことで、そこに偶然の勝利という形すら排斥されているのだから始末に悪いという話だ。

ピシッ

手から伝わる違和感。不味い。このままのペースで打ち合いを続ければあと三合で鎌が砕ける。

向こうにも察知されたか、鉄爪が二撃連続で打ち込まれる。目に見えるほどはつきりと鎌に亀裂が浮かぶ。

ジャスリンが一旦距離を取り、助走をつけて突進してくる！ 刀を交差させて同時に打ち込まれる一撃！

「フッ！」

突き出されたボロボロの鎌は、

繋がれ。廻れ。

ガギイイッ！

「……！？」

二本の刀と拮抗して留まった。それどころか押し返し始める。その刃に亀裂などわずかも見当たらない。

「？！？！」

困惑の様子を見せるジャスリンが鉄爪で薙ぎ払う寸前で後ろに飛び退る。

対して俺の方に惑いはない。先ほどのやぶれかぶれとも見える防御のときにも躊躇はなく、恐れもなく、怯えもなく、諦めもない。ただ当然の行動を起こしただけ。

グレートクラス相当の力を引き出した。グレートクラスに勝利する権利を得た。それだけの事に過ぎない。先に手の内を一枚晒したというのは面白くないが

増した凍気により再構成した鎌を構え直す。

「さて　続けようか」

混乱が収まる前に、今度はこちらから斬りかかった。

異常というのは彼の為にある言葉のような気がしてきた。

「嫌になるわね、ほんと」

教室の床に腰を下ろして愚痴る。十秒チャージという触れ込みのゼリー飲料を一吸いして残りをアライエスにあげた。

戦闘開始から五分。状況は明らかに劣勢。こちらのメインである電撃は効かず、パワーは言うまでもなく負け。オーナーを直接狙おうにもこちらの射程が把握されてるみたいで雲の中に入ってこない。スピードと小回りを生かそうにも、正面からではどうとでも対処されそうな気がした。

このまま続けてもジリ貧……と判断して一旦距離と時間を取ることにした。電撃による目眩ましは成功し、現在の状況になったワケで。

……ほんと参ったわね、相性の差がここまで厄介だなんて思っ
なかつたわ。ていうか無効っていうのはいくらなんでも反則じゃな
いかしらっ!?!?

……法則ルルに文句言っても無意味ね。だいたいこんなただの弱音
そもそも相性の差も経験の差も、クラスの差に比べれば容易にひっ
くり返せる要素に過ぎないもの。むしろ今までそんな状況がなかつ
たことを幸運に思うと同時に反省すべきね。この学園に配属されて
から単独での戦闘回数が飛躍的に増加したから慢心気味になってた
かしら。自分より強い敵にいかにか勝つかっていうのがあたしみたい
な普通のオーナーには必要な能力だっというのに。

さて。あまりこうして隠れてるわけにはいかないわね。レオンハ
ルトの目的はあくまで周防君。無理にあたしと戦う必要はない。ま

あ、それはあたしも同じことなんだけど、あたしから逃げた形になつたまま状況が終わりを迎えるのはプライドが許さないわ。

「でもそれ以前に周防君が負けてたら終わりよね……」

クラス上の相手と戦えばまず敗北は必至。それは実力差以前のものとして存在する、あたし達の いや、この世界の法則ルールと言つてもいい、それほど強制力を持つている。さつきはああ言つたけど、如何にあたしが早くロツクギガンドを倒して合流できるか、それまで周防君が戦況を維持出来るかが勝敗の鍵と言つていい。

そう考えつつあたしはY・Iを開いた。このPDAに元々付属している機能はミステイの情報検索と通信機能程度だけど、皆大抵それ以外にも機能拡張を施している。その一つ、特定対象の観測という機能が今作動中。対象は当然周防君及び彼のミステイ。戦闘時のデータが採れる絶好の機会を逃す手なんてあるはずがないでしょう。各種身体データがリアルタイムで表示されるからどのくらいの余裕があるかくらいは分かるはず……と考えていたのに、最初に飛び込んできた表示にあたしは目を瞠ることになる。

214% SYMPATHIZE!

HARMONIOUS DRIVE!!

「……なによ、この数字」

クラス上の相手と戦えばまず敗北は必至。けど、その法則を破る抜け道も確実に存在している。あたしが試みようとしていたのはその中で最も容易に実行できる「多対一」というやり方。結果どちらの力が上回っているというのは関係なく、下位複数で上位一体と戦っているというのを世界が認識すれば制限が解除される。数と力の条件が明確に定まっているわけじゃないけど、下位グレートに対してレギュラー二体なら十分のはず。だからあたしは急いで自分の戦いを終わらせる必要があつただけ……

「……ハーモニアス・ドライブ……ッ」

ミスティに対して明らかに能力で劣る人間は時として足枷になりかねない。けど、そのリスクを補って余りある利点が確かに存在する。それはオーナー・ミスティ間の精神を同調させることによって両者の能力を引き上げることが出来るという特質。それは強制契約したオーナーには決して引き出せない、純粹なるオーナーのみと生じる力。けど、通常それは微々たるもので、同等の実力の相手より一步先んずれば御の字という程度の、ちょっと役に立つかなというものでしかなく、劣勢を覆すほどの力は発揮できない。

しかし、これが平常状態から一気に高まり、100%を突破すると能力が爆発的な増加を見せる。それがハーモニアス・ドライヴ。その爆発力は法則の鎖を引きちぎり、クラスの壁を破壊する。前述の方法と違い、単騎で、しかも確実に能力が上昇する力。あたしみたいな平凡なミスティと契約するオーナーにとっては切り札といってもいい位に欲する能力。

けど、その発動は精神の同調という条件ゆえに偶発性が高く、しかも爆発性の力ゆえ保って数秒。とても戦術に組み込めるような力じゃない。……あくまで一般のオーナーには。上級のオーナー

ハーモニアス・ドライヴ

例えばアウレリア様や先代『最高のオーナー』は自由にこのH・Dを発動出来るらしい。現『最高のオーナー』である周防君が使えるのは想定外というほどではないし、だいたい融合タイプのミスティとは精神同調能力は必須項目のはず。だからH・Dを使えること自体は驚くことじゃないのだけれど。

……そう。周防君はミスティと融合している。その時点で既に同調率100%を突破しているのが前提よ。そしてそれが平常状態となっている為100%を突破していてもH・Dは発動しない。だから驚異的なよ、この214%って数字が！同調状態から更に同調率を上げるってだけでも困難だったのに、200%突破！？精神第二階層同調！？しかもそれを既に三分間維持！？そんなこと出来る人間、あたしはアウレリア様しか知らない。……幼少からミスティと一緒にだったっていう周防君が、ミスティと同調し易いっ

ていうのは理解出来る。けど、それだけで納得出来る数字でもない。……そう。これもまた才能ってワケね。ほんっと、異常と才能のカタマリよね、彼って。ここまで来ると笑うしかないんじゃないかしら、おほほ。

……腹立つわね。嫉妬でも劣等感でもなく、純粹に腹が立つ。

昨日と同じ感情。ふと、そのときの会話が頭に浮かび上がってきた。

「これが、『最高のオーナー』」

……違う。後悔なんかじゃないわ。

「やっぱり認めない」

これは、憤慨よ。

「周防君なんか『最高のオーナー』だなんて、絶対に認められない」

有り余る才能。圧倒的な能力。けどそれだけ。その上にいるだけ。磨く事もしない。有意に使うこともない。そんな存在があたしより上だなんて事、有り得るはずがないわ！

あたしはとても平凡。『異質』は持たない。契約したミステイの力は平均並み。それでも努力を積み重ねることで現在の實力と評価を得るまでに至った。けど周防君は才能だけであたしを飛び越えてみせる。

でも、それを嫉妬してるわけじゃない。實力のある人間が上に行くのは当たり前のこと。その手段が才能だろうと努力だろうと構わない。そしてあたしは自分より上の人間を目標と定めて目指す為の努力はしても、その歩を乱す嫉妬は邪魔なだけ。するだけ馬鹿らしい。あたしが怒ってるのはその才能、その能力を周防君という人間が有している事っ！ それだけの力を持つ者の義務は隠すことじゃなくて使うことでしょうっ！？ 努力じゃ得られない力だっていうのに、宝の持ち腐れにしてんじゃないわよっ！！

人間は才能の奴隷じゃない。ええ、確かに才能があるからといっ

てそれに基づいた職へ進まなくてはいけないなんてふざけたことは言わないわ。けどね周防君、あなたは自分が特別な力を持っている人間だっていう自覚があまりにも足りないんじゃないかしら？ あなたの何気ない一挙手一動作で世界中が動くかもしれないっていうのに。『最高のオーナー』にふさわしい言動つてもものがあるでしょう？　なのに周防君ときたら自分には関係ないと謂わんばかりのいいえ、事実そう思ってるんでしょね、そんな自己中っぷり。あらゆるオーナーの頂点であるはずの『最高のオーナー』がそんな人間でいいはずがないっ！

「どれだけ優れた力を持っていても使わなければ意味はないわ。何もしない人間には評価なんてつける以前の問題よ。ただ自儘な行動しかない周防君に『最高』なんて評価がふさわしいとは到底思えないわね」

でなければあたしのこれまでの人生、これまでの努力は何だったというの。

あたしは親の顔を知らない。子供の頃から『教会』で育ち、オーナーとなる以前からオーナーとしてふさわしくあるように努力をすることが当たり前だった。目指す目標は二つ、『最強のミスティ』と『最高のオーナー』。

結局契約したミスティはレギュラーだったので『最強のミスティ』の座は断念したけどある程度予想もしていたので割り切る事は出来た。あたしのミスティ、アライエスを卑下するつもりはない。決して弱いとは思わないし、あたしとの相性も　まあ本来契約ミスティってというのはそういうものなんだけど　当然悪くない。けどレギュラーであり、クラスの壁を越えるような特殊性も持たない以上、どれほど努力しても『最強のミスティ』は目指せない。

しかしだからといって嘆くことはなかった。むしろ自分自身の成長こそが修道騎士として成長する鍵になると強く意識する発破になった。

そんな折一つの事件が起こる。鳴海市を襲う大寒波。中心部にい

るミスティを鎮圧に向かった当時『最高のオーナー』と呼ばれていた人とそのミスティの完全敗北。初めてグレートクラス以上の存在アルティメットクラスが確認された瞬間。

その一組は『最強のミスティ』と『最高のオーナー』の称号を同時に手に入れた。

あたしはすぐにそのオーナーについて調べた。けどその時には既に『ブリッジ』がほとんどの情報を封鎖し、彼自身にも近づけない様ガードが固められていた。分かった事は二つ、周防こおりという名前と彼のミスティがオーナーとの融合能力を持つ古代種エンシェントだということだけ。

同じ能力を持つミスティに心当たりがあった。『教会』の前線に立つオーナー『修道騎士』、その中でトップに立つ女性。気高く美しい、あたしの憧れの存在。アウレリア「ペトラルカ様。『最高のオーナー』が入れ替わる日が来るなら、必ず彼女がその座に納まるだろうと思っていたのに。その彼女すら抜き去って『最高』の座を射止めた周防こおりという存在にあたしは心から惹きつけられた。いったいどんな人間なんだろう。彼に出会えばあたしはより自分を高められるかもしれない。けど彼についての情報は何も手に入らず（情報収集能力の高いミスティですらお手上げって異常よ!?）結局今までどおり、任務と学業の日々を送ってきた。それは静かな水面。そこに投げ込まれた一通のメールが大きな石となって波紋を起こした。

霧群学園に『最高のオーナー』が編入する。

その報せと共に彼の監視を命じられた時はそのメールの文面を何度も読み直し、その度に興奮の余り叫びだしそうになるのを必死で堪えて、その代わりに部屋の中を意味無くぐるぐる歩き回りながら神への感謝を緩みまくった顔で唱えまくるといふ学園の人間が見たら今まで積み上げてきたあたしのイメージを一瞬で破壊する行為を繰り返していたというのは記憶から、いえアカシックレコードから抹消すべき黒歴史ね。

そこには指令のほかにも今までいくら捜しても見つからなかった彼の情報が記載されていた。といつても簡単なプロフィール程度で、つまるところ『教会』には『ブリッジ』よりこれしか情報が下ろされていらないのだ。要するに、当人からそれ以外を探るのもあたしの役目。『ブリッジ』側の意図も含めて。本来戦闘要員であるあたしにとつては困難な任務になりそうだったけど、それ以上に期待で胸がスキップしていた。……そう、あの日が来るまで。

あたしの理想がそのまま『最高のオーナー』であるはずはない。けど、周防君の人格はそれからあまりにもかけ離れていた。なのに能力だけはふさわしいものを持っている。

「ふむ……つまり、理想を裏切られた逆恨みということかな？ しかし、何の分野でもそうだが高度な才能の持ち主が必ずしも人格者とは限らないだろう」

「どちらも否定はしません。けど、誰からも『最高』と呼ばれる人間なんですよ？ ただ才能があるだけの人間が当てはまるっていうのはおかしいじゃないですか。それに、あたしはどちらかといえば人格より姿勢が気に入らない。『最高のオーナー』なんてどうでもいいって言うくせに、自分が誰よりも高いところに立っているみたいな態度でいるんじゃないわよってカンジ。完全同調融合しないのだから、周囲を心配してるっていうより配慮してやるって感じじゃないの」

「だから言つたらう、彼は『暴君』だと。もつとも、鎖国状態の上国民は一人だけだがね。あと、上から目線って言うならキミもなかなかのものだと思うが？」

「あたしはいいですよ、そういうスタンスだもの」
傲岸不敵に髪を流し、微笑ってみせる。遠見先輩も苦笑で返した。
「そう言い切れる辺りが素晴らしい。やはり次代の生徒会長はキミがふさわしいとおもっただがどうだい？」

「お断りします。周防君にでもやらせてみたらどうですか」

「ああ、それは却下だ、周りが潰れてしまう。補佐役くらいがちょ

うどいい」

肩を竦める先輩。皮肉のつもりで言ったんだけど、どうやら既に検討した上であたしの方を選んでいたらしい。

「それはともかく、確かにこおりちゃんは協調性がないし独善的、孤高といつてもいいタイプだ。そもそも人間というものを他人事と見ている彼だぞ？ 余程同じタイプの人間でなければ手本になどなるはずもないさ。キミの言う『最高』からは大きく外れるに違いな。だがね、明野女史。君には一つ大きな間違いがある」

「……間違い？」

「そもそも 『最高のオーナー』 ってなんだね？」

「もつともミスティのパートナー 『オーナー』 としてふさわしい人間のことよ」

「ああ、僕もそう思う。では、その判断基準は？」

『最高』。それはとても定義が曖昧だ。『最強』と違ってはつきりとした基準が存在しない。では何を以って『最高』とするのか。

先代の『最高のオーナー』はミスティが下位グレートにも関わらずその戦略を以って上レベルのミスティを何体も撃破した事からその称号を与えられた。つまり、

「……『実績』」

「それは先代の話だな。今代 こおりちゃん理由は全く違うのだよ」

わかつてるわよそんなこと。あの『白い死神』事件はミスティの暴走により起きた事。そんな事件を引き起こしたオーナーが何故『最高のオーナー』と呼ばれるようになったか、何故その一件だけで決定されたか。

「『能力』、或いは『才能』って言いましょうか？ 先代だって突き詰めて言えばそうですけど、ミスティと融合する事も判断基準に入れれば総合的に先代を上回っていると上の人たちは考えたんでし

「ようね」

ところが、遠見先輩はこれにも首を振る。

「融合能力はあくまでミステイが古代種であったが故の能力だぞ？
オーナー単独の能力として見た場合、ミステイと高い精神同調が
可能ということに過ぎない。先代と決定的な差をつけるものとは言
えないんじゃないかな？」

「じゃあ他にどんな理由があるっていうのよ。実績はない、かとい
ってその特異な能力が理由でもない。まさか人格なんて言わないで
しようね」

或いは、子供の頃は本当にカリスマといってもいい人間だったの
かもしれないけど、今は今、関係ない。やはり先輩は首を振る。

「……勿体つけるわね。そんなに予想出来ない理由なのかしら。そ
れとも、焦らして遊んでるだけじゃないでしょうね」

「フツ。確かに予想出来ないかもしれないが、この理由以上に『最
高のオーナー』にふさわしいものはないよ。ある意味これも『才能』
か、君が挙げたものとは別物の。さあ、何だと思う？」

「……やっぱり遊んでますね？ あたしの反応で楽しんでるでしょ
う？」

「そんなことはないぞ、うむ。であるからそのバチバチいつてるの
を収めてくれないだろうか？」

「それは先輩の態度次第だと思えますよ？」

キレイに微笑ってみせる。何故か先輩は両手を上げて降伏のポー
ズを取った。

「……なあに、簡単なことだ。要するに、『誰』にとって『最高』
かということさ」

「？」

「つまり」

「ンメッ！」

アライエスの一鳴きで回想から現実に戻された。弓を引き絞

るように緊張感が増す。同時に廊下側から剣戟の音が近付いてくるけど！

「あたしの相手は、こっち！」
何の前触れもなく隣の教室との壁が壊される。けどそれを予期していたあたしたちは迷いなく現れたロックギガンドと対峙した。

ドライブを開始してどれくらいの時間が経ったか。振り上げた鎌を刀で止められる。突き出された刀を柄で逸らし振り下ろされる鉄爪を避ける。時に鎌を手放した氷の右手で受け止め、落下中に左逆手で受け取り振り切った鎌は空を斬る。場所を転々と移し鎌と四腕の打ち合いは膠着状態を続けていた。

少し不味い。こいつのオーナーは思った以上に堅実で冷静。急な能力の上昇に焦って大技を使った際の際を狙い打ち、一気に畳み掛ける予定だったのが狂わされた。

状況を動かしたいところだ。けど当然どちらもFAを警戒してる。先に撃った方が手痛いカウンターを喰らいかねない。そして時間が経つことで不利になるのは俺の方、か。オーナーの方を狙いに行けるだけの間も与えてもらえないしな。

……あと十秒。それで状況が動かなければ仕方ない、強引にいこう。読まれてようが押し通す。

鎌と鉄爪が噛み合う。刀が振り切られる前に強引に振り払って距離を開け、すぐさま追い縋るジャスリンに対し、

打ち合わず後方へ一跳び、距離を離す。

次の瞬間、教室との壁が破れ岩の巨人と羊モドキが飛び出した。その勢いに巻き込まれ体勢を崩すジャスリン。

FA発動。

「！ ちよ、あんたっ……！」

制止と思しき声。しかし容赦も情けも一片の慈悲すらかけず、

「ゼロストーム」

指を天上へ突き立てる。瞬間、俺を中心に竜巻が校舎を貫いた。
“枝葉の氷柱” レリーフのFA、ゼロストーム。霧のドームの頂
上まで届くそれは巻き込むものを寒波と氷塊で砕き、周囲の物体を
暴風が吹き飛ばす。

数秒後、立ち消える風。降り注ぐ氷の粒。遠くから聞こえる瓦礫
の落下音。俺の半径数メートルに存在するものはない。それを確認
して溜め息を一つ。

「……失敗ったなあ」

廊下の最端、二人の人間と二体の人型が見えた。両方粉碎出来る
はずだったんだが……やっぱ大味だな、この技。範囲攻撃なのはいい
けどFAにしちゃ威力がイマイチ。

両方とも腕を一本失っていた。ロックギガンドの方は完全に位置
取りが良かったただけだな。左腕を砕かれた後暴風に吹き飛ばされた
か、身体中に亀裂が走っている。ジャスリンが失ったのはカラクリ
腕。超反応で咄嗟に回避行動を取ったか。目に見える損傷だけじゃ
なく寒波によるダメージも大きいはず、今はまともに動けまい。置
み掛ければ一気に片が付く。

「出来るなら、な」

右腕が動かせない。それどころか頭の中がドロドロと濁り溶け出
したかのような不快な感覚に襲われる。

タイムリミット。魔法が解けた。ズレ始めた精神波が徐々にその
溝を広げていく。

精神同調は波だ。故に急上昇が終わった後は急下降をするのが当
然。ドライヴが能力の急上昇を呼び込むのだから、その逆はもちろ
ん急低下。しかも俺たちの場合はそれに留まらない。同調がシフト
の鍵なのだから、それが乱れれば、

「くっ」

右腕に熱が灯る。なのに力が抜けていく感覚。自分たちの意思で
解除したときには味合わない不快感。

「」

俺の隣に気だるそうな表情かおのレリが現れていた。シフト解除時に現れる疲労感だけじゃなくFA使用による体力の消耗、ドライヴの反動も大きそうだ。こうなるとしばらくの間融合は出来ない。

判断は迅速に。レリを抱え上げるとその場から一目散に撤退した。

第十話 禁

適当な教室で一息つく。やれやれ、予想外に手間を掛けさせてくれる。今まではグレートクラス相手でもドライヴを使えば撃破、或いは追い返すことが出来たが、流石に野良と共生ミスティ、しかも天然ものじゃ勝手が違うか。面倒な。

面倒って感じて居る時点で危機意識が薄い。野性はシンプルだ。故に敵性に対して容赦なく殺気を叩きつけてくる。だから対応するこちらも自然、敵性の排除に神経が研ぎ澄まされる。対して人間にはいろんな思惑がある。戦う理由は生存本能とは大きくかけ離れて居る。だから戦意があっても殺意が足りない。質も量も何もかも。この前の教師とかいい例。無駄に殺意振り撒いてたけど質の軽いこと軽いこと、小物つぶりしか伝わってこなかった。逆に獅子堂は超危険。教師が風船なら彼女は銃弾。未だ理由不明だけど他人事感覚も出て来ないし。

危険度が足りない。

比較して足りない危険性は余裕に変換される。

余計な思考が生まれる。

集中の妨げになる。

緊張が削がれる。

慢心と油断が発生する。

手が疎かになる。

それ以前に自らの危機を他人事のように捉えている。

そんなだから同調率も低くなるし、こうしてたらだらと時間が掛かってさらに面倒さが増すというスパイラル。自業自得だ。「負けるわけない」とか考えて負けたら末代まで笑われても文句言えない。それでも、噛ませ犬に噛まれてやる気はさらさら無いが。

幸いなことに少し前より手札に余裕がある。存在は識^しつてたけど手段がなかったモノ。早速だが使わせてもらおうとしよう。……この

状況を見越されてたんだとしたら遥香さんは相当俺の内面を理解してるって事になる。二日も会っちゃいないっていうのに。『先生』以上に　それはすなわち、俺の人生で最も　侮れない相手かもしれない。

……俺、一体何させられるんだろ。こいつだってその一環に間違いないし。

とはいえ相手のことをよく知らず、知る気もない俺には考える材料すらない。つまり常に受け身。来たものにその場で対処するしかない。ああ、いつも通りだな。

そんな思索のうちに、教室の中はいつの間にか　曇っていた。

「……………」

どこかで覚えのある景色。逃げ出そうと動く前に、

「サンダークラウドオツ！」

まさに電光石火。雷鳴が轟いた。

ドシャアアアアッ！

「……………」

ばたりと倒れた。

「ようやく見つけたわ、この殺人鬼」

倒れたまま声の方へ振り向いた。チビツ子がいた。肩で息をしている。トレードマークの尻尾が片方解けて乱れていた。しつかりきっぱり睨まれてる。てか頭を踏まれた。

「危ないな。コンセントからの感電だって死ぬときには死ぬんだぞ？」

「あんたみたいな頑丈な奴、あのくらいで死んでたまるもんですか」

「……………」

「……この足どけてくんね？」

「……………」

「……黒」

顔を蹴られた。スカート裾を押さえながら後退する明野。冷視線を受けながら立ち上がり、そのまま教室の入り口へと彼女の横を通り過ぎようとした。

「どこ行くのよ」

「誰かさんがドデカい音させたからな、場所替えだ」
もつ少し時間を潰したい。しかし明野が前に立ち塞がった。

「……何さ？」

「さつき、あたしを巻き込んだことに何か言う事は？」

「……やっぱ撃墜率低いな、アレ」

状況変化には使えるが切り札には辛い。FAとしちゃ落第点じやなかるうか。

「反省の色なし、って事ね」

「反省する要素が無いしな」

「ふっ、ざけんじゃないわよっ!!」

ドカン、と壁が叩かれた。

「人を殺しかけて反省の要素無しですって？ しかも味方を？ あんたってどういうイカれた頭してるワケ!？」

「一応勘違いは訂正するけど、お前味方じゃないし。ただの他人。巻き込んだってのも違うな、お前から飛び込んできたんだろ、ここに？ 最初にちゃんと確認したよな」

「なっ……」

絶句される。まあ、きつと理解されない考え方なのだろうけど。

命つてのは決して軽いもんじゃない。けど人間つてのは弱くて、脆くて、簡単に壊れてしまつて、簡単に壊せてしまつて。そんな人間つてのは他人事で、だから彼らを壊すことを是としない。巻き込んで死なせる真似はしない、それは俺の決定事項。たとえ自分が死の淵に追いやられようと覆すことはないだろう。

しかし相手にも相手の意思があり、そして結局他人事だ。

「そつちから飛び込んできたのに心配なんかするわけないだろ。利用出来るなら利用しないでどうする」

「……敵の命を心配してどうする、って言うならまだ理解できるわけど、あたしは一応あんた側の人間でいたつもりなだけけど？」

「だから、そもそもそれが間違いなんだって。敵対の意思が無い奴

と争う気は無いけど、お前の為に機会を潰す気も無いの。ご理解頂けましたか」

「……危ない奴。自分の都合に反する奴は全部死んでも構わないってことでしよう、それは」

「そりゃ違う。命つてのは弱くて脆いくせに重いモンだ。他人事でもそれは変わらない。化け物の馬鹿な暴走で壊していいものじゃないんだ。けどあいつらは俺の命か、それに類するものを狙っていて、そんな奴らに躊躇する理由は無い。お前はそこに自分から入ってきたんだ、氣遣つてやる理由が何処にある。俺の都合に反するんじゃない、お前らの都合に合わせる理由が欠片も無いだけだ」

敵の都合を排除するのに手段を選ぶ気は無い。むしろ、俺の都合を通すときこそ誰かを踏み躪らない様、手段は慎重に選ぶ。

「それが知り合いやクラスメートでも？」

「関係ない、全部同じ。他人事だ」

「殺人者の言い訳にしか聞こえない」

「言い訳つてのは釈明だろ？ 許しを請う事だろ？ 今言つた事は許されるための言葉じゃない、ただの決定だ」

「つまり開き直りね。まあいいわ、仮にその考え方を万歩譲つて認めるとして、それでも実行出来るかどうかじゃ大違いよ」

「決めたなら迷う必要はないだろ」

「そんな簡単に割り切つていいもんじゃないでしょう、命に関する事なのよ」

「簡単じゃないさ。命はそこまで軽いもんじゃない。けど重いからつてのは理由にならない。割り切れないなら考えが足りないってことだろ」

「人間の感情はそこまで単純じゃないわ。どこかでこれで正しいのか、後悔しないか、もっといい方法があるんじゃないかって思考が生まれる。命みたいに取り返しの付かないものなら尚更。あんた、自分が必ず正しいとか思ってるんじゃないの？」

「正しいよ。ただしあくまで俺にとって。他人にとってはどうか

知らない。たとえ世界全てにとって間違いでも、俺がそう思わなきゃ絶対に謝罪したりしない」

「……自分が完璧人間のつもり？」

「それこそまさかだ。自分が絶対唯一の正義だなんて有り得ないだろ。他の誰かにとつちや悪ってことももちろん有り得る。それでも俺にとつて正しいなら行動する理由には十分だ。躊躇はない。それが命を奪うことだろうとも」

「絶対に自分にとって正しいことを選択してるとも限らないわよ」

「俺が間違いだと思わなけりゃ正しいんだよ」

「……思ってた以上の自己中だったワケね。この独善者。自分一人が満足できればそれでいいってこと」

無言で返す。他人の事なんてどうでもいいし、否定の材料はないわな。

「……ある意味、あんたみたいな人間は強いつて呼べるのかもしれないわね。他の人間に左右されず自分の意思を貫き通せるって事だものね。人の心まで読める化け物は精神構造も普通じゃないってことかしら」

「何言つてんのお前。そりゃ俺は化け物だけど、それでどうして心が読めるなんて発想が出てくるのさ。それに俺は別に強くもなんともない、ただの人間だぞ。化け物だからちよつと考え方が違うだけの」

“ Ripple ”の事か、厳密には心が読めるってのは間違いだけだ。参ったなあ、どこでばれたんだろ。キョウ辺りにでも聞かされたか？ まあ……隠しちゃおくけど決定的に知られちゃいけないってものでもないが。

「……タヌキね。全っ然表情が変わらないじゃない、普段は余計なことまで顔に出てるくせに」

少し時間かけすぎかな、流石にもう移動しないと。

「無視してんじゃないわよっ！ つもう、何がただの人間よ。あんたみたいのが普通の人間なわけじゃない。余裕のつもり？ 自

分が化け物とか、自分はお前たちとは違うんだぞって優越感を自虐っぽく言ってるつもりなワケ!?　じゃあはつきり「自分は人間以上です」とでも言ったらいいじゃない、この自己陶醉者ナルシスト!!」

刹那、あたしは敗北した。

彼は指一本動かしていない。一声たりとも放ってはいない。殺気を感じたわけでもない。そもそも戦いが始まってすらいない。けど。あたしの意味は、本能は　それ以上に存在が白旗を揚げて、降伏の意思を示す事も出来やしなかった。

「そんなわけないだろ。俺は人間だよ」

彼の言葉のイントネーションは変わっていない。こちらが緊張している方が変に思えるほど変わってない。

「ただの人間。けどレリと同じ化け物。だから変わった人間かもしれない。おかしな人間かもしれない。もしかしたらどこか壊れてるかもしれない。でも、人間。人間以上なんかじゃない　人間から外れる事なんて決してない」

視線を合わせることも出来ない。言葉の意味を問い返す事も出来ない。はたして彼は怒ってるのか。全てを他人事と見ている彼が憤怒する事があるのか。少なくとも彼は今までの彼じゃなく、何か『異質』なモノが『周防こおり』という殻に入った罅ひびから滲み出て来たかの様。

それは、まさしく、

「だろ?」

思考は中断させられた。そんな思考を持つことは許されないと命令された気がしたのは、はたして錯覚なのか。抵抗の意味も無く、あたしはただ一度頷いた。

それで終わり。周防君に現れた『何か』はわずかな余韻も残さず消え去った。

体中から汗が噴き出した。目尻に涙が浮かんだ。嗤いたくなるほど無様。失禁しなかったのが救い。溜まりに溜まった憤懣ふんまんが攻撃的

な言動になつて嘔き出した、それだけのはずだつたのに、それは一瞬で畏怖に上書きされ消滅した。本当は畏怖なんて言葉じゃ言い表せない衝動に襲われたのだけど、それを表せる言葉をあたしは知らない。自分の言動をこれほど後悔したのは生まれて初めて。何が周防君の逆鱗だつたのか 考えたくもない。

「……おい、どうしたよお前。突然顔中汗だらけだぞ。輝燐に風邪でもうつされたか」

「……自覚してない？ それともフリ？ ……どつちでもいい。周防君が知らない事になつているのならあたしが触れる必要も権利もない。」

「……別に、気にするほどのことじゃないわ」

精一杯いつも通りを装つて視線を周防君の顔へと戻す。そこにあるのは何事もなかったようないつも通りの顔。あまりにもいつも通りなんで怒りすら覚えるくらい。このあたしがとことんコケにされてる気分。あ、調子戻ってきたかしら。そうよ、そのやる気のない表情も、そのくせそれなりに整つてる顔立ちも、どこを見ているかもわからないような瞳も、何もかも気に入くわなゾクリとした。反射的に一歩下がった。

瞳。いつも通りの瞳。周防君の方に変化があつたわけじゃない。変わったのはあたしだ。あたしの認識だ。

さつきよりはとても弱い。どうして、どういう風に、とか具体的なことは言えない。わからない。けど。

「周防君、あなたの瞳……何？」

質問を口にしてた。今さっきの出来事を鑑みれば反省がないとか無謀とも思える問いだけど、あくまでそれは理性の認識。もしこの問いが逆鱗に触れるなら、あたしという存在そのものが阻止していたに違いない。口に出来たということは許可されてるという事。そういうレベルの存在よ、『アレ』は。

「何、とは何だ。かなり唐突でぶしつけでしかも失礼っぽいぞ」

「あたしは周防君相手にならどこまでも失礼になれる自信があるわ。」

それで、その瞳だけど……特別、とか思ったことは？」

「……お前までそういうこと言うか」

不快気に眉を顰める周防君。

「言われたことあるのね」

「お前で三人目だよ。つたく、俺の瞳が何だっつーんだ。他と何がどう違うんだかわかんないっつーの」

そう、周防君は「特別な瞳」っていうのを「変わった瞳」って意味だと思ってるのね。それならそれでいいわ、あたしから藪を突くことはないもの。

「そうね、常に女の子のあられもない姿を見逃さんとする変質者の目かしら」

「……いつまで引つ張り続けるんだ、そのネタ」

「あたしとあんたの縁が切れるまでよ」

疲れたような溜め息を吐く周防君。その彼がふと何かに気付いたように振り向いた。あたしもその視線の先を追う。

黒い点が浮いていた。いえ、浮いているというより、その空間にマジックで目印を付けたみたいなの……

「……なんだコレ」

訝しげに見るだけの周防君。けど、あたしにはこれに覚えがある。データベース通りなら、

「馬鹿っ、どうしてそう危機感足りないのよっ！」

ぐいと周防君の腕を引いて教室から飛び出た直後　　岩の塊があたしの目前に！

「きゃっ」

咄嗟に回避。その結果、

「ぶっ」

周防君に直撃、勢いであたしの手が離れ、周防君は教室の中へ押し戻される。

「周防君！」

振り向こうとして、その直前、目に入った窓の外の光景に息を吞

む。大量の岩塊が窓を、壁を破り加速をつけて迫ってくる！

「FA、ギャザリングボディ……ッ」

無数の岩塊に体を分解させたロックギガンドが一点　あの黒い目印に集まって元に戻るうとする。その速度をどんどん増し、内部の物を巻き込んで、最後には中心で圧殺する！

「アライエス！」

角が電撃を纏い、強化される。飛んで来た岩をその場で迎撃。全包围攻撃、軌道は直線、下手に動き回るより目の前だけに集中する！
「ンメエエ！」

破壊するより軌道を逸らすため横から振るう。砕いても収束が止まるわけじゃない。

ぴしぴしと身体が細かい痛みに晒される。襲い掛かるのは巨大な岩だけじゃない。砂礫だつてこの速度で飛んでくれば立派な弾丸になる。割れたガラスや砕けた壁の破片も飛んでくる。目だけは腕で覆う。すると視界が制限され、撃ち漏らした岩に身体を打たれた。もともと全てを避け切るなんて事は不可能、多少身体が傷ついても潰されるよりマシ。

耐えていれば必ず終わりが来る。しかしその前に、人の胴体ほどはある大きさの岩が迫ってくる。

アライエスの角で逸らせる大きさじゃない。砕いたところで致命的な大きさの瓦礫が残るのは明白。

正しい選択は回避。けど。

アライエスは真つ直ぐ角を大岩に向けた。

この状況、あたしたちにとっては願ってもない好機！　危険な勝負にはなる。けど、

ロックギガンドを一撃で倒せるチャンスなんだから！

見せてあげるわ周防君、あたしたちの力をッ！

「貫きなさい、アライエス！」

四肢に力を籠め、大岩へと飛び出し

「馬鹿かつ、上だ！」

え？

次の瞬間、アライエスの真上の天井に線が入った。その線で天井は分割され、崩れ、そこから見える姿は　ジャスリン！？

完全に失念してた。不味い、アライエスはもう岩への攻撃態勢に入ってる、すぐには回避行動へ移れない！　完全に無防備なアライエスへ刀が投げつけられ

ヒュンッ

る直前、その目前に投げつけられた物を反射的に鉄爪が弾き飛ばした。その行動により刀を投げるまで数秒のタイムロス。その間にアライエスは回避行動に移る。が、その時点からでは岩の軌道から完全に脱することは出来なかった。

ドカアッ！

「ンメエエッ！」

「アライエスッ！」

大きく弾き飛ばされたアライエスに駆け寄った。直前に体毛を膨張させてはいたけど、大きく加速のついた岩塊の威力は相当のものらしく、立ち上がったも足元が覚束ない。

あたしのミスだ。いつもならもっと慎重に指示を出してるのに、周防君への対抗心が先に立って……ッ。

「焦り過ぎだ、馬鹿」

いつの間にあの隕石群を抜けたのか、あたしたちの傍に歩いてきた周防君が呟いた。

「あんだ……無傷……？」

正確にはあちこちに切り傷があるけど、それはそれは教室の中で見た傷と同じもので、つまり岩や砂で受けた怪我はひとつもないということだ。

砂に耐え、岩を読む。例の耐久能力、それに読心、あるいはそれに類する能力。その二つがあればそんな芸当も可能でしょうね。遠見先輩が言った事が現実味を帯びてくる。

でもそれすら、『アレ』に比べれば大したものじゃない。

……『アレ』が『最高のオーナー』の理由？ なんとなく違う気はする。確かに圧倒的だけど、そういうのとは別物に思える。

周防君が『最高のオーナー』と呼ばれる理由は先輩から聞いたけど、肝心の選ばれた理由は分からないまま。もしかするとあたしたちには決して分からないのかもしれない。だって

「あんなもんで怪我してたまるか」

ッ！ 周防君のどうでもよさそうな声で我に返る。同時に砂礫でところどころ裂けた身体と服を意識して、酷い敗北感に襲われる。

「……敗者に鞭打って楽しい？」

アライエスの背をさすりながらじろりと睨む。が、周防君は呆れたと言わんばかりの溜め息を吐いた。

「何で敗北宣言してんだ、お前は。ただ今は俺達の攻撃ターンじゃない、それだけのことだったのに」

周防君は、全く動じていなかった。この圧倒的不利な状況下で、自分の勝利を微塵も疑っていない。……あたしが誰に対して敗北を感じてるか、まったく理解してないんでしょーね。

「……さて、どうする？」

「何をよ」

「今更だけど共闘するか、ってことを。一人でもなんとかかなりそうだけど、まあ、どちらが楽かって言われたら組む方だから。無理にとは言わんけど」

「……言葉を返すけど、本当になんで今更？」

「正確には改めて、だよ。一応最初に意思確認してたし、お前の命の責任について。「心配するな」って返事だったから一切心配しなかったら、さっき文句言われたばっかりだし」

その返事で容赦なく巻き添えに出来る辺り、極端過ぎるわ、こいつ。

「……一度あなたに殺されかけてる身として、素直に背中を預けられると思ってんの？」

「まあ、だから訊いてる訳で」

「……選択肢無いもの。仕方ないから共闘してあげる。さつき助けてくれたことでチャラにしとくわよ、とりあえずはね」

さつき周防君がジャスリンの邪魔をしなければアライエスは確実に殺された。そのとき投げられたものは破れた窓から落ちてしまつたみたいだけど……何かボールみたいなの……機械だったようなの？

「方策はあるの？」

「うん。けどちよつと時間掛かるから、その間あいつらの相手しないとな。マッチアップは同じでいいな」

「つて、ちよつと待ちなさい！ さつきからあなたのミスティの姿を見ないけど」

「今ちよつと動けない」

「こつ、この馬鹿！ 生身でグレートクラスなんて相手出来る訳ないでしょ！ 代わりなさい、その方がまだマシよ」

「そつちこそ馬鹿言うな。それこそお前の方が保たん。大体お前があのでカブツさつさと仕留めときゃこんな面倒な事態にならなかつたんだろ、責任持ってあつちやれ」

「んな、あんただつて倒せてないじゃない！」

「同じにすんな。あれ、天然ものじゃないだろ？」

「……はい？」

「だから、強制的にミスティと共生関係を結んだつてヤツ。前回の教師で見たの初めてだけどさ、「こりやダメだ」つてカンジ。野良以下。相性悪いとかレベル差とかクラス差とかどうでもいいよ。苦戦すること自体信じらんない。輝燐は初陣だった訳だから、結構手酷くやられてても「そういうこともあるか」つて思えたけどさ、お前、それなりに経験あんだろ？ だから手伝いとか必要ないと思つて言わなかったのに、手こずつてんじゃねえよこのチビ」

……とりあえず最後の暴言は聞かなかったことにしてあげるわ、今回だけ。蹴り倒したいのを我慢して気になったことを二つ訊いてみる。

「わかるの？ 天然かどうかなんて」

「何言つてんだ、見りゃ『理解』んだろ」

普通わかんないわよ。これも例の『異質』？ でも、まるで誰でもわかる当然の事みたいに言ってるけど……？

「……ま、いいわ。で、周防君。もしあたしが「助けて〜」とか言ったら、助けてたのかしら？」

「……ないんじゃないかな。あの位自分でやれって突っぱねてたと思う」

「ふうん。……つまり、あたしには無理だと思えば助けてたのかしら？」

「揚げ足取ってんじゃないよ」

けど否定はしなかった。そういえば……以前、あたしがプリント運ばされてる時に半分持つて行つたっけ。あの時は余計なお世話くらいにしか考えなかつたけど、冷静に見返せば、あの喫茶店での事もそうだし、学園でも度々誰かが困つてたり人手が足りなかつたりする時に手伝いに入ってるのよね、こいつ。

「周防君って、実は優しい？」

「何を藪から棒に脳みその腐つたことをほざくか」

「……そうね、あたしもそう思う。あんたが優しいなんて血迷った発言どこから出てきたのかしら。きつとあんたがあたしにストレスばかりかけるから、擦り下ろされた心が癒しを求めて少しでも周防君のいいところを探そうとしているのね。ああ、なんて可哀想で健気なあたしの心」

「はいはい。ん」

バガツと穴だらけの壁を壊して教室からロックギガンドが出てくる。あたしたちを挟んで反対側の天井が崩れ、ジャスリンが飛び降りた。

それぞれの相手へ再び向き合う。背中合わせに。

「そんじゃ、ちよつくら相手しますか。時間潰しやいいからさつきみたいに無理すんなよ」

「わかったわよ」

「お前もな」

あたしの足元をちらと見る。アライエスがこくりと頷いた。

「いい子だ」

……なんかあたしに対するより優しくくない？

始めと同じ背中合わせ。でもその意味は少しだけ違って。とりあ

えずもう一人のパートナーの背中に、聞こえない程度の声で呟いた。

「……このお人好し」

聞こえてたら絶対否定してたでしょうけど。

第十一話 氷の樹

「髪の毛がはらりと落ちた。」

「足を縫いつけようと突き出された刀から寸前で引き逃げる。」

「爪に肩を引き裂かれた。」

「秒刻みで身体に傷が増えていく。息も着かせぬ連撃をどうにか避け続ける。“Resist”に耐刃性はほとんど無いしなあ、まともにも受けるわけにいかないし。でなくても痛いのだし。」

「ドライヴも使っていない状態じゃ速度は完全に向こうが上だし、反撃の手もない。ていうかこいつらって俺捕まえるのが目的じゃないの？ さっきから急所狙われてる気がするんですけど。このペースだとそのうち致命打喰らうぞ俺？ ……霧の中なら死にさえしなきゃ問題ないからかなあ。」

「まあ、思い通りにさせる気はないけどね。防戦一方なのは仕方ないとしても何も出来ないわけじゃない。そろそろ動くのでしょうか、つと！」

「足元の手頃な瓦礫を蹴り飛ばした。ジャスリンの爪が避けるより先に反応し、こちらに打ち返す。少し身を反らして回避。そこへと右の刀が、追って左の刀が振り下ろされる。」

「ギンッ」

「ととつ」

「打ち合ってパワー負け。よろめいて後退。」

「！？」

「驚愕に包まれたジャスリンは慌てて右手を見た。そこには何も握られておらず、続けて俺を見る。俺が両手で握る、刀を。」

「……無刀取り……？」

あれ、すぐ真後ろから明野の声？ 戦闘開始と同時に距離を開けたはずだけど、どっちも押され気味で下がってきたみたい。

「周防君、剣なんてやってたの？ それって、いわゆる奥義でしょ」

「いやあ、俺のはインチキみたいなものだから。警戒されたら二度目はないよ」

俺がやった無刀取りは“Rippie”で読んだタイミングに合わせて身体を動かしただけで、剣術の極みという本物には程遠い。剣速が今より速くなれば合わせられそうにない。

とはいえ、相手を多少牽制する効果くらいは見せている。じり、じりと迂闊に踏み込むのを躊躇したジャスリンに対して俺は、

「とうっ」

ポイツと窓から刀を捨てた。

「ッ、何やってんのよアンタはっ！ せっかく手に入った武器、なんで捨ててんのよっ！！」

「いや、アレ重いし。さつきは奪った勢いのまま振っただけだし。正直荷物にしかならん」

「ああもっつ！ ならせめて、もっと早く奪ってればよかったじゃない！ 限定融合状態の時に奪ってればもう決着ついてたかもしれないでしょ！」

「いや、これ神経ゴリゴリ削れるからあんまりやりたくないんだよねえ」

「……今この状況じゃなきや雷落としてるわよ、あんた」

容赦ないな、こいつ。さて、

「なあ、あのロシア人（仮）、この間喫茶店にいた奴だよな。なんであの場で襲ってこなかったんだろ？」

「今さら……っていつか今この状況で訊くこと！？」

「だってさ、さつきから俺ずつと同じことやってんだよ？ 避けたり斬られたりの繰り返し。さすがに飽きてきたから世間話でもしてみようかな、と。なんせしばらく時間潰さなきゃなんないんだから」

ピキリ、と明野の表情が固まった。ん？ と疑問に思うと同時に、

「なるほどな、時間稼ぎか」

あ、ハゲが喋った。ミステイへの命令以外じゃ初めてじゃないか？
「何をする気かは知らんが、わざわざ教えてくれるとは、どうやら『最高のオーナー』とは頭の方はよくないらしい。すぐに終わらせてくれよう」

クツクツクと忍び笑うハゲ。明野が殺したそうに睨んでくる。俺はうーん、と唸って頭を掻いた。

「……俺が言った事ちゃんと聞いてた？ 俺は時間を『潰す』って言ったの。『稼ぐ』んじゃないの。分かる？」

ハゲも明野も訝しげな顔になった。構わず続ける。

「俺はね、時間が来るのを待ってるだけなの。空き時間を潰してるの。お前らの攻撃に耐えて耐えて時間を作り出す そんなのじゃないの。分かる？」

「……！」

「戯言を。一体何が違うと言う。その時間とやらの前に貴様らは倒れるというのに」

うん。どうやら明野の方が理解力高いみたい。

「だからな、そんな可能性は無いって言ってんだよ。たかが前座が主役のタイムテーブルを邪魔出来ると思ってるんのか、この漫才コンビ。ハゲとガイジンのコンビってだけで売れると思ってるじゃねえよ」

……ハゲが顔を紅潮させて口をパクパクしてる。なんかすげえ間抜け。

「……このドS」

「お前にや言われたくねえな」

おお、頭のとっぺんまで赤くなった。うーん、ありゃタコだな。

「ッ、調子に乗るなっ、ミステイ無しでこれが防げるものかっ！」「ドドドツと岩弾を乱射する。ふう、やれやれ。どうにも誰も彼もが勘違いしてるなあ。」

「明野。ちよつとばかり背中任せる」

「えっ、周防君？」

動こうとした明野を制して前に出る。歩くこと数歩、眼前には岩の塊。

「なっ、馬鹿か！ 死ぬ気か!？」

「周防君!？」

「あー、うるさい。」

右腕を前へ伸ばす。真正面に飛んで来た岩弾を、ボールをキャッチするくらいの感覚でふわりと受け止めた。

「なっ!？」

「ぼいと投げ捨てた岩が他の岩弾に当たって弾き飛ばしたのは偶然。視覚効果以上の意味でこんなめんどくさいこと何度もやる気はねえ、と残りは全部払いのけた。」

「くっ、行けロックギガンド!」

ハゲの指示通りずんずんと向かってきて石剣を振り下ろす。タイミングを合わせて脚、腕をとん、とんと押すと見事に頭からスツ転んだ。

今度は、怒りでなく驚愕で口を馬鹿みたいに開いていた。

「まだやる？ それなら仕留めにかかるけど」

岩の塊を生身で破壊するのは流石に骨が折れるけど……ま、やりようなんて幾らでもある。

「馬鹿な……ミステイが人間に負けるはずが」

「まったく。どいつもこいつもミステイに幻想持ちすぎだ。」

「あのねえ。そりゃあミステイが使える能力つてのは人間にとってみりゃ超常現象ですよ。身体能力も人間よりずっと高いですよ。まともによって勝てる道理は無いですよ。でも、そんなの勝てない理由にならない。だって、人間は弱くて脆い生き物だけだよ。そんなのミステイだって同じだよ。」

ハゲだけじゃない。全員が俺の言葉に凍りついた。

「な……にを、言ってるの、周防君」

「あー、こいつが一番シヨック大きそうだなあ。『教会』の教えと

やらを完全否定してるもんな。……まあ、しょうがないか。俺はただの事実を言ってるだけだし。

「だから、ミスティってのは特別な存在でも化け物でもない、人間と同列の存在だと言ってんの。簡単に壊れる、脆くて弱い存在だと言ってんの」

だから、オーナーであることに特別性なんて欠片も無い。

「馬鹿な、何を根拠に」

「人間より高い能力を持っている」イコール「人間より強い」じゃない。現に、ホラ。一介の人間に過ぎない俺相手にこのザマだ。

まあ、姿形が怪物って意味でミスティを化け物って呼ぶのは無理に否定しないけど」

石のデカブツを爪先で蹴ろうとしたがその前に腕を振るってきたのでおとなしく引き下がる。

「じゃあ……周防君、あんたは何なの？ あんたの言う『化け物』って、何？ 何で自分を『化け物』って言えるの？」

「手の届かないもの、それが『化け物』だよ。お前らはなんで俺がこんな回り道してると思ってた？ 簡単には壊れない、簡単に壊せる、さっきの等式がそのまま成り立つ、そんな『化け物』だからだろうが。人間もミスティも関係なくより強い生き物ってことなんだよ」

でも、本質的には人間と変わらない。別物じゃあない。だから俺は人間でもある。頑丈で強い『化け物』なのに脆くて弱い『人間』だなんて矛盾した話だけど、間違ってる。その理由はフリーリングになるから上手く説明できないけど。

「な……何をワケのわからないことをさっきから言ってる」

「単純に強い力を持てば化け物になると思うなよ。アルティメットクラスがそんな簡単なものか。あれを他のミスティと同次元で考えるな。あれと共生するには普通の人間の意志じゃ許容量キャパが足りない。だから壊れる。イカれる。滅ぶ。けど俺は普通の人間のまま壊れなかった。だから化け物なんだ。お前、自分がそれだけの容量あると

思ってたんの？ 自分の力じゃオーナーにもなれない分際で。そんなのが万一にでも、俺に勝てると思ってたんの？」

そう、普通の人間。本質的に変わりはない。けど 遠い。

「これだけ懇切丁寧に説明してやったんだから時間の無駄なことも理解したろう？ さっさと消える。失せる。目晦ましでもかましてケツまくれ。何の為にそのでつかい電球があると思ってたんだ？」

一步、踏み出して 身を屈めた。

ガキイツ！

俺の背後、金属が打ち合う音。咄嗟に腕を伸ばし、体毛を掴んでその場から飛び退いた。

「ギギツ！」

倒れたまま肩に生成した砲身から岩弾を撃つロックギガンド。砲門は一つ失われてるし、狙いもろくに定まってるから避けるのは難しくない。それ以前に当たったところで痛いだけでまるでダメー
ジはないだろう。が。

「ッ！」

真横を通り過ぎる岩弾が二つに割れる。綺麗な断面からジャスリ
ンが飛び出す。アライエスを攻撃圏内から放り出した。

「くっ」

刀の連撃。躲し切れない。左肩を大きく斬られた。

バックステップ。距離を取る。と、それを追って投げられた刀。

その行動を訝しみながらも右に回避。その先に、爪が飛んできた。

「っ！！」

ドシユドシユドシュッ！

……左腕を盾にして三本全てを受け止めた。かなり深く刺さってる。左腕はもう使えんな。絶対に避け切れないってタイミングじゃあなかつたが……

「……どうしてよ」

「避けたらお前に当たってたたる」

明野の背中に直撃するコースだった。これだけ深く刺さるとなる

と相当ヤバイことになってたろう。

「そうじゃなくて、いえ、そうなんだけど周防君があたしを助けるなんて」

「そりゃ一緒に戦ってたし。痛い嫌いだけど、この程度はしょうがない。そんなことより自分の方に集中しろ」

近接攻撃のみかと思ってたが、鉄爪を飛ばすって隠し玉があったか。相手の油断を突けば確かに有効だが、これで完全に丸腰になったぞ？ 流石に無手でさっきまでと同じだけの戦闘能力を発揮出来るとは思えないんだが。

「~~~~~！」

ジャスリンの遙か後ろから、（多分）ロシア人が何かを叫んだ。

カタリ

「……？」

何だ？ 左腕に刺さったままの爪が

ヒュッ

「ッ！」

咄嗟に更に右へ避けたが脇腹を裂かれた。さっき避けた刀が回転しながら弧を描いて背後から飛んできたのだ。その拍子に腕から爪が抜ける。勢いよく刺さった割には簡単に。

そしてジャスリンの手元へ戻る。爪も刀も。さっき外に放り出した刀までも。

武器回収、これがこいつのSAジャスリンか。避けたと思ったところへ背後からの奇襲にもなる。まんまとハメられた形だな。まったく、ミステイの能力が常識の枠に当て嵌まらないってのは『常識』だろうが。

「~~~~~」

続けて放たれたロシア人（ではあるまいか）の言葉。呼応するようにミステイがゆらり、と両腕を広げる。畳み掛けに来るか。

……さて。

このお人好し。

「っ！」

振るわれた石剣。回避して懐に潜り込むアライエス。このまま角を身体へ突き立てれば勝負あり、だけど、

「……SAか」

身体硬化が発動してる。それでも試してみる価値はある。けど、それは少し前までの話。

「下がって！」

振り払うように蹴り上げられた足を躲すようにあたしの指示通り後ろへ跳ぶアライエス。その角の真ん中ほどに、亀裂が入っていた。さつき周防君の背後に迫っていたジャスリンの剣撃を受け止めた時だ。たった一撃、正面から受けただけでこれだなんて、グレートクラスとの力の差と、それと渡り合っている周防君との実力差を明確に表す徴しるしみだった。

それはもういい。現実を見誤ればまたさつきみたいな無様を晒すことになる。だから認めよう。周防君はあたしよりオーナーとして数段優れていると。

でも。だからこそあたしは周防君を認められない。

周防君がどれだけ高い位置にいても、いえ、だからかしら、上を向かない。上を目指さない。そんな人間に未来はない。何かに懸命になれない、そんな人間をあたしは認めない。それだけは譲れない。

……結局、周防君が他人に手を貸すのもそういうことなのかしら。「そんなことも出来ないのか」とばかりに呆れて、見下して手を出しているのかもしれない。……それとも。そんなお人好しな行動こそが周防こおりという人間の本当の姿なの？

……ともかく。

「くっ、サンダークラウド！」

目晦ましの電撃を放って二手に走り出す。しかしアライエスの動いた先を読んだように岩弾が飛んできている！？

ドカアッ

「ンメエツ！」

避けきれないと見るや咄嗟に体毛を膨張させてダメージを軽減させるも吹き飛ばされる。その間に、

「！」

あたしの方にロックギガンドが迫ってくる。不味い！

「ギギツ！」

大きく石剣を振り下ろす。後退して咄嗟に避けるけど、ロックギガンドはそのまま石剣を振り回す。その巨体から繰り出される攻撃の勢いはかなりの重圧プレッシャーを与えてくる。前面に立つのに慣れていないあたしの足が不意に鈍りそうになる。まるでそれを見透かしたようなタイミングで振るわれる石剣。

「ンメエエエツ！！！」

そこへ勢いよく走りこんできたアライエスが電気を纏った角を振り上げ、正面からぶつかりあった石剣を真っ二つに破壊した。

「アライエスッ、」

「ステイフエン！」

あたしが次の指示を出す前にスキンヘッドがロックギガンドの身体を硬化した。こうなると今のあたしたちじゃ手の出しようがない。歯噛みしつつ大きく後ろへ下がる。硬化状態では動きが鈍くなるらしく、咄嗟に追撃が来る事は無い。

角の亀裂はさらに広がっていた。やっぱり……このまま硬化状態のロックギガンドとぶつかったら確実に折れる。そうなったらあたしたちにはもう勝機がなくなる。

「……くっ」

弱気の虫でも働いたのか、つい後ろを見そうになる。圧倒的不利な状況で、自分より強い人間の存在があるとやっぱり頼りたい気持ち働いてしまうから。

その人間が、あたしの真横で宙を舞った。

「え」

ドザアアツと背中から床に叩きつけられた周防君はがふつと空気を吐き出す。その身体はどこもかしこもズタズタだった。

「す……周防君!？」

その姿に、あたしは思わず振り返る。周防君をそんな姿にした相手を。

ゆらり、と。何本もの刀が揺らめいていた。まるで何本も腕がある様。揺らめきは次第に小さくなり、最後には元の二本腕だけが残っていた。

……FAだ。周防君はグレートクラスのFAを生身で喰らったんだ。

「……この馬鹿」

この姿はむしろ当然。腕の一本も失ってないのが不思議なくらいよ。

キツと正面を見据える。こんな状態じゃ周防君はもう動けないでしょう。それなら、動けるあたしが何とかするしかない。

周防君みたいに勝てるのが当然なんて思えない。努力して手に入れたものには自信を持つてるし、自らを高める意味でも出来て当然みたいな言動を見せるけど、周防君のそれとはまったく違う。周防君の言葉は自尊心から出るものじゃない。まるでそれが自然の摂理であるかの様に語る彼は傲慢で、そして圧倒的だった。あたしは一生これほどの強さを得ることは出来ないでしょうね。

それでも上を見上げる。上を目指す。上に挑む。上に勝つ。

そんな決意を新たにしたところへ、

「……あー、痛い」

起き上がったってきた阿呆が一名。

「……………な」

「くそ、やられたな。血が足りん。くらくらする。まあ……左手がまだ付いてるだけマシってことにしとくか」

絶句したのはあたしだけじゃなかった。誰も彼もがこの場で最も重傷な人間を怖れるように見る。そんな周囲を他所にフラフラと立

ち上がる周防君。

「ちよ……あんだ、平気なの？」

恐らく殺さないよう手加減されていたとは思う。でなければ周防君の身体は今頃バラバラのはず。それでもかなりの衝撃を受けたでしょう、まだ意識があること自体おかしいのよ。まして立ち上がるなんて！

「お前はこれが平気に見えるのか」

「見えないから訊いてんじゃない！ そんなボロボロでどうして立てるのよ！」

「まあ、慣れてるし。不意打ちならいざ知らず、受けると分かってりゃそう簡単に気絶しねえよ。意識さえ残ってりゃ、そりゃ立てるだろ。足はちゃんとあるんだし。寝てられる状況でもねえんだからよ」

……慣れ？ ちよっと、まさか……精神論？ そんな……そんなもので簡単に肉体の限界値を超えられるっていうの？

『あれと共生するには普通の人間の意志じゃ許容量キャパが足りない。だから壊れる。イカれる。滅ぶ。けど俺は普通の人間のまま壊れなかった。だから化け物なんだ』

ゾクリ、と背筋が粟立つ。ああ、そういうことだったのね。こいつ、むしろ精神の方が化け物なんだ

「ロツクギガンド！」
「~~~~~！」

スキンヘッドとロシア人が同時に叫ぶ。ロツクギガンドの肩に砲が生成され、ジャスリンの刀が揺らめき、それが次第に大きくなり、幾つもの腕、幾つもの刀へと分裂したかの様。誰も彼もの表情に浮かぶのは恐怖と焦り。

これは、本気で来る。組織の命令とか無視して、殺しに来る。

どうする！？ 立ち上がったっていつても結局こんなフラフラで戦えるとは思えない。いいえ、戦えたところでこの劣勢を覆す手なんて、

「我が傍らには氷の樹、下すは瀑風の裁き」

！？ “送り唄”！？

幾つもの岩弾が迫る。無数の刀が迫る。

「そして死する汝に祝福を」

その全てを、無数の氷柱が受け止めた。

「な……！」

床を、壁を突き破り生えてきた氷柱にぶつかると飛んできた岩弾の方が碎け、それとは比較にならない威力を持つ刀も、突然現れた氷柱へと存分なインパクトを与えることが出来ず弾かれる。

「……ふう。初期設定に随分時間食っちゃまったおかげで、ようやく攻撃ターンだ」

そしてさらに、ジャスリン側に生えた氷柱からそれより一回り細かい針のような氷柱が生まれ、勢いよく突き伸びた。

「……！」

それらを咄嗟に鉄爪と刀で薙ぎ払いつつ後退するジャスリン。そこへ、

「それじゃあ、終わりにしようか」

あちこちの床から氷柱が顔を出す。そのうちの一本がさらに鹿の角のように枝分かれしてジャスリンを刺し貫く。

「わあああ！？」

叫び声に振り向く。そこには誰もいなかった。ていうか床が無い。ああ、ロックギガンドのFAで脆くなつてたものね。そこにさらにこんなことしたら床が崩れるのも仕方ないわよね……って。

ガラリ

あたしたちの足元もっ！？

「きゃああ……あ？」

予想したような浮遊感は一瞬で終わりを告げた。抜けた床の下にさらに太い氷柱が横に伸びていたのだ。

その氷柱が動き出してグラウンドの方へ引っ張り出される。その先の光景に目を見張った。

巨大な四足の怪獣。その背から巨大な氷の樹が生えていた。あたしたちが乗っているのは、その樹からさらに伸びた枝の一本だったのだ。

> i30604—3710<

自らに刺さった枝を強引に叩き折るジャスリン。そこへさらに多くの枝が突き出される。

……これってまさか。慌ててY・Iを開き検索。

ヒュドラン。氷系木種。グレートクラス。？型古代種。

やっぱり。『最強のミステイ』は人間との融合によるシフトという形から分かるように現代に新たに生み出された形態。そしてこの巨獣こそが『ミステイ』レリーフの古代における真の姿。現代に復活した遙か太古の強大なる者。そうだ、確かさつき周防君が投げた機械は？型の古代種を元の姿に戻すためのエネルギー供給装置のはず。周防君が投げた時、いえあたしが周防君を見つけた時には既にレリーフを収納していたんだわ。投げつけた装置が外に弾かれたのも計算づく、か。

「ほんと、人が悪いわね。こんな切り札隠し持ってたなんて」

「使いにくかったただけだ。グレートクラスの古代種となるとある程度強いミステイの霧じゃないとあつという間に分解しちまうし。貰ったのついこの前だから試してみる機会もなかったし、初期設定に時間がかかるのわかってたからいきなり使うわけにもいかなかったし」

面倒臭そうに語る周防君。まあ、それだけしがらみがあったら愚痴りたくも、

……ちよつと待って。それってつまり、今回が初めてのシフトってこと、よね？ 周防君が装置を外へ出したのはヒュドランの巨大さから考えれば当然だけど、そもそもなんで巨大になると知ってるわけ！？ それにこの氷の枝。まるで手足のように動くこの特殊な性質からおそらくSAだと思っけど、SAは常時発動型・自動発動型でもない限りオーナーの指示なしに発動出来ないはず。いえ、周

防君ほどなら口頭での指示がなくとも意思の疎通だけで発動できるのでしょーけど、でもそれだつてオーナーが技を知^{アツ}っていることが前提でしょー！？ 内と外、話す時間も無かつたのにそんなのわかるわけないじゃない！

「ちよつとあんた！ なんでシフトした後の形態を知つてたのよ！」

「……はい？」

不思議そうな目で見るんじゃないわよっ！ あたしの方がおかしいことを言つてるみたいじゃない！

「いや、そんなのお前……当たり前だろ？ 何も知らないガキの頃ならいざ知らず、自分のミスティがシフトした後どうなつてるかなんて普通分かるだろ」

わかんないのよ、普通は！ この馬鹿、自分が特別つて自覚がいくらなんでもなさすぎるわよ！？

「だいたい人間とミスティが同等とか、『契約』つていう『教会』の教えじゃ絶対に有り得ないわよ。でなくても超常の力を持つ存在を同等と呼ぶなんて

不意に思った。だから、なの？

先輩の言葉が思い返される。それは、周防君が『最高のオーナー』と呼ばれる理由。

『つまり、彼を『最高のオーナー』と認めたのはミスティなのさ。

あらゆるミスティにとつて、彼は『最高』のオーナーということさ』その言葉を先輩のミスティと、遠慮がちにアライエスも肯定した。

「さて」

その一言の後に周防君が枝から飛び降りた。降り立つ先はヒュドランの頭の上。

「待たせたな、レリ」

「ウ」

応えて唸るヒュドラ。待ったのはあたしたちの方だと思っただけだ。……って、あんな優しい表情も出来るのね、あいつ。

校舎の方を見遣る。瓦礫の中から現れるジャスリンとそのオーナー。

「散々好き勝手してくれたんだ、今更逃げられると思っな。慣らし運転程度には付き合っつて貰っぞ」

予感がした。確信と言ってもいい。

ここから先、「戦い」になんてなりはしない。

「アイスブランチ」

氷の枝が伸びる。突き刺し、打ち据えようとジャスリンへ殺到する！

「~~~~~!!」

ロシア人が吠える。ジャスリンの腕が揺らめく。三回目のFA!?

「!!!!」

ジャスリンが跳んだ。迫ってくる氷の枝を時に碎き、時に避け、時に踏み台にして巨大な古代種へと跳び向かう。何十本にも増えた刀を振り続ける。

しかし。氷の枝の数はその倍じゃ済まない。それどころか無数に増え続ける。単純な手数だけでも押し通せたはずだけれど、周防君はそれだけで済まさなかつた。

増えた右腕が、残り一本の機械腕ごとまとめて斬り落とされた。

枝の間を縫って飛んできた巨大な氷の葉によって。

「NA、クリスタルカッター」

体勢が崩れるジャスリン。その隙に太い枝が腹を打ち据え、上空へと打ち上げた。

周防君がそれを二本指差す。ヒュドラが息を大きく吸い込んだ。

「チエックメイト」

巨獣の口から渦巻く風の球体が放たれた。中速で進むそれはジャスリンにぶつかりと内部へと呑み込み、そのまま前進を続ける。そして最高点、校舎の真上で瀑発した。

「バーストブリザード」

圧縮された冷気が解放され、瀑風となって吹き荒れた。勢力圏内の物質を氷が覆い、瞬時に嵐が砕き去る。それはまさに炎のない爆発。中心点から球状に生まれた何も無い空間。余波の冷気がその周囲を霜で覆う。その光景はあまりに空虚で、空寒い。

当然ジャスリンの姿は、最早影形もなかった。

第十二話 雷鳴疾走

瀑発の余波による霜、それはヒュドラ自身にまで及び、鼻先に被った霜を邪魔つけに振り落としている。発動前に作られた氷の枝の壁のおかげで霜を被らずに済んだあたしは、その様子をはじめ、校舎や周防君の様子を眺めやる。

オーナーは、巻き込まれたでしょうね。同情はしないけど気分がいいものじゃないわね、周防君はやっぱ平然としてるけど。

グレートクラス同士の戦いとは思えないほど一方的な蹂躪。まさに圧倒的。しかもまだ上がある。『最強のミスティ』っていう上が。そしてその力を自在に振るう人間は髪に張り付いた霜を払い落としながらミスティから飛び降りる。まさに規格外。それは思い返せば、ほとんどが『ミスティの為の』力。ミスティという力を手に入れたあたしたちと違って、ミスティに力を与える存在。でもきつと、それすら『最高のオーナー』という存在の定義には第二要素に過ぎない。

本当に規格外なのは『関係性』よ。ミスティと人間を心の底から同等と認めている。本当の意味で彼らは『共生』している。そんな人間、他にどこにいるっていうの？

きつと誰よりも、周防こおりは純粹にミスティを見て、純粹にミスティを理解してる。誰よりもミスティの近くにいる人間、それがきつと『最高のオーナー』。

……結局、『検閲』対象のそれを確かめる手段はあたしにはない。でもこれが当たりなら、確かにあたしが異を唱えられる話じゃない。それにどこか納得出来る話でもあった。……でも。

「周防君、そろそろ下ろしてくれないかしらー！」

上から大声で呼び掛けるとあたしの乗った枝が下に移動する。融解と凝結を繰り返して形を変えてるのかしら、その動きは氷と思えないくらい滑らかだった。

十分地面に近づいたところでさつと飛び降りた。もちろんスカートを押さえるのは忘れない。同時にヒュドランが銀光に包まれ、その体積がみるみる小さくなる。その光が収まる後には、レリーフがちょこんと鎮座していた。

「さて、あと一体いるんだっけ」

面倒そうな溜め息を吐く周防君。あの高さから落ちたワケだけど、スキントオーナーはともかくロッキキガントミスティは間違いなく生きてるでしょうしね。

FAの瀑心地をずらせばまとめて片が付いてたに違いないんでしょうけど……存在自体今思い出したわね、こいつ。それでもシフトを解除したつてことは、それくらい取るに足らない相手つてこと、か。「いえ、周防君は手を出さないで。あたし一人でやるわ」

「……いいの？ 俺はどつちでも構わないけど」
「いいのよ」

このままじゃ全部周防君に任せたも同じじゃない。苦手な相手だからつてこんな負けたような状態のまま丸投げするなんてプライドが許さないわ。それに苦戦することも信じられないような相手なんでしょう、周防君には。じゃあ、やっぱり背は向けられないわ。

「ねえ周防君。やっぱりあたし、あんたのこと認められそうにないわ」

「ふーん」

「流すんじゃないわよ」

「いや、だってどうでもいいし」

「だから、それが一番ムカつくつていうのよ！ いいから聞きなさい！」

ほんつとこいつは、どこまでもあたしの神経を逆撫でて。少しはあたしをまともに見なさいよ！

「……ふう。周防君、あなた、何かに懸命になったことある？」

「ん？」

「何かを成し遂げるために努力したことは？ 必死になったことは？」

「……ない、つばい」

「……あたしは、周防君はその気になれば何にでもなれると思う」
おもいつきり引かれた。

「何よそのこいつ何言い出すんだキモツ！ って反応は」

「突然持ち上げるなキモイ。買い被りもいいとこだっつもの」

「ほんと蹴り倒したくなるストリートさね、あんたって。ま、いいわ。周防君って、大抵の事は特に頑張らなくてもそこそこのレベルで出来るんじゃない？」

「まあ、他者と比較するならそれなりには」

「……努力すればもつと高いレベルに行けるはず。なのにそれをしてない。怠惰さでその能力を無駄にしてる」

「だから買い被りだつて。だいたいな、何かを成し遂げたいってのはそこに何か望みがあるからだろ？ 俺はそういうの持ったことないみたいだから」

「無気力無目的つてことね。どつちにしても褒められたことじゃないわね」

「……結局、何が言いたいんだお前は」

「……あなたは、確かに凄い。でもそんな力がどこかに向かうこともなく宙ぶらりんのまま。だから周りにはあんたの一挙一動に注視し、脅えることになる。そこをちゃんと理解してるのか、怪しいものね」

「どうでもいいよ、そんな他人事」

「ええ、そう言うんでしょねあんたは。本当腹立つ。あんたの力なんて、全部元々持ってたもんでしょが。他人に出来ないことが出来ても、自分が出来ないことを出来るようになったわけじゃない。力を伸ばそうとすることもなく才能の上に胡坐をかく。そんなもの、どれだけ凄い力だとしても認めることなんて出来はしないわ」

そう。こいつがどれだけ優れていてもそんな人間である限りあなたは認めない。さあ、何か反論はあるのかしら。

「んー。要するに、お前は才能なんてなくても才能ある奴に勝てるくらい努力してるってことだろ」

「っ!? ちょ、なんでそこであたしの話になるのよ!？」

「始めからそういう話じゃないのか? お前の考え方を聞いてたんだから」

「その話の内容があんたのことでしょうがっ!」

「で、違っの?」

「っ」

「ちょっ、ここで頷いたらなんか自惚れてる奴みたいじゃない!

「は、はぐらかさないでよ。あたしの思想よりあんたの話でしょうが。どうせあたしがどう思ってるかなんてどうでもいいって答えるんでしょっけど、じゃああんた自身はそんな自分をどう思ってるのよ」

「どうでもいいよ。慕われようが蔑まれようが、どうせ俺の事だし」

「っっ、ああもっっ、話にならないっ!

「というかさ……わかってる? そんな評価する価値もない人間にそこまでこだわる必要もないだろ?」

「それは、あんたが『最高のオーナー』だからよ」

「だから何だよ。そんなのどれだけの価値があるんだ? ずっと続けている自分の努力よりそんな称号一つが本当に価値あると思ってるの? 劣等感なんて感じる必要、微塵もないだろが」

「れっど……違っわよ! あたしは怒ってるの! 憤ってるの!

「あんたが力にふさわしい人間じゃないから、」

「だから、それなら怒る必要もないだろ。蔑み、見下しゃ済む話だろ」

「だからその力に、その称号にふさわしい行動を取らないことに怒ってるんでしょうが!」

「なんで名前に合わせなきゃいけないのさ、馬鹿馬鹿しい。そこまですぐに入らないなら称号ごと見下すくらいやってみせる。出来ないってことは、その称号を俺が持つてることに嫉妬してるってことじゃないのか」

「っ、黙りなさい、ペラペラと! あんたこそ人の事見下しま

くるのがそんなに楽しい!？」

このドS。人の心を抉るなんてもんじゃない、メスで切り開いてあたし自身が気付いてないことまで暴き立ててくる。本当、なんて嫌な奴。

「別に楽しくない。ただ視点が違うだけ。化け物って位置から他人を見てるだけだ」

それから話を区切るように大きく溜め息を吐いた。

「だいたいさ、なんで俺がお前に妬まれなきゃいけないんだよ。さつきも言ったけどお前、他人よりずっと努力してんだろっが」

「何よ、嫌味？ それでも自分には勝てないって？」

「そんなもんでもいい。お前はこれまで上を目指して努力してきた、これからも努力し続ける。成長を続けるお前の方が留まり続ける俺よりずっと価値が高い。……全部その通りだろうが。お前の言う通りだろうが。なんでそれに自信を持ってねえんだよ」

「……え？ えっと」

「いつも通り堂々と胸張ってる。努力し続ける自分に誇りを持って。そういう人間、俺はすごくいいと思うぞ？」

そう言った周防君の顔は儂く、羨ましそうに微笑んでいて、それはまるで自嘲のようでもあって、そんなの周防君に言われるまでもない。という言葉は結局口に出れなかった。

ええ、そうよ。恥ずかしくも告白してしまうなら、その瞬間あたしはその表情に心奪われてしまったのだ。

「でも気を付ける。上を目指すのはいいけど本当に『上』に行っちゃいけない。断言していいよ、そんなところにお前の目指すものはないって」

次に周防君が口を開いた時にはその表情は消えていた。そしてやはり、その瞳はあたしを見てはいなかった。

半壊した校舎に入り込む。どこに隠れてるかわからないから慎重

に、でもあまり時間をかけるわけにもいかない。

学園を覆う霧は三人のオーナーによって構成されていた。そのうち一人がいなくなったことで今霧は二人のオーナーによって維持されている。しかもいなくなったのはメインとなっていた人間。そのうえ霧を分解する性質を持つ古代種がわずかの間ながらも現れた。だから、霧の限界時間まであまり間がないはず。

霧が解ければあいつは逃げるだろう。さっきまでの攻防で一人では周防君に勝てないことは明らかだからだ。でも、それはあたしから逃げる訳じゃない。というかこのまま逃がしたらあたしの負けもおんなじじゃない。

負けたくない。いいえ、負けられない。

周防君は言った、苦戦することも有り得ない相手だって。それなら今のあたしはなんだってのよ。今のあたしはあなたの目にどう映っているのよ。こんな無様な人間が『最高のオーナー』を指すなんて、どれだけ身の程知らずに聞こえているのかしら。

それとも。

どんなに無様だろうと努力し続けるなら「いい」って言うのかしら、あいつは。

……あの表情、反則よね。不覚にも一撃で心に焼き付けられるなんて。今までどれだけの女の子を毒牙にかけた事やら。

「……この辺ね、あいつらが落ちたところは」

熱くなつた顔を誤魔化すかのように口に出した。さすがにこの場所にはいかないかしら。でも油断は出来ない、と慎重に周囲を探る。

普段なら目立つ岩の巨体も瓦礫の山じゃどこに隠れてるか分かったものじゃない。

そう考えていたところに、ひらり、と動くものが視界に入る。

「……………」

流石にあからさま過ぎる。誘いを掛けられてるのは明らかなのだけど、どのみちこのまま睨み合ってたら時間切れ。

……任務に失敗してそのままただ逃げ帰るといふ状況は向こうも

避けたいはずなのよね。とすると、あたしの方を仕留めて少しでも評点を稼いでおきたい、といったところかしら。なら確実に短期決戦を仕掛けてくる。

「アライエス！」

呼びかけると同時に飛び出した。罨であることは承知の上。何かが見えた先、岩陰へ飛び込む。……いない。確認と同時に離脱。二秒前居た場所に岩弾が降り注ぐ。逆算して撃ち手へ迫撃。ロックギガンドなら迅速な移動はない。

「NA発動、同時にFA待機……！」

体毛を膨張させ、でも拡散はさせない。パリッと弾ける電気、全て角へと注力。突撃槍ランスを構える騎兵の如く疾走。駆け抜けた先に、

「……そうくるのね」

宙に浮かぶ、黒い点。

「FA発動つ、ギャザリングボディッ！！」

離れた所から響くスキンヘッドの号令とともに周囲から石が浮かび上がる。あたしまでの距離約5メートル、砂礫から巨岩まで様々。それらが動きだす、一点へ収束するために、邪魔なものを巻き込んで。さっきのように抜け出す隙を与えないためか、岩はそれほど拡散せずに取り囲んでる。その分十分な加速を与えられないだろうから激突時に即死の可能性は減ってるけど中心で押し潰すことに変わらない。岩の群れは確実にあたしたちへと向かってくる。

だからカウンターを仕掛け易い。

短期決戦なら今までのチマチマした攻防より一撃必殺でくることは予想出来た。向こうは確実に仕留めるつもりで仕掛けた罨なんだろうけど、あたしたちにとってもわざわざ向こうから近付いてきてくれる状況は願ったり叶ったり。

……でも、今のままじゃやはり負けるのはあたしたち。正面からぶつかりあつて潰されるのがどちらかなんて火を見るより明らか。

故に、あたしたちが勝つためにはここで一段階強くならなきゃならない。その手段は既に先刻、周防君が示している。

即ち、ハーモニアス・ドライブをここで発動する。

「無理だろ」

一蹴した周防君に一蹴お見舞いする。

「足癖悪いよな、お前」

この木偶の坊め。脛を蹴っ飛ばしたのに眉一つ動かさないなんて。傷口を抉るくらいししないと堪えないみたいね。学習したわ」

「怖いことを平然と。っーか教えを請う人間の取る行動じゃねえ」
平然と人を殺そうと出来る奴に言われたくないわね。

「無理ってどういふことよ」

出来ないことを出来るようにする為には、出来る人間にコツを訊くのが近道。だから……そう、こいつに訊くっていう恥辱に耐え忍んで訊いた結果が『無理』じゃあ、そりゃ蹴りたくもなるってものよ。

「言ったとおり。お前と羊モドキじゃ“廻る”ほどシンクロしねえよ」

「廻る？」

「繋がった精神の中を高速循環……みたいなの？ まあ気にすんな、ただの俺のイメージだし」

H・D状態の周防君の精神イメージ。一応覚えておきましょう、彼自身が思ってるより重要かもしれないし。

「そう。で、なんでシンクロしないって断言出来るのよ」

「お前ら見てりゃ分かる。意思決定がどちらかに偏ってる時点で“廻る”わけがない」

「どういふこと？」

確かに、あたしが指針を決定してアライエスに行動を指示するっていうのがあたしたちの方針だけど、それが悪いってこと？

「役割が決まってるのが問題なんじゃない。自分の意思を相手に合わせる、あるいは任せる、委ねるのが不味いつてんだ。一見、それで二人の行動が一致するように見えるから始末が悪い。シンクロっ

てのは、いや本当はもつと複雑なんだろうけど簡単に言や、次に取る行動がなんの示し合わせもなく一致することなんだから。名前を呼ぶ程度ならともかく、明確な行動指示が出る時点でシンクロしてたまるか」

「……………」

ぐうの音も出ない。言われてみれば確かにその通り。シンクロは深層意識で起こるもの。だけど、指示を出すというのは表層意識で行動を合わせるということ。要するに、示し合わせ無しでも行動が一致する、と信じていない。それなのにどうしてシンクロするっていうのよ。

「取らぬ狸の皮算用。その程度の勝算で博打打つ気なら素直に逃げ回るのを勧めするけど」

周防君の言う通り。必ず勝てる戦いしかしないのはただの臆病者だけど、勝算の目処も立てず戦うのはただの馬鹿だ。そんなことはよく理解していて、でも、

「…………嫌」

それは出来ない。逃げるという行動自体を戦略として否定する気はないけど、これはそういう話じゃない。これは、

「あたしはここで、こんなところで逃げるわけにはいかないのよ」
何より、目の前の化け物から逃げないために。

退く様子のないあたしを一瞥して周防君は目を伏せ、それから一言、

「お前、思ってたより頭悪いな」

「だから努力してるんでしょ。それに、聞き分けの良さが頭良いってことだとあたしは思わないわ」
なるほど、と一言。次いで、

「けどお得意の努力をする時間はないぞ？　むしろ今までの努力がシンクロする上で最大の障害だ。長年積み重ねた連携を根本から捨て去らなきゃならない。登る山を間違えたんだ、お前たちは」
それはきつと、ゼロから積み上げるより困難なことだ。

「上等よ」

ここで不敵に返せたのは、きつと強がりなんかじゃない。だって、さつき言われたばかりじゃない。あんたが言ったことでしょう。

「自信を持っていいんでしょう？ 努力し続けるあたしは」

「……そうなんだけど」

言葉に詰まる周防君。何か言い返そうとして、しかし結局、

「まあ、どうでもいいか。お前が戦おうが逃げようが、結局他人事だし」

「ええ、そう。その通りよ。これはもう、あたしの戦い。だから見てなさい、あたしが勝つところを」

そして、目が離せなくなってしまうくらい。注目せずにはいられないほど、大きな存在になれればいい、と。

踵を返す。あたしの戦場へ。

勝算は、ある。この会話は決して無駄じゃなかった。きつと周防君は気付いてない。まあ、彼には必要ないんだから当然といえば当然だけど。

狙うは一瞬のチャンス。それは、言うなれば、

火事場の馬鹿力。

迫る岩塊を前に、逃げるといふ選択肢は捨てている。

勝ち抜くといふ決意を固めている。

なら 躊躇なんてして暇はない。あらゆる人事を尽くす。

「我が傍らには白羊宮」

それは祝詞にして呪言。

「下すは雷走の裁き」

敵性に死を与えるといふ誓約。破れば死に等しい罰が下るといふ制約。

「そして死する汝に祝福を！」

教会の“送り唄”。それが齎す効果。それ即ち、同調率の上昇。

気のせいか、あたしとアライエスの間に見えない経路が繋がった

気がする。錯覚だとしても、自己暗示だとしても、効果は本物……のはず。Y・Iで確かめることはしない。それは慎重と隣り合わせの疑心であり、今は必要ない。

そして、まだ足りないことも間違いない。H・Dには届かない。その為の今の状況。眼前に迫る敗北と死。

「いつ、きなさあいつ!!」

掛け声と同時、突っ込んでくる岩塊へ回避行動を取るでもなく、地を蹴り渾身の力を込めて強化した角を突き出し跳び込む!

「ンメエエツ!!」

どちらも加速のついた衝突。しかし明暗は明らかで、硬化した身体に刺さった角は先端のみ。亀裂は更に広がり、更に力が加われれば砕け折れる事明白。でももう一押し食い込ませなければFAは不発に終わる。

地に足が着いてないライエスの身体は岩塊に刺さったまま収束点 黒い点へと運ばれていく。ライエスの真後ろにいたあたしは避けずに体毛へしがみつき埋もれ、一緒に収束点へ。

「くっ、ああ!!」

体毛で蓄えられた電流があたしの身体へ衝撃を与える。バチバチと身体が焼ける。けど、しがみつくこの手を離すわけにはいかない。今から逃げ出したところで岩の群れに身体を打ち付けられて死ぬのがオチ。膨張した体毛の中にいれば圧死まで猶予が出来る。

だから、落ち着きなさい。パニックを起こしちゃだめ。

ポロポロと角の外殻が崩れる。今、あたしたちの身体はこの角で支えられている。つまり、あたしたちの体重が全てこの角に架かっているということ。もうそれだけで折れたっておかしくない。それはつまり、あたしたちの賭けの失敗を、そしてあたしたちの死を意味する。

恐怖が身体を駆ける。だから落ち着きなさいって。思考を手放したら終わりよ。

そして幸運に、しかし結局は変わらぬ最期の時。すなわち収束点。

全方位から岩の群れが一点にぶつかり集う。四方八方からの衝撃。きつと何本か骨が折れた。同時に視界が完全な闇に包まれる。体毛の抵抗は所詮微々たる抵抗で、数秒後には二つの身体が原型も留めない姿に押し潰される。

死ぬ。その恐怖に。

「あああああああつ！！」

「メエエエエエエツ！！」

抵抗の咆哮が上がる。

125% SYMPATHIZE!

HARMONIOUS DRIVE!!

これが彼女の策。

死への恐怖。或いは生への渴望。極限状態で思考をそれ一つに絞ることによりH・Dを発動させる。

この策を心はアライエスへ伝えていない。FAをカウンターで撃ち込むという方針のみ伝え、最も重要なH・Dを発動させる手段は教えなかった。教え、実行させるのではH・Dは発動しないところりとの対話で分かっていたからだ。

しかし、それでも発動確率は絶対ではない。仮にどちらかが恐怖に負け思考能力を放棄していたなら確実に失敗に終わっていただろう。でなくとも、同位の精神状態になっているとは限らないのだ、たとえ通常よりなりやすいとしても。

これは一瞬が全ての勝負。至る為積み重ねるものは無く、故に経験も努力も入り込む余地のない、明野心の在り方とは真逆の策である。しかし、唯一つ彼女の努力が入り込む余地があったとすれば。

アライエス。共に在り共に戦った経験が、指示がなくとも彼女の戦術を予測させてくれたということ。同系の思考が存在したのではない故に同調ではない。しかし確信はしていた。それこそがH・Dへの最大の足掛かりになったのである。

そして二人の咆哮に呼応するかのように精神は繋がりが、廻り、突撃槍の如き角は折れる事無く深々と岩の身体に突き刺さり、

H・Dが発動してる間に行えた行動はそれだけだった。

ほんのわずかな抵抗。イタチの最後っ屁。この程度で既に決まった勝敗は揺るがないと押し進む岩塊からは嘲笑の気配すら伝わってくる。

しかし あたしたちは笑う。これまでの人生でした事もないほど凄絶に。咽喉が切れる程の叫声を 勝利の宣言を果たす。

「サンダーア、ドラアイヴツ！」

FA発動の宣言。同時に体毛に、角に蓄えられていた電撃が駆けた。

不細工な岩塊の内部を。

「！？ ギツ、ギギヤアアアツ！」

ガラガラと駆け巡る電撃が岩の塊を崩壊へ誘う。

「これが……あたしたちの本当のFA、よっ！」

角を突き刺した地点から自走し、標的へと至る電撃はサンダードライヴの仮の姿ではない。その真の姿は突き刺した物質の内部を駆け巡る破壊の雷撃。この状態のサンダードライヴでは表面だけを走る通常の電撃とは性質が一変する。即ち、雷撃の姿をした破壊エネルギーそのものに。故に、電撃が効かない物質だろうが問題など全くない。

しかしその性質、一物質の内部で完結する技である以上、分裂した状態で放つてもその部位しか破壊出来ないし、また発動時点で分裂されても同じ事。故に、最大のチャンスは元の姿に戻るため一箇所に集まり、でもまだ収束しきつてないこの時点。本当は外側から攻撃したかったけど、それではH・Dを発動出来なかったからこの状況は苦肉の策。外面みたくスマートに決められればよかったんだけどね、と苦笑してみる。皮肉な状況ね、内側に飲み込んだもの、その狙いは更に内側へ飲み込ませることだなんて。

未だに収束を続けようとする岩塊。でも遅いわ。ほら、分かるでしょう？ 貴方の身体が雷速で壊されていくのが。だから、
「さようならよ、ロックギガンド。神の元へ逝きなさい」
角が食い込んだ場所、今では大きく亀裂が入った場所へ渾身の蹴りを叩き込んだ。岩とは思えぬほど脆く、開いた穴。連鎖的に広がる崩壊。そこから脱出して振り返ったときには、その身体は既に霧へと還っていた。

ふらり、と身体が崩れた。

「れ？」

そのまま身体を支えることも出来ずばたりと倒れる。ズキンと体中に走る激痛。ああ、そういえば骨折れてるんだったわ。

地面に両手を着いてどうにかこうにか起き上がってみるも足元がおぼつかず尻餅をぺたり。そのままバタン。あいたた、こりゃ三半規管がイカしてるわね。ちらりと視界に入ったアライエスもおんなじ状態。つまり あ、そっか、H・Dの反動ね。解除直後に来なくて助かったわ。

あーあ、角折れちゃって。って、止め刺したのあたしかしら。

多分、霧が解けてもこのふらつきは治らないわね。おまけに視界がぼやけてきたし、意識もはつきりしなくなってきた。参ったわね、もうあまり時間がないっていうのに。こんな、まるで酔っ払いみたくにぶつ倒れてる姿を大勢の生徒に見られるなんて、ほんと、プライドにガタが、

ガチャッ

金属音。それは、こんな世界にいれば一度や二度は必ず耳にする、
ハンマー
撃鉄を起こす音。

なによ、やっぱりマフィアじゃない。そんな悪態を思い浮かべると共に、意識が闇に吸い込まれた。

ドバンツ

「がっ！」

倒れた明野へ銃口を向けていたハゲが、黒い十字形のエネルギー体に吹っ飛ばされた。

「お見事」

「それは心に言うべき。私のはただの後始末」

その発生源にいたのは、学生服姿の割烹着メイド　もとい鳳真砂とその横に浮遊する、白いふさふさの毛並みに、額に黒い宝石の付いた小さな生物、要するに彼女のミスティだった。

> i30679—3710<

「ミンカー、ホワイトクロス」

名を呼ばれたミスティはふよふよと浮かんだまま明野へ近付くと、両手をかざし白い十字形のエネルギー体を発生させた。その光を浴びた明野とアライエスの顔色が見た目にも良くなっっていく。おそらく身体の方も治癒されているだろう。まあ、霧が解ければ完治するはずだけだから放つて置く必要はないわな。

「っーか出張ってくるのが遅くね？　もっと前からいただろ、お前」

「気付いてて撃つた周防は容赦ない。巻き込まれかけた」

「自業自得」

こそこそ隠れて動くような奴はそのまま人知れず野垂れ死ぬのがお似合いだ。

「っーか、お前『ブリッジ』とやらの一員だろ？　よかつたのか？

お前ら、俺に手貸さないように命令されてるだろ？」

「……会長から？」

「いんや、状況から予想しただけ」

本気で俺を保護する気ならそもそも前回、俺に電話を繋げたりする訳ない。俺が気付いていることにキョウも気付いているだろうけど……あちらの事情が変わらない以上は、形だけは隠したままにするんだらうな。

「手は貸してない。セーフ」

「まあ、そうか。けど、そこには手貸してもよかつたんじゃないか？」

気絶している明野を顎で指す。しかし鳳は首を振り、「それは、手伝いじゃなくて邪魔。心は自分たちの力で勝つて決めた。強くなるって」

にしちや無様だけどな。もう一回同じ真似したら絶対死ぬぞ、こいつら。

まあ間違はなく経験にはなっただろ。一度体験したことで次回以降発動しやすくなるはず。それが感覚を再現しようとし過ぎてうまくいかないか……。まあ、どうでもいいな。俺が気に掛けることじゃない。多分だがうまくいく気はしてる。経験を糧に積み重ねる…努力はこいつの得意分野なんだしな。

「じゃあ最後の最後で手出したのは？」

「愚問。友達が殺されそうになってるのは見過ごせない」

「矛盾してないか？」

「してない。ただの優先順位。説明するまでもない当然の事。周防もそうなんでしょう」

そう言つて鳳がちらりと見たのは俺の右手。そこに握られたレリーフの鎌。ああ、そういうこと。

「別に俺は明野が死のうがどうでもいいけど」

ただ、共闘してた間柄の奴に「見てろ」と言われて。なら、勝負を見届けるくらいはするべきだと思つて。

「あれは、ミステイを倒した時点で明野の勝ちだ。別に銃や不意打ちが卑怯とか言ってるわけじゃない。隠し玉、切り札として最後まで忍ばせてたんなら何も文句ないさ。けどハゲのはそうじゃない。

決着が着いた後に、自分のミステイが倒された後になってようやく、持つてるのを思い出しただけ。チェスで王を取られた後キングも手を差すようなもんだ。敗北と現実を認めたくないだけ。そんなもん、たとえ他人事だろうが見てる側として納得出来る訳がないだろ」

「自分ルール、周りにまで適用する人は怖い」

「自分ルールは徹底させるもんだ。他人の都合で変えてたまるか」
「社会不適合者」

喫茶店のときから思ってたが、言葉数少なくせに一言一言が棘あるよな、こいつ。

「心、保健室に運びたい」

「……意味あんのか？ 運んでも霧解けたら教室に戻るんだろ？」

「方法はある。研究の成果、科学の進歩」

「そうか、頑張れ」

「……手伝って、と言ってる。私一人じゃ重い」

「そこまでする義理無いし」

「人でなし」

明野を担ぎ上げようとする鳳。しかしうまく持ち上げることが出来ず、ついには制服を引っ張って引きずりだした。おい、へそ見え
てるぞ。

「……ああもう、仕方ない。」

「ほら、お前はそつちアライエス持ってけ」

「あ」

明野を奪い取って背に担ぐ。そのまま保健室があるはずの場所へ
歩き出した。

他人事だけど、だからって懸命にやってる奴を放置していい訳じ
ゃない。むしろ他人事だから。逆に俺に関わってきた奴こそあっさ
り放置出来るのが俺という奴の性分。理はあって、でも矛盾してる
よな、どう見ても。

「訂正。周防はお人好し」

アライエスを抱えて俺の隣に並んだ鳳がそんなことをのたまって
くれた。

「違う」

「じゃあ世話焼き」

「それも……」

違う、と言えなかったのは現居候宅の欠食児童のせい。

「……帰り、奢れ」

「毎度ご贔屓に」

薄れる朱色の霧。こんなところ誰かに見られたくないからとつとと運んでしまおう、と。

小さな寝息を立てる背中の中の重みを担ぎ直した。

エピソード

Another eye

「だから、悪かったって言ってるじゃん。まさかちよつと目え離れた際にこんななるなんてさあ」

『もおう、昇ちゃんはいつつもそんなのばかりなんだからあ』

何度も同じ文句を繰り返す電話越しの声に辟易し、その発端となつたものをちらりと横見する。

空き教室の椅子に縛り付けられているスキンヘッドの男 周防
こおりを狙ってきたという『レオンハルト』の構成員だ。

この場に何人もいる職員兼『ブリッジ』の構成員を前に抵抗を示す様子は微塵もない。それどころか俯き、死んだかのように動かない。

否、死んでいた。

「でも運命みたいなもんなんだろ？ ミステイが死んだらオーナーもそのうち、って」

『逆もね』

「番の鳥ってヤツかな」

『アポトシス自滅因子が働くとかエライ学者さんは言ってるよ。でも人工ものだったらねえ、あつという間に自然死、なんてことはないの。運がいいと十年くらい生き続けちゃってもおかしくないんだよ。あーあ、せめて情報を吐くまで生きてて欲しかったなあ。やつぱりそつちの
不手際だよ、うん』

そういう割りに声に重さがないのは、どうせたいした情報は得られないだろうと初めから考えていたからだろう。とはいえ、今回の襲撃の目的くらいは聞き出しておきたかったところなんだが……。
「って言われてもさ。実際誰かが侵入した形跡とかはないんだよ。こいつらの戦闘が終わって以降は霧張られてないらしいし？」

『 死因は？ 』

「 縊殺。これで自殺のセンが消えちまった 」

『 …… 遠隔式か自動式の SA だね。一つ心当たりがあるよ。だとしたらそれ以上調べても何も出ないね。ご苦労様、あとは回収班の人に任せていつものお仕事に戻っていいよあって皆に伝えて 』

「 了解^{りょかい}。って、こーいう遣り取りしてるとなんか上司と部下みたいだわな 」

『 ぶう。みたい、じゃなくてわたしは昇ちゃんの上司なんですう。偉いんですう 』

まったく偉く聞こえねえ。電話の向こうで口を尖らせている姿を想像して苦笑が漏れた。

「 っと、そういやこないだドイツでアウレリアに会ったぞ 」

『 リアちゃん？ 元気してたあ？ 』

「 開口一番でメシたかられた 」

『 あはは、変わらないねえ 』

「 だな。アタシたちなかで一番変わったのはアンタだよ、遥香 」

『 …… 』

「 アレをアタシに押し付けられてもなんも出来ねえぞ？ 仮にも親代わりをやるならアンタがしっかり面倒見る。アレ、アンタと『 同類 』 だろ？ 」

『 …… やっぱりかあ 』

「 あん？ 」

『 ううん、なんでもないよお。そうだねえ、わたしもそろそろ家が恋しくなってきたよお。輝燐ちゃんと女の子同士のスキンシップしたりこおりくんの手料理食べたりたいなあ 』

「 トシ考えるバーカ 」

『 …… ちよつと昇ちゃん、今のは聞き捨てならないなあ？ だいたいい、昇ちゃんも同い年じゃない！ 』

「 そーだよ、同い年だ。ホラ、アタシ今幾つだ？ それがアンタの年齢だよ。それを踏まえてさっきの発言と比較してみ？ 」

『まだまだ現役！ イケる！』
「あー、悲しくならんかね？」

更に二言三言言い争いをして電話は切れた。

「……………ふうっっ」

疲れがどつと吹き出た。そのまま椅子に深く沈みこむ。

普通なら口封じが目的だけど……………今回の場合、この段階で死人を増やす意味は無い。だからこれは『レオンハルト』本来の思惑じゃなくて、一部の人間の独断、または暴走。あるいは愉快犯。

……………頭の中に浮かぶのは、くすくすと二重に響く嘲笑^{わら}い声。

必ず打倒すべき、わたしの『敵』。

そのビジョンを、とりあえず今は頭から追い払う。

パソコンの画面にはついさつき送られてきた報告書。そこにはつい数時間前の戦闘について書かれていた。詳細を省いたおおまかなものではあるけど、京之介くんといいろキーの子といい、迅速で大変よろしい。

第一段階、『古代種ヒュドランへのシフト』余裕でクリア。ついでに長時間のハモリも確認、かあ。うん、当然当然。説明書入れ忘れたのがちよつと不安だったんだけどねえ。

これで『レオンハルト』はしばらくこおりくにちよつかい出さない、と。でもこおりくん自身がトラブルの種みたいなものだもんね。退屈とは縁遠い日々になりそう。うん、大いに結構。何も起きないようじゃ、わたしたちが困るんだよね。

こおりくんは『ブリッジ』の……………ううん、人類の切り札になってもらわないといけないんだから。

さて、一時間くらい仮眠を取ったらまたお仕事かあ。うう、本当に休暇が欲しいよう。

ふと、鏡に映りこんだ自分の顔を見た。

「……………」

こおりくんを思い出す。あのひどく変わった瞳をした男の子の顔

を。

「…………『2nd』」
セカンダリ

その瞳を見た今でさえ、自分の瞳がどう変わっていたのか……まったく分からなかった。

Another eye end

「あ

「ん

翌朝、下駄箱で明野とばったり。

「おはよ

「…………おはよう

「…………なに、このビミョーに変なフンイキ

輝燐が訝しげに窺ってくるが、俺に聞かれてもわからんて。

そのまま黙って靴を脱ぐ。下駄箱を開くのは三人同時だった。

「あ

「ん?

俺と明野の声が重なる。そのまま下駄箱の中に手を伸ばすのが同時なら、取り出したものもまた同じだった。

「わお

輝燐が感嘆の声を上げる。俺と明野の手にあるのは一通の封筒だった。

「ふう、参るわね

とか言いつつピッと封筒の口を切る明野。そのままざっと一読してすぐにしまった。

「今年に入って何通目や?」

「こんどこそつきあうのかー?」

いつの間にか背後に立っていた藤田と乾に、明野は肩を竦めて答える。

「まさか。あたし、手紙で告白するような度胸のない人に興味ないわ。まあ、呼び出しの手紙でも結果は同じだけど。っていうかあたしを手紙で呼び出そうって何様？ 直で迎えに来るのが最低条件でしょ」

「くっはー、さすがごころん！」

「貫禄の女王サマ発言、すばらしいの一言やな。……で、ワレは何しとんねん」

「ん？ ……ごみはゴミ箱に？」

端からどつきまわされた。

「いきなり何しやがりますか」

「いやいや、それはない！ その選択肢はないってこおりちゃん！
「せめて中身確かめるのがスジってもんやる！」

「けつとーじょーか？ らぶれたーか？」

興味津々に見られまくる。あー、うつとおしい。溜め息とともに封を開いて、野次馬どもに開帳してやる。

「……嘘、ありえない」

「まじもんのらぶれたーだったとは」

「この裏切りモン！ ちよつとばかり顔が良くて頭が良くて喧嘩が強いからって……泣きそうになってきたぞコノヤロー！」

あー、うるさい。

「もういいな、捨てるぞ」

「バカなの！？」「バカかお前！」「ばかだ！！」「馬鹿ね」

異口同音に馬鹿呼ばわりされた。しかも一人増えてるし。

「ワレ、こんな人生で何度もあるかわからん機会不意にして」

そこで乾が何やらハツとして明野を見た後、こちらに向き返り、

「なあ、こおりはん。コレ、初めてや、よな？」

「いや？ 前にも何度か」

「……………死にさらせー！ー！！」

ダッシュで駆けていく乾。もうじき始業だつてのにどこ行くんだあいつは。

「……ちなみにこおりちゃん、その時どうしたの？」

「ガン無視。けど何日か続いたから、折れて呼び出しに応じることもあった」

「……返事は？」

「『断る』。あるいは『嫌だ』」

「アホー！ー！！」

輝燐に拳骨でどつかれた。

「〜痛う。さっきから何なんだ、いったい。だいたい、明野だつてかなり無碍に扱ってるだろ」

「いいのよ、あたしは。男は打ち捨てるくらいの扱いがちょうどいいのよ」

「男女差別反対」

「そう言うこおりちゃんはもうちょっと女の子に優しくするべきだと思う。たとえばボクとか」

「あたしとか」

「伊緒とかな！」

「寝言は寝てから言いましょう」

放置して歩き出すと三人も後ろに付いて来る。

「わかんないなあ。なんでこんなの好きになるかな」

俺に聞かれても。

「そうかしら。あたしはわからないでもないわよ」

「ふえ？」

疑問符と共に輝燐が立ち止まる。同時に一駆けし、俺の前に出たのは明野。

振り向いた表情は、悪戯めいた笑顔で。

「だからってあたしがあなたを好きになんてならないけどね。もっといい男になりなさい、こおり」

何やら勝手なことを言い残して明野は一足先に教室へと駆けていった。銀の尻尾を翻し。

何故か、輝燐に後ろから殴られた。

第一話 恋愛談義 誰だ、こいつ主人公にしたの

A few days ago

「では、ご夕食ノ際にまたお呼びニ参リマス、オネーサマ」

一礼して彼女が退室する。と同時に座っていたベッドに背中から倒れこんだ。

「……疲れた」

その眩きとともに大きな溜め息が出た。寮のものとは違う深く沈みこむベッドに身を委ねて、ついこの場で出るはずもない愚痴が口を吐いた。

ベッドが心地好いからってこの家が心地好い訳じゃない。たとえ一人きりだろうと気を置くことが出来ない家。常に確固たる自らを求められる。ここに比べたら、部屋が狭かろうと役職に日々追われていようと、寮の方が遥かにリラックス出来る。

であれば今はどうということだろう。それを承知の上でただ家具の心地好さに身を任せる気の抜けっぷりは。

答えは簡単。学校まがはで更に気の置けない出来事が発生したということ。

「……周防こおり、か」

転校生。

同い年の後輩。

新しい生徒会役員。

会長の幼馴染み。

そして どこか、異質な人間。

一つの間を思い出さず。それは、新学期が始まる前の日の事。周防と初めて会った日。

私服姿でぼーっと突っ立ってる彼を見つけた。瞬間、何とも言えない感覚が総身に走った。決して相容れないような、それでいて奇

妙なくらい惹かれるような。結局その感覚はすぐに立ち消えて、注意しに声を掛けたのだけど。

たった一週間。私の日常は表向き変わっていないのに、私の内の何かが異常なほど乱れている。生徒会に入れなくなかったのは、もしかしたらこうなる事を心のどこかで予測していたから、というものもあるかもしれない。昨日も歓迎会になんて行ってしまった。理由があったから じゃない。理由は自分で見つけた。受動じゃなく能動。そもそも私は流されて行動する類の人間じゃない。

私は昨日、自ら彼に関わった。肩書きの一切に関係なく、私個人として。

執着している、のかしら。わからない。原因も、真偽も。

駄目ね、結局全然リラックス出来やしない。当たり前ね、元々が気の休まらない場所なんだから。……つい一週間前までは、それが当然と思考にも上らなかつたのに。たった一人の人間にこうも揺さぶられるなんて。

……夕飯まで一眠りしてしまいたい。思考を切って、ウトウトと微睡の中へ。でも、今の私じゃ怠惰に身を委ねることも出来ないから。^{5。}

わずかな躊躇いと 恐れに、目を瞑って。

自分にかけた『魔法』を、解いた。

R e t u r n n o w

雪は、キラリじゃない。

それは象徴。愛しさと、憧憬と、懐かしさと、そして恐怖の。

天気予報はハズレでガツカリ。融雪で足元は水溜りでゲンナリ。絡んでくる臭い豚どもにはウンザリ。

「ウヒョー、その服可愛いねえ。どこの店？」

「客引き？ サービスしてくれるんなら、どこだつて行つちやうよ？ てか、言葉わかつてる？」

「てゆうか、俺がこの娘連れて帰りてえ！」

馬鹿笑いする牡豚どもを半眼で見遣る。下品で下劣。こんな下民にかかずらつてたら折角の有意義な時間がごんごん失われてしまう。

「…………てゆうか、この娘ガンくれてない？」

「ああ？ ダメでしょ、ご主人サマにガンくれちゃ。てか、しゃべれよ。日本語、わかる？」

「ボディランゲージでお置きしちゃうべ？ ベッドの上で？」

…………豚の言語なんて理解できないけど、今、一つだけ聞き流せない戯言を吠えたな。

「誰が」

「あん？」

ズンツ

「ぐおつ！？」

「誰ノ、主人だつテ？」

傘による刺突一閃。正面の牡の鳩尾に突き刺した。

「こつ、のアマ！」

左の牡豚が拳を振り上げた。傘を離し、牡豚より遅く動き出した拳を先に顔面へ叩き込んだ。怯んだ隙に傘をキャッチ、くるりと回して取っ手を牡の足に引っ掛け、おもいつきり持ち上げる。

「ぐえっ！」

頭を強かに打ちつけ悶える犬。

「やりやがったな、この」

後ろから殴りかかってきた牡豚をひよいとしゃがんで避け、顎へと傘を突き出した。

「がつ！？」

命拾いね、持ち手のほうで。石突だつたら口の中まで突き破つてたかもネ？

悶え蹲る牡豚どもに何の感慨も持たず歩き出す。凡俗が思い上が

ったクチを叩いた結果、ただそれだけのこと。

このサファイエル、サザンウインドが主と認める人間はただ二人。
「今参りマス、オネーサマ」

「有罪」「有罪ね」「はんけつ、ゆーざい!」「死刑や!」

「……いきなり何の魔女裁判だ」

昼休み。相変わらずまあ一人でどっかにいこうとしたこおりちゃんを捕まえて、四人で囲み席に着く。そして、ボクたちの口から一番に飛び出したのはそんなセリフだった。

「こおりちゃん。今朝貰ったラブレターはどうしましたか?」
「捨てた」

きっぱりと言い切ったバカの頭をはたき回した。

「学習能力ないんか、おのれは!」

「あつはつは、こーりんはほんとひとでなしだなー」

「……なんかひどい言われようされてるみたいだな、俺って」

「またそんな他人事みたいに」

こおりちゃんの悪癖にげんなりさせられながらも話題を引き戻す。
「昨日といい今朝といい、恋する女の子の気持ちをもっと大事にしなきゃダメでしょ! 同じ振るにしても、優しい言葉かけてあげるとか、アフターケアきっちり!」

「なんで俺がそんなめんどくさい役回りしなきゃなんねえんだよ。」

俺が悪い訳でもなし、そんな他人事にいちいち神経割く気はないの」

「……十分ワレが悪いと思うんはワイだけか?」

「どこに俺の落ち度があるってんだ。告白するってことは振られる事も十分想定範囲内だろ。それで泣かれてこっちが悪いとか言われても、傍迷惑なだけだ」

「……理屈としちゃ間違ってないんだろうけど、ね。」

「それはちよつと、子供っぽい意見じゃないかしら。相手の感情を蔑ろにしてるもの」

うん、同感。

「どうでもいいよ。その感情がどれだけ激しかろうが、真剣だろうが、俺にとっちゃ結局他人事だ」

また『他人事』だ。これが言い訳とかじゃなく本当にそんな感覚だっというんだから始末に悪い。それは告白してきた女の子に対してだけじゃなくて、今日の前のボクたちへも同じ感覚だっというから……本当、どう手をつけたらいいのやら。

「……はあ。ほんと、皆なんでこんなのに惚れるんだろ」と、そういえば。

「明野さん、わからないでもないとか言っただけだった？」

……ん？ ってことは、

「ま、まさか明野はん!？」

「なにかとても失礼なことを口に出そうとしてるみたいだけど乾君。そんなありえない想像をする頭は虫並み、と言わざるを得ないわね」

む、虫!？ しかも啓吾と同レベル!？ ひ、ひどすぎるよ明野さん!!

「大した理由じゃないわよ。ただ、周防君を客観的に見てみるとね、そういう面が浮かび上がってくるのよ。愉快なことに」

そう言っただけおちちゃんをちろりと見る明野さん。

「はじめは悪い噂の絶えない敬遠すべき転校生だった。しかし蓋を開けてみれば、成績優秀、腕っぷしが強く、顔も見れる程度には良い」

む。

「さらに、こんな性格の割りにお人よしというか世話焼きというか。実は優しい？ なんて取る娘がいても不思議じゃないわね」

「あー、あれやな。極悪の不良が実は橋の下で捨てられた子犬の面倒見てたとかっちゅーヤツ」

「そういうのが市民権得てるんでしょう？ なんていったかしら、こういうの」

「ギヤップ萌え、ってやつだなー!」

「そう、それ」

「な、なんかモテ要素だらけに思えてきたよ？」

「実際その通りね。人間破綻者でさえなきゃ完璧なんじゃないかしら」

「それが一番の問題だけどね……」

破綻してるといふか辿り着いちゃってるといふか。なんせ条件さえそろえば殺人も躊躇わない人だし。

「まあ、恋は盲目ってよく言うものね」

「こーりん、つきあったらどーだ？ よりどりみどりだぞ？」

「好きでもないのに付き合うのって失礼じゃね？」

「……どうしてそういふとこだけ誠実かな」

「……じゃあ、貴方はどんな女の子だったら好きになるのかしら、こおり？」

……また明野さんが名前で呼んだ。普段は『周防君』って呼んでるのに、昨日の朝からときどき『こおり』って名前で呼ぶようになった。それに、一昨日まではこうして彼女と一緒にご飯を食べることもなかった。

一昨日。『霧』の中で何かあったのか。気にならない、と言つと嘘になるけど、そこまで突っ込む理由がボクにはない。

……なんだか、モヤモヤする。

「どんな、ねえ……」

と、こおりちゃんが天井を仰ぎ、さらに首を捻る。明らかに長考の構えだ。……んーと、もしかして。

「ねえ、こおりちゃん。もしかして、初恋とか……まだ、とか？」

恐る恐る聞いてみると、こおりちゃんはああ、とばかりに手を鳴らした。

「……マジかい」

「うん、確かに。言われてみると無いね」

「こ、子供の頃とかも？ ほら、えーと」

伊緒や啓吾がいるから『事件』の事とか口に出すわけにいかない

けど、要するにその前とか。

「ん、無い」

「……それはまた、何というか……」

「……男色？」

「すぐにそつちの方向に繋げるのは、ほら、なんつったっけ……腐女子？ の証明じゃねえのか、チビ」

「冗談に決まってるで、しょっ！」

ガンツ、と机の下でいい音がした。……にも関わらず平然とストローを啜えるこおりちゃん。つくづく頑丈だ。

「女の子に興味ないの？ 彼女欲しいとか思ったりしない？」

「興味ない訳じゃないけど、願望はないな」

……まあ、まったく興味なかったらねえ、出会って早々のアレな事態にはならなかった訳だし。

「興味あるんだったら試しにでもいいから付き合ってみるのもアリなんじゃない？」

「と言われても、恋愛感情って正直よくわからんし。別に、性交渉がしたいだけなら恋愛関係になる必要は絶対的には無いし」

「ぶっ！？」

な、なにを平然と言いますかこの馬鹿こおりは！

「ハッ！ お、おま、まさか！」

「んー、迫られたことはあったけどね。別にしてもよかつたんだけど、勘違いされると面倒臭かったから、結局経験はまだないよ」

……なんかもお、いろいろと最悪だこの人……。

「すえぜんくわなかつたのかー？」

「うん。興味以上のものは本当にないし」

「いい加減にしなさい、あんたたち。乾君、なんだか不自然な姿勢だけど、蹴り飛ばしていいかしら」

「な、ナニをでっしやる？」

「潰すわよ？」

「そ、それだけはお勘弁をー！」

「冗談よ。あたしの足が汚れるわ」

呆れた風に銀髪をかき上げる明野さん。本当、女王様気質だ、この人って。

「……というかな、今まで俺が言われたことって全部明野にも当てはまるんじゃないのか？」

と、こおりちゃんが話題の矛先を逸らしてくる。でも、ふむ。確かに。

「あたし？ あたしはちゃんと恋愛に興味あるわよ。それなりに願望もあるし。けど、その願望に釣り合う男がいんじゃないじゃあねえ」

「明野さんの理想って高いの？」

「それほど無茶なことは言わないわよ。ただ、あたしに釣り合う男じゃなきゃ嫌だってハナシ」

うわー。すごい上から目線だ！。

「そこの男より格好いい女性を子供の頃から知ってるもの。その人を目標にしてるあたしとしては、そこの平凡な男で妥協するなんて出来ないわね」

「（……そりゃある意味とんでもなく高くて、ある意味とんでもなく低いな……）」

……？ こおりちゃんが何かポツリと呟いたみたいだけど……？

「で、貴女はどうなのかしら、桜井さん。貴女だって校内一の有名な人の一人じゃない」

「へっ、ボ、ボク！？ ボクなんて全然だよ！ 二人みたくラブレター貰ったことなんて……男の人からは……ないし、告白された事だって……男の人からは……ないもん」

「あっはっはー、りんはどーせーにもてるタイプだな！」

「ていうか、四強で有名っちゅうんはなあ。そんなの彼女にしたがる剛毅な男、ウチのガッコにおるんか？」

「係わり合いになっっちゃいけないベスト4、だっけ？ そりゃ付き合いたくないわな」

「あんたもその一人だけどね」

ぐうつ、本人の目の前で好き勝手言ってくれちゃって。……マジヘコむよ？ ボク。

「ま、とは言っても人気あらへんワケやあらへんけどな。気さくで付き合いやすいしの」

「友達としては人気あるけど、彼女にするととなると一歩足りない、って感じなワケね」

「う、うーん、それっていいのかな？」

「それは桜井さん次第じゃないかしら。別に今すぐ男欲しいって訳じゃないんですよ。だったらいいんじゃない？」

「ん……まあ、そうだね」

実際、彼氏持ちの自分なんて想像出来ないし。

「ふむ。てことはさ、この中で恋愛経験ある人っていないんだね」

「？ なんでだー？」

「？ 決まってるじゃない。啓吾に彼女なんているわけないでしょ？」

「なっ、なんで決まっとなねん！」

「じゃあ、いるのかしら？」

「い、今はおらへんけど……」

「じゃあ、いたのかしら？」

「……いません……」

いじけ始めちゃった啓吾は放置。

「伊緒だつてねえ、彼氏なんて」

にこにご笑っている伊緒。一瞬生まれた空白時間。妙な雰囲気にも包まれたまま、おずおずと尋ねてみたりする。

「ねえ、伊緒。伊緒は、付き合ってる男の人なんて、いないよね？」

「あはは、いるわけないぞー！」と予想していた返事は、

「おー、いるぞー！」

あっさり塗り替えられ、場が完全に沈黙した。

「……嘘、でしょう」

ボクと同様絶句していた明野さんがポツリと漏らした一言。それで硬直が解除され、驚愕が爆発した。

「えええええつ！！ 嘘嘘、なんで伊緒！？ ていうかボク初耳！！ いったいいつから！？ 相手は！？」

おおお落ち着けつ！ そうだ、こんなときこそこおりちゃんの動じなさ振りを見習って、

「有り得ねえつ！ いったいどこの宇宙人が相手だよ！？」

おもいつきり動揺しまくってた。まあそりゃ、こんな不意打ち喰らつちやあねえ。

「……意外過ぎるわ……」

こちらは啞然としたままの明野さん。そんなボクたちと対照的に、啓吾だけが驚いた風もなくパンを貪り食っている。うーん、こういう状況って珍しいなあ。

「啓吾は知ってたの？」

「そりゃあなんだっての。相手、ワイの兄やんやし」

……なんだって P a r d o n ?

「乾君、お兄さんいたのね」

「ボクもまた初耳」

「今県外に勤めとるしの。一流企業でバリバリ働いとるで」

「見栄を張るな。お前の兄貴でそれはない」

おおう、流石こおりちゃん。皆が言いにくい事を軽々と言っているウ。シビレも憧れもしないけどオ。

「ちよつ、何ソレ！？ まるでワイがアカン子みたいやんけ！」

「そう言ってるんだが」

「ノー！ ツ！ そこで肯定するんじゃないやねえ！ ウチの兄やんは優秀なの！ ワイと比べたら兄やんに失礼なの！ わかったか！」

「とりあえず、似非関西弁が外れるくらいには真実だったのは理解した」

「判断基準そこかよ！」

あー、やれやれ。でもちよつと安心かな、伊緒つてばこういう娘だから。話を聞く限り相手も信用出来る人みたいだし。啓吾のお兄ちゃんつて聞いたときは正直ちよつと不安だったけどね。ああ、でもまさか伊緒に先を越されるなんて、ちよつと納得がいけないかも。明野さんの表情もそんな感じだなあ。

「でもけーよりスケベだけどなー、あははー」

……そう言った伊緒の頬にはわずかに赤みが差して、えーと、珍しいことに照れてる？

「……ちなみに、付き合つてどのくらいになるのかしら」

「えーと、三年だな！」

……………。

「口」

「言わんといてー！ 後生だからそれだけは言わんといてこおりはんー！」

……なんだか、無性に不安になってきたかもしんない。

こおりちゃんが家に来て早くも二週間が経とうとしている。転校当初、マイナス方面に有名だったこおりちゃんは、下着ドロ事件以降プラス方面での有名人になりつつあった。

とはいえそれでこおりちゃん自身が変わることもなく、未だ周囲への関心無し愛想無しの他人事状態。ときに疑問なり突っ込みなりが入る以外はこちらからのアプローチに返事を返すだけの、言つちやえば一方通行状態だ。あちらから話題を提供してくることはない。以前遠見会長は言った、こおりちゃんはあらゆるものが脆く見えているって。何もかもを壊せる、そんな立ち位置にいる、って。それは分かった。いや、実感は出来ないけど言いたいことは理解できた。

でも、後から思った。下手なことをすれば無関係な『人間』を壊す、そんな状態のままであることを、こおりちゃんは良しとする人

だろうか？

そう考えると、あの身体の半身だけがレリーフと融合した形態
リミテッドリンクロシフト
限定同調融合だっけ？ あれも、力の制限だけじゃなくて、いざ
完全融合したとき、暴走しないための訓練と考えることも出来る。

『化け物』にとつて、『人間』は遠い存在なのかもしれない。あ
るいは、ガラス窓の向こうから眺め見ている感じなのかもしれない。
こおりちゃんを見てるとそっちの表現の方が近そうだ。

それでも、呼びかけることは出来るはずだよ。遠くからだって、
ガラスの向こうからだつて。それをしないのは、何でだろう。

そんなことをしても根本的な問題　こおりちゃんが『化け物』
を自称する理由　は変わらないからかもしれない。他人事と感じ
る、その感覚が変わることはないからかもしれない。けど、だから
つて他の人間に近づくことは無駄なことなんだろうか。そうやって、
人と人が関わりを持つことが、果たして無意味なんだろうか。

たとえ、こおりちゃんがいくら自分を『化け物』と認識してい
ても、

こおりちゃんが『人間』であることには変わらないのに。

……無意味なわけ無い。

ボクには一つこおりちゃんに大きな恩がある。何年も続いてきた
大きな悩み。憎悪と甘え。それらを断ち切つて新たな関係を築くこ
とが出来たのは、間違いなくこおりちゃんと関わったからだ。きつ
と、他の人じゃ今みたいな結末には至らなかつたと思う。

だから、助けよう。たとえこおりちゃんがそれを微塵も望んでな
くても、そうすると勝手に決めた。

あの時の宣言通り、こおりちゃんの他人事っぷりを微塵も発揮で
きないようにしてやる、つて。

人、人、人。

街は人で溢れている。

万物の霊長。地球の支配者。そう自称する生物が目につく限り至る所に跋扈している。

獲物を噛み千切る牙も敵を切り裂く爪も、寒さから身を守る毛皮も強靱な身体能力も持たず、視力も聴力も嗅覚も他の動物より劣る脆弱な生物。しかし知恵と道具　武器を使う手先により生物の頂点に立った。この事を疑問視する人間はいないに違いない。だからこそ人間は社会コミュニティを作り、法律ルールを作り、その枠組みに他の生物までも当てはめている。

くだらない。

サファイは知ってる。どれだけ盛隆を誇るうが、所詮『人間』の存在は他の生物と同じ位階にしかない。

サファイは知ってる。異世界の存在を。そこに棲む、超常の力を持つ『ミスティ』という生物を。ミスティと共生する『オーナー』という人間を。

サファイは知ってる。『オーナー』も、『ミスティ』ですら人間と同じ位階の生物でしかない。

サファイは知ってる。

『人間』以上の『存在』を。

第一話 恋愛談義 誰だ、こいつ主人公にしたの（後書き）

だいぶ間が開きましたが、第三章開始です。以降更新が不定期になりそうですが、どうか長い目で見てください。

第二話 冥土襲来

終業のチャイムが鳴る。と同時に斜め前の輝燐がこちらの席へ。

「ねえ、こおりちゃん」

猫撫で声に鳥肌が立った。

「露骨に嫌そうな顔されると傷付くんだけど」

「じゃあ変な声出すな。軟体生物が身体を這い回ったみたいな気分になったぞ」

「……流石にそれは酷くない？」

「そんなことより用件はなんだ？ 晩飯のリクエストなら早く言ってくれ」

「そうじゃなくてさ、もう帰るの？」

何当たり前のこと聞いてんだ、こいつは。

「生徒会室行く用事とか、なあい？」

生徒会室？ そりゃ、俺は一応生徒会役員ではあるけど。

「なんで通常業務がない日まで行かなきゃいけないんだよ。つーか獅子堂とのリアル鬼ごっこさえなきゃ普段だつて行きやしないってのに」

「……どの辺がリアルなのか教えてくれない？ 周防」

「そんなもん鬼に決まってるだろ。あの眼鏡の下の殺気が渦巻く目、どう見たつて鬼以外の何者でも」

……あれ？ 今の、誰の声だつたでしやうか？

キリキリと錆び付いたブリキロボット染みた動きで首を回す。背後に居りましたのは。

生徒会副会長、霧学最強の女帝、獅子堂優姫。その身体に視覚化出来るほどに渦巻く怒りのオーラを纏う姿は、「優姫」なんて名前とは圧倒的にかき離れておりました。

「やれやれ。もう二週間経つというのに未だに周防は私から逃げることを考えているの、悲しいものね」

い、いえ、まったく棒読みでそんなことを言われても悲しいとか
説得力ないんですが。

「昨日は比較的素直に着いてきたから今日は穏便に迎えに来たつもり
だったけれど……この様子だと本格的にその性根を叩き直す必要
がありそうね」

「いや、それ以前にだぞ獅子堂？ 今日が生徒会活動はないはずじ
ゃあ」

「つべこべ言わずに来い」
「はい」

くそう、なんだこのプレッシャー。正面からならいざしらず、不
意を打たれたらその時点で全面降伏決定じゃねえか。ていうか輝燐
のヤツ、時間稼ぎに呼び止めやがったな。今日の夕飯は覚悟するが
いい。

「あはは、それじゃボクはこの辺で」
目を逸らしつつ逃げようとしたところへ、

「ああ、桜井も来て頂戴。藤田と乾、それから明野も」
「ふえ？」「お？」「へ？」「あたしもですか！？」

帰り支度をしていた四人が素つ頓狂な声を上げた。まあ、さつき
まで鬼のオーラを発してた奴に呼び止められればねえ。

「何したんだ、お前ら」

てゆーか、そのせいで俺まで巻き添えを喰ってるんじゃないのか。
「知らないわよ。あんたたちならともかく、あたしが問題なんて起
こすわけないでしょ」

まあ、ツラの皮は厚いしな。

「周防君のカオって素敵ねー。考えてることが手に取るようにわか
るわー」

笑顔のまま足をぐりぐり踏むな。

「ワイらだつて心当たりなんてあらへん」

「さいきんはおとなしーしなー」

つまり、「最近」でなければ心当たりはあるってことかい。

「……なんで咎めに呼ぶと決め付けるの。用事があるだけよ」

そりゃ、あれだけのプレッシャーを放った直後に呼ばれたらねえ。
「要するに周防のせいってことね」

「だから、どいつもこいつも人の心を読むなって……」

そして総勢六名でぞろぞろと生徒会室へ。獅子堂が先頭で俺と明野が最後尾。逃走は……無理か。獅子堂は後頭部にも目がついてるんじゃない？ ってくらい奴だし、獅子堂と輝燐を同時に敵に回して逃げ切れるとも思えんし。

「……あたし、このメンバーで呼ばれる見当がまったくつかないわ」「お前が呼ばれるってことは、また勧誘じゃね？」

この明野心という女子生徒、その身体の発育度合いと反比例して学年主席、スポーツ万能という肩書きの持ち主である。それが理由かはわからないが、来期の生徒会長として何度も打診されているという話だ。

「だったら藤田さんと乾君はいらないでしょう」

まあ、そうだな。輝燐は生徒会の裏事情関連で納得出来なくもないけど、この二人を引き入れる理由はどこにもない。第一、俺まで一緒に引っ張ってこられる理由だってない。

まあ、どうせすぐにわかることだし、と切り捨てたところで、ポケットに走る振動。

「ん？」

最近ようやく扱いに慣れてきた携帯を取り出す。メールの差出人は、キヨウ。

なんだ？ もう数分もせず会ったのに、と思いつつメールを開くと、そこにはたった一文、すらなく一言。

『にげる』

あまりに簡潔で、それ故まったく意味が分からなかった。

が、その理由はわずか数秒後、どンドンこちらへ近づいてくる疾走音により明かされることになる。

「……どうしてあの娘が？」

いつの間にか獅子堂の足が止まっていた。つられて全員の手が止まり、その視線の先を見遣る。

廊下の先からどンドン、高速で接近してくる物体。それはどう見ても、

「メ、メイドさん!？」

全員の心の声を乾が代弁した。フリルのたくさん付いた、白を基調とする西洋のハウスキーパーの仕事着、いわゆるメイド服。それをヘッドドレス込みで完璧に着込んだ少女をメイドと呼ぶことに何の異論があるのか、いや、ない。それが似非だろうと本物だろうとだ。

そのメイドが俺たちの手前で走ってきた勢いそのままジャンプし、

「オネーサマ~~~~ツ!!」

「わっ と!!」

獅子堂の懐へと飛び込んだ。驚きの表情を浮かべながらもしつかりキャッチする獅子堂。

「はア、流石お姉さまデス。受け止めてくださいと信じていました」

「サ、サフィエルツ!? お前はまた勝手に来たのか!？」

「何を言っておられるのデスカ、オネーサマの居られるところナラたとえ火ノ中水ノ中。どこまでだっテ付いてきてお仕え差し上げるのがサフィの使命でございます!」

どうやら獅子堂の知り合いらしい。『お姉さま』とか言ってるけどその褐色の肌はどう見ても日本人のものじゃない。というか今の言動から察するにコスプレとかじゃなくマジモンのメイドなのだろうか。

「う、うおお! 見いや、メイドさんやで、本物のメイドさんや! メイド喫茶みたいなインスタントもんやなく本職さんに出会えるなんて、今日はなんてツイてるんや!」

「あつはっは!、け!はあいかわらずヘンタイだな!。でもめずらしいものみれたぞ!」

「……さっすが天下の獅子堂財閥。いるところにはいるのね、メイ

ドつて……」

「うっわ、うっわー！　すごいなあ、優姫先輩！　やっぱり先輩専属の娘とかだつたりするんですか？　紹介してくださいよ！」

ギャラリーも四者四様の興奮を見せている。ああそっか、獅子堂ってなんか大財閥のお嬢様らしいんだっけ。てことは本当に本物のメイドなのか。

しかし、よくよくメイドに縁があるなあ。先週金曜の謎のアサシンメイドに始まり、割烹着メイドのウェイトレス、歓迎会じゃ杏李先輩のコスプレ、終いには本物が来たかあ、流石に脱帽だよ。人生で最もメイドとのエンカウント率が高い一週間だな。メイドウィーク。本当、この街に戻ってきてからイベント尽くめの濃い毎日を送りっぱなしだぜ。誰か、俺に安息プリーズ。ま、このメイドとは接近遭遇以上の関わりはないだろうけど。

「サフィエル。少し落ち着いて、それから離してくれないか。後輩たちも見ているだろう」

獅子堂のその言葉でサフィエルという名前らしいそのメイドが初めてこちらに顔を向けた。ルビーの瞳に俺たちの姿が映り込む。途端、それまでの満面の笑顔が、まるで汚物を見るかのような顔に変わった。

「サフィとオネーサマとノ感動の再会ヲ邪魔するナ、この虫ケラども」

ものすつごい態度の変わり様だった。

その言葉で輝燐と明野は頬を引き攣らせ、乾はあまりの変わり身に硬直し、藤田は……変わらんなあ、相変わらずあつはつはと笑っている。こいつの思考回路だけはまったくわからない。まあ、独特ての自然素材を一般ピーポーが完全に理解しようとするほうが間違っているのか。

「サフィエル」

獅子堂の語調がキツめになる。メイドは獅子堂から離れて一礼し、しかしそれでも自らの意思を変えなかった。

「事実デス。オネーサマと比べれば全ての人間八塵芥のようなモノ。であれば、コノ有意義な時間ヲ邪魔する無粋者ヲ虫と呼ブことに何の問題がありませんョウカ」

「言ってくれるじゃない。塵芥に虫ですって？ そのクチ溶接してほしいのかしら？」

「当然というか、始めにキレたのは明野だった。プライド高いもん。な。けど、」

「お前もさつき人のことを虫扱いしてなかったか？」

「そんな昔のことは忘れたわ」

銀の尻尾かみを指で梳きながらさりとのたまう。何気にひでえ。

「ボクもね。流石にここまで言われて黙って引ッ込んだら女が廃るつてもんだよ」

「続けて輝燐も拳を鳴らす。怒りに燃えるその姿は威風堂々。しかし、」

「お前、廃るほどの「女」があるの？」

鼻ッ柱に裏拳を叩き込まれた。

「だから、なんでそういうつも余計なことばかり言うかな……！」

しかしメイドはそんな二人の怒気も意に介した様子はなく、言い放つ。

「事実を指摘しただけデ怒るンじゃない。自ラの卑小さモ自覚出来ない様じゃ器もたかガ知れてルね」

「初対面の人間によく言ってくれるわ、貴女。貴女こそ小間使いらしい口の利き方を学習したほうがいいんじゃないか？」

俺に対するように突っかかってこそいかないが、冷笑を浮かべた明野の言葉には静かな炎とでも言うべき十分な怒りが洩れ出ている。

「先輩の知り合いだからって何言っても許されると思わないですよ。ボク、結構短気なんだから」

対して輝燐は分かりやすい。表情からすっかり笑顔が消え、敵対者を睨む目つきになっている。ああ、ちょうど越してきたばかりの俺を見る目つきか。こいつ、敵味方の区別ははっきり付けるタイプ

だっただんな。

「お前たちこそ、オネーサマの後輩だからと情けヲかけてもラえるなド思わナイほうがいい。イヤ、お前たちゴときガオネーサマと話すナ近づくな。オネーサマが穢れル」

そう言ったメイドの袖から彼女の両手ヘストーンと何かが落ちる。俺の目が確かなら、それはテーブルの上で、それも食卓という限定時にのみ使われるはずのもので。

すなわち右手にナイフ、左手にフォーク。

「……………」
改めてメイドの格好をよく見る。暗かったこともあつて細部までよく覚えてる自信はないんだが、この片言といい……

「……………！」
「あんだ……………！」

輝燐も気付いたか。明野まで反応したのは意外だが、こいつの立場を考えれば何処で遭遇してても不思議じゃない。

そう、あの仮面メイド。

「……………なんやねん、それ」

そんな緊張感にも気付かず、乾が珍妙な武器（乾は武器とすら認識してないかもしれないが）に突っ込みを入れる。

「メイドの嗜み」

嘘つけ。こつちを見もせず事も無げに言いやがって。

「……………」

輝燐が完全に構えを取った。スタイルは空手。対するメイドの前傾姿勢はその殺気と相まって獣の様。

「フツ」

一呼吸。同時に地を蹴り駆け出すメイドは次の瞬間、スパンツという小気味よい音と共に床に顔を正面衝突させていた。
「いい加減にしろ、まったく」

為したのは彼女に敵と認識された輝燐ではない。

「ここをどこで私を誰だと思ってる。私立霧群学園、私はその生徒

会副会長だぞ。部外者に暴れられるのを黙って見過ごせると思うか。それが身内なら尚更だ」

獅子堂優姫。彼女はメイドが始動するタイミングを完全に読み切り、合わせて足払いと掌打の打ち下ろしをかましていた。

「アウウ……」

「すまない、我が家に仕える者が迷惑をかけた。しかしあの程度の戯言に易々と反応するのも部の先進としてどうかと思うがな、桜井」

「う……」

一睨みで輝燐が後退った。獅子堂の怒りは分かりやすい。言葉遣いが乱暴になるからだ。

顔を上げたメイドが輝燐を睨む。しかし獅子堂の視線に気付くとすぐ目を逸らした。

しかし、これは一言突っ込んでおくべきだろ、今後の為にも。

「だがな、獅子堂。そう言うならお前も結構頻繁に怒ってないか？

俺とか、キョウとかに」

「サファイエルは純粹なだけだ。会長は確信犯だし、周防、お前は性根が曲がっている。だいたい、どちらにしても私はお前たちに実際に手を上げたことはないぞ」

「……え？ 嘘、マジ？」

言われてみればその通り……かも？ 強いのは分かるけど、実際の強さを目にしたのって下着ドロ事件の時だけのようない気がする。威圧感だけで既に暴力みたいなもんだからなあ、こいつって。もう何発も殴られてるみたいない錯覚に陥ってたよ。しかしそうか、なるほど。

「……だからって今後もそうとは思わないで。私だっていつ堪忍袋の緒が切れるか分からないんだから」

「……OK、ボス」

「ボクとしてはこおりちゃんは一度先輩に徹底的に叩きのめされたほうがいいと思うけどなあ」

恐ろしいことをさらりと口にするんじゃないやねえ、と嘆息して、

「……………ふえ？ コーリ？」

ぼつり、耳に届いた小さな言葉。その元へ向けた視線は、ルビーの光と交わった。

「……………」

「……………」

かちんと硬直したままこちらを凝視するメイド。その突然の停滞に一同 俺自身も例外でなく 怪訝な表情で首を傾げる。

そんな不審極まりない彼女へ声をかける役割は、当然彼女に最も近い者が請け負った。呼び掛けとともにメイドの肩へ手を伸ばす。

「おいサファイエル、どうし」

しかし、その獅子堂ですら、彼女の次の行動には反応出来なかった。

「コーリ！」

固まった表情から一転、花が咲くかの如くパツと輝く笑顔。同時に地を蹴り、獅子堂の手を擦り抜け、引き絞られた矢の如く真っ直ぐに俺へと跳んできた。

「はあっ!？」

俺は獅子堂とは違う。至近距離から跳んでくる人間を咄嗟に避ける反射神経もなければ、受け止め支える足腰の強さもない。

つまり、ぶつかかった勢いと衝撃で後ろに倒れて、後頭部を強打するのは自明の理であった。

ガアンッ

「ぐおっ」

脳みそが揺さぶられて世界が回る。目の前がフラッシュでも焚いたみたいにチカチカする。それを頭を振って強引に打ち払った。俺にとってはその程度のダメージだ。

「お前、いきなり何を」

しかし、今この状況においては目の前が点滅したままなり気絶するなりしていた方が幸運だったのかもしれない。

「コーリい……………コーリだア……………」

至近距離。目前数センチの顔という不意打ちに心臓が跳ねた。潤んだ瞳。浮かべた微笑。それらが細部まではつきりと読み取れる距離。

まるで時間が止まったかのように、身体がびくりとも動かない。すつと彼女の顔が視界から消える。しかしそれで緊張が解れる事はない。何故なら、彼女は俺と類同士を摺り寄せてきたからだ。

「ああ、サフィの馬鹿……なぜさっさと気付かないの。この口、この鼻、この髪……何よりこの瞳。こんな瞳をした人が何人もいるわけナイじゃない、この凡俗メ……ああッ、コーリ、違うからネ？

虫けらつて、コーリの事じゃナイの。サフィ程度の存在がコーリを貶めルなんてありえない。ああッ、でもサフィハ……ごめんなさい、こんな碌に目も見えていない畜生デ。でもお願い、見捨てないでコーリ」

「な……な……」

耳元での囁きとともに顔中を撫で回されて、まくしたてられる言葉が全部右から左へ流れていく。なんだ、一体何なんだこの状況。

「アア、それにしてもなんて素晴らしい偶然。まさかすでにコーリとオネーサマがお知り合いだなんて　ハッ」

それは跳びついてきたときと同様まったく唐突に、メイドは俺の身体から跳び離れた。その時ようやく周囲の人間が目に入る。全員、あの獅子堂までもが茫然自失の様で俺たちをただ見ていた。約一名普段にも増して能天気な笑顔で面白そうに見ていた奴がいるが、そいつはやっぱり大物が大馬鹿だ。そして肝心のメイドは、まるで何か大変なことに気付いてしまったという顔で。

「も、ももも申し訳ありませんオネーサマアッ！　折角のコーリとのデートヲ邪魔してしまうなんて、このサフィこそが無粋者でしたアッ！　どうか、どうかこの不出来ナ愚か者をお許シ下さいいっ！」

今度は平謝り。めまぐるしい態度の変化に最早誰もついていけない。まずい、思考を停止してたらいつまで経ってもコイツの独壇場

だ。よし、とりあえずコイツの言葉の内容を一つ吟味してみよう。

……終了。今、この黒イノシシがほざきやがりましたのは。

デート。誰が。

獅子堂が。誰と。

俺と。ほつほつ。

なるほど、そうか。アツハツハ。

「……ありえねえっ!!」「……」

リリース
リリース
硬直の解除と同時にハモツた。しかも四人同時に。

「あウツ!?!」

周囲で同時に叫ばれて耳鳴りを起こしたのか、メイドが耳を押さえる。

「ど、どうしたのコーリ、オネーサマ? そしていきなり低周波を撒き散らすな騒音公害」

「ばばば馬鹿言わないでよねっ! なんでこおりちゃんが優姫先輩とでででデートなんて」

「……なんで貴女が一番挙動不審なの、桜井」

頭が痛いと言つかのようにこめかみを押さえる獅子堂。実に板についている、と言ったら睨まれるだろうか。あ、睨まれた。そして何やら眉を顰めたメイドが口を開きかけたが、

「……周防君。あんた、この罵詈雑言メイドと知り合いなの?」

明野の白けた視線がこちらに向けられると同時に留まった。それを一瞥して一言。

「いや、知らん」

「!?!」

その瞬間のメイドの表情はまさしく啞然。それを見て明野は再び訊き直してくる。

「周防君。いくら衆人環視の中、人目もはばからず猥褻行為に及ぼうとする破廉恥痴女メイド相手だからって別に他人の振りすることはないのよ?」

「お前もそのメイドに負けず劣らず毒舌だが、生憎知らんものは

知らんとしてか言いようがない」

「!??」

「ドSつちゆうならこおりはんもやと思うけど。あのメイドさん、すっかり凍りついてるで」

それどころか、顔色がどんどん蒼褪めていく。身体が小刻みに震えだし、目尻にじわりと涙が滲んで……っておい、なんでそんな目で俺を見る？

「さ……サファイエル」サザンウインドだよ、コオリ!? 貴方の、トモダチの!」

涙目で必死にアピールされても、俺には本当に覚えがなく、出来ることといたら首を傾げるのみ。さらに愕然とするメイド サファイエル。む、なんか周り中から非難の視線が。

「忘れちゃった……? コーリがサファイを忘れちゃった? 『あの時』のことモ? そんな、なんで……」

ゆらり、とサファイエルの膝が崩れるが、すんでの所で倒れず踏み止まる。しかし平静ではないらしく、ブツブツと何やら呟きながら忙しなく視線を彷徨わせていた。

「ありえない。コーリは『トモダチ』って言っタ。だからありえない。デモ、じゃあなんで……」

その視線がある人物と目が合って止まる。その人物はきよとんとしてきよるきよると周りの人間を見回した後、ようやく自分が注視されていると気付く、というお約束の行動を行った後、

「な、何さ」

若干気圧された感じで問うた。

「……『サクライ』?」

「え? う、うん。桜井輝燐」

「……『コーリチャン』?」

「え、あ、うん? えっと?」

戸惑う輝燐と対照的にどんだんサファイエルの声色が剣呑さを帯びていく。視線にもどことなく敵意 どころか殺意がこもってるよ

うな。

「何をシたっ！……！」

ドカンッ、と大砲の発射音のような叫声が轟いた。うおう、耳鳴りが。ガラス窓がビリビリと振動しちまってら。

「ちょ、いきなり何」

抗議を言い終えることなく反射的に身を逸らす輝燐。一瞬前までその身体があつた空間を通過してフォークが壁に突き刺さつた。

「コーリに何をシた！」

「なっ、一体なんのことさ！ わけわかんない言いがかりやめてよ！」

「とぼけれなっ！」

袖の中から三本のナイフが取り出される。指の間に挟んで鉤爪のように扱いつつ輝燐を指す。

「もう一度訊ク。ハルカとオマエはコーリに何をシた……！」

「……遥香さん？」

予想外のところから我らが家主の名前が飛び出したことに困惑する。輝燐も同じ感想を抱いたのか、問い質そうと口を開こうとした、その間際、

ゆらり、サフィエルの脇の空間が陽炎の如く揺らいだ。

「……！！」「」

それを目の錯覚と捉えず、正確に理解できる人間はこの場に三人うち一人は硬直し、咄嗟に反応できたのは二人。一人は同様に陽炎の門を開き、一人は『霧』を呼ぼうとする。しかし、二人ともが直感している。間に合わない、と。

「やめないかサファイ！」

故に、その拳動を止めたのは第三者の声だった。

「……キョー」

サフィエルがちらりと視線を向けた先に居る人物の名を呟いた。

そこにはこの学園の生徒が二人。うちの男子、こいつにしては珍しく困りきつたという表情をしている。

名前は遠見京之介。この学園の生徒会長兼

「……オマエもココにいたノか。ん？ とユーことハー、キヨーはコーリと一緒にいることをサフィに黙つてたつてことカナー？ サフィってば仲間外れデ悔しいナー、悲しいナー。プチプチ潰してやりたいナー、食玩のラムネヤロー」

「……あれつてオマケどつちなんだろ。

「いや、まあ、それはねえ……」

これまた珍しい事に齒切れ悪く視線を逸らしている。そこへ助け船を出すように割り込んできたのはもう一人の生徒。

「相変わらず口が悪いですね、サフィさん。メイドさんの基本は笑顔で『お帰りなさい、ご主人様』ですよ。恥ずかしいならご一緒にやって差し上げましょうか？ あいにく私はメイド服じゃありませんけど」

淑やかな風貌、丁寧な口調とは裏腹の挑発にしか聞こえない言葉を吐き出した女子の名は石崎杏李。去年の生徒会長らしい。もう引退してるのに頻繁に生徒会室へ顔を出しては毒を零していく女だ。

「……オマエもいたンだったナ。相変わらさずぶざけまくつてるネ、コノ超肥満体女」

「あら、これでもウエストのサイズには気を遣つてるのですよ？ そ・れ・に、コーりんはここが大きくて柔らかい方が好みみたいですよ？」

そう言いつつその90は下らないとされる二つの球体をわざと揺らして見せる。むう、相変わらさずの迫力に思わず脱帽です。そして女子生徒諸君、その冷え切った目をやめてくれませんか。

「……プチコロス」

うおう、サフィエルの顔が今にも憤死するんじゃないかねえかつてくらい真っ赤だ。

「コーホー、コーホー」

呼吸音もなんかおかしいし。ていうか火種が輝燐から杏李先輩に移っただけじゃないか？

「……あんり」

と思つてたところへ聞き覚えのない声が聞こえた。その声に反応して振り返つた杏李先輩。その動作でやっと気付いた、先輩の後ろに線の薄そうな女子生徒が一人いたことを。

「はい、どうしましたか水芭みずはさん？」

「……喧嘩、しにきたんじゃ、ないよね」

短い三つ編み、不安そうな視線と声、いかにも気弱でおとなしそうな雰囲気の少女が杏李先輩の袖をぎゅっと掴んで離さない。

彼女の方へ振り向いた杏李先輩の顔はここからだとはよく見えなかつた。しかし、

「もう、心配症ですねえ。大丈夫ですよ、こんなのは挨拶みたいなものですから」

その声は、今まで聞いたことのない程穏やかなもので。

「……あちらは挨拶では済まないようだが？」

「あら、大丈夫ですよ。ホラ」
ズドンッ

強烈な音。その発信源で地に叩き付けられたサフィエルの頭がぶすぶすと煙を出していた。

「学習能力ないのか、お前は」

「……ゴメンナサイ、オネーサマ」

「……なんというか。」

「もうグダグダね」

明野サンが見事に代弁してくれましたとさ。

第三話 戦慄雲散 そんなことより温泉に行こうよ！

「温泉へ行きましょう」

その唐突なセリフは、廊下での騒動が鎮静化されてからその場の全員で生徒会室まで移動して、鳳さんが淹れてくれた温かいお茶を飲みながら一息吐き、まったりしかけたところへ、スツと立ち上がった杏李先輩の口から不意討ちのように飛び出した。

「……」

そのあまりにいきなりな提案……提案？ 杏李先輩のことだから、もう決定事項でいる気なんじゃあないだろうか……？

ともかく、その「提案」に、ボクを含めるこの場に呼ばれたメンバーは何と返せばいいのか、反応に困ったという表情で沈黙している。

そんな最中、コトリとティーカップが置かれる音と落ち着いた吐息がよく響く。

「良い腕だね、オマエ」

「ん、ありがとう」

「名前八？」

「鳳真砂。甘味処「おととり」の看板娘」

「覚えとくヨ」

「……あの、優姫先輩。その黒メイド、いつまでいるんですか？」
声を潜める事すらせず言ってる。

「き、輝燐はくん？ もー少し、オブラートに包みはったらいかがでっしやる？」

啓吾が何かぼそぼそ言ってるけどよく聞こえない。

「何？」

「い、いや、なんでもあらへんよ？」

「ザコキャラだなー、けー」

「桜井さんって敵には容赦しないタイプなのね。……誰かさんと同じで」

「似てきた、というべきかも。ストレートな物言いか。同居の成果」

「いや、そういうことならお前もなかなかだと思っぞ？　つつかあれが地だろ」

と、また各々が好き勝手に喋り出したところへ、

「温泉へ行きましょう」

杏李先輩が繰り返した。……ああ、覚えあるぞ、これ。始まりは一年近く前、苗字じゃなく名前で呼ぶよう矯正（あるいは強制）されたっけ。一言ごとにプレッシャーが増してくんだよねえ。このやり方でいっただい何度押し切られたことか。

「温泉へ」

「……石崎先輩。流石に説明責任くらいは果たしてください。いきなり用件だけ押し付けても訳が分からないに決まってるでしょう」
そこへ「呆れた」と言う声音の天の助け。その主はもちろん、この程度のプレッシャーじゃあビクともしない霧学最強、優姫先輩だ。
「姫さんにダメ出されては仕方ありません。では、」

「行かね、帰る」

さらにもう一人、実に面倒臭いと言いたげに溜め息を吐いたのは誰か、もう語るまでもない。

「ひどいです、こーりん。ご一緒に旅行に行きましょうと、つい先日お誘いしたばかりじゃありませんか」

「知りませんよ、なんですかそれは。一体いつの話です」

「つい三日前のことですよ。ほら」

Three days ago

「……なんか、仕事量多くなってる？」

PCの脇に積まれた書類の束を見てげんなりする。その眩きに反

応して獅子堂が視線をちらと上げ、すぐ目の前のPCに戻した。

「気のせいじゃないわよ。この学校、騒動が多くて忙しいんだから。いつまでも新米待遇で楽させておけないの」

更にげんなりした。こっちは新米気分どころか、生徒会に入ったこと自体不承不承だったのに。

「今日の騒動、周防も一枚噛んでる」

新しいお茶と一緒に余計な突っ込みも入れてくれた鳳。まあ、その辺の始末書も書かされた訳だけど。

「それでも、今年はまだ少ない方だよ？」

そう言ったのは二年の男子生徒。顔の造り、話し口調ともに柔和、役職は書記で……名前なんだっけ。

「そうなんですか？」

返したのは書記の一年女子だ。ちなみに今期の生徒会の振り分けは、生徒会長と副会長が一人ずつ、会計と書記に一年と二年が一人ずつ、庶務に一年二人（俺と鳳）の計八名だ。

「ああ。ほら、去年は獅子堂と石崎が、ホラ、いろいろ……ねえ？」
「……私は、暴走したあいつを止めに回っていただけだ」

無然とした様子で書記二年男子を睨め付ける獅子堂だが、正直説得力に欠ける。実状がどうあれイメージとして、獅子堂とは猛威そのものなのだ。

「あはは、まあ、おかげで今年はそれ以外がおとなしくしてた訳だから、ね？」

何が「ね？」なのかわからないが、成程、こいつ以上に抑止力として効果的なヤツはそう居るまい。

「今年 新年になってからまた楽しく もとい、騒がしくなってきたがね」

キョウがこちらをニヤついた表情で見ながら話に割り込んできた。ふうん、新年の抱負で「はっちゃける」とでも宣言したヤツでもいたのかね。

「なに「自分には関係ない」って顔してるのよ、中心人物が」

「え、なにそれ。俺普通に学生生活送ってるだけなんだけど」

「無自覚、救い無い」

短い言葉でプスプス刺してくるなあ、この割烹着メイド。

「……そういえば、今年に入ってから石崎先輩が騒ぐとこまったく見ないんですけど、何か悪いものでも食べたんですか？」

この書記一年、さらりとヒドイこと言ってるけど多分まったく自覚無い。天然つて怖いよね。まあ、それはともかく。

「あの先輩は騒ぐってタイプじゃないだろ。実働するより暗躍して扇動する人間じゃん」

と、まあ至極まっとうと思われる指摘をしたが、その言葉を聞いた皆まとめて眉を顰め、すぐに納得したように頷いた。何だ？

「そうか、転校してきたばかりの周防は知らないよね」

「とはいえ、あいつが学園にいれば確実に周防と接触してただろうな……」

「え、石崎先輩、学園に居ないんですか？ まさか、休みの間に停学喰らうような騒動起こしたとかですか？」

……元々の俺の疑問に答えることなく各々嘆いたり驚いたりし始めたぞ。まあ、どうでもいいけど。

で、ようやく思い出した。そーいえば昼休みに聞いたっけ、杏李先輩には弟が

「翠歌くんは、去年から一人旅の真っ最中なのですよ」

ドアの開く音と同時に会話に加わってきたのは、毎度お馴染み、元生徒会長であるところの石崎杏李、つまり今まで話題にしてた「石崎」の姉の方だ。

明らかにドアの外で話聞いてたよなー、と思いつつ闖入者の方へ視線を傾けて、

……ちよつと引いた。なに、あのだらしなない緩んだ顔。

「なんですか、なんですか。皆さん、翠歌くんのお話をされてたのですか？ 仕方ありませんよね、翠歌くんカッコ可愛いですものね。でも駄目です、翠歌くんは私と水芭さんのものですから」

「なにこの弟プッシュユ!? あんた、外見だけは清楚で礼儀正しい黒髪美人ってキャラじゃなかったの!? まるで自分の得意分野を語るマニアの顔じゃん、割と台無しだぞ!?!」

「……すごいね、周防。誰もが思っても言わなかったことを躊躇なく……」

「それが周防の、周防である由縁さ」

「なんで貴方が偉そうにしてるの、会長」

そしてどいつもこいつも平然とスルーしてるし……要は、珍しいことじゃないってことか。

「それはプッシュユさせて頂きますよ。私、翠歌くん大好きですから」

「ああ、そう」

OK、これ以上は何も言うまい。杏李先輩が超の付くブラコンだろうが、俺にはどうでもいいことだ。

「……で、石崎先輩。あれは、まだ帰って来ないんですか」

「はい。可愛い子には旅をさせよといいますけれども、流石に一ヶ月近く翠歌くんのお顔を拝見していないというのはなかなか辛いものがあります」

「ふむ、無事は確認しているのかね?」

「それは間違いなく。三日に一度は水芭さんの方へ連絡が入っていますから」

「あれ? 先輩の方から連絡してないんですか? なんだか毎日連絡してると思ってたんですけど」

「はい。本当なら一日に数回はお話をしたいのですが、あちらから着信拒否にされてしまいました」

……この溺愛ぶりの姉から、一日に何度も電話されたらうざったいだろうなあ。ん? 俺の記憶が正しければ(自信ないけど)弟の方もシスコンってハナシじゃなかったっけ? だったらむしる喜ぶモンなんじゃないのか? よく知らんし、どうでもいいけど。

「あいつに限ってその辺は心配してないけど……進級大丈夫なのかしら。二学期も割とギリギリだったんでしょ?」

「翠歌くん、割と自由人ですから」

「答えになってない」

「写真ご覧になれますか？ ラーメンのドカ盛りを見事時間内に完食された記念写真ですよ。すごいですよ、こんなにお食べになられたのに、無料で済ませることに成功したのですよ」

「……それ、もしかして手持ちの金がヤバイことになってるってだけなんじゃ……？」

「翠歌くんのチャレンジャー精神に乾杯です」

「……まあ、無一文になる前には戻ってくるだろう。多分多分だよ。」

ところで、これだけ話に参加してても獅子堂の作業速度は少しも落ちていない。成績は優秀っていうほどじゃあないって話だが、マルチタスクの技能は高いらしい。その辺のことを言ってみると、「慣れよ」

なんと素っ気無い。まあ、人のことは言えんし、実際のところ照れられたりしても逆に反応に困るし。

「ふむ……旅行か」

と、不意にキョウウの呟き。なんだろう、何故だろう。無闇に不安が増していく。

「よし皆、行こう」

「よし、じゃねえよ」「よし、じゃないっ……」

見事に獅子堂とハモツた。

「頭から否定することはないだろう。親睦を深めるのは大事だぞ？」

「私も旅行自体は否定していない。合宿扱いで企画するのでもいいだろう。だが、いったい何時行くつもりで言った？」

「うむ、今週末なんてどうだ？」

「却下に決まっているだろうが。先代の生徒会長がいろいろ行事を増やしてくれたおかげで、これから相当忙しくなることぐらい、去年から生徒会に居るお前が一番よく知っているはずだろう」

「……あんた、何余計なことしてくれてんですか」

道理でたかが学生のお仕事にしちゃあ妙に忙しいと思ったよ。

「いけませんよーりん。既存の事、言われた事しかなさらないようではせつかく運営組織に在籍している意味がありません。それに生徒の皆さんにはとてもご好評でいらしたのですよ」

「いやあまったく、脱帽ものの手際だったよ。当初は実現不可能と思われていた企画の問題点を、予算の捻出成功を皮切りにトントン拍子に解決していったね。見事学園側の首を縦に振らせたのさ」

「そもそもこの学園自体お祭り好きな風潮はあるからね。喧嘩も祭りの華にするくらいだもん」

その言葉に昼間のことを思い出してげっそりする。俺が本当の意味で『恐怖』を覚える数少ない人間、獅子堂優姫。金払ってでも回避すべきそいつとのガチンコ、書記二年の言葉はその実現を諦めていない頭の沸いた輩がわんさか居るといふ事実を示唆するもので、実に頭の痛い話だ。

「その分限度を超えたときの対応は厳しいけど。一発退学も珍しくはないわ」

ふうむ、シビアね。しかしPTAとかそれで納得してんのかね。

まあ、俺が気にするところでは全くないな。

「学園の教育方針についてここで議論しても仕方あるまい。話を戻して、今週末の旅行の件だが」

「いやいや、なに行くのを前提にしてるんだ、お前は」

「そーですよ。わたし、日曜はデートって決まってるんです。ようやくここまで漕ぎ着けて、彼氏が出るかどうかの瀬戸際なんですから」

「何気に自慢してみたかったただだよ、三条さん……」

「……………振られてしまえ」

ここまで一言も喋っていなかった会計の二年女子が、陰鬱そうに一言だけ呟いた。

「ひ、ひどっ！ ちょっと、可愛い後輩を応援してあげようとかいう優しさはないんですか！」

「……………」
書記一年の抗議に耳を貸さず黙々と仕事を続ける会計二年。ちなみに、会計一年はこの場にいない。昼休みのうちに来るだけ終わらせ、残りを自宅で片付けてくるといふパターンが毎度のことだそう。こうして見ると、書記が社交的、会計が独特な人間という変な対比が窺えた。

「私も、店の手伝い」

「ほら見る。皆にも都合があるんだ。急に企画を入れても、参加人数自体が少なくて成功には程遠いだろう」

「ううむ。本格的に忙しくなる直前だからこそ、良い機会だと思っただがね」

「どうしても言うなら、春休みまでに、今度はしつかり予定を立てておいてください」

「いやあ、俺は集団旅行自体行く気がしないんだがなあ。」

「まあ、仕方あるまい。では、これはどうだ？ 今日の昼休み以降、優姫女史と周防のタイトルマッチ開催を望む声がそこかしこから出ているのだが」

「私と周防を見世物にする気か？ 生徒会長にあるまじき暴言だな、本気で解任動議を起こすぞ？ いや、その前にお前が私と試合しあひってみるか？ 生徒会長対副会長だ、これこそタイトルマッチと言えるぞ？」

「ははは、御免被る」

乾いた笑い声で引き下がるキョウウ。昼休みでの獅子堂は少々乗り気だったから少し心配だったが、杞憂に終わって助かった。獅子堂と戦い合うなんてねえ、想像するだけでも、

Answer: 必ず一度は殺される。

呼吸が止まる

心臓が早鐘を打つ

顔が強張る

生理現象として生じようとするそれら全てを意思で封じた。表に出すな、今の俺は不味い。

この場に居る全員を、再起不能にしかねない。

……おい。なんだ今のは。いや、現象としては判っている。自身自身の『異質性』で出来ることくらい把握してる。問題なのは、“ソレ”が俺の制御を離れて拳動を起こしたこと。本来常時発動している筈の“Ripple”が漏れたのとは比べ物にならない。『隠し札』として指定している“ソレ”は、今の俺では一定の手順を踏まないと使えない筈の現象なのだ。

その原因をどうにか解釈してみるなら……言い方として少々苦しいが、無自覚で意識的に発動した、ということか。『隠し札』の使用を無意識下で容認するほど、獅子堂は脅威の存在である故、あの『異質性』のレベルを無自覚で引き上げ、“アレ”を使用していた。うつわあ、それが真実なら俺はどれほど獅子堂に恐怖してるんだ。俺は自分で思っていたよりずっと臆病だったのか。

……あるいは。本当に全くの無意識で、つまり手順抜きでごく自然に発動していたのなら。

それはつまり。

無意識的に発動できるレベルまで、俺自身が引き上げられていた……？

そこで気付く。さっきの俺は、“アレ”も、“アレ”も、“アレ”も使用可能状態になかったか……？

それが意味する事すなわち、獅子堂優姫とは

「どうしたの？」

そのなんでもない一言は、不安定な積み木を突く行為で

「あ、いや、なんでも」

あつた筈なのだが、何故か今まで迷い込んでいた思索の靄は、綺麗さっぱり斬り裂かれていた。

「そう……？」

心配そうにこちらを覗く獅子堂の裸眼。手早くレンズを拭くと、その瞳はすぐ眼鏡の向こうへ隔てられた。

そして、今までの俺の思考も霞で隔てられたかのように見えなくなっていることに気付く。それに首を傾げながらも、詮索はしなかった。自分で自分を詮索する、つてのも変な話だが。

「それでは、私は卒業旅行に行つてきたいと思います」

と、唐突に、いや順当にとも言えるか、終わったはずの話題を引き継いで杏李先輩がそんな発言をした。

「……それこそ卒業してから行くもんじゃあ……？」

「私、長期の休みに入るといろいろと忙しくなるのです。ですから、確実に余裕のあるうちに行くのが最善だと思ひまして」

含みのあるセリフだな、あつち方面の。

「国内の旅行ですとやはり温泉は外せませんよね。花見も素敵ですが、温泉で一番風情があるのは雪見ではないでしょうか。ここ近年気候が不安定ですから、今のうちに出掛けるのがベストでしょう。こーりんもそう思われませんか？」

「ん？ いや、いいんじゃないの？」

なんで俺に聞く？ 自分の都合がついてるなら、勝手に行けばいいだけの話だろうに。

「そうですか、安心しました」

一言そう言って微笑む先輩。特に裏を感じさせるような態度ではないのに、いちいち勘繰ってしまうのは決して俺の性格だけが原因ではないと思う。しかし、それ以上何も言つてこない以上いつまでも気に留め続ける訳にもいかない。

「……ねえ、周防。貴方、手書きの方が早いんじゃない？」

「……そのうち慣れる」

今までもろくにパソコンを触った事もなかった俺の手付きはとても

ただたどしいもので、周りの作業からどんどん取り残されているのだから。

「触れた電子機器が片っ端から壊れた、なんて面白　厄介な経歴があるなら早目に申告してくれたまえ。去年の生徒会役員で、コンセントに引っかけかかって転んだ挙句データをパソコンごと吹っ飛ばすわ、バケツの水をぶちまけてショートさせるわの惨事を起こした人間が居たからな。それを思えば担当分を手書きに変更する程度の融通は利かせるぞ?」

「いや、そんな酷くは。てか、そんな漫画みたいな人間がほんといるのか」

「ふふふ、世の中は広いですねえ」

後日、俺が報告書を書き上げた直後にスツ転んだ杏李先輩の手がパソコンをおもいっきりぶっ叩き、フリーズを起こした時点でドジッ娘生徒会長の逸話を聞かされる羽目になる。

R e t u r n n o w

「思い出されましたか?」

「……俺は一度たりとも行くなんて言っていない」

「いいえ、確かに「いいんじゃない」と」

「俺が、じゃなくてあんたが、に決まってるでしょうが」

流石に無理があるとボクも思う。

「しかしですね、集団での旅行券が手に入りました。十名までなのですが、余らせてしまうのも勿体無いのです。他の生徒会の皆さんにはもうお伺いしましたが、既に土日の予定を入れられてしまったそうなのです」

「卒業旅行なら卒業生だけで行きやいいじゃないですか」

学内男子の人気を明野さんと二分するこの人が誘えば入れ食いだろっね。

「今の時期は皆さん必死ですから。旅行に行く、なんて言ったら恨

まれてしまうので、お忍び旅行です」

「……ええと、鈴木先輩はいいんですか……？」

と、この場にもう一人いる三年生、鈴木水芭先輩に視線が集中すると、彼女は縮こまって視線を俯けてしまった。

「当然、問題ありません。私と同じく、水芭さんも推薦で合格なさってますから。それにそもそも、旅行を当てた当事者が行かれないなんてどうかしてます」

「当てた？　つてもしかして、商店街の福引きかしら？」

心当たりがあつたらしい明野さんが訊くと、鈴木先輩はこくりと頷いた。

「う、うん。特賞の、温泉旅行集団御招待券……」

「流石、水芭さんです」

「へえ、太っ腹だねえ。普通そういうのって、ペアか家族旅行が普通じゃない？」

「それがですね、期間が今月いっぱいです」

……もしかしてなんかの余り物？　安物っぽいしあまり期待は出ないなあ。

「それ、来週に出来ないんですか？　今週の土日って……明日じゃないですか」

「今夜だけで準備うちゅうのも、えらい強行軍やしなあ」

「思いついたが吉日、とも言いますし。来週以降となりますと、少々この街を離れられない事情があります」

その事情ってヤツが相変わらずきな臭い。

まあ、折角誘われてるんだから行くけどな。周りを見るともう乗り気の人間もチラホラと見られた。

「温泉は混浴でっしゃるか！？」

啓吾が勢いよく挙手。見事と言いたいほどエロ全開だった。

「アホだなー、けー。それなら姫がとめてるぞー」

「藤田の言う通りよ、露天はあるけどな。あと、覗きが発覚したら酷いからな」

「……はい」

現地へ行く前から釘刺されちゃった。さもありません、ってカンジだけ。

続いて、明野さんが軽く拳手。

「せっかくのお誘いですけど、あたしは辞退させてもらいます。教会を空けてくるわけにもいかないのよ」

「……あそこって人来んの？」

「あら、お言葉ね。教会は常に迷い子へと門を開いているのよ。リアルに迷い込んできた人は一人しかお目に掛かった事ないけれど」
むぐ、とこおりちゃんが口を噤んだ。

「それに……その、旅費が……」

その一言でこちらのムードまで消沈する。え、えーとお財布の中身どうだっけ。

「……そうね。急な話だし……どうかしら、私が立て替えておくわよ?」

その優姫先輩の言葉に全員が目を剥いた。

「！ オネーサマがそんな」

「サファイエル、無粋なことは言わないでね。皆も気にしないで、せっかくの旅行にそんなことで水を差したくはないでしょう?」

「さすが姫、おーものだ！」

いやあ、伊緒の言うとおり。いくら家がお金持ちだからってなかなか言えることじゃない。ただのボンボンならともかく、優姫先輩みたいなしつかりした人なら尚更だ。

「そ、それじゃあ十二カ月払いで……いえ、だからあたしは行かないって」

けど、この反応からすると明野さんも行きたくないって訳じゃないみたい。

「ふむ。しかし、だ。状況によっては君も参加する気構えがない訳ではないだろう?」

「……ええ、そうですね。状況がどうなるか当日まで分からないの

で、保留ということでもいいかしら」

「ええ、構いませんよ」

……？ 何、この一連のやり取り？ どういう意味？

「真砂はどうするの？ 初めからここにいたってことは、参加なのかしら」

「うん。お父さんに許可貰った」

淡々と喋る鳳さんだけど、その声音はわずかに興奮を帯びている気がした。

「……つか、一番意外なのがさあ……」

こおりちゃんがちら、とその人のほうを見る。ボクも、皆も考えることは一緒だった。

「……言いたいことがあるならはっきり言えっ」

「いの一番に却下してたはずのお前が何でここにいるんだ、獅子堂？」

「ここで本当にはっきり言えるのがこおりちゃんだよねえ。」

「~~~~っ、いいだろう、私だって人間だ、心変わりだってする！

温泉は魅力的だ、観光だってしたい！」

そっぽを向いて吐き捨てるように言う優姫先輩。その顔は羞恥で

紅潮 って、そんなの初めて見た！

「いやあ、あんたに限ってそんな」

そして、こおりちゃんのターンはまだ終わらない！？

「こ、こおりちゃん、いいじゃない！ たまには日々の雑事を忘れて温泉に浸かるのもいいですよね！ ね！」

てかなんでそこだけいつもみたく放置してくれないの！ ええい、

ここは癒だけど黒メイドが「主を辱めた」とか難癖付ける事を期待

「コーリに言葉攻めされルオネーサマ……アア、素敵デス」

なにこの駄メイド！

「ふふふ、よろしいではないですか。姫さんが参加してくださって私は嬉しいですよ」

「く、うっ……」

更に言葉に詰まる先輩。ああ、見てらんない。

「ちよっと」

「オネーサマ困らせるナ、コノ雌牛」

……あつれえ？ え、なにこの変わり身？

「あらあら、雌牛ですか。いったい私のどこを指してそう呼ばれたのでしょうか」

そう言いつつ胸の下で腕を組む。圧倒的な戦力差がそこにあった。啓吾がガン見してるのはまあデフォとして、

ぐこっ

「……はにふる」

「ジロジロ見るな、エロこおりっ」

「みふえふえよ、いーふあふえんふあれふあ」

「それもそれで女の子に対してどうかと思っけど……っつか慣れるほど見たの!？」

つまんだ頬をねじる。ちなみに“Attack”働いてます。

「いふあい、いふあ」

ヒュッ、バツ、カンッ

風切り音に反応して咄嗟に腕を引っ込めたところをフォークが通過した。

「チッ」

露骨に舌打ちする黒メイド。……こいつ、いっぺん締めよう。

「……」

そして無言のままに優姫先輩の手が閃く。その速度は先ほどのサイフィ以上。スクリーン回転で飛ぶボールペンがだらしなく鼻の下を伸ばした啓吾の眉間を問答無用で撃ち倒し、啓吾は背後へ無様に引っくり返った。

「周防、乾。女性の胸を下卑た視線で舐め回すな、不愉快極まりない」

「いや、だから別に凝視してなんか」

「石崎先輩」

「……………」

諦めなよ、こおりちゃん。こういうとき、男性諸君の意見は一顧だにされないのが世の常つてもなんだよ。

「サフィエルをいちいち挑発しないでください。サフィエルも、わざわざ敵を作る言動をするな」

「しかしオネーサマ、アノ饅頭は一度モいだほうガ」

「止せ、と言ってる」

「……………ハイ」

「私も、少々戯れが過ぎました。ここで手打ちに致しましょう」

いつのまにか腕を解いていた杏李先輩が軽く目礼。ふう、と一息吐いた優姫先輩が暴走した話を元の路線に戻す。

「……………という訳だからサフィエル、私は今週末は帰れない。連絡する手間が省けたな、父様に伝えておいてくれ」

「……………父様って」

流星に突っ込んだ。メイドといいその呼び方といい、こんな地方の学園にいるのが不思議なくらいのお嬢様なんだよね、優姫先輩って。

そのお嬢様へ、メイドは一礼して謝意を述べた。

「申し訳ありません、オネーサマ。本日こちらへ出向いたのは、サフィも週末才屋敷を空けることヲご報告するためなのです」

……………お屋敷。うん、もう突っ込まないぞ。

「そうか。……………しかし、わざわざ来て伝えるほどのことではないと思うが」

「それハ！ オネーサマノご尊顔を拝見できナイと思うとイてもたつてモ……………！ しかしコノ判断は正解でシタ。マサカコーリの姿を見つけれることが出来ルなんて。それに」

最後、声の温度がスツと下がり、視線が真っ向ぶつかった。

「羽虫ガ湧いてル」

「上等だよ」

何でこんなに敵視されてるかわかんないけど、それはこっちも同じだ。さっきは一瞬戸惑ったけど、

「なんかお前、気に入らない」

「こっちのセリフだ」

拳を握り、フォークを取り出す。視線に飛び交う火花。俄かに一触即発。

「い・い・か・げ・ん・に・し・ろ・よ、貴様ら」

そんな空気は女帝の怒気で押し潰されました。

「サファイエル、桜井、いつからお前らは見境のない獣の如く暴れるようになった。少なくとも、私はそのように指導した覚えはないぞ？」

「あう……」

「ウツ……」

ボクは部の後輩として、サファイは従者として縮こまる。

そして、まったく関係ない鈴木先輩まで涙目になっていた。

「姫さん……」

杏李先輩の珍しい非難気な声に優姫先輩の怒気が萎み、決まり悪げな顔になる。

「……すみません、鈴木先輩」

「う、ううん、こっちこそ」

頭を下げる優姫先輩に、恐縮してペコペコと頭を下げる鈴木先輩。小動物っぽい人だな！。

ともかく、伊緒と啓吾はノリノリだからこれで九人。ぐるっと見渡して、最後の一人に視線をやる。ここまでお膳立てされてれば、

「パス」

うん、言うと思ったたよこおりちゃん。

第三話 戦慄雲散 そんなことより温泉に行こうよ！（後書き）

大変遅くなりました。ようやく第三話更新です。

回想部分、こおりのあの思考の部分がおそらく訳分らないと思います。おまけにアレとかソレとか指示代名詞が多くて。しかしこおり自身も『隠し札』と呼んでるように、こおりの所有する情報には今の段階ではオープン出来ないものが多いのです、ご容赦を。

第四話 上下関係 ある部活・ある幼馴染み・ある主従

結局こおりちゃんを翻意させることは出来ず、明野さんが未定でとりあえず現時点では八名の参加が確定になった。

わかってたことだ、こおりちゃんには集団の中にいる気自体が無い。

「でもですね、ボク、こおりちゃんは連れてくべきだと思うんですよ」

ヒュンッ

「ふうん、強制的に参加させても楽しめないと思うけど。その理由は？」

パシンッ

「だっていつでもどこでもひとりきりなんて、絶対精神衛生によくないですよ」

ビュッ

「だからとりあえず集団の中に放り込んでおく？ でも、それって逆効果になりかねないわよ」

スパンッ

「っとおっ、え、どうしてですか？ こおりちゃん別に内気って訳じゃないし、普通に話も出来るから、皆の中にいればそのうち自然に溶け込んでいきそうじゃないですか？」

シュ、シュッ

「ないわね。あれは強いて「孤」でいるわ。不特定多数の中に放り込んだところで、自分と他の差異を浮き彫りにするだけだと思うけど」

トン、パンッ

でも、自分と他人が違うのなんて当たり前なんだから、

「そんなの、妄想とおんなじです！」

踏み込み、中段突き。本気で打ち込む。

『異質性』“Attack”を乗せた、本気の拳。

「　　そうでもないわ」

その拳は左掌で受けられ、

ズンツ

同時の右脚の踏み込みにより、地面が揺れた。

流された。力が吸い取られたかのような感覚。一瞬の脱力。目の

前に、先輩の右掌。

「……参りました」

「うん。相変わらず直感に頼り過ぎね。もっと考えて身体を動かさない」と

「でも、偉い人は「考えるな、感じる」って」

「それは考える必要もないほど武が身体に染み込んだ達人の話ね。理性と本能の融合が至高であり、決してドタバタ殴りかかれと言ってる訳じゃないわ」

「ドタバタ……バタ……」

自分じゃあ無駄のない動きをしてるつもりなのに、先輩にはそう見えてるのか……。――

ズーンと落ち込みかけるボクに、優姫先輩は相好を崩した。

「ふふ。でも桜井の素直な拳は嫌いじゃあないのだけれどね」

そう言っただけで微笑うけど、片っ端から避けられいなされ、渾身の一撃に至っては正面から止められてる身じゃあ、到底褒められる出来とは思えなかった。まあ、優姫先輩にとって空手ってあくまで「趣味」らしいからね、そこまで厳しい水準を要求する気はないんだろう。

「で、少しは憂さが晴れたかしら。生憎打たれ役にはなってあげられなかったけど」

「はい、まあ……少しは」

気ままに殴るだけが鬱憤の解消方法じゃない。特に最後の―撃を避けず受け止めてくれただけでも気晴らしになった。こおりちゃんが見られるまで、ボクの本気を平然と受け止められるのはこの人だけ

だったのだ。しかも、こおりちゃんと違って純粋な技術で。

「で、周防のことだけど。そういうのって、確かにあるのよ。差異というより、どうしようもない隔絶って」

……大企業のお嬢様で、学園内では「最強」という不動の地位により畏怖の念を一身に集める人の言葉は、説得力があった。

「とはいえ、私もあれはあのままでもいいとは思ってない。あれは、放置しておくにはあまりに危険よ」

「危険……？」

「ええ。常識とか倫理観つてものを、平気で飛び越えそう」

聞き返したのは疑問の意ではなかったけど、先輩は律儀に返答してくれた。事実先輩の言うことは的を得ていて、「人を殺せる、殺した」とこおりちゃんは発言している。実際その場面を見てはいないけど、本当にやる、と思わせる雰囲気がかおりちゃんにはある。

「往々にね、才能のある人間っていうのは一人突出して行動したがるものなのよ。周りに合わせるより、最低自分さえ居ればどうにかなるって考えるのかしら。だから自分の意見をより正しいものとして通したがる」

そう聞くと子供っぽいだけ、と思うけど、

「ただ、あれはちよつと違うわね。自分の意見が優れている、なんて思考は微塵も無い。やると決めた、だからやる。それだけの決断力と行動力は正直 尊敬に値する。でも、だからこそ放置は出来ない」

驚いた。敬意という言葉もだけど、それ以上に何も知らないはずの先輩がこおりちゃんという人間をここまで理解していることに、だ。何か、そういったものを感じさせる出来事でもあったんだろうか。

「よく……わかりますね」

その台詞に少しいぶかんだような感情が混ざってしまったのは…
…多分、サフィの所為。

あの夕方、ボクたちを襲った仮面メイドとあまりに相似した姿、

動作。同一人物と断定して構わないだろう。そして、そのメイドの主である優姫先輩……。まさか、とは思うけど邪推してしまう。そっちの繋がりを。

「それは……まあ、根拠もない直感よ」

言葉を濁した、とは断言できない。この先輩の直感が優れているのはよく知ってる。それでも直感にしちゃ具体的過ぎかな、と思う。「そろそろ帰るわね。サフィエルも待ってるでしょうし」

「あ、はい」

こちらから質問を連ねる前に打ち切られる。仕方ないか、ここで突っ込んだ事聞いて雰囲気悪くなってもやだし。

もう三年の付き合いになるんだから、先輩がどんな人間かくらいは分かってる。だから、どうあっても悪いようにはならないだろう。背中を見せて武道場を去る先輩に、

「先輩、また明日です！」

いつも通りにさよならを言って、

「ええ、また明日」

いつも通りの返事を貰った。

そのまま先輩を見送って、

「……よしっ！」

最近日課になった練習を始めることにする。……そういや、もう結構時間経つけどそっちの師匠がまだ来ない。

「……ま、いつか」

どうせ一人でも出来るし、先に始めてれば向こうには分かるんだから。

そう判断して、『霧』を展開した。

「逃げなかつタこと八褒めてヤル」

「いやあ、ははは。そんな、僕が逃げるはずないじゃないか」

白々しい。今の今までサフィから逃げ回っていたくせに。オネー

サマのいる学園にいて、サファイから自分の存在を隠してなかった、など言わせない。

何より、コーリに先に接触しておいて黙っていたことが許し難い。「そうか。罰を受けル覚悟は済ませている、とユーことだな？」

チキ、と左右の指の間に取り出すフォークとナイフ。さらに、陽炎のドアをゆらりと開く。

「いや、待てサファイ」

両手で押し留めながら後退していく、気弱な中間管理職のような仕草。刻み込んだ上下関係をすっかり覚えてるようで何よりだ。また賤け直すのは面倒だからな。

「待つ時間などナイ。オネーサマをお待たせするワケにはいかない。手早く、キリキリと、コーリについて話してもらおうゾ」

「う、うむ。こおりちゃんについてというと、あれかな？ 料理の腕が、かなりの域まで上達しているらしいぞ」

雷が、駆け抜けた。

「なん、だと」

コッ、コーリが料理だとオッ!? そんな、小間使いの如き真似、このサファイのような下働きに任せてくれればいいのに！ しかしコーリの料理ならばその美味は天にも響き渡り至福へ導かん事必定！是非、この下女の舌にもご賞味させていただきたい所だが、そのような手間を掛かせるワケにも

「悩ましい」

「うむ、満足してくれたようで何よりだ。では僕はこれで」

「逃がす力」

既に準備していた『霧』を展開した。

「……ここまですることないんじゃないかな、サファイ」

「フン。今度煙に巻こうとして三口。そのときハ」

隣へと手を向ける。そこにはサファイの腰までの高さの、太い上腕から後ろ脚が延びている変則的的四足獣。『霧』と同時に喚び出した異界の生物。サファイでないサファイ。ミステイ・ヘーゲルネ。

「調教し直してやる。骨の髄までナ」

「あ、相変わらずSだなあ」

「違うヨ。サフィはMダ。オマエと違って」

そう。だから、コイツは何時まで経ってもサフィより下だ。

学園生徒の自治組織、生徒会。その長がキヨーで、オネーサマがその下に就いていることの示唆を、サフィにはすぐに看破出来た。そこにあるのは、生徒会の持つもうひとつの顔、ブリッジの下部組織というわかりやすい理由だけじゃない、キヨーという一人の人間に関わる理由がある。

怖いのだ。圧倒的過ぎる『存在』を再び体感することが。

「恐怖と同居出来ナイ体たらクで、アノお二方と共に居ようなど、片腹痛イ」

「……前から思ってたのだが、キミ、片言の割には日常会話で使わないような言葉を頻繁に使うな」

「ダカラ話を逸らすナ、と言ってルだるウ？」

合図は、要らない。

飛び掛ったヘーゲルネに、キヨーの身体は押し倒された。

同時に馬乗りになれ、同時に服の肩がカンツとフォークで床に縫い付けられた。

「……ぐっ」

「上出来だヨ、キヨー。咄嗟に陽炎のドアを開いていたラ、さらにお灸を据えるところだったヨ」

コイツのビジョムス……いや、テレムスはレギュラー、ヘーゲルネはコモン。クラスではコッチが劣っているが、生憎勝敗を決定付ける条件は何もソレ一つじゃない。その証拠に、サフィはキヨーに勝った例ためししかない。本来戦闘タイプでないビジョムスの脇をすり抜けてキヨーをフルボッコにするなんてオチャノコサイサイだ。

「キヨー、答エロ。……ハルカは、コーリに何をシた？」

「何、と言われてもな」

「オマエもとぼけルの力？ コーリが、サファイを忘れルはずないだるウー！」

それは、コーリからサファイへの評価じゃない。サファイたちからコーリへの評価だ。

コーリが、一度『友』と認識した相手を忘れるなど、有り得ない。『コーリの精神二介入できるなら、ハルカ以外有り得ナイ』

「興味深いお話です。私にもお聞かせ願えませんか？」

あるはずのない第三者の声に沈黙したまま振り向く。ガチャリとドアが開き、黒髪の女が姿を現した。

「キサマ……どうしてココにイル？」

「コーりんを一番よくご存知と思われるお二人が、一緒に残られているようでしたので」

イシザキ・アンリ。どこまでも胡散臭い笑顔を浮かべて、サファイの問いとは意図のズレた答えを返してきた。

「一応、私はコーりんの監視を任ぜられている正式な『ブリッジ』の一員であるはずなのに、教えられていることはあまりに少ないのですよ？ かと行って上司に詰め寄る訳にもいきませんし。ですから、ここはあくまで協力者でしかいらっしやらないキョウさんと、それどころか敵方の一員でいらっしやるサファイさんに伺うのが摩擦が少なく済むのではないかと考えた次第です。水芭さんにはお先にお帰り頂いて、戻ってきた所存なのですよ」

「オマエの事情なんて聞いてナイ。古代種エンシェントオーナーのオマエが、どうやってサファイの『霧』に侵入はいってきた、と訊いてル」

古代種エンシェントの「霧を分解する」という性質上、そのオーナーは『霧』を喚べない。召喚主に指定されていない者が『霧』に入り込むためには、やはり『霧』が必要なのだ。コーリほどの技量があれば、逆に古代種の性質を利用して侵入することは可能だが、この女に真似できるものじゃナイ。

「私のミスティは何度もご覧になられたことがあると思います。それでも、まだわかりませんか？」

挑発の意を無視して、アンリの腕の中に納まったイモムシ型ミスティ・ワーミンを見る。

「……そうか。念系か。」

十系の一つ、念。いわゆる超能力、サイコネシスというヤツだ。能力としての発現の仕方こそ個々のミスティにより異なるが、それ以前に念系の持つエネルギーそのものがある特性を有している。

すなわち、空間干渉。テレポートなどはその典型だ。

そして、『霧』への侵入すなわち別空間への侵入。早い話が、作り物の空間の境界に穴を開ける程度の芸当、彼らにとっては技にも満たない手慰みに過ぎないってコトだ。

「ナルホド。……ダガ迂闊じゃあないか？ 今ココで、ともすれば奇襲に使える力を晒してしまうとはナ」

「あらあら。サファイさん、貴女 私にお勝ちになられた例がありましたか？」

「ソレでサファイの上に立ったつもりか？ ハモれもしないミスティ頼みの分際デ」

チリツと肌がひりつく。お互い、懐に手を差し込んで

「そこまでにしよう、二人とも。サファイ、この『霧』は長時間の運用目的で張ったものではないのだから？」

「……その通りダ」

長々と話してオネーサマをお待たせするなど、断じて許されることではナイ。

「私も早く水芭さんに追い付きたいですし、……こうして睨み合っているだけでは埒を開けようがないですね」

両者合意の元矛を納め、ついでにヘーゲルネをキョーの上からどかす。

「やれやれ。……さて、話を続けようか。とは言っても言われたことと心当たりは全くないのだが」

「そもそも、何故桜井理事を名指しで？ やはり、ご一緒に暮らしたからですか」

「そんなの、可能な生物がハルカしかいないからに決まってハアッ!? ナッ、ナッ、今ナント!?」

「あ、う、えー、それはだな、」

「こーりんは、只今桜井理事のお家で暮らしてられるのですよ。ご存じなかったですか？」

「きつ」

聞いてねーゾ、アノ天然！

「……ゴホン。あー、僕は遥香女史について詳しくないのでね、その様子だと二人のほう彼女についてよく知っているのでは」

「ナチュラルに話を元に戻そうとすンナ！ ハッ、ハッ、ハッ、」

「……舌を垂らした犬さん？」

「ハルカとこーりが、同棲だトオッ！！ 奴メ、仕事にかこつけテこーりを籠絡するツモリカッ!? とつくに過ぎ去ツタ灰色の青春時代を今になッテ往生際悪く取り返そうってカアッ!?」

「あれ、頭痛ですか？」

「ううん……なんだか、今どこかの誰かにとてもヒドイこと言われたような気がするよあ。とりあえず、今度心当たりを片っ端から問い質してみようかなあ。手始めにサファイちゃんあたりから当たってみよおつと」

「ふふふ。安心してくださいサファイさん。桜井理事はずっとお仕事中です。引き取っておいてずっと放置というのは如何なものかと愚考する次第ですが」

「ハッ！ あ、ああソウカ、そうだったナ。チツ、驚かせるんじゃない」

「（……）ご存じでいらっしやいましたか。機密事項のはずですが、どこまで把握しておられるのでしょうか」

「（…………輝燐クンのことは気付いていないようだな…………助かった）」
…………キヨーム、まだ何か隠してるな。まあいい、確かにこれ以上ズルズル引き延ばす訳にもいかない。

「とにかく、コーリとハルカは接触しているのダロウ？ ならば決まりダ、ハルカがコーリの記憶ヲ弄つたに違いナイ」

おのれハルカめ、何を企んでいる？

「そうだろうか、僕は違う考えだが。案外、少し刺激してやればキミのことを思い出すかもしれないぞ？」

「又？ 馬鹿言うナ、ハルカならバ念入りに記憶を消していルダロウ、簡単に復元出来ルはずがナイ」

「消されているならそうかもしれないが、単に思い出せないだけかもしれないぞ？」

「ソレはサファイを侮辱しているの力、それともコーリを力？ そんなことは有り得ナイと、オマエだつて知つてルダロウ」

「そうだな、普通ならサファイの言う通り有り得んダロウ」

「ええと…………子供の頃のことですから、普通に忘れておられるだけではダメなのですか？」

「ダメダメだね」「駄目だな」

「…………続けて下さい」

「うむ。確かに普通なら有り得ない。だが、忘れてるわけではないだろう？ この街で、何が起きたのか」

キヨールの指摘が示すモノにすぐさま思い至る。サファイが口にするより先に、アンリが答えた。

「『白い死神』ですね」

「ああ。その後半年眠り続けていたんだ。検査で異常は診られなかったはずだが、記憶の一つや二つ飛んでいてもおかしくない」

「…………チツ」

言われてみればナルホド、そちらの方が可能性が高い。ハルカといえどコーリの記憶を弄るのは容易な話でなく、しかし他の可能性が見当たらなかったから断言してしまつたが、どうやらハルカとい

う大き過ぎる存在を前に視野狭窄に陥っていたらしい。

「しかし、改めて考えてみればその辺りの後遺症が残ってないか、気にした事は無かったな。こおりちゃんに一度聞いてみるのもいいかもしれん」

「素直にお答え頂けるでしょうか、あのこーりんから」

「大丈夫だろう。健康診断の延長程度の事、余程の事が無い限り問題あるまい。他人事に無頓着なこおりちゃんなら記憶に抜けがあるとしても隠したりしまい」

「他人事、ネ。やはりソウなつてたカ」

その程度は予想通りだ。あの事件でこーりは自覚しただろう、己が世界の異端である、と。

その「他人事」の対象にはサファイも含まれているのだろうか……悲観する気持ちは全く湧いて来ない。

それでいいのだ。こーりとサファイでは存在する次元がまるで違う。サファイ如きをこーりがいちいち気に掛ける必要はないのだ。そう考えれば、こーりがサファイを覚えていないのも、結果的にはプラスなのかもしれない。

「だがサファイ、こおりちゃんがキミを覚えていれば決して他人事扱いなどしなはずだ。こおりちゃんにとってキミは」

「お喋りが過ぎるヨ、キョー」

トントと、キョーの肩にヘーゲルネが乗った。二人とも表情にこそ出していないものの、驚愕と警戒の気配が明白に伝わってくる。

初動に、全く反応出来なかったのだろうか？

「サファイさん、今のは」

「オマエには出来ないことだヨ、鈍牛女」

「……挑発のおつもりですか」

フン。ようやくその胡散臭い笑顔を消したな。

「さつきも言った通りココでやりあう気はナイヨ、時間もナイしネ」「そうですね。では、持ち越しという事で」

結ばれた休戦はそのまま導火線に灯された火種だ。必ず爆発の時

が来る。

とはいえ、それは一先ず置いておく。所詮本題からは脇道に過ぎない。

「とりあえず、僕の方でさりげなく聞いておこう、彼がどの位の事を忘れてるのか」

「仕方ナイ。そういう裏方仕事は確かにキサマの方が得意だ」

「裏方役が裏方仕事（メイタク）で負けているとハッキリ言われてしまうのはどうかと思うのですが」

「サフィは裏方じゃなくテお側付きだから。オマエらみたいな腹黒デモナイ」

「適材適所というヤツさ。サフィより機会も多いからな、任せておくといい」

「……そーいえばキョー、キサマコーリの近くにいるコトを黙ってタ仕置きがマダだったナ」

意図的に言葉の温度を下げ、袖からではなくポケットから殊更ゆつくりと取り出す コルク抜きを。ソレを瞳に映した途端、キョーの顔がさつと青褪めた。

「い、一応僕にもキミにも立場というものがあつてだね？」

「黙れ。ソレ以前にキサマはサフィの下っ端だと何度言えば理解出来る？」

ぼーんぼーんとコルク抜きを手で弄ぶ度にキョーの顔から色が失われていく。

「オネーサマとコーリ、お二人と一日の大半を一つ屋根ノ下……ナント至福な環境……！ ギギギ、マジ妬ましイ」

「ヒッ!? ストップ、悪かった！ 僕が全面的に悪かったから、その手の凶器をしまつてくれたまえギャツ！」

「……キョウさんの悲鳴、初めてお聞きしました」

アンリがどーでもいいことに感心している。ちなみに最後の悲鳴は、最初の悲鳴でビクンと肩を揺らした所為で、そこに乗ったままのヘーゲルネに顔を引っ掻かれた悲鳴だ。バカめ。

「ヨシ、サファイも来週からココに通う」

「い、いや、君は僕の二つ下だろう。流石に無理だから」

「……熱でもあるのか、キョー。オマエがソナナ普通のことを言うなんて」

「サファイさんの仰られるとおりです、キョウさん、失望しました。それでも生徒会長さんなのですか」

「い、いつから横紙破りが生徒会長の仕事になったのか知らないが……サファイ、もう一度言うが自分の立場を考えてくれ。キミの入学、まして編入など認めてもらえないはずがない。今この場で戦闘が始まってもおかしくないんだぞ？」

……そんなこと、言われるまでもナイ。

「フン。キョー、貴様に重要な任務を与えろ。ソレで不問としてやるからありがたく思うがイイ」

「……ああ、なんだ？」

警戒して、しかし反駁はしなかったキョーにわずかに満足し、コルク抜きと好感で服の中から取り出したモノは、

「貴様はカメラマンだ。オナーサマの浴衣姿、確実に収めておけ」
差し出すデジカメを、

「うむ、了解した。万難排して達成しよう」

キョーは自信あり気に、面白そうにニヤリと笑った。よろしい、サファイの下っ端ならその程度の度胸はナイと。

と、ようやくヘーゲルネがキョーの肩からストーンと下り、同時に世界がスツと晴れた。リミットだな。

……オヤ？

「『霧』が張られているナ」

規模はごく小さい。校舎の離れにあるあの建物は、武道場だったか。あそこを中心に渡り廊下いっぱいまでを半径として覆う程度の範囲。戦闘目的で張るには場所も規模も半端が過ぎる。とすると、
「オマエたち、こんな時期に新人研修ヲやってるの力？」

「私たちのお仕事に、時期はあまり関係なされないと考えるのです

が」

……時候という意味ならそうだろうがな。今、この状況下で、新人なぞ鍛えてる時間は惜しいだけだと

……待て。確か、オネーサマは道場に寄ると仰られて

「オイツ、キサマら！」

「待て待て待て待て、多分誤解だ！ 優姫クンはおそらく既に武道場を出ている！」

……グツ、思考を先読みされた。しかしこの眼で確認するまで安心するわけにはいかん！

「今日の所はここまでダ！ キヨウ、写真忘れるナ！ ソレト、その肥満体にダイエツトさせておけ！」

言い捨てて生徒会室を飛び出した。

まだ早い。まだ、その時ではない。

本来、サファイがオネーサマを心配するなどおこがましいにも程がある。アノコーリすら超える可能性を持つ方なのだ、シンドウ・ユウキという存在は。

しかし、だからこそその不安がある。

かつてサファイは二度、都合三名のその場に立ち会った。だからこそ断言できる。

ソレは、決して無事には終われない。

まだ、準備が足りない。こうしてサファイが向かって、なんら解決することなどナイ。それでも足は止まらない。

「オネーサマ……」

サファイにとって、アノ方は何者にも代え難い主ひとなのだから。

火照った身体に冬の外気が心地いい。でも、身体には薄っすらと汗を掻いているから、このままにしておくと思邪を引きかねない。

寮に戻ってすぐ風呂を沸かす気ではあるけれど、やはり更衣室で軽くシャワーを浴びてくれればよかったか。

でもいつまでもサファイエルを待たせる訳にもいかないし。あの娘、先に帰っていいって言っても必ず待つてるのよね。不快とか文句という訳じゃないのだけれど。

……襟元を開いて鼻を利かせる。匂いは……しないわよね？ — 応武道場を出る前に確認はしたけれど、あそこ、汗の匂いが染み付いたような場所だものね。

ちらと窓の向こう、離れにある武道場を振り返った。

……出て行くときの、桜井の視線を覚えている。少し、私の態度を変に思われていたみたいだ。

けど、仕方ない。こんなこと、私自身上手く説明できる自信がないし、他人に話したい内容でもない。

……ねえ、桜井。やっぱり私、ときどき思うのよ。

周防とは、他人のままでもいいべきだったんじゃないか、って。

転校初期と比較して桜井の周防に対する態度は大違いだ。あの頃の桜井なら一緒に旅行に行こうだなんて決して言わなかっただろう。桜井の周防に対する感情はどういう類のものなのだろう。お節介？ 家族愛？ それとも恋愛感情？ 多分、本人も分かっていないんじゃないだろう。

私は、どうなのだろう。

分からない。初めから、分からない。

一目惚れ？ そう言われればそうかもしれない。

生理的嫌悪感？ そう言われればそうかもしれない。

『理解』らない。『理解』ることは、どんな形であれ、周防という存在が私の中に、もう他人と呼べないほど深く入り込んでいるということ。

……お笑い種だ。私は、そんな人間をこそ望んでいたはずなのに。カチャリ

「ねえ、周防さん……貴方は、一体 ツー！」

タタタツとこちらへ近づいてくる気配に急ぎ思考を立て直す。次いで姿を現したのはやはり、

「……どうしたの、サファイエル。そんな息切らせて」

「いえ……少々……お待ちヲ……」

「しかも、なんでそんな笑顔なの？」

「……ただノ……杞憂でしタ、から……」

「？ よくわからないけど……落ち着いたら、帰りましょう。お茶くらいなら淹れてあげるから」

「……！ いえ、オネーサマにそのような雑事をお任せするワケにはッ」

「気にするな。屋敷じゃない、いち学生の寮でまで仕事をする事はないわよ。素直にもてなされなさい」

「いえッ、屋敷だろうト外だろうト、サファイエルはオネーサマの侍従でアルことに変わりなくッ」

言い募りながら後を追うサファイエルを連れて校舎を出る。一緒に歩いて、同時に別のことを考える。

こうして私を慕ってくれているサファイエル、それに桜井。彼女らが私にとって大事な人間であることに疑いはない。

それでも、だ。何と言えはいいのだろう。私が、彼女らとの間に常を感じている、この隔絶感。もう数年、共に過ごした大切な友人である彼女らが、無関係な赤の他人であるはずがない。それなのに、何故、

決定的に、他人事という感覚が拭えない？

あの時の感覚を覚えてる。とても平静に、容易くそれを行ったことも。もう十年近く前だというのに、目を背けることを許さない自分自身に辟易する。あるいはだからこそ大事なのか、自分とあまりに隔たった、壊れやすいものと判ったから。

だから、きつと求めていた。願っていた。この、筆舌に尽くし難

い隔絶を感じない相手、そう 他人ではない人間を。

……私らしくもない他力本願。そして、実際に現れた途端の尻込みも、本当にらしくない。

らしくなくとも、事実を変えられない。

ねえ、周防 周防さん。私は、貴方が

……怖い。

第五話 旅行前夜 まだ弱き少女

「ふう……。酷い目に遭った」

この人の物憂げな声を聞くと妙に気分が

「清々しくなるのはなんででしょう？」

「む？ 気持ちが晴れやかになるというのは素晴らしいことではないか、一体何を悩むことがある？」

「ソウデスネー」

棒読みの返事をして、訂正を入れることもせず練習を続ける。

「んん……」

体の周りだけを覆うイメージで霧を喚び出そうとする。しかし、

「……………うああつ、また失敗だーっ」

何度やっても拡散して上手くいかない。

言われた通り、『霧』の召喚は一時間ほどで成功できた。その調子で防護服『ミストクローク』の生成も成功させようと意気込んでみたものの、未だ一回も成功に至っていない。

「ははは、不器用だなあ」

ぬぐぐう。人の失敗を笑うなんて、心が貧しい証拠なんだぞう。

ちなみに遠見会長はボクが『霧』を喚んだ後から『ミストクローク』を使って入ってきました。ガッテム。いや、教えられてるんだから相手が使えるのは当然なんだけど、なんかこう、ねえ？

「何で上手くいかないんだろ。言われた通りやってるのに」

「まあ、教えられて即何でも出来るようになるのであれば、教師という職業の需要は大幅に減るだろうね」

そんな一般論いらない。

「とはいえ、教える側と教えられる側の相性というものは確かにある。もしかすると、僕の『ミストクローク』のイメージはキミのそれに合っていないのかもしれない」

「イメージ……」

「『霧の衣』なんて形の定まったものではないからね。構築に関しても定型化しないほうがいいのかもしれない」

「……つまり、手探りで自分のスタイルを探すしかないってこと？ 投げっぱなしは教師役としてどうなんだ、と言いたい。」

「ググらなければ不安かい？ 一から十まで手取り足取りでなければ出来ないかね？」

言いたかったけど、その言葉で思い止まった。

「別に。運動競技をやれば、スタイルの模索はいつだって自身でやらなきゃなりませんから」

「うむ。明らかに間違っていたら指摘くらいしよう」

そうしてあれこれ試しながらも、二人の会話は途切れない。ボクとしては練習だけに集中したいところなのだけど、会長曰く、手を挙げるみたいは自然さ、スムーズさで出来なければ意味が無い、とこのことで集中すること自体を禁じられている。

……言いたいことはわかるけどさあ、それってちゃんと出来るようになった後、次の段階で取り組むことじゃないの？ なにコレ、スパルタ？

そんなボクの内心も気に掛けず、話題はいつの間にかある一人の人物へと移り変わっていた。

「つまり、あの黒メイドはこおりちゃんの幼馴染みで間違いないんだ」

「ああ。そしてオーナーの二大組織の一方、『レオンハルト』の一員でもある」

そう言いつつPDAを操作する会長。こちらに向けられたその画面に映っていたのは、縞模様の入った暗い赤色の体色、前脚上腕部が発達した四足の獣 ん？ 後脚の付け根、なんか位置がおかしくね？ そんな姿のミスティだ。

「コモンクラス、闇地系獣種ミスティ、ヘーゲルネだ」

「コモン……プウ プルディノの同程度か。たいして強いわけじゃない、

「強いぞ。少なくとも僕は勝ったことがないし、これから先勝てるとも思えん。レギュラークラス相手の勝率も決して悪くない」

「え……？ 下のクラスじゃ上のクラスに勝つのは無理って話じゃ」

「原則、ね。ハーモニアス・ドライブを常用出来る人間にとっては絶対的なものではないよ」

「はーも……？」

「ハーモニアス・ドライブ。共鳴とも呼ばれるな。オーナーとミステイの精神波を同調させることで双方の能力を引き上げる技術だ。

この技術の最大の利点はクラスの壁を破れるという点にある。本来不可能である単体での上位クラス撃破。その法則を覆す権利を得られるんだ」

「……それじゃあ」

その技術を習得出来れば

「と、誰もが思うことだが、難しいぞ。そも「技術」などというが方法論が確立されているわけでもなく、「こんなことが出来ます」と言ってるだけに過ぎない。大抵は偶発的に入れるだけで意図的に起こせる者など一握りだ」

「……ぐ、偶然でも入れればチャンスは」

「ハモつたのは攻撃がインパクトする瞬間とは限らないぞ。さらに、「波」である以上、上がった後は下がる。それも基本値より下へ。

さあ、ここで想像してみよう。拳を振りかぶった瞬間に偶然同調！しかし次の瞬間、揺り戻しでガクツと威力の落ちた拳がヒット」

「……空しい」

「で済めばいいが、拳でなくFAやSAだったなら空振ったエネルギーは相当なものだし、そこにカウンターを合わせられた日には「悲惨だあ」

「だなあ。だから半端なドライブは起こすべきじゃないし、逆に意図的にドライブを起こせるオーナーは相当重宝されてるのさ」

……要するにミステイが強いのではなくそのコンビが強いということ。なににせよ、あの黒メイドが一定の評価を得ているというの

は、非常に面白くない。

「これに関して僕からアドバイス出来る事は何も無い。才能や相性以外で実践方法があるなら、僕が教えて欲しいくらいさ。それに、あくまで得られるのは権利だ。実力が伴わなければ結局勝てはしないよ」

「……それって、暗にボクが力不足だと？」

「違うかい？ 僕もテレムスも前線に出る側じゃあないから正確になんて言えないが、こおりちゃんの周りにいるオーナーのうちで今一番弱いんじゃないかな」

流石に、カチンときた。

「何それ。まさか、会長がボクに勝てる気ですか？」

「ふむ。まさかもなにも、キミらが僕らに勝てる要素が見当たらないのだが」

あつたまきた！

会長へ一歩踏み出す。同時に、ボクの感情に呼応して陽炎の扉が開き、

同時に、会長の側の陽炎からぬるり、とモニター顔の奇怪な生物

テレムスが現れ、次いで側からプウが出て来る。

「……ボクの反応なんかお見通し、ですか」

「頭に血が上りやすいからね、キミは。この間の一件からも、僕にあまり良い感情を抱いていないようだし。この際、こちらでスッキリさせておこっじゃないか」

……ふん。この状況も狙い通りですか、そうですね。

なら、結末くらい大番狂わせをくれてやる！

「いくよ、プウ！ あの性悪にギャフンって言わせてやる！」

「きあ！」

ガシガシと両拳を打ち合わせるプウ。そんなボクらの様子を見て会長は、

「ギャフン」

「だから、そんなお約束はいらないうって言うてるでしょおおお

!？」

ニンマリと、嗤われた。

結論から言つて、完敗でした。

「まあ、クラス差を覆す方法が無い時点で当然の結果だよ」

「ぐ、うつつ」

「きああ……」

プウと二人揃つてグツタリ。ボツロボロにされました。レーザーに散々追いかけて回されました。

「ていうか……どうということなのこれ……」

実質、ボクらは二対一だった。片方がテレムスを引きつけている間に会長を狙う隙があり、事実踏み込んだ。なのに。

「いやあ、痛かった痛かった。それでも、守りに集中してれば急所を守るくらいは出来るさ」

「だから、それがおかしいんだって!」

「きああ!」

プウも同意の抗議を吠える。ボクの“Attack”にせよ、プウのフォトンアームにせよ、生身の人間が受けて平気なものじゃない。

「おかしい、こんなの……こおりちゃんじゃあるまいし……」

特に、ボクの拳が効かなかったのが衝撃だった。今まで疎ましく感じていた力が、ここでは役に立つ。そう考えていた矢先だった。というのに、まるで無力。所詮ボクの力なんてそんなものだった。とか!？」

「やれやれ。キミは今まで何の練習をしてきたと思つてるんだ?」

「……え? 練習つて、『ミストクローク』じゃないよね……空手?」

「いや、『ミストクローク』であつてるさ。これは『防護服』だと、何度も言つてるだろ?」

……ええと、それって。

「レギュラークラスのNAくらいまでなら効果を遮断出来るのさ。もちろん耐久限界はあるし、何より衝撃がある程度伝わるからさつき殴られたときも痛みを顔に出さないようにするのが大変だったのさ、はっはっは」

笑いながらさつきボクの拳を受けた腕をぶらぶらと振る会長。けど、でも、ちよつと待って。

「き、聞いてないよボクそれ！ てつきり、ただ『霧』に侵入するだけのものだとばかり！」

「む？ そうだったか？ いやあ済まない。だが、これではつきりしただらう？ 『ミストクローク』の戦術的重要性が」

「……そりゃあね」

超常的なミステイの技が飛び交う中に生身の人間が飛び込むのは自殺行為だ。身の備えがあるのとないでは出来ることが大きく違ってくる。

「でも……防御力が上がっても、攻撃力が上がらないんじゃないやっぱりボクの『異質性』は役立たずなんじゃ……」

「オーナー相手に効かないならミステイを殴ればいいだらう」

「でも、この間一発殴っただけで手がイカレちゃって」

「手が保護されるの？」

……あ。

「それに、キミの『異質性』は“Attack”、攻撃力の上昇であり、肉体そのものの強化じゃない。逆に言えば、攻撃方法は肉体による直接攻撃に限定されないということだ」

「……たとえば、武器攻撃とかでも効果が出る？」

「もっと単純に石を投げるとかでもいいかもしれん。まあ、その辺りはキミ自身の『異質性』だ、自分で試していけばよいだらう。実例として」

ここで一旦会長は複雑な表情で口籠もり、しかしその続きを口にした。

「サファイは自分の『異質性』を武器にまで広げている」

ただし、具体的な内容を示さずに。

「……会長、どっちの味方なんですか」

「こおりちゃんの味方だよ、僕も、サファイも」

サファイのミステイを教えた。『異質性』があることを教えた。つまり、ボクに対して出来る譲歩はそこまでが限界ってことか。

……ちよつと待てよ？

「えつと会長、サファイのミステイって本当にさっきのもであってるんですか？」

「ああ、間違いないがそれが？」

……おかしい。あの時　一週間前、ボクらを襲った仮面メイドのミステイは二本足、両腕から刃が生えた獣だった。

別人？ いやいや、それこそないって。あんなに特徴一致してるのに。じゃあ、考えられることは……

会長にそこまで話して、さらに自分の考えを伝えた。

「シフト、か」

こくと頷く。シフト前と後の姿がまるで違うのは体験済みだ。

あの時こおりちゃんが仮面メイドを引き受けたことから考えても（牧野がこおりちゃん曰く「雑魚以下」であったことを差し引いても）あの魔獣はおそらくレギュラー。戦闘時にだけシフトしているに違いない、そう考えた。のだけど。

「……いや、それはない、はずだ。彼女のミステイはシフトしていない」

と会長は否定した。

「どうしてそう言えるんです？」

「ヘーゲルネのシフト形態は不可逆性だ。一度シフトしたらもう以前の姿には戻らない。キミのプルディノがプニヤモに戻ることは無いようにな」

「あつ……」

ユグドラシル・インデックス
「加えて言うなら、Y・Iに情報が載っていない。こいつにはこちらの世界に現れたミステイと、共生したオーナーが全て登録される。

端末によって情報開陳のレベルに差はあるが、僕に対して彼女の情報を閉ざしているとは思えん」

「……情報は「無い」んですよね？　なのにシフトは不可逆って判ってるんですか？」

「ほう、いいところに目を付ける。聞いていたより鋭いじゃないか」
「ははー、誰だー？　鈍いとかバカとかそーゆー類の印象植え付けたのー。」

「しかし生憎だが、僕にはその答えの持ち合わせが無い。ヘーゲルネのオーナーは現時点でサファイシカ確認されていない希少なミスティなのだが、何故か……その進化系統樹が明らかになっているという話だ」

「何故かって……どうゆうこと？」

「ミスティがシフトするか否かは実際にそれが起こらないと分からないということさ。Y・Iでも分からない。もつとも、僕らに公開されていないだけで実はその機能が存在するのかもしれないが」

「じゃあ、何で会長がそのことを知ってるんです？」

「教えられたからさ。僕だけじゃない。流星に気付いてるかな？　こおりちゃんがこの学園に呼ばれたのは、単なる保護目的ではないことは」

「……まあ、そりゃ」

本当にこの人たちにこおりちゃんを護る気があるなら、ボクがこんな特訓をする必要なんてないんだし。

「いずれこおりちゃんの手を借りることになるある作戦……今はその準備段階というところだが、現在この作戦を推し進めているメンバーにある数体のミスティのシフト情報が知らされている」

その内の一体が、つまりサファイのヘーゲルネか。

「でも……何で？　ブラックリストとか？」

その計画とやらに当たって邪魔になるから注意しろ、とか？

会長はそんな内心を正確に把握したようで、しかし首を振る。横に。

「その面子の中に味方も混ざっているよ。おそらくは逆、むしろシフトを促進させたいんじゃないかな」

「ちよつ、敵でしょ!?!」

「僕個人はともかく、ブリッジにとってはそうだね。だが、それを脇に置いてしまう程の事情があるのかもしれない、その作戦には」

「……一体何させる気なの、こおりちゃんに」

「……あるミステイを倒してもらおう、それだけのハズなんだが」

……沈黙。不安。でも少し安心。この会長だって何だって知っているワケじゃないということですよ。

「……話は変わるが、随分敵視しているな、サフィを」

一瞬で鬨めつ面になったのを自覚した。

「アレは……ムリ。出会ったばっかの時のこおりちゃんよりムリ。本能が受け付けないレベル」

「ふうむ。いきなり乳揉みされた以上とは、相当だな」

「ぶつ!?! ちよ、え!?! な、なんでそのこと!?!」

「はっはっは、まあいいではないか、そのような瑣末なことは」

「瑣末か、ドコが瑣末か! ボクのプライベートが! あんなハズカシイ黒歴史が!」

よりに、よりにもよって、こんな、こんな性悪にイイイイ!!

「安心したまえ、僕に他人の恥ずかしい秘密を吹聴して回る趣味は無いよ。ところで、こおりちゃんはテクニシャンだったかな?」

……

「う……」

「うっ」

「うんがあああああっ!!」

……閑話休題。

「だいたいさあ、アレいきなりボクにフォーク投げたんだよ、どゆこと!?!」

「何を言う、僕なんて初球デッドボールだったぞ。フォークなんて可愛いものじゃないか」

「ちっがーう！ ああもうっ、何でボクがいきなり殺されかけたのって訊いてるの！」

「ふうむ。こおりちゃんにベタベタしていたからじゃないか？」

「してないよっ！ てか本当に危ないヤツだね、それは。ヤンデレ？ ボク尾け狙われたりしないよね？」

「それはないだろう。あれはあれでバカ素直だ、来るなら正面から堂々とだろっね」

「……ボク、後ろから不意打ちされたことある気がするんだけど」

「『敵』ですらなかった、というだけのハナシじゃないか？ こおりちゃんの後ろに隠れた目障りな邪魔者、だからとりあえず駆除」

「また虫扱いか」

「実際、彼女にとつちや「邪魔虫」だったのではないか？ もしかしたら、今日その邪魔虫がキミだと気付いてすらいなかったんじゃないかな？ まあ、その仮面の人物とサファイが同一人物と仮定した上での話だが」

でも、サファイが敵であることは変わらなくて。だから、ボクは会長に絶対に訊かなきゃいけないことがある。

「遠見会長」

「我が獅子堂優姫副会長は敵か否か、かね？」

「……いちいち先読みされるのは気分が悪い。けど、ここは素直に頷いておく。……口に出す方が多分、もっと気分が悪かった。」

「 答えは否。ただし決して無関係では無い」

「……どういう意味」

「なあに、それほど深い意味じゃ無いさ。単に、『レオンハルト』会長の長女というだけのハナシだよ」

「へっ……」

なんだそれ超VIPじゃ、ああいや、そもそも先輩ってお嬢様だから元々VIPで、ってちょっと待て。

「優姫先輩の家って、大企業の……」

「ああ、獅子堂財閥。『レオンハルト』の母体企業さ」

「はー、なるほどねえ。獅子堂が『レオンハルト』とやらのお嬢サマ、か」

「現実味ないよねえ。獅子堂財閥ってさ、確か持ち会社がCMにバンバン出てるような、そんな有名企業らしいんだよ？ それが世界[≡]の裏側と大きく関わってるとかさあ」

「いや、むしろ大企業だからこそ関わっていて不思議はないと俺は思うぞ」

肉じゃがのじゃがいもを半分に切って口に運ぶ。煮崩れしない程度に軟らかく、味も染み込んでる。けど、何かもう一味欲しいなあ。今度本屋でレシピ漁ってみるか。

「それよりも、なんで獅子堂が霧学に入れたんだ？ 要するに大ボスの娘なんだろ？ 事情を知らなくても重要人物に違いない。よくどっちも認める気になったよな」

以前にも何故獅子堂がこんな地方の学園にいるのか気になったことがあったが、輝燐の話聞いてその疑問がさらに深まった。ミスティについて何も知らないなら、学園側としては人質として価値があると思うが、逆に『レオンハルト』にはどんなメリットがあるというのか……。

「ていうか中学の頃から鳴海市^{（このまち）}で暮らしてたんだよね、親元離れて詳しいことは知らないけど、自分で決めたって言ってたよ」

「……決めたからハイそうですか、って了承するもんか？ 親が？ 中坊の一人暮らしを？ 遠くの街で？」

「う、うーん、そりゃボクもそう思うけどさ、その辺はボク、他人の事とやかく言えないから」

ああ、そりゃそうだな。

けど隠し子とかならともかく、世間的にも認められてる大企業の

令嬢だぞ？ 仮に家庭内で不和があつたとしても、護衛も付けず一人暮らしなんて許すものなのか？ いや、寮暮らしではあるんだが、そこは実際に敵地なワケで。その辺の裏事情を知らないはずの獅子堂がピンポイントで霧学に……いや、それ以前にこの街に来た事自体、偶然と片付けるのは無理がある。あいつ自身の意思で選んでるなら尚更だ。

端的に言つてしまえば、どいつもこいつも何考えてんのか分かんねえ。分かんなくて当たり前だけど。

結局は他人事だ。そのはずだ。

「まあ、人様の事情をいつまでも詮索するのもアレだし、何より不毛だろ、いくら考えても正解なんて判別出来ねえんだから」

「身も蓋もないなあ」

「で、どうでもいいけどとりあえず聞くが……何でへこんでんの、そいつ」

顎をしゃくつて輝燐の隣を示す。青い恐竜 プルディノが三本指で器用にスプーンをつまんでメシを食ってるのだが、貪り食うと形容してもいい程のやさぐれ具合である。

「きあー！」

「あんまり気にして欲しくないんだけどね、ボクは」
そう前置きしてから、輝燐はでっかい溜め息を吐いた。

「今日、あの後遠見会長とちよつと、ね」

「ふーん。喧嘩して負けた、とか？」

二人揃って苦み走った表情かおになる。凶星かよ。

「負けたの勝つたのいちいち気にすることか、馬鹿らしい」

「こおりちゃんはそうかもしれないけど……プウ、ずっと勝ち星ないから」

ふむ。勝てないこと自体より輝燐の役に立ってないかも、てことを気にしてるってとこかな。なんとも健気なヤツだ。

「別にミステイの存在理由は戦うことじゃねえぞ。少なくとも単にここでこうして暮らす分にはレリの技アツも『最強』なんて肩書きも爪

楊枝程の役にも立ってくれねえし」

そしてそんな事を気にした様子もなく首肯して葉で掬い取ったメシを口に運ぶしり。

「……でもこおりちゃんは戦ってたんでしょ？ 力も使いこなせるよう鍛えてるよね？」

「必要性があるからな。つーか、何？ お前、ここ数日帰りが遅いと思ったら、キョウに特訓でもつけてもらってるワケ？」

「も、問題ある？」

「いや、全然。何をわざわざやる気になってるんだか、とは思っけど備えあつて悪いことはないし」

あと、どうでもいい。

「……遠見会長はさ、こつちの頭の中読んでるんじゃないかって思うほど鋭いことあるけど、こおりちゃんは逆だよな」

「ん？」

「読まれ過ぎ。今、どうでもいいって思ったでしょ。あと、かなり鈍ちゃん」

「ほっとけ」

いちいち言われるまでもない。“Ripple”を意識的に抑制する弊害なんだよ、鈍いのは。

『読まれ易いのは素だよな。警戒心皆無なんだよこおりは』

だからほっとけ。別にまるっとない訳でもないぞ。無警戒ってより無頓着なんだよ、俺は。

「ボクだって、必要だからこうして稽古つけてもらってるんだよ。

さしあさって、あの黒メイドには負けたくないから」

「はあ。ま、好きにしたらいいんじゃないね」

そう軽く流す俺に、しかし輝燐はずいっとテーブルに身を乗り出し、顔を思いつきり近付けた。

「ねえ、こおりちゃん。本当に、あのサフィってメイドの事知らないの？」

「ああ」

「でも、遠見先輩はこおりちゃんの幼馴染みだつて言つてたよ」
「なるほど。しかし、だからといって俺が覚えているかは別問題だ
る?」

嘘は吐いていない。ただし、俺にあのメイドの記憶がない理由に
関しては既におおよその見当が付いている。別に教えてもいいんだ
が、先に当人^{サソイ}と話すのが筋だろう。現在の俺にはそれが事実である
とはいえ、面と向かつて「知らない」と言ってしまったのだから。

「そりゃそうだけど……」

肯定しつつも納得はしていないという表情の輝燐。そんな彼女へ
内心をおくびにも出さず話題を転換する。

「というか、お前明日旅行行くんだろ? 前日にまでよくやる……」
「旅行つつたつて温泉じゃん。そりゃ遊園地とかなら体力温存し
とこつって気にもなるけどさ。それに、根本的な身体の鍛え方がこ
おりちゃんとは違うしね」

さいですか。

「それよりさ、こおりちゃん本当に行かないの? 折角なんだから
さ、一緒に温泉入ってゆっくりしようよ」

「……お前、大胆だなあ」

「は? ……ちっ、ちがつ! 一緒につてそう意味じゃなく、男女
別に決まつてるでしょっ!」

「あー、はいはい。で、同じ問答を繰り返す気は俺にはないんだけ
ど」

「ボクにはあるの」

……またこいつは、妙なしつこさを発揮しやがって。

「あー、はいはい。ところで、来週頭までの英語の対訳終わってん
の?」

ピシリ

あ、固まった。

「……えーご?」

「うん、宿題」

頷きつつカチャカチャと空になった食器を重ねて立ち上がる。そのままキッチンへ運んで、

「ま、ちよーっと待った！　ね、こおりちゃん、ちよっとお願いが」
後ろ襟を引つ掴まれた。危なっ、皿落としたらどうすんだ。

「じ・ぶ・ん・で・や・れ」

「まだ何も言っていないのに！　そんな、自分で爆弾投下しといてあんまりだよ！」

そのまま逃がさないとばかりに腕に首を回してくる。

「頼むよお、旅行中に宿題のことなんて考えたくないんだよお」

そして、ぎゅっと腕に力が入った。当然締め付けられる俺の頸動脈。

「ぐえ」

だが、そんなことで折れる俺ではない。

「今からやれ。でなきや諦める。あるいは開き直れ」

そしてこれも当然の結果だが、俺の背中に輝燐の胸が押し付けられている。杏李先輩程ではないが、十分おつきい。けどあの先輩とは違って故意ではあるまい。

わざわざ指摘して殴られることもないよな、うん。

「そんな冷たいこと言わないでよお。人助けだと思つてさあ。てか首締められながら普通に話すなあ！」

首に回した腕を左右に振る。合わせて振り回される俺の首。やってることは子供と一緒にだが、しかしまあ、ぐにぐにカタチを変える胸は十分オトナであります。うむ、悪くない。

「きああ！」

ん？　プルディノが輝燐に向けて何か喋った。意味の汲み取りはあくまで俺に対しての言葉に限定されるから、あいつがなんと言ったのかは分からない。

しかし……それで輝燐の動きがピタリと止まった事を考えると、嫌な予感しか浮かんで来ない。

「……このラッキースケイベンターめ……！」

そんな低い声が聞こえたと思ったら、首から腕を離さないまま腰を落とす。ヤバイ、何かヤバイ！

「いや待て、よく考えろ。俺は何もしていない。お前が勝手にやったことで、その責任を俺に擦り付けるのは如何なものかと」

「問答」

そして落とした重心を伸ばすと同時に、後方へと身を反り返らせて、

「無用ーっ！」

持ち上げた俺の体を、脳天から床へ叩き落す！

「ぐほっ！」

バックドロップッ！ しかも腰じゃなく首に腕を回して！ 死ぬぞ普通！！ あとなんでプロレス技？

そして宙に舞った皿をキャッチしたレリ、ナイス。でも、出来ればこうなる前に助けて欲しかった……。

「はい……はい。承りました。そのように」

そうお返事した後『上司』からの電話は切れました。そして頼に手を当て、溜め息をひとつ吐きました。

……困ったことになりました。

本日の放課後、思わぬ闖入者と、予想外の間関係が発覚致しましたものの、肝心の旅程にしましてはつつがなく、予定通りに進んでいましたの……お仕事のお陰で台無しです。

仕方ありません、気は進みませんがお仕事はお仕事です。良く評価されているとはいえ、新米は所詮新顔ルキキなのです。このような所で『組織』の心証を悪くする真似は避けるべきでしょう。

大丈夫。上手くやればいいだけです。幸いな事に今日お会いした限りでは『あの方』は『彼女』に興味を示した様子はありませんでしたし、明日お会いしたときにお名前を覚えていらっしやるかも怪しいくらいですね。大きな接点さえ持たせなければ心配ないでしょ

う。

……となれば、後は肝心のお仕事の方ですか。こればかりは『あの方』がやる気になって頂かなければどうにもならないと思われるのですが……その辺りはキョウさんとご相談すると致しまして。

「まずは、お電話ですね」

まずは巻き込んで　いえいえ、参加して頂かなければはじまりません。いえ、そう難しい事ではないのです。

なにしろ、説得する必要などというものは初めから微塵もないのですから。

第五話 旅行前夜 　　まだ弱き少女（後書き）

今更ではありませんが、この物語、概念とか抽象的な要素が多くて読者の皆様にちゃんと設定が伝わっているか心配です。あえてぼかしているところもありますし。それはさておき、読者の皆様におかれましてはどのキャラが人気あるのでしょうか。この話を書いている段階では女性主人公5人のうち誰を最終的なヒロインにするか、まだ決まっております。まあ、このペースでは最終話はずいぶん先になりそうですし、気長に考えると致しましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1228v/>

霧幻冬の群像劇

2012年1月14日01時50分発行